

三田市

北摂ニュータウン内
遺跡調査報告書 Ⅲ

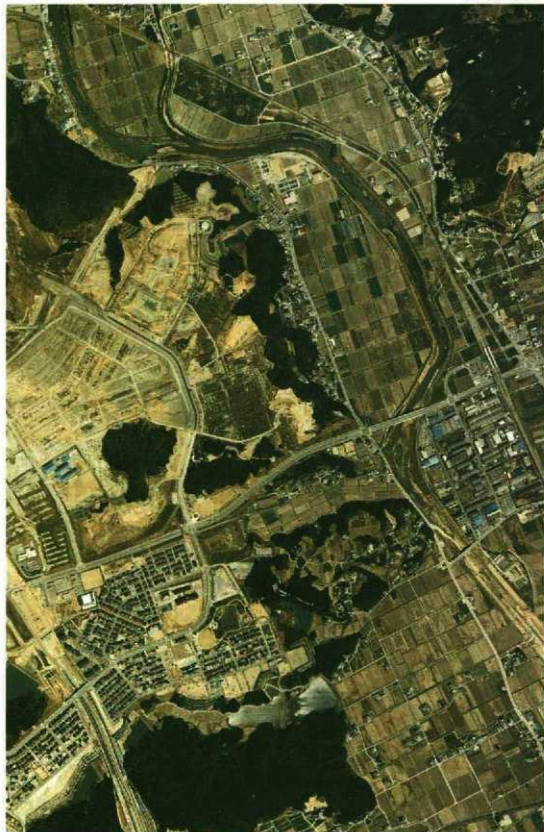
なか にし やま
中 西 山 遺 跡 群
へい ほう
平 方 遺 跡 群
へい ほう にし
平 方 西 遺 跡
な ら やま
奈 良 山 遺 跡 群
な ら やま ちゅうおう こうえん
奈良山中央公園遺跡

1993. 3

兵庫県教育委員会



南東上空からみた北摂ニュータウンと三田市街（昭和51年）



北摂ニュータウン中央地区全景 (昭和63年)



1. 中西山遺跡群北方より三田市街を望む



2. 中西山遺跡群全景 (昭和56年度の調査)



1. 中西山遺跡群全景 (昭和62年度前半の調査)



2. サヌカイト集積遺構



1. 平方遺跡群全景 (南西から)



2. 平方遺跡群全景 (真上から)



1. SH 2·3小銅碑跨型出土狀況



2. SK 3舌出土狀況



1. 小銅鑄型 (内面)



2. 小銅鑄型 (外面)



1. 平方1号窟



2. 平方1号窟出土须惠器



1. 平方2号窟



2. 平方2号窟出土须惠器



1. 平方3号窟



2. 平方3号窟出土须惠器



1. 平方2号窟側壁



2. 平方2号墳(南から)

例 言

1. 本書は三田市けやき台、すずかけ台に所在する中西山遺跡群・平方遺跡群・平方西遺跡・奈良山遺跡群の発掘調査報告書である。
2. 本調査は住宅・都市整備公団が開発する北摂ニュータウン中央地区（ウッディタウン）に伴う調査である。
3. 本調査は兵庫県教育委員会が住宅・都市整備公団からの依頼を受けて、昭和63年以前は社会教育文化財課が、平成元年以降は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施した。
4. 本報告にかかる調査は以下の一覧表のとおりである。

北摂ニュータウン発掘調査一覧表（本報告関連分）

遺跡調査番号	遺跡名	所在地	調査期間	調査担当者
全 800023	奈良山遺跡 奈良山小墳群	三田市貴志字奈良山	昭和55年 9月24日～12月26日	井守徳男 大平茂
確 810021	奈良山遺跡	三田市貴志字奈良山	昭和56年 7月29日～ 9月 1日	井守・大平
確 810022	平方遺跡	三田市貴志字平方	昭和56年 7月17日～ 7月27日	井守・大平
全 810023	中西山遺跡	三田市西野上字中西山	昭和56年 6月29日～昭和57年 3月20日	井守・大平
全 820039	奈良山遺跡	三田市貴志字奈良山	昭和57年 7月20日～11月18日	大平・山下史朗
全 840015	奈良山遺跡	三田市貴志字奈良山	昭和59年 4月24日～ 5月18日	小川良太・山下
870136	奈良山中央公園	三田市貴志字奈良山	昭和62年 5月16日～ 6月26日	瀧井明比古・藤宮正
確 870064	平方西遺跡	三田市けやき台3	昭和62年11月 1日～昭和63年 3月31日	深井・岸本一幸・藤宮
全 870050	平方遺跡	三田市けやき台3	昭和62年11月 1日～昭和63年 3月31日	深井・藤宮
全 870007	中西山遺跡	三田市けやき台3	昭和62年 5月18日～ 6月26日	藤井・中山泰・栗山洋子・藤宮
確 870009	平方遺跡	三田市けやき台3	昭和62年 5月18日～ 6月26日	深井・藤宮
全 890008	平方西	三田市けやき台3	平成元年 7月17日～ 8月25日	大平・中川・藤宮
全 900011	平方遺跡	三田市けやき台3	平成 2年 7月 2日～ 9月18日	久保弘幸・藤宮

5. 本書に報告する4遺跡のうち中西山遺跡・平方遺跡・奈良山遺跡は、すでに『調査概報』や『兵庫県文化財調査年報』や『日本考古学年報』に一部を公表している。しかし、その後の検討の結果、調査概報と異なる記載があるが、本書の方が正しく、これによって訂正したと了解されたい。

6. 本書に使用した方位は国土座標（第Ⅳ系）の座標北を示す。また、標高は東京湾平均海水準（T.P.）を基準とした海拔高度である。
7. 本書では各遺跡ごとに遺物番号を付け、本文・実測図・写真に共通して用いた。
8. 本書の執筆分担は以下の通りである。
 - 井守 徳男 第1部第1章第1～3節、第2部第2・4・5章、第5部第3章
 - 深井明比古 第7部第2章
 - 山下 史朗 第1部第1章第4・5・10節、第2章、第5部第1・2・4・5章
 - 久保 弘幸 第3部第3章第2節2
 - 中川 渉 第1部第1章第6節、第2部第1～3章
 - 菱田 淳子 第2部第3章第2節1
 - 篠宮 正 第1部第1章第7～9節、第3部（第3章第2節2以外）、第4部、第6部第7部第1章
 - 三原 慎吾 第2部第3章第2節3
9. 平方遺跡の自然科学分野の分析は以下の各先生に依頼し、原稿をいただき、第3部第8章に掲載した。
 - 社団法人日本アイントープ協会 放射性炭素年代測定
 - 広岡公男・塩浜修一・森定 尚氏（富山大学）考古地磁気測定
 - 薬料哲男氏（京都大学原子炉実験所）サヌカイト製造物原材産地分析
 - 三辻利一氏（奈良教育大学）須恵器の蛍光X線分析
 - 安田博幸・金杉直子氏（武庫川女子大学）弥生土器の赤色顔料の分析と胎土分析
 - 肥塚隆保氏（奈良国立文化財研究所）ガラス玉の科学的調査
 - 嶋倉巳三郎氏 炭化材の樹種
10. 本書の編集は八木和子の協力を得て各担当者がおこなった。
11. 現地調査および報告書作成において、西村 康、岩永省三、佐原 真、中村 浩、高島信之、山崎敏昭、片山一造、菱田哲郎の各氏に御世話になった。
12. 発掘調査で出土した遺物、作成した図面・写真類は兵庫県教育委員会無蔵文化財調査事務所にて保管・管理している。

目 次

第1部	調査の経過	
第1章	調査に至る契機と経過	(井守・山下・中川・篠宮) 1
第2章	遺跡をとりまく環境	(山下) 7
第2部	中西山遺跡群	
第1章	遺跡群の位置と立地	(中川) 11
第2章	調査の経過	(井守・中川) 12
第3章	中西山遺跡	(中川・夔田・三原) 16
第4章	中西山古墳群	(井守) 31
第5章	中西山城	(井守) 51
第3部	平方遺跡群	
第1章	遺跡群の位置と立地と概要	(篠宮) 57
第2章	調査の経過	(篠宮) 59
第3章	平方遺跡—弥生時代—	(篠宮・久保) 65
第4章	平方遺跡—古墳時代—	(篠宮) 115
第5章	平方窟跡群	(篠宮) 126
第6章	平方古墳群	(篠宮) 152
第7章	平方城	(篠宮) 158
第8章	自然科学分野における調査	(篠宮) 161
第9章	小結	(篠宮) 193
第4部	平方西遺跡の調査	(篠宮)
第1章	遺跡の位置と立地	205
第2章	調査の経過	206
第3章	古墳時代	208
第4章	その他の遺構と遺物	214
第5章	小結	218
第5部	奈良山遺跡群	
第1章	遺跡の位置と立地	(山下) 219
第2章	調査の経過	(山下) 219
第3章	確認調査	(井守) 220
第4章	全面調査	(山下) 225

第5章	小結	（山下）	249
第6部	奈良山中央公園遺跡の調査	（篠宮）	
第1章	遺跡の位置と立地		251
第2章	調査の経過		251
第3章	調査の結果		251
第4章	まとめ		254
第7部	まとめ		
第1章	要約	（篠宮）	255
第2章	北摂ニュータウン内遺跡発掘調査が意味するもの	（深井）	258

挿図目次

第1部 調査の経過

- 第1図 北摂ニュータウンの位置……………1
 第2図 周辺の主要遺跡……………8

第2部 中西山遺跡群

- 第1図 年次別調査位置図……………11
 第2図 トレンチ配置図と遺構全体図……………15
 第3図 竪穴住居跡1……………17
 第4図 木棺墓1・2……………18
 第5図 サヌカイト集積遺構……………19
 第6図 弥生時代の遺物(1) 土器……………21
 第7図 弥生時代の遺物(2)
 鉄斧・石斧・石鎌……………22
 第8図 背面剝離方向……………23
 第9図 弥生時代の遺物(3)
 サヌカイト剥片……………24
 第10図 弥生時代の遺物(4)
 サヌカイト剥片……………25
 第11図 弥生時代の遺物(5)
 サヌカイト剥片……………26
 第12図 弥生時代の遺物(6)
 サヌカイト石鏃・石鎌……………27
 第13図 弥生時代の遺物(7)
 サヌカイト楔形石器・剥片……………28
 第14図 弥生時代の遺物(8)
 サヌカイト剥片……………29
 第15図 3号墳墳丘地形・断面図……………32
 第16図 3号墳石室実測図……………33
 第17図 3号墳遺物出土状況……………38
 第18図 3号墳出土土器(1)……………40
 第19図 3号墳出土土器(2)……………41
 第20図 3号墳出土銅製品・鉄製品……………45
 第21図 4号墳墳丘地形図……………47
 第22図 4号墳埋葬施設実測図……………48
 第23図 4号墳出土土器……………48
 第24図 中西山遺跡出土のその他の土器……………50
 第25図 中西山城地形測量図……………52
 第26図 中西山城土層断面図(1)……………53

- 第27図 中西山城土層断面図(2)……………54
 第28図 中西山城出土土器……………56

第3部 平方遺跡群

- 第1図 平方遺跡群位置図……………58
 第2図 平方遺跡群全体図……………61・62
 第3図 竪穴住居跡SH1……………66
 第4図 竪穴住居跡SH1変遷図……………67
 第5図 竪穴住居跡SH2調査前地形図……………68
 第6図 竪穴住居跡SH2・3……………69
 第7図 竪穴住居跡SH2・3変遷図……………70
 第8図 竪穴住居跡SH4……………72
 第9図 竪穴住居跡SH5……………73
 第10図 竪穴住居跡SH6……………74
 第11図 竪穴住居跡SH7……………74
 第12図 方形住居状遺構SH8……………75
 第13図 掘立柱建物跡SB1……………76
 第14図 段状遺構……………77
 第15図 土坑SK1……………77
 第16図 土坑SK3……………78
 第17図 溝SD1断面図……………78
 第18図 竪穴住居跡SH1出土土器……………79
 第19図 竪穴住居跡SH2出土土器……………80
 第20図 竪穴住居跡SH3出土土器……………81
 第21図 竪穴住居跡SH4出土土器……………82
 第22図 竪穴住居跡SH5出土土器……………83
 第23図 段状遺構・土坑SK1-3
 出土土器……………84
 第24図 包含層出土土器……………85
 第25図 竪穴住居跡SH2出土
 の石鏃(1)……………88
 第26図 竪穴住居跡SH2出土
 の石鏃(2)……………89
 第27図 竪穴住居跡SH2出土
 の磨製石鏃・石剣……………90
 第28図 竪穴住居跡SH2出土の石鏃……………91
 第29図 竪穴住居跡SH2出土
 の楔形石鏃(1)……………92
 第30図 竪穴住居跡SH2出土の楔形
 石器(2)・削器……………93

第31図	竪穴住居跡SH 2出土 の砥石・その他の石器……………94		
第32図	竪穴住居跡SH 3出土 の石鏝(1)……………95		
第33図	竪穴住居跡SH 3出土 の石鏝(2)……………96		
第34図	竪穴住居跡SH 3出土 の楔形石器・削器……………97		
第35図	竪穴住居跡SH 3出土 の砥石・その他の石器……………98		
第36図	竪穴住居跡SH 1出土の石器……………99		
第37図	接合資料……………100		
第38図	包含層出土の石器(1)……………101		
第39図	包含層出土の石器(2)……………102		
第40図	包含層出土の石器(3)……………103		
第41図	縄文時代草創期の石器……………105		
第42図	竪穴住居跡SH 2・3出土鉄器……………109		
第43図	竪穴住居跡SH 2・3出土 鋳造関係遺物……………110		
第44図	土坑SK 3・4出土遺物、竪穴 住居跡SH 2出土玉……………114		
第45図	竪穴住居跡SH 9……………115		
第46図	竪穴住居跡SH 10……………116		
第47図	竪穴住居跡SH 11……………117		
第48図	竪穴住居跡SH 12……………118		
第49図	掘立柱建物跡SB 2……………119		
第50図	土坑SK 5……………120		
第51図	土坑SK 6……………120		
第52図	竪穴住居跡SH 9・10・11 出土土器……………121		
第53図	竪穴住居跡SH 12出土土器……………122		
第54図	掘立柱建物跡SB 2出土土器……………123		
第55図	土坑SK 5・6、SH 2上層 出土土器……………124		
第56図	包含層出土土器……………125		
第57図	平方1・2号窯跡……………126		
第58図	平方1号窯跡……………127		
第59図	平方2号窯跡……………129		
第60図	平方3号窯・竪穴住居跡SH 12 ・掘立柱建物跡SB 2位置図……………132		
第61図	平方3号窯……………133・134		
第62図	平方1号窯出土土器(1)……………137		
第63図	平方1号窯出土土器(2)……………138		
第64図	平方1号窯出土土器(3)……………140		
第65図	平方1号窯出土土器(4)……………141		
第66図	平方2号窯出土土器(1)……………142		
第67図	平方2号窯出土土器(2)……………143		
第68図	平方2号窯出土土器(3)……………144		
第69図	平方2号窯出土土器(4)……………145		
第70図	平方3号窯出土土器(1)……………146		
第71図	平方3号窯出土土器(2)……………147		
第72図	平方3号窯出土土器(3)……………148		
第73図	平方3号窯出土土器(4)……………149		
第74図	平方3号窯出土土器(5)……………149		
第75図	平方3号窯出土土器(6)……………150		
第76図	平方3号窯灰層出土土器……………151		
第77図	平方1・2号墳位置図……………152		
第78図	平方1号墳……………153		
第79図	平方2号墳……………155		
第80図	平方1号墳出土土器……………156		
第81図	平方1・2号墳出土鉄器……………157		
第82図	平方城跡……………159		
第83図	中世以降の土器……………160		
第84図	平方遺跡群の考古地磁気測定 結果と考古地磁気永年変化……………168		
第85図	サスカイトの原産地……………170		
第86図	平方1号窯出土須恵器 のRb-Sr分布図……………179		
第87図	Ca-Sr相関図……………179		
第88図	平方2号窯出土須恵器 のRb-Sr分布図……………180		
第89図	平方3号窯出土須恵器 のRb-Sr分布図……………180		
第90図	平方遺跡出土土器の胎土 の化学分析値分布図……………184		
第91図	平方3号窯須恵器杯・蓋 口径/器高比……………198		
第92図	平方2号窯須恵器杯・蓋		

	口径／器高比	198
第93図	平方3号竈須恵器壺・蓋	
	口径／器高比	198
第94図	平方竈須恵器壺の変遷図	199
第95図	口径部計測法による	
	須恵器の器種比率(個体)	200
第96図	重量計測法による	
	須恵器の器種比率(kg)	200
第97図	平方遺跡出土	
	サスカイトの分析	203

第4部 平方西遺跡の調査

第1図	平方西遺跡位置図	205
第2図	平方西遺跡全体図	207
第3図	竪穴住居跡SH1	208
第4図	竪穴住居跡SH1カマド	209
第5図	竪穴住居跡SH2	210
第6図	竪穴住居跡SH2カマド	211
第7図	土坑SK1	212
第8図	古墳時代遺物	213
第9図	土坑SK3	214
第10図	土坑SK2出土の石鏡	214
第11図	木棺墓1～4	215
第12図	木棺墓5・6	216
第13図	近世遺物	217

第5部 奈良山遺跡

第1図	北摂5号線と遺跡の分布	219
第2図	奈良山3号墳出土遺物	220
第3図	奈良山2・13号墳測量図	221
第4図	奈良山3号墳測量図	221
第5図	奈良山4号墳出土遺物	222
第6図	奈良山4号墳測量図	223
第7図	奈良山6号墳測量図	224
第8図	奈良山9号墳測量図	224
第9図	奈良山遺跡調査区設定図	225
第10図	奈良山遺跡全体図	227
第11図	第1工房跡	231
第12図	第1工房跡出土土器(1)	233
第13図	竪穴部内面の当て具痕	234
第14図	第1工房跡出土土器(2)	235

第15図	第2工房跡下層の竪穴住居跡(SH1)	237
第16図	第2工房跡上層の掘立柱建物跡	238
第17図	第2工房跡出土土器	239
第18図	第3工房跡	240
第19図	第3工房跡出土土器	241
第20図	石器・金属器	242
第21図	鉄滓・羽口・銭貨	244
第22図	中世墓	246
第23図	中世墓出土土器	247
第24図	近世墓出土銭貨(寛永通宝)	247
第25図	炭窟跡(SK5)	248

第6部 奈良山中央公園遺跡の調査

第1図	調査地点	252
第2図	遺構	253
第3図	出土遺物	254

表 目 次

第1表	主要遺跡一覧表	9
第2表	サスカイト集積遺構出土石器計測表	23
第3表	平方遺跡の石器組成	86
第4表	石器計測表(1)	106
第5表	石器計測表(2)	107
第6表	石器計測表(3)	108
第7表	平方1号竈の磁化測定結果(MRN)	164
第8表	平方2号竈の磁化測定結果(MRN)	164
第9表	平方3号竈の磁化測定結果(MRN)	166
第10表	平方遺跡住居跡SH1の磁化測定結果(MRN)	166
第11表	平方遺跡住居跡SH2の磁化測定結果(MRN)	166
第12表	平方3号竈の磁化測定結果(50e消磁)	166
第13表	平方遺跡住居跡SH1の磁化測定結果(50e消磁)	166

第14表	平方遺跡住居跡SH1の磁化測定結果(500e消磁)……………166
第15表	平方遺跡群の考古地磁気測定結果……………167
第16表	各サスカイト原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値・170
第17表	岩屋原産地からのサスカイト原石66個の分類結果……………171
第18表	和泉・岸和田原産地からのサスカイト原石72個の分類結果……………171
第19表	和歌山市梅原原産地からのサスカイト原石21個の分類結果……………171
第20表	平方遺跡出土のサスカイト切片分析結果……………173
第21表	平方遺跡出土サスカイト製石片の原材産地推定結果……………174
第22表	平方遺跡出土遺物の原石産地別頻度分布……………176
第23表	岩屋第二群の3個を基準として補正した各原産地の使用頻度……………176
第24表	平方遺跡群出土須恵器の分析値・178
第25表	ジフェニルカルバジドによる呈色スポットのRf値と色調……………182
第26表	ジチゾンによる呈色スポットのRf値と色調……………182
第27表	原子吸光分析における各元素の分析条件……………184
第28表	平方遺跡出土土器の粘土の化学分析結果一覧表……………185
第29表	平方遺跡炭化材樹種一覧表……………189
第30表	口縁部計測法による須恵器の器種の比率……………200
第31表	重量計測法による須恵器の器種の比率……………200

図版目次

カラー図版

巻首図版1	南東上空からみた北摂ニュータウンと三田市街(昭和51年)
-------	------------------------------

巻首図版2	北摂ニュータウン中央地区全景(昭和63年)
-------	-----------------------

中西山遺跡

巻首図版3	1. 中西山遺跡群北方より三田市街を望む 2. 中西山遺跡群全景(昭和56年度の調査)
巻首図版4	1. 中西山遺跡群全景(昭和62年度前半の調査) 2. サスカイト集積遺構

平方遺跡

巻首図版5	1. 平方遺跡群全景(南西から) 2. 平方遺跡群全景(真上から)
巻首図版6	1. SH2・3小銅鐸型出土状況 2. SK3舌出土状況
巻首図版7	1. 小銅鐸型(内面) 2. 小銅鐸型(外面)
巻首図版8	1. 平方1号窯 2. 平方1号窯出土須恵器
巻首図版9	1. 平方2号窯 2. 平方2号窯出土須恵器
巻首図版10	1. 平方3号窯 2. 平方3号窯出土須恵器
巻首図版11	1. 平方2号窯側壁 2. 平方2号墳(南から)

図版

中西山遺跡群

遺跡の調査

図版1	1. 遺跡遺景(南から) 2. 確認調査全景(西から)
図版2	1. 調査前 2. 確認第1・3トレンチ(西から) 3. 確認第3トレンチ 堅穴住居跡検出状況(南から) 4. 確認第8トレンチ(南東から) 5. 掘削状況 6. 電動ふるい機による選別作業

中西山遺跡

図版3	1. 遺跡全景(南西から)
-----	---------------

- 図版4 2. 竪穴住居跡1(南から)
1. 竪穴住居跡1(北東から)
2. 竪穴住居跡1 中央土壇の断面
3. 竪穴住居跡1 周壁溝の断面
4. 竪穴住居跡1 柱状片刃石斧出土状況
5. 竪穴住居跡1 柱穴断ち割り状況

- 図版5 1. 木棺墓1(南西から)
2. 木棺墓2(南東から)
3. 木棺墓2 板状鉄斧出土状況
4. 木棺墓2 棺内の断面

- 図版6 1. サスカイト集積遺構(上層)
2. サスカイト集積遺構(下層)

中西山3号墳

- 図版7 1. 調査前(南東から)
2. 全景(南から)
- 図版8 1. 奥壁(南から)
2. 玄門(北から)
- 図版9 1. 右側壁(南西から)
2. 左側壁(南東から)
- 図版10 1. 右羨道(西から)
2. 墳丘東側の盛土状況(南から)
3. 墳丘西側の盛土状況(南から)
- 図版11 1. 石室内遺物出土状況(南から)
2. 玄室北隅付近の遺物出土状況(西から)
- 図版12 1. 支室内遺物出土状況(南から)
2. 羨道 遺物出土状況(南から)

中西山4号墳

- 図版13 1. 全景(南から)
2. 遺物出土状況(一部復原)

中西山城跡

- 図版14 1. 調査前の全景(北西から)
2. 北側の状況(北から)
- 図版15 1. 北側の状況(西から)
2. 東側の状況(南から)
- 図版16 1. 調査後の全景(北西から)
2. 調査後の全景(西から)

- 図版17 1. 土塁の断面(東から)
2. 土塁の断面(南から)

遺物

- 図版18 弥生時代 土器・石鐮
図版19 弥生時代 石斧・鉄斧
図版20 弥生時代 サスカイト石鐮・石鐮
図版21 弥生時代 サスカイト銅片
図版22 弥生時代 サスカイト銅片
図版23 弥生時代 サスカイト銅片
図版24 中西山3号墳 須恵器
図版25 中西山3号墳 須恵器
図版26 中西山3・4号墳 須恵器
図版27 中西山3号墳 鉄器・耳環
図版28 古墳時代～中世 須恵器・土器

平方遺跡群

- 図版29 1. 遠景(南から)
2. 遠景(上空南東から)
- 図版30 1. 全景(上空南から)
2. 全景(真上から)

平方遺跡一弥生時代一

- 図版31 1. SH1・SB1(南西から)
2. SH1(南から)
- 図版32 1. SH2調査前(南から)
2. SH2・3(南から)
- 図版33 1. SH2・3(南から)
2. SH2・3(北から)
- 図版34 1. SH2・3小銅鐮鋳型出土状況(東から)
2. 小銅鐮鋳型A出土状況(南東から)
3. 小銅鐮鋳型B出土状況(東から)
- 図版35 1. SH5・6(南西から)
2. SH6(南西から)
- 図版36 1. SH5(西から)
2. SH7(西から)
- 図版37 1. SH4(南から)
2. 段状遺構・SH4(南から)

- 図版38 1. SH 8・SH 2・3(西から)
2. SK 3・SH 8(南東から)

- 図版39 1. SB 1・SH 1(真上から)
2. SB 1(南東から)

- 図版40 1. SK 3舌出土状況(北から)
2. SK 3舌出土状況(東から)

平方遺跡—古墳時代—

- 図版41 1. SH10(東から)
2. SH10 遺物出土状況(東から)

- 図版42 1. SH 9(南東から)
2. SH11(南東から)

- 図版43 1. SH12(南東から)
2. SH12 カマド・遺物出土状況
(南東から)

平方窟跡群

- 図版44 1. 2・1号窟全景(南東から)
2. 1号窟(南東から)

3. 2号窟(南東から)
図版45 1. 1号窟(南東から)
2. 1号窟土器出土状況(南東から)

- 図版46 1. 2号窟(南東から)
2. 2号窟土器出土状況(南東から)

- 図版47 1. 2号窟土器出土状況(北東から)
2. 2号窟土器出土状況(北から)

- 図版48 1. 2号窟左側壁(東から)
2. 2号窟右側壁(南から)

- 図版49 1. 3号窟(南東から)
2. 3号窟土器出土状況(南東から)

- 図版50 1. 3号窟とテラス(南東から)
2. 3号窟とテラス(東から)

- 図版51 古墳時代 1. SB 2(東から)
2. SB 2ピット断面(南から)

平方古墳群

- 図版52 1. 1号墳(南東から)
2. 1号墳(南東から)

- 図版53 1. 1号墳玄室(北東から)
2. 1号墳南溝(南東から)
3. 1号墳北溝(南東から)

- 図版54 1. 1・2号墳(南東から)
2. 2号墳(南東から)

- 図版55 1. 2号墳奥壁(北西から)
2. 2号墳左壁(南西から)

平方城跡

- 図版56 1. 全景(上空南から)
2. 全景(南東から)

- 図版57 1. 全景(南西から)
2. 南土塁断面(南西から)

平方遺跡の調査

- 図版58 1. SH 2調査状況
2. 3. 地磁器サンプル採集
4. 電動フルイ使用状況
5. 現地説明会風景

遺物

- 図版59 弥生土器

- 図版60 1. 弥生土器 壺

2. 弥生土器 甕

- 図版61 1. 弥生土器 高坏

2. 弥生土器 脚部

- 図版62 1. 弥生土器 器台

2. 弥生土器 底部

- 図版63 土製品 鋳型

- 図版64 土製品 鋳型

- 図版65 土製品・石製舌・玉

- 図版66 住居跡出土須恵器・土師器

- 図版67 1号窟出土須恵器

提瓶

- 図版68 1号窟出土須恵器

- 図版69 1号窟出土須恵器

- 図版70 1号窟出土須恵器

- 図版71 2号窟出土須恵器

- 図版72 2号窟出土須恵器

- 図版73 2号窟出土須恵器

- 図版74 2号窟出土須恵器

- 図版75 3号窟出土須恵器

- 図版76 3号窟出土須恵器

壺

- 図版77 3号窟出土須恵器

壺・高坏

- 内外面
- 図版78 3号窯出土須恵器 坏内外面
- 図版79 3号窯出土須恵器
- 図版80 各窯出土須恵器 壺蓋・壺・甕
- 図版81 古墳・土塁・包含層出土須恵器
- 図版82 1. 弥生時代鉄器
2. 古墳出土鉄釘
- 図版83 1. SH2出土の石罫(1)
2. SH2出土の石罫(2)
- 図版84 1. SH2出土の石罫(3)
2. SH2出土の石罫(4)
- 図版85 1. SH2出土の石罫(5)
2. SH2出土の石罫(6)
- 図版86 1. SH2出土の石罫(7)
2. SH2出土の石罫(8)
- 図版87 1. SH2出土の石罫(9)
2. SH2出土の石罫(10)
- 図版88 1. SH2出土の石器(1)
2. SH2出土の石器(2)
- 図版89 1. SH3出土の石罫(1)
2. SH3出土の石罫(2)
- 図版90 1. SH3出土の石罫(3)
2. SH3出土の石罫(4)
- 図版91 1. SH1出土の石器(1)
2. 包含層出土の石器(1)
- 図版92 1. 石器の接合資料
2. 包含層出土の石器(2)
- 図版93 1. 包含層出土の石器(3)
2. 包含層出土の石器(4)
- 図版94 1. 縄文時代草創期の石器
2. 包含層出土の石器(5)
- 図版95 炭化材掛種(1)
- 図版96 炭化材掛種(2)
- 平方西遺跡**
- 図版97 1. 調査前(北東から)
2. 全景(南西から)
- 図版98 1. 全景(北東から)
2. SH1・2(南東から)
- 図版99 1. SH1(南東から)
2. SH1遺物出土状況(南西から)
- 図版100 1. SH2(南東から)
2. SH2遺物出土状況(北西から)
- 図版101 1. SH1カマド(南東から)
2. SH2カマド(南東から)
- 図版102 1. 木棺墓群(南から)
2. SK1
- 図版103 1. SK2
2. SK2断面
- 図版104 出土遺物
- 奈良山遺跡**
- 図版105 1. 遺跡全景(北東から)
2. 第1工房跡全景
- 図版106 1. 奈良山5号墳と第1工房跡
2. 奈良山14号墳
- 図版107 1. 第2工房跡全景
2. 第3工房跡全景
- 図版108 1. 第1工房跡(南東から)
2. 第2工房跡(西から)
- 図版109 1. 第2工房跡下層の竈穴住居跡
2. 同上層の樹立柱建物跡
- 図版110 1. 第3工房跡(南から)
2. 炭窯跡
- 図版111 1. 中世墓(南から)
2. 中世墓の断ち割り
- 図版112 1. 近世墓全景
2. 近世墓域の石塔類
- 図版113 須恵器 蓋杯・高杯
- 図版114 須恵器 高杯・壺・甕・碗・飯
- 図版115 1. 須恵器 蓋杯
2. 須恵器 蓋杯
- 図版116 1. 須恵器 高杯
2. 須恵器 壺・甕
- 図版117 1. 須恵器 甕内面の当て具痕
2. 土師器 杯・甕・鍋
- 図版118 1. 土師器 甕・輪羽口
2. 鉄滓
- 図版119 1. 金属器
2. 石器

図版120 近世墓出土懸甕

図版121 近世墓出土土器(1)

図版122 1. 近世墓出土土器(2)

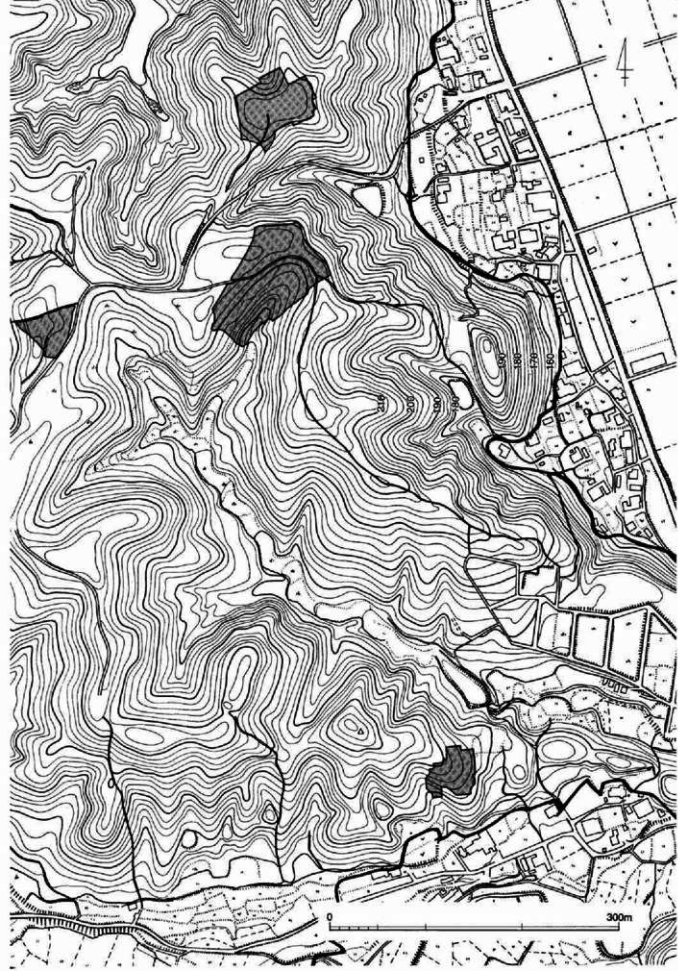
2. 近世墓出土土器(3)

3. 近世墓出土銭貨

奈良山中央公園遺跡

図版123 遺構と出土土器

第1部 調査の経過



第1章 調査に至る契機と経過

第1節 調査の契機と昭和54年度以前の調査

北摂ニュータウンは六甲山系北方に広がる三田盆地西北部の丘陵上に建設され、その開発面積は1,244haに及ぶ。開発地は当初、南地区、中央地区、西地区、北地区の4地区に区分され、兵庫県と日本住宅公団(現在住宅・都市整備公団)が分担して工事を実施し、現在一部を残し造成工事が終了している。また、昭和56年からは入居が開始され、新しい町並みが形成され始めている。

ニュータウン建設計画に伴う埋蔵文化財分布調査は、昭和44・45年度の2箇年にわたって行われ、85箇所の包蔵地が発見された。

分布調査の成果に基づいて、昭和46年度から発掘調査が開始された。発掘調査は造成工事が先行して行われた南地区から実施し、その後、中央地区に移行したが、昭和52年度までは行政外の研究者に調査を依頼し、断続的に調査が行われた。この間の調査では、弥生時代中期後半の高地性集落遺跡である下深田大山遺跡、終末期の横口式石槨を埋葬施設とする奈良山12号墳、三田盆地で唯一確実な前方後円墳であり、金銅装冠の出土した西山6号墳など、重要な成果が得られた。

昭和53年度以降は兵庫県教育委員会が発掘調査を担当し、弥生時代中期後半の大規模な高地性集落遺跡である奈カリ与遺跡の発掘調査が昭和55年10月まで約2年4箇月間行われた。この調査では、同一地点に位置する釜屋城跡と終末期古墳である奈カリ与古墳の調査が合わせて行われた。

奈カリ与遺跡は弥生時代中期後半の時期に限定された集落遺跡で、標高約220mの丘陵頂上、それから派生する尾根稜線及び斜面に営まれ、合計30棟の壑穴住居跡の他、段状遺構・溝・井戸・壱棺墓などが検出された。遺物には土器の他、石器・鉄器などが多数出土している。

釜屋城跡は丘陵頂部を取り囲むように土塁が巡らされ、土塁盛土を中心に多量の遺物が出土し、16世紀後半の城跡であることが明らかとなった。



第1図 北摂ニュータウンの位置

奈カリ与古墳は径7～8mの円墳で、特異な小型の横口式石椁を埋葬施設とする古墳である。出土遺物から7世紀中葉頃の時期が考えられる。

この発掘成果については、『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書 II』において報告しているので参照されたい。

その他、昭和53年度には、No72・No107・No218・No223・No226・No236などの6地点の確認調査を行い、そのうち、No72地点については、五良谷11号墳として全面調査を行い、2基の木棺直葬を埋葬施設とする径12mほどの円墳であることが判明した。この五良谷11号墳については、前記報告書に調査成果を公表している。No226は古墳状の隆起が認められたため、全面調査を行ったが、自然隆起であることが判明した。No107地点は奈良時代の堀立柱遺物を検出し、椀下ヶ谷遺跡として昭和62・63年度に全面調査を行っている(未報告)。

第2節 昭和55年度の調査

昭和55年度は10月まで奈カリ与遺跡の調査を行った。奈カリ与遺跡の調査終了後、奈良山古墳群の位置する丘陵を横断するように計画されたニュータウン内幹線道路の確認調査と、この確認調査の結果、新たに発見された、奈良山5号墳と奈良山遺跡の全面調査の一部を行った(本報告書)。なお、確認調査の詳細については、『三田市・北摂ニュータウン内埋蔵文化財発掘調査概報-昭和55年度-』において報告している。

第3節 昭和56年度の調査

昭和56年度の調査は、中央地区では奈良山遺跡の全面調査、No240地点(平方遺跡)、No306地点(中西山遺跡群と呼称)の確認調査、及び中西山遺跡群のうち、東半部の全面調査を実施した。また、北地区(工業団地)で溝口城跡の確認調査を行った。

調査は前年度に引き続いて奈良山遺跡の全面調査から開始した。しかし、新たに中西山遺跡が発見されたため、工事計画の都合上、奈良山遺跡の調査を中断し、中西山遺跡の発掘調査を先行して実施することになり、奈良山遺跡の調査は約150㎡を終了したのみで、その他の地区は翌年以降に繰り越すことになった。

No240地点(平方遺跡群と呼称)は分布調査で須恵器片が採集され、窟跡の存在が想定されたため、丘陵斜面にトレンチを設定して確認調査を行った。調査の結果、須恵器を包含した灰原かとみられる炭化物層が検出された。また、弥生土器とみられる小片が出土し、第2次確認調査の必要性が考えられた。

No306地点(中西山遺跡群)は前年度に新たに発見された遺跡で、確認調査の結果、丘陵頂部を中心に弥生時代中期後半の集落遺跡と室町時代後期の山城跡が発見され、確認調査に引き続き遺跡の東半部分にあたる約2,575㎡の全面調査を行った。

また、調査途中で新たに2基の古墳(中西山3・4号墳と呼称)が発見されたため、合わせて全面調査を行った。

第4節 昭和57年度の調査

昭和57年7月20日から11月18日にかけて、奈良山遺跡の発掘調査を行った。対象面積は1,250㎡である。昭和55年度の調査では、奈良山5号墳を新たに発見し、さらに古墳の裾部には、平坦地を削り出した鍛冶工房跡を検出していた。今回の調査では、新たに古墳の残骸一基(奈良山14号墳)と、2箇所の工房跡を発見し、中世墓も確認した。この中世墓は、さらに調査対象地外へ続くものとみられ、隣接する現在の墓地との間のおよそ300㎡を追加調査する必要がある。翌年度以降に調査することになった。また、南側の全面調査対象地域外に平坦地があることから、確認トレンチ調査を行ったが、テラス状の平坦地の部分で炭焼窯跡を確認したのみである。

第5節 昭和59年度の調査

昭和57年度の調査で中世墓を検出した奈良山遺跡の東側の隣接地のおよそ300㎡を対象に、昭和59年4月24日から5月18日にかけて調査した。当初は中世墓地が周囲に広がることを予想していたのだが、調査の結果、近世後期を中心とする墓地であることが判明した。

第6節 昭和62年度前半の調査

調査を行った遺跡は、中西山遺跡・平方遺跡・梶下ヶ谷遺跡である。

中西山遺跡は前回未調査であった西半部について調査を行った。また、中西山城跡関係の遺構の広がりをもつため、新たに4本のトレンチを設定した。その結果、弥生時代中期末の集落が明らかとなった。しかし中西山城跡については、新たな遺構を確認することはできなかった。

平方遺跡は前回の調査で斜面に窯跡の存在が推定されていたのを受けて、全面調査を行う予定であった。しかし遺跡の範囲外として造成されていた尾根のカット面で、弥生土器・石器を採集し、さらに尾根上に土塁状の盛土が発見されたため、急遽周辺部も含めた遺跡の範囲確認調査に切り換えた。調査は新たに7本のトレンチを設定し、尾根上の平坦面から斜面の遺構を精査した。調査の結果、弥生時代～古墳時代の遺構・遺物が調査区のはほぼ全域から検出され、遺存している遺跡の範囲は約2,000㎡あることが判明した。

梶下ヶ谷遺跡は寺院跡の存在が伝えられており、前回の確認調査でも柱穴が検出されていた。そのため全面調査が予定されていたが、既に遺跡が破壊されている可能性が生じたことから、第2次確認調査を行った。調査では2本のトレンチと4箇所のグリッドを設定し、平安時代の遺構・遺物および縄文時代の遺物を検出した。

第7節 昭和62年度後半の調査

昭和62年度後半の調査は、昭和62年11月1日～昭和63年3月27日までの期間行った。

調査は、平方遺跡(No240)、梶下ヶ谷遺跡(No107)、西山古墳群(No197)の全面調査と、平方西遺跡(No532)、西山遺跡(No509)、西山西遺跡(No503-)、下西山遺跡(No501・502)の確認調査を実施した。

平方遺跡は、弥生時代中期の集落、古墳時代後期の集落、横穴式木室墳、須恵器窯跡、中世の山城が発見された。また、遺物は弥生時代中期後半の住居跡から小銅鐸の鋳型一対、銅鐸の石製舌などが発見出土したため、遺構・遺物共に重要であるという観点にたち、公団に対して遺跡の保存を訴えていくことになった。そのため調査を途中で中断して協議を重ねていくことにした。

梶下ヶ谷遺跡は、縄文時代の落とし穴や奈良時代の掘立柱建物跡や竪穴住居跡を調査した。西山古墳群は、古墳時代後期の古墳12基と住居跡が見つかり、下層からは弥生時代と考えられる木棺墓群が見つかった。

確認調査は幅1mのトレンチで調査を行い、平方西遺跡、西山遺跡、西山西遺跡、下西山遺跡の各遺跡で何らかの遺構、遺物が見つかり、遺跡であることが判明した。この結果全面調査が必要であることがわかった。また、梶下ヶ谷遺跡は範囲が広がることが判明した。

なお、昭和63年2月21日に平方遺跡と西山古墳群の現地説明会を実施した。

第8節 平成元年度の調査

平成元年度の調査は、平成元年7月17日～8月25日にかけて実施した。

調査は昭和62年度の確認調査で、遺跡と判明した平方西遺跡(No532)の全面調査を実施した。古墳時代後期の集落を中心とした遺跡で、平方遺跡との関連性が想定された。

第9節 平成2年度の調査

平成2年度の調査は、平成2年7月2日～9月18日にかけて実施した。調査は昭和62年度に調査を実施し、保存協議を行っていた平方遺跡の補足調査と下西山の第2次確認調査を実施した。

平方遺跡は保存対象地の周囲が既に造成されており、保存は難しいという結論に達した。このため、昭和62年度に保存を前提として掘り残していた部分についての完掘や、断ち割りなどの補足調査を実施し、調査を完了した。

下西山遺跡は第2次確認調査を実施して、範囲と深さを確認した。

第10節 遺物整理

出土品の整理事業は平成2年度から平成4年度の3年度にかけて、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。

整理作業は、出土遺物の①水洗→②ネーミング→③接合・補強→④実測・拓本→⑤復元→⑥写真撮影の順に実施した。さらに、遺物実測図・遺構図と共に⑦トレース→⑧レイアウトを行い原稿執筆→印刷を経て報告書刊行となる。

なお金属器については劣化を防ぎ、元の形状を復元するため保存処理を行った。保存処理作業は①形状観察・写真撮影→②脱塩処理→③X線透過試験→④錆削除→⑤真空樹脂含浸→⑥乾燥→⑦欠損部分を補填→⑧密封乾燥保管の工程で行った。

あわせて平方遺跡から出土した遺物など遺跡を理解するために、放射性炭素年代測定を社団法人日本アイソトープ協会に、サヌカイト製造物原材産地分析を京都大学原子炉実験所斎藤哲男氏に、須恵器の蛍光X線分析を奈良教育大学三辻利一氏に、弥生土器の赤色顔料の分析と胎土分析を武庫川女子大学安田博幸・金杉直子氏に、ガラス玉の科学的調査を奈良国立文化財研究所肥塚隆保氏に、炭化材の樹種を嶋倉巳三郎氏に分析を依頼した。

平成2年度

調査担当者 深井明比古、岸本一宏、篠宮正、中川渉、菱田淳子、大平茂、山下史朗

平方遺跡 水洗い作業は現地で実施済み。ネーミング、接合・復元作業を実施した。

中西山遺跡 水洗、ネーミング、接合・復元作業を実施した。

奈良山遺跡 水洗、ネーミング、接合・復元作業を実施した。

平成3年度

調査担当者 山下史朗、中川渉、篠宮正

整理担当嘱託員 広戸紀子、八木和子、片岡喜久子

平方遺跡 実測、写真撮影、分析・鑑定、保存処理作業を実施した。

平方西遺跡 ネーミング、接合・補強、実測、復元、写真撮影、保存処理作業を実施した。

中西山遺跡 実測、写真撮影、保存処理、遺構図補正、トレース、作業を実施した。

奈良山遺跡 実測・写真撮影・保存処理作業を実施した。

平成4年度

調査担当者 井守徳男、山下史朗、久保弘幸、中川渉、菱田淳子、篠宮正、三原慎吾

整理担当嘱託員 八木和子、片岡喜久子

平方遺跡 遺構図補正、トレース、レイアウト作業を実施し、報告書を印刷・刊行した。

平方西遺跡 遺構図補正、トレース、レイアウト作業を実施し、報告書を印刷・刊行した。

中西山遺跡 レイアウト作業を実施し、報告書を印刷・刊行した。

奈良山遺跡 遺構図補正、トレース、レイアウト作業を実施し、報告書を印刷・刊行した。

なお、現場補助員として、宮崎博史、高島知恵子、田中 騰、斉木 巖、今村直子、佐伯博光、藤井太郎、鳥羽正剛、長尾健、石本哲也の協力を得た。

第2章 遺跡をとりまく環境

遺跡の位置

兵庫県三田市は、六甲山の北側、丹波山系との間にあり盆地を形成している。旧国名では摂津国の西北部を占めているために、北摂地区と呼ばれるが、本来は有馬郡に属していた地域である。古く中世には金心寺の門前町として成立しており、戦国時代に至って有馬氏～荒木氏らの居城である車瀬城が築かれ、さらに江戸時代には三田藩九鬼氏の陣屋がおかれたことにより、以後城下町として栄えた。近年までは、丹波地域への玄関口としての役割を担ってきた田園都市であった。

ところが、昭和45年の中国自動車道の開通、昭和63年のJR福知山線の複線電化により、飛躍的に交通路が整備された結果、大阪・阪神方面への通勤圏となっており、ベッドタウンとしての役割が増している。このために、三田市から神戸市北区にかけては急ピッチでニュータウン建設が進められている。このため、元々3万7千人ほどであった人口は、現在では8万人を越え、人口増加率では日本一を誇っている。

遺跡周辺の地質

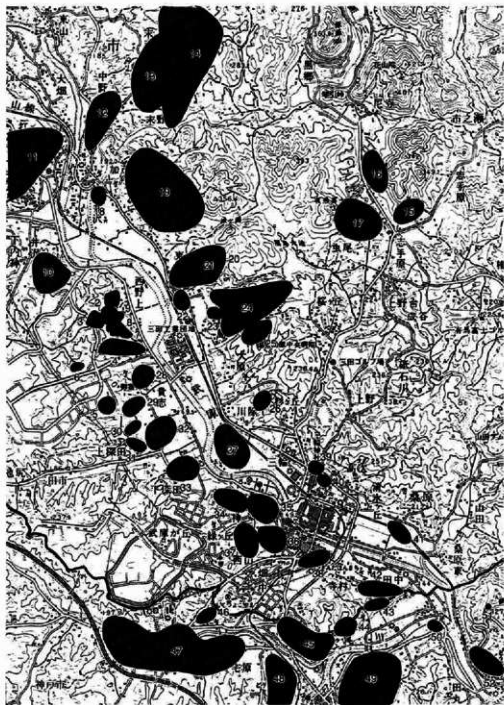
地質的にみると、三田市域の南西部は、六甲山地が隆起する以前に六甲北麓一帯に堆積した神戸層群からなる丘陵地からなっている。一方で、北東部は流紋岩類からなる急峻な山地となっており好対照を示す。この境界部を削って武庫川が流れている。

さて、今回報告する北摂ニュータウン中央地区付近では、東方山地の裾部を北から南へ流れる武庫川を挟んで、西側に平地との比高約50～70m、標高約220mの丘陵が広がる。この丘陵、もともとは神戸層群が平たく堆積していたものだから、最高所に登ると平坦な地形に見える。しかしながら、地質的に柔らかい地層からなっているために、かなり浸食が進んでおり、小さな開析谷が網目状に広がっている。先に述べた大規模なニュータウンの建設は、この大規模な造成が可能な丘陵地形があってこそ可能だったのである。

周辺の遺跡

これらの丘陵の先端部を利用して、弥生時代の中期末には、奈カリ与遺跡や今回報告する平方遺跡・中西山遺跡などの集落が営まれている。いわゆる高地性集落と呼ばれるこの種の遺跡がここ北摂地域に集中していることが特筆できる。近年低地で発見されている川除・藤ノ木遺跡などの集落遺跡との関係を解くことが今後の重要な研究課題である。

北摂地域では、奈良山1・2号墳を除いて、前・中期の古墳がほとんど発見されていない。



第2圖 周辺の主要遺跡

第1表 主要遺跡一覧表

1 中西山遺跡	19 加茂古墳群	37 西山遺跡群
2 平方遺跡	20 萬代古墳群	38 村中遺跡
3 平方西遺跡	21 青竜寺裏山古墳群	39 三輪宮ノ越遺跡
4 奈良山古墳群	22 福島長町遺跡	40 三輪餅田遺跡
5 奈カリ与遺跡	23 上龍王谷古墳群	41 桑原遺跡
6 梶下ヶ谷遺跡	24 福島古墳群	42 下田中古墳群
7 西山古墳群	25 大原古墳群	43 八幡神社裏山古墳群
8 西山西遺跡	26 川除古墳群	44 川北古墳群
9 下西山遺跡	27 川除・藤ノ木遺跡	45 八景中学校南古墳群
10 有鼻遺跡	28 貴志古墳群	46 定塚古墳群
11 内神古墳群	29 五良谷古墳群	47 宅原遺跡
12 宮脇古墳群	30 與元古墳群	48 日下部古墳群
13 末野古墳群	31 矢ノ原古墳群	49 塚田遺跡
14 末窯跡群	32 貴志遺跡	50 尼崎学園内古墳群
15 志手原古墳群	33 下深田遺跡	51 鏡射山石剣出土地
16 清水山古墳群	34 天神遺跡	52 中野古墳群
17 有馬富士東麓古墳群	35 古城遺跡・三田城跡	
18 加茂六地藏遺跡	36 屋敷町遺跡・金心寺跡	

ところが、後期になると一転して爆発的に古墳が増加し、今回報告する奈良山、西山、中西山などの古墳群が築かれている。また、末窯跡群は、竹野町鬼神谷窯や相生市丸山窯、明石市赤根川・金ヶ崎窯などと並び、県下でも最古級の5世紀末～6世紀初頭の須恵器窯である郡塚窯に始まり、古代を通じて周辺でも有数の須恵器生産地となっている他、ニュータウン地区でも今回報告する平方窯が築かれている。

さらに、北摂地域は、7世紀代には、終末期の古墳が多数存在することで知られている。三田市青龍寺裏山1・2号墳、奈カリ与古墳、西山7号墳、奈良山12号墳、神戸市北神ニュータウン内20号地点古墳、籠谷古墳、西宮市青石古墳などである。これらは各集団ごとに対応するかのようにならされており、当地域が律令社会へ向けて組み込まれていく様子がうかがえる。

つづく飛鳥・奈良時代には、奈良山遺跡や西山遺跡、梶下ヶ谷遺跡など、製鉄に関連すると思われる遺跡が特定地域に集中して発見されている。これらも、地域集団の活動と密接に係わったものと理解できる。

また、北摂三田地方は、中世城館が盛んに築かれた地域でもある。戦国時代には、丘陵地形

を生かした釜屋城跡、中西山城跡などの小規模な山城が築かれている。

従来、丘陵地域に存在する遺跡ばかりが注目されてきたが、低地部にも遺跡が存在していたことが至るところで確認されている。その最大の成果は川除・藤ノ木遺跡の調査だろう。武庫川沿いの自然堤防上に立地する弥生時代後期～古墳時代にわたる一大集落遺跡で、83棟の堅穴住居跡がみつまっている。その他、桑原遺跡、対中遺跡なども注目される。

このほか、三田盆地周辺の地理的・歴史的な環境については、これまでいくつかの報告書で詳しく紹介されているので、ここではそれらを紹介するにとどめておくことにする。詳しくはそれらを参照していただきたい。

参考文献

青木哲哉1983「三田盆地およびその周辺地域の地形」『北摂ニュータウン内遺跡発掘調査報告書Ⅱ』

兵庫県教育委員会

高橋 学1989「三田盆地の地形環境Ⅰ」『対中』兵庫県教育委員会

兵庫県教育委員会1983「北摂ニュータウン内遺跡発掘調査報告書Ⅱ」

三田市教育委員会1984「北摂ニュータウン内遺跡発掘調査報告書Ⅰ」

兵庫県教育委員会1987「青野ダム建設に伴う発掘調査報告書(Ⅰ)」

兵庫県教育委員会1992「川除・藤ノ木遺跡」

兵庫県教育委員会1990「中尾城跡」

兵庫県教育委員会1992「相野古窟跡群」

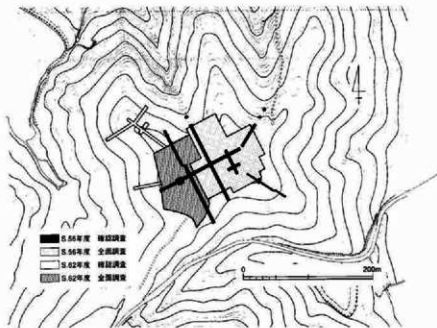
神戸市1989「新修神戸市史」歴史編1自然・考古

第1章 遺跡群の位置と立地

中西山遺跡群の行政上の所在地は、三田市けやき台3丁目800で、ニュータウン建設以前の旧地名は、三田市西野上字中西山800である。遺跡群の位置する武庫川右岸の丘陵は、無数の支谷によって奥深くまで浸食され、複雑な地形を呈している。その反面、丘陵の尾根上に上がってしまうと、標高210~218m程度のフラットな稜線となり、尾根伝いの移動が容易である。こういった地形が、集落や古墳・山城などの立地に適していた。

さて中西山遺跡群は、西野上の集落を東に見下ろす丘陵の山頂に位置する。ここからの眺望は良く、三田市街方面を見通すことができる。標高は約213mで、比較的広い平坦地となっており、そこが遺跡の立地として選ばれている。山頂の周囲は急な斜面となっており、平地との比高差は約50mあり、取り付きが困難であるが、南西方向にのみ平坦な尾根が延びていて、約100m南方の平方遺跡群と連絡をとることができる。

地形からみて、中西山遺跡群と平方遺跡群が密接な関係を有していることは言うまでもない。しかし平方遺跡群の先にはさらに西山遺跡群・奈良山遺跡群などが連なっており、全体的にみると、この稜線で結ばれた遺跡群相互が有機的な関係をもって成り立っていたと理解するべきであろう。



第1図 年次別調査位置図

第2章 調査の経過

第1節 確認調査

中西山遺跡は、昭和44年～45年度に行われた分布調査では確認されていない遺跡で、奈カリ与遺跡の発掘調査中に、周辺の踏査を行った際に発見された。踏査を行った時点では遺構・遺物などを採集したわけではなかったが、丘陵頂部付近が自然地形としては不自然な平坦面を呈していたことから、No.306地点として住宅・都市整備公団に対し確認調査の必要性について申し入れを行い、昭和56年度に平方遺跡や奈良山遺跡と併せて確認調査を実施し、遺跡の存在を確認した。

遺構・遺物の有無を確認するため、まず、丘陵頂の平坦部にトレンチを4本設定したほか、古墳が存在する可能性のある南東に派生する尾根上にトレンチを設定した。

各トレンチは、丘陵頂平坦部の中央に、尾根筋に平行して東西方向に第1トレンチ(長さ50m、幅2m)、それに直交して東側に第2トレンチ(長さ20m、幅2m)、西側に第3トレンチ(長さ20m、幅2m)、さらに、第2トレンチに直交した第4トレンチ(長さ10m、幅2m)の4本を設定した。また、丘陵頂から南東に派生する尾根上の下方には、工事範囲外に古墳が2基(中西山1・2号墳)存在し、工事範囲内にも古墳が存在することも考えられたので、この南東に派生する尾根に第5トレンチ(長さ35m、幅1m)を設定して調査を行った。

各トレンチの基本的な層序は、腐葉土の堆積である表土下に、黄褐色土(第2層)がある。丘陵頂平坦部では第2層下は赤褐色土の地山層となる。ただし、東半部分では第2層である黄褐色土の堆積がなく、表土直下が地山面となり、後世の削平を受けていることが推定された。一方、丘陵頂平坦部の縁部分と、その外周である緩斜面では第2層と地山層の間に茶褐色土(第3層)の堆積が認められた。この第3層からは弥生時代の遺物しか出土していない。

確認調査では、第1トレンチで第2層から弥生土器・須恵器が出土したほか、トレンチ西側で堀切状の遺構が検出された。第2トレンチでは表土層から土師質土器、第3トレンチでは第2層および第3層から弥生土器・須恵器などの土器のほか、トレンチ南側の平坦面から緩斜面に移行する付近で竪穴住居跡が検出された。第5トレンチでは中西山2号墳に隣接した地点で須恵器が出土したが、遺構は検出されなかった。

このような確認調査の結果をふまえ、遺跡の範囲を確認のため、各トレンチを平坦面周辺の緩斜面部分に延長するとともに、新たにトレンチを追加した。第1トレンチでは西側へさらに20m、第3トレンチでは南北にそれぞれ30m延長した。また、第2トレンチと第3トレンチの間に第6トレンチ(長さ65m、幅2m)と、北端に2m×2mの坪を1箇所、北東に派生する尾根上に第7トレンチ(長さ20m、幅2m)と2m×2mの坪を2箇所設定した。

この結果、第1トレンチ延長部で、サヌカイトの石核・剥片・破片を集積した遺構が発見された。また、第6トレンチの北半部分(北側緩斜面の谷部に当たる)でも第3層から弥生土器が相当量出土し、昭和53年度から昭和55年度にかけて行っていた弥生時代中期の高地性集落である奈カリ与遺跡と極めて類似した様相を示していることが判明した。さらに、第6トレンチおよび第7トレンチでは、丘陵頂の平坦部から斜面に傾斜変換する付近で、旧表土上に赤褐色土と黄褐色土を交互に積んだ盛土層が検出され、この盛土を行っている外側下方斜面では地山を切り込んで整形している痕跡がみとめられた。盛土層は土塁状の高まりがなく、丘陵頂平坦面とはほぼ同一の高さであるが、先の第1次調査で検出された堀切り状遺構や土師質土器などの状況も合わせて勘案すると、丘陵頂部地点には山城跡が存在すると推測された。

以上のような確認調査の結果、堅穴住居跡・サヌカイト集積遺構などの遺構とともに、土器・石器が相当量出土し、弥生時代中期後半の集落遺跡の存在が確認された。しかし、丘陵頂平坦面では後世の削平を受けているらしく、土器は出土するものの顕著な遺構は検出されなかったことから、弥生時代集落遺跡は山頂平坦面周辺ないし、その外周の緩斜面を中心に残存しているものと想定された。

古墳時代の須恵器も、細片ながら各トレンチで出土した。山頂から南東方向に派生する尾根の稜線上に2基の古墳が存在し、墳丘規模や三田盆地西側の丘陵に存在する古墳のあり方から想定して、木棺直葬を埋葬施設とする古墳であろうと判断されたため、山頂付近にも同様な木棺直葬墳が存在したことが考えられたが、弥生時代集落遺跡と同様、後世の削平を受け、すでに消滅したのではないかと推定された。

また、丘陵頂付近の平坦面が人為的に削平された痕跡があり、平坦部の西側で堀切状の遺構が検出された。さらに、平坦部縁辺には旧地形の緩斜面上に土塁は認められないが、平坦になるように盛土された痕跡があり、盛土下方には犬走り状の造成面が検出され、16世紀後半の所産とみられる土器も少量ながら出土したことから、山城と考えると間違いなからうと判断された。

その他、奈良時代から平安時代の須恵器片と近世の土器片が出土したが、これらの時期の遺構は確認調査では検出されなかった。

以上のような2次にわたる確認調査の結果から、No.306地点と仮称した遺跡は、弥生時代中期後半から室町時代後半にわたる遺跡が複合して存在していることが明らかとなった。したがって、遺跡は中西山遺跡群と総称し、さらに各時代の遺跡を細分して、弥生時代の集落遺跡を中西山遺跡、古墳を中西山古墳群、山城を中西山城跡とそれぞれ呼称することにした。

第2節 全面調査

全面調査は諸般の都合により、昭和56年度と昭和62年度前半期の2回に分割して行った。

1. 昭和56年度の調査

調査は遺跡の東半部分、約2,575㎡について実施した。この東半部分にあたる遺跡は、中西山遺跡群のうち中西山遺跡と中西山3・4号墳および中西山城跡である。

中西山遺跡は丘陵頂部北側の緩斜面の調査を行ったが、顕著な遺構は認められず、丘陵頂部から流出したと考えられる土器が出土したのみである。

中西山3・4号墳は昭和56年度の全面調査中に発見された古墳である。丘陵の伐採を行った際には、古墳の存在は全く気付かなかった。その後の地形測量でも、南側の傾斜変換点あたりでやや等高線の乱れる箇所があったが、後世の改変または流出によるものと理解していた。しかし、中西山城跡の曲輪を断ち割ったところ、盛土下層から横穴式石室を埋葬施設とする古墳が発見されたため、中西山3号墳と呼称し、併せて昭和56年度に発掘調査を実施した。中西山4号墳についても、中西山城跡の曲輪の断ち割りの際に、B-8地区で須恵器の完形品が2セット併置された状態で出土したため、古墳であったことが判明し、調査を行った。

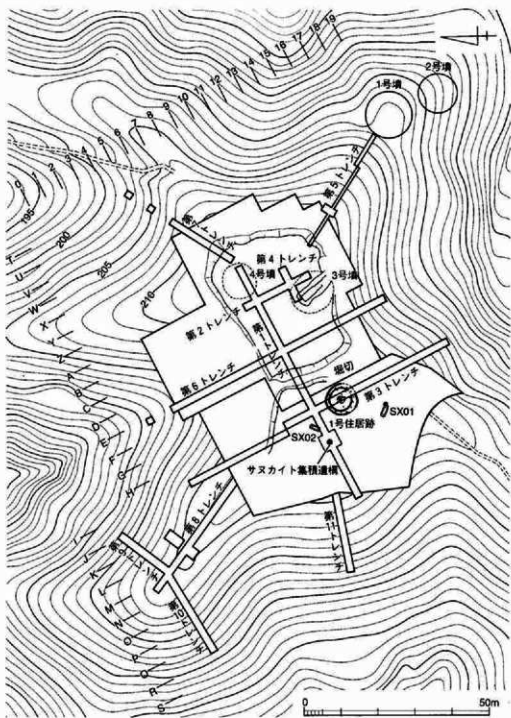
2. 昭和62年度前半期の調査

昭和56年度以来未調査のままであった中西山遺跡群の西半部、約2,000㎡について全面調査を実施した。また、調査区から北西方向に延びる尾根に、堀切状の落ちによって区画された小規模な平坦地が認められた。このことから、調査区外にも中西山城跡関係の遺構が広がる可能性が考えられた。そこで、北西方向の尾根とその斜面、および西側斜面に4本のトレンチを設定し、確認調査を行った。

全面調査は昭和56年度の調査の際に設定したグリッドを踏襲し、人力掘削によって掘り下げた。また昭和56年度の確認調査の際に、サヌカイトの剥片などの細かな石器が多量に出土したことを勘案し、掘削機を電動ふるい機にかけて、微細な遺物も洩らさないように努めた。

調査範囲は遺跡群中の中西山遺跡の部分で、昭和56年度の確認調査の際に弥生時代の住居跡とサヌカイト集積遺構を検出していた。今回は住居跡を完掘した以外にも、2基の木棺墓を発見した。遺物は遺構・包含層から、弥生土器・石器・鉄器・須恵器・土師器が出土した。

確認調査のトレンチは、第8～11トレンチと呼称する。第8トレンチの堀切状の部分では、上端の幅約2m、深さ約0.6mのV字形の落ちが、尾根を直交方向に切っていることが判明した。しかしそれ以外に関連する遺構・遺物が見つからなかったため、時期および性格を明らかにするには至らなかった。他のトレンチにおいても、遺構・遺物は見当たらなかった。



第2図 トレンチ配置図と遺構全体図

第3章 中西山遺跡

第1節 遺構

中西山遺跡で検出された遺構には、竪穴住居跡1棟、木棺墓2基、サヌカイト集積遺構1基、土坑2基がある。これらの遺構は、山頂から南西方向の尾根に向かう緩斜面に位置する。遺構の分布に偏りが見られるが、これは遺跡の東半部が城の構築などによって削平されたためと見られる。遺構の時期は、竪穴住居跡については出土した土器の年代からみて、弥生時代中期後半（畿内第IV様式）に位置づけられ、サヌカイト集積遺構も同時期と考えられる。他の遺構からは年代の判るような遺物は出土していない。

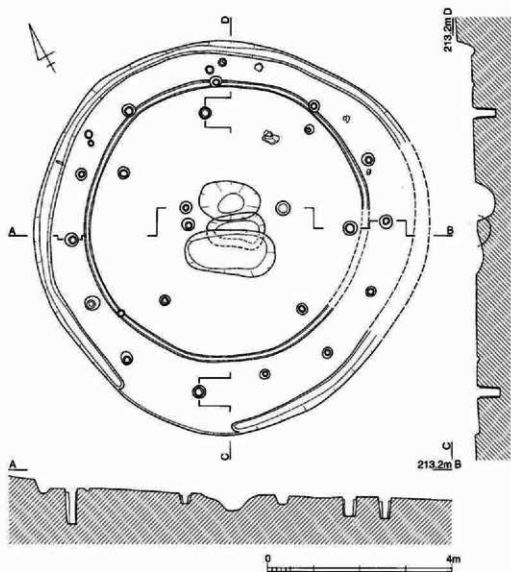
1. 竪穴住居跡1(SH1)

この住居跡は、伐採直後から凹地として認識されており、山頂にあるため、現代に至るまで埋まりきっていなかった。埋土の上層からは、須恵器も出土している。

住居跡のプランは円形で、同心円状に二重の周壁溝をもつところから、建て替えに伴う拡張が行われたものとみられる。しかし建て替え後も住居跡の軸線に大きな変動はなく、中央土壌の長軸の方位は、いずれもN60°Wあたりに留まっている。

最初に建てられたとみられる内側の住居跡は、直径が6.0×6.2mで、面積は約29㎡を占める。住居の拡張によって当初の床面・壁面は残っていないため、立ち上がりは不明である。柱穴は6本で、直径20～30cm、深さ40～50cmを測る。中央土壌は大半が切られているため詳細は判らないが、本来は楕円形で、長軸1.2m、深さ30cmを測る。埋土中には炭化物を含む。

拡張後の外側の住居跡は直径が8.4mで、面積は約55㎡を占める。壁面の立ち上がりは最大で30cmあるが、斜面の低い方ではほとんど残っていない。床面も高い方から低い方に向かってやや傾斜をもち、約20cmの比高差をもつ。床面には台石として用いられたらしい石が据えられていた。周壁溝は幅20～30cm、深さ10cmで、中から柱状片刃石斧も出土している。柱穴は周壁溝の内側に13個検出されている。直径20～30cm、深さ50～60cmで、掘り方の底に石を入れているものもみられたが、地盤自体が安定しているの、特別な処置を施しているものは少なかった。この他、中央土壌の両脇にも柱穴を一对検出しており、棟持柱とも考えられる。中央土壌は、平面楕円形で深いものと、平面長円形で浅いものが1セットとなっている。両者は長軸方向を平行にし、約20cmの間隔をもって並んでいる。深い方は長軸1.2m、短軸0.8mで断面U字形を呈し、深さ40cmを測る。埋土には顕著に炭化物を含む。浅い方は長軸1.95m、短軸0.95mで断面は浅い皿状を呈し、深さ15cmを測る。底面は赤く焼けており、埋土には炭化物・焼土を含む。遺物は弥生土器のほか、柱状片刃石斧・石錘・石鏃などが出土している。

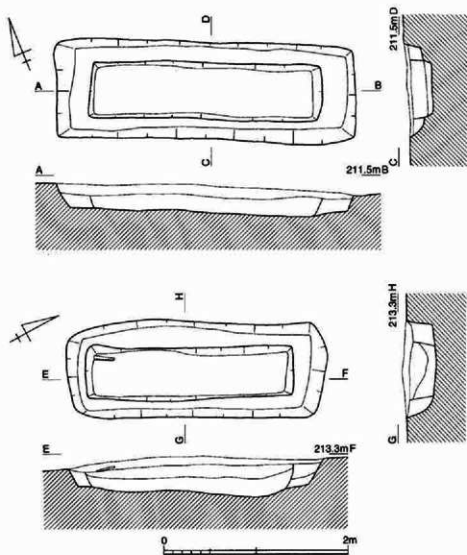


第3図 竪穴住居跡1

2. 木棺墓1 (SX1)

南西方向に延びる尾根上に位置し、尾根に対して直交、等高線に対して平行に掘り込まれている。長軸方向は $N68^{\circ}W$ である。平面は整った長方形を呈し、掘り方の長軸3.2m、短軸1.0mを測る。木棺の規模・形状は長軸2.5m、短軸0.6m、深さ25cmの箱形となっており、小口穴は認められない。ただし短軸方向は木棺の部分のみが深いため、二段掘り状となっている。

遺物は全く出土しなかった。

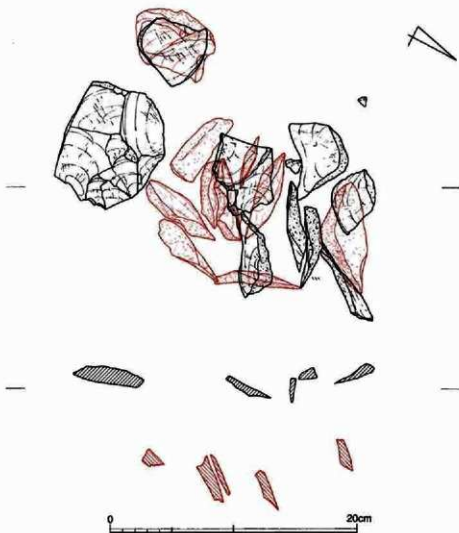


第4図 木棺墓1・2

3. 木棺墓2 (SX2)

山頂部の西端付近に位置し、長軸方向はN28° Eである。平面はややいびつな長方形を呈し、掘り方の長軸2.75m、短軸1.0mを測る。木棺の規模・形状は長軸2.15m、短軸0.55m、深さ35cmの箱形となっており、小口穴は認められない。

遺物は木棺の南西隅に、底から20cm浮いた状態で、板状鉄斧が出土した。鉄斧は刃先を小口方向に向け、長辺に沿って置かれており、埋葬の際に棺の上に置かれた副葬品と理解することができる。鉄斧が柄に装着されていたかどうかは不明である。この他の遺物として、掘り方



第5図 サヌカイト集積遺構

内から弥生土器の底部が出土している。

4. サヌカイト集積遺構

確認調査の第1トレンチで見つかったもので、山頂部の西端付近に位置する。確認調査では遺構の広がりをもつため、トレンチを拡張して精査した。その結果、新たな遺構は見つからなかったものの、包含層中よりサヌカイトの剥片・チップなどが100点余り出土し、この付近で石器製作を行った可能性が高いと言えよう。

遺構は明確な掘り込みを伴っておらず、およそ30×20cmの範囲に、19点のサヌカイトの剥片・石核が積み重ねられていた。層位的には、大きく上層10点、下層9点に分けられ、最高点と最低点で11.5cmのレベル差がある。出土状況は、縦に立ったものと横に寝たものが混在しているが、下層については縦の方が多い傾向にある。

第2節 遺物

1. 弥生時代の土器(第6図)

1～8の土器は、堅穴住居跡1からの出土である。いずれも保存状況のあまりよくない小片の遺物である。色調はにぶい橙色～黄橙色、灰黄褐色である。1は無頸壺で2孔の縦孔を穿つ。2の壺は1cmあたり8本のやや粗いハケ目を施したのち3条の凹線文を巡らす。3の高杯にも凹線文が施されている。4～6の甕の口径は11～13cmで、6、7の甕は火を受けており、8の底部は落けている。いずれも弥生時代中期、畿内第IV様式に並行するものであろう。

9はおそらく甕の底部で、木棺墓2の掘り方からの出土である。火を受けたものかひび割れが著しく、また煤けており、外面は黒色である。調整はほとんど不明であるが外面にハケ目を施しているらしい。これも弥生時代中期のものである。

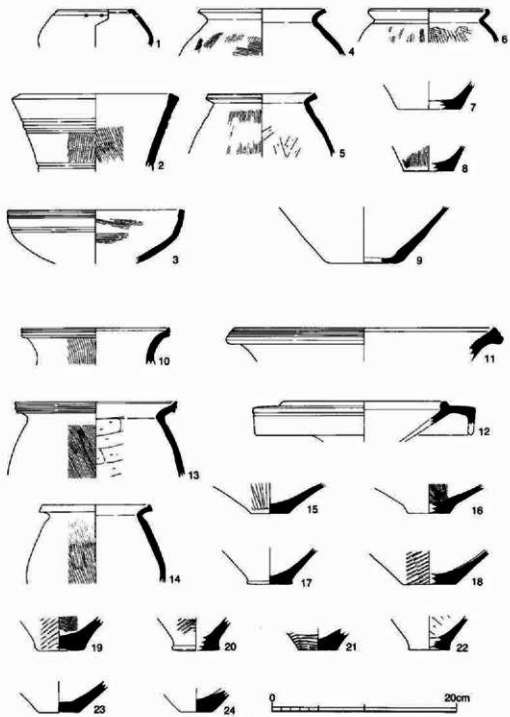
10～24はいずれも包含層からの出土である。10はほぼ直に立つ口縁の端部外面に2条の凹線を施す壺である。11も口縁端部外面に2条の凹線を施す壺であるが、口縁が大きく開く器形である。12は垂下するタイプの高杯である。内面はヘラ磨きを施していたものと思われる。13は口径17.2cmとやや大型の甕で、口縁端部外面に2条の凹線を施す。外面は1cmあたり12本のハケ目を施し、内面は横方向にヘラで削っている。14の甕も二次的に火を受けている。外面のハケ目は1cmあたり7本とやや粗い。15～18は壺の底部、19～22は甕の底部である。外面に叩きのみられる18～21はもちろん、15・16についても弥生時代後期に下るものと思われる。

2. 弥生時代の鉄器(第7図501)

501は木棺墓2から出土した板状鉄斧である。平面形はバチ形で、基部から刃部に向かって直線的に広がる形状をとる。刃部は両刃で、外弯しており、やや片減り気味である。全長23.9cm、厚み1.05cm、基部の幅2.4cm、刃部の幅4.3cm、重さ516g(処理後の重量)。

3. 弥生時代の石器(第7～13図)

本遺跡からは、微細な砕片を含めて合計で約250点近い石器が出土した。内訳は石鏃17点、石錐1点、削器4点、楔形石器2点、剥片・砕片200点余り、石核1点、柱状片刃石斧1点、蛤刃石斧1点、石錘1点である。遺物は、住居跡・サヌカイト集積遺構をはじめとした遺構の



第6図 弥生時代の遺物(1) 土器

埋土からや、古墳の墳丘盛土・遺跡内の堆積土から出土している。この他、表面採集した資料もある。ここでは、これらの遺物を一括して扱うこととする。

石材は柱状片刃石斧1点・蛤刃石斧1点・石錘1点を除いて、いずれもサヌカイト製である。使用されたサヌカイトには、緻密な構造を持つものとそうでないものの2種類が肉眼観察で分類できる。

柱状片刃石斧(第7図301)

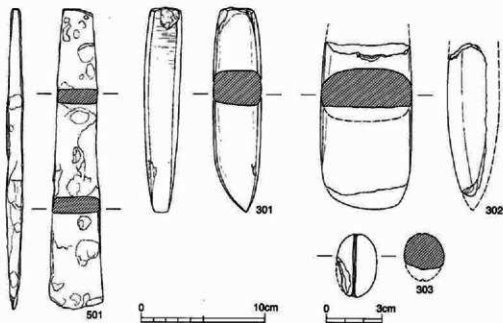
聖穴住居跡1の周壁溝より出土した。ほぼ完形品で、背面に横方向の擦痕が認められる。石材は結晶片岩で、隣接する平方遺跡・奈カリ与遺跡出土品と、ほぼ同形・同質のものである。全長16.6cm、幅3.95×2.9cm、刃部の幅1.0cm。

蛤刃石斧(第7図302)

包含層より出土した。基部と刃部を欠損しており、片面も剝離してしまっている。残存長12.2cm、幅7.3cm。

石錘(第7図303)

聖穴住居跡1の床面より出土した。一部を欠損しているが、ほぼ全形が窺える資料である。形状はラグビーボール形で、縦方向に紐掛け用の浅い溝を切り込む。本来は全周していたものであろうが、片面は欠損している。石材は非常に軟質の凝灰岩である。全長3.4cm、幅2.15cm。



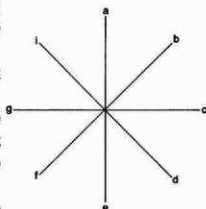
第7図 弥生時代の遺物(2) 鉄斧・石斧・石錘

サヌカイト集積遺構出土の石器(第9図304～第11図322)

サヌカイト集積遺構から出土した剥片・石核は合計で19点である。内訳は剥片18点(304～321)・石核1点(322)である。いずれも緻密な構造を持ったサヌカイト製である。全資料とも自然面を有しており、その自然面を子細に観察すると、転磨によると考えられる爪跡状のクラックを持っている事が特徴として指摘できる。サヌカイトの構造・自然面の特徴等から見て、全資料が同一母岩資料である可能性が極めて高いが、接合関係は認められなかった。資料の重量合計は877.8gである。

剥片の形状は、長さ5cm程度・幅5～8cm程度の方形に近い形状を示している。打面は、線状打面の1点を除けば、全て自然面打面である。背面が自然面で覆われるのは304～306であり、後に述べる石核の関係から剥片剥離工程の初期に得られた資料と言える。その他の資料の背面を構成する剥離面の剥離方向は、主要剥離面の剥離方向と比較した場合、同一方向のもの、直交方向のもの、反対方向のもの、斜め方向を示すものなど多岐にわたる。背面を構成する剥離面が複雑な構成をする資料は320のみで、比較的単純な背面構成を持つ資料が多い。

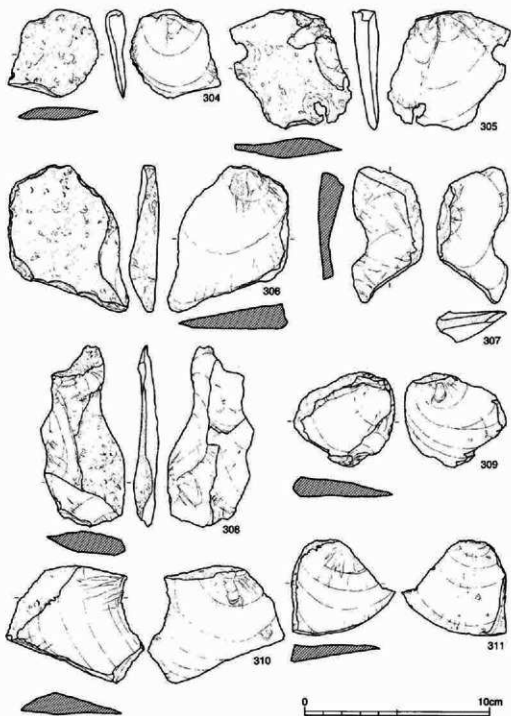
これらの剥片の中には、306・321のように二次加工の剥離痕を持つものや、309・311～313・317・319のよう



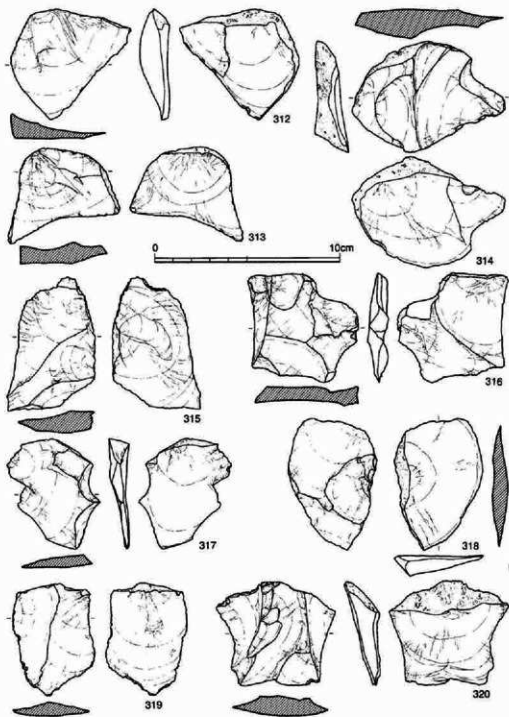
第8図 背面剥離方向

第2表 サヌカイト集積遺構出土石器計測表

番号	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	打面	背 面	備 考
304	4.7	4.7	0.7	19.8	自然面	i + e	二次加工痕あり
305	6.3	6.5	1.0	47.0	自然面	i + c	
306	7.8	6.5	0.9	79.1	自然面	i + c	
307	3.8	7.2	0.7	29.3	自然面	i + b	
308	4.5	9.6	1.0	43.8	自然面	i + f + e	
309	4.8	5.1	1.1	29.9	自然面	i + b + f	微細な剥離痕あり
310	4.8	7.3	1.4	52.2	自然面	i + c	
311	5.3	5.6	0.9	22.2	線状	i + a	微細な剥離痕あり
312	5.9	6.5	0.9	36.2	自然面	a	微細な剥離痕あり
313	5.9	8.2	1.2	63.3	自然面	c + c + h + h	
314	3.5	6.2	1.2	32.0	自然面	a	
315	3.9	6.7	1.2	30.2	自然面	a + a + b	
316	5.8	6.0	0.7	33.6	自然面	b + b + c + f	
317	5.0	5.8	0.4	20.1	自然面	h	微細な剥離痕あり
318	4.8	7.0	0.7	26.9	自然面	d + h + a	
319	5.6	4.4	0.9	19.4	自然面	b + e	微細な剥離痕あり
320	5.5	6.4	1.1	44.3	自然面	a + c + e + g	
321	6.2	6.9	0.9	48.4	自然面	g + e + b	二次加工痕あり
322	9.7	8.1	2.9	209.1	自然面		石核



第9図 弥生時代の遺物3) サヌカイト製片



第10図 弥生時代の遺物(4) サヌカイト切片

に微細な剝離痕を有するものもある。

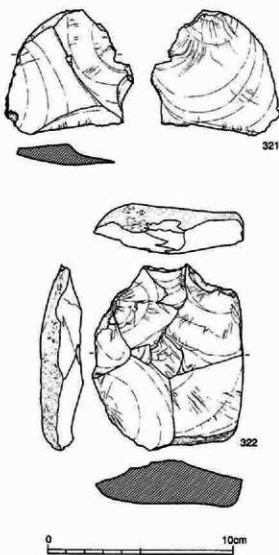
石核(322)は裏面に自然面を大きく残し、作業面が一面で打点が作業面の周囲を移動する円盤状の石核である。打面調整などの剝離痕は認められず、自然面を打面として剥片剝離作業が進んだと考えられる。石核に残された剝離面の形状・大きさも先に述べた剥片に合致する。拳大の板状の角礫を素材として、石核の小口面を打面として打点が周囲をまわる剥片剝離工程を示す。

サヌカイト集積遺構出土の剥片は本遺跡出土の他の遺構・堆積土より出土した剥片(354~364)と比較して大きさ等の点で著しい差を有している。石材は集積遺構出土の剥片が緻密な構造を持つサヌカイト製であるのに対して、他の剥片はハリ質の感を受けるサヌカイト製のものが大半である。また、サヌカイト集積遺構出土の剥片が打面がしっかりと残置し、打瘤の発達も顕著なものが多いのに対して、他の剥片は打点付近が著しい潰れ状を呈し打瘤の発達も認められず、截断面をもつものも多い。

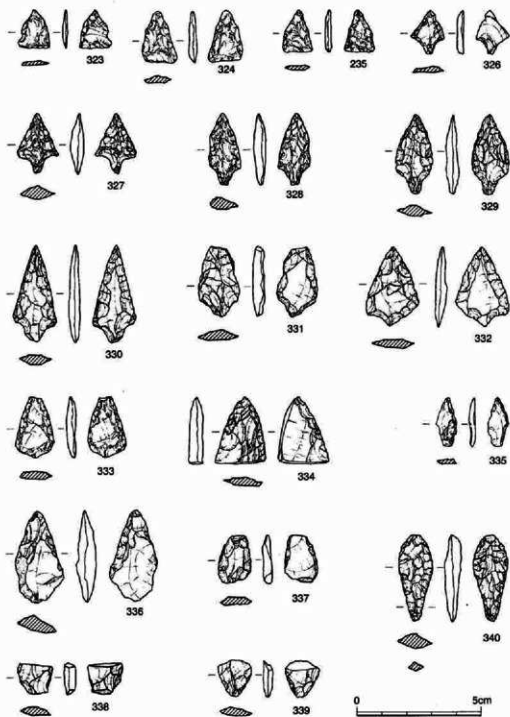
石礫等の製品の特徴も後者のそれに概ね合致する。したがって、サヌカイト集積遺構出土の剥片は、調査区内での出土はないが他の大形の石器の素材として一時的に埋納されたものかまた、剥片に二次加工痕・微細な剝離痕を有するものもあることから、それ自体が利器として利用されたと考えられる。

微細な剥片が、周辺から大量に出土していることから、この集積遺構の近辺で剥片剝離作業が行われたと考えられる。

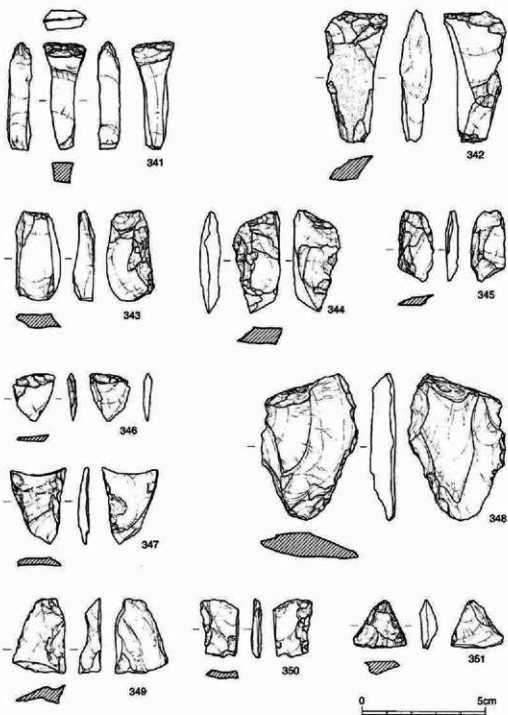
石礫(第12図323~329)



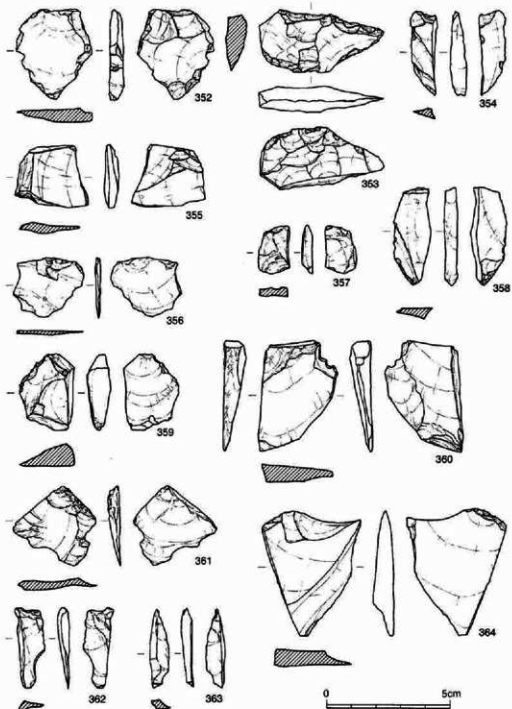
第11図 弥生時代の遺物(5) サヌカイト剥片



第12図 弥生時代の遺物(6) サヌカイト石鏃・石錐



第13回 弥生時代の遺物(7) サヌカイト楔形石器・剥片



第14図 弥生時代の遺物(8) サヌカイト製片

石鏃は、未製品も含めて合計で17点出土した。少ない資料ながら、基部の観察の可能な資料は11点あり、その内訳は、平基式3点、凸基式1点、有基式7点である。平基式の3点は小形のもので、長さ2cm以内、幅1.2cm程度の法量を計る。対して、有基式は326を除いて、長さ3cm前後、幅1.5cmの法量を計り、平基式に比して大形である。調整剥離が縁辺に止まり素材剥片の剥離面を残すものや、調整剥離によって器面が覆われ精緻な観を受けるものもある。335-339は、石鏃未製品として一括した。

石鏃(第12図340)

石鏃は1点出土した。鏃部と基部の境が明瞭でない形状を示す。両個縁からの入念な調整剥離によって全体の形状を整えている。この調整剥離によって器面は覆われる。鏃部の磨耗は見られない。

楔形石鏃(第13図341-342)

2点の出土を見た。341は両側面、342は、片側面に截断面を持つ。いずれも平面形が靴状を呈する。

二次加工のある剥片(第13図343-第14図353)

素材となる剥片に対して何らかの調整剥離を加えたものを二次加工のある剥片として一括した。ただし、これらの中には連続する調整剥離によって刃部が形成され、刮器として認定しても差し支えない資料(343-345・353)も含めている。素材剥片の一边に対して、背腹両面から緩斜度の二次加工を施す例が多い。平面形は方形を呈するもの、三角形状となるものなど様々である。

剥片(第14図354-364)

剥片については、11点を図化した。資料には、その縁辺部に微細な剥離痕を持つものもある。全体的に截断面を持つものが多く、打点付近に潰れ状の細かい剥離痕や薄い剥離痕を留めている物が多い。また、厚さは359を除けば約0.5cm程度のものである。打点付近が著しい潰れ状を呈し打痕の発達も認められない。平面形は方形を呈するもの、三角形状となるものなど様々である。

第3節 小結

中西山遺跡では、弥生時代中期後半の竪穴住居1棟と石器製作の痕跡が見つかり、平方遺跡に連なる集落の一部を構成していたと考えられる。

木棺墓2基については、当初は同じく中期後半の所産と考えていたが、1)住居の側に墓があるのは不自然、2)棺の長さが2m以上ある、3)確実に墓に伴う土器はない、4)包含層中には後期の土器も含まれている、といった理由から、後期に下るものと判断した。

第4章 中西山古墳群

第1節 中西山3号墳の調査

1. 古墳の位置

古墳は三田盆地の西側に展開する標高 214m 前後の丘陵頂の南東側縁部に立地する。三田盆地西側に展開する丘陵主尾根は、通常東に向かって延びるのが一般的で、中西山3号墳の位置する尾根も主尾根は東に向かって下降している。詳細にみれば、中西山3号墳の位置する丘陵頂部から北東方向に延びる尾根と、南東方向に延びる尾根が分岐し、中西山3号墳はこうち南東方向に延びる尾根の基部付近、すなわち、丘陵頂の平坦面から斜面部に傾斜が変換する標高 213m 付近に立地している。丘陵下の平地部の標高が160m 前後であることから、古墳は約50m ほどの比高差をもつ丘陵頂部に築造されていることになる。

なお、この尾根上の下方の標高 202m 付近には、中西山1・2号墳の2基の古墳が存在する。中西山1・2号墳は墳丘の形状・規模から、木棺直葬を埋葬施設とする円墳とみられる。

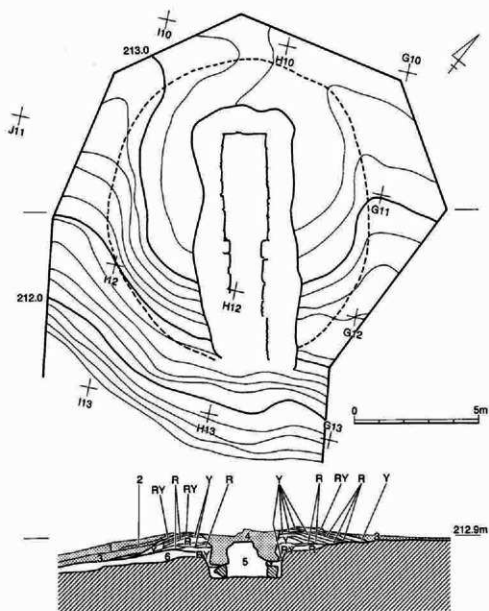
武蔵川右岸にあたる三田盆地西側の丘陵上に立地する後期古墳の埋葬施設は、他地域の後期古墳の埋葬施設として一般的な横穴式石室が採用されず、木棺直葬を中心に一部横穴式木室を埋葬施設とする古墳から構成されている。このような三田盆地西岸地域の後期古墳のなかで、中西山3号墳は横穴式石室を埋葬施設とするという点において、特異な形態の古墳であることが指摘される。

2. 墳丘

中西山3号墳は後世の地形改変により墳丘が大きく削平されていたが、幸い墳丘基底部が残存しており、墳丘盛土も一部が残っていた。

古墳は丘陵頂最高所から南東に派生する尾根筋の基部からやや西に寄った標高213m 付近の緩やかな斜面上に造営されている。墳丘の断面観察では、横断方向の石室東側では旧地表を削り出し、その上に墳丘盛土が行われているが、西側では旧地表は削平されず、旧地表上に盛土を行っていることが判る。この西側に残る旧地表の傾斜角度は8° 程度である。このことから東西方向では石室造営および墳丘盛土にさいして、基底面の平坦化が計られたとみられる。石室の主軸方向である南北方向では、墳丘北側、即ち奥壁側の斜面上方では旧地表を削り出している。一方、斜面下方の羨道前面および前庭部は、丘陵頂部から斜面部に傾斜が変換する地点であるが、墳丘は残存していない。

墳丘および石室の上半部は中西山城の造営によって破壊されている。なお、石室内の堆積土からは平安時代の土器が出土しているので、少なくとも平安時代末ごろまでは石室は開口していたのではないかと考えられる。



山城盛土 (1. 暗赤褐色土 2. 暗黄褐色土 3. 黄褐色土) 4. 石材抜き取り痕 (赤黄褐色土)

5. 石室内埋土 (黄褐色土) 6. 旧表土および旧堆積土 (暗黄褐色土)

墳丘盛土 (R. 褐色土 Y. 黄褐色土 RY. 赤褐色・黄褐色土混合土)

第15図 3号墳墳丘地形・断面図

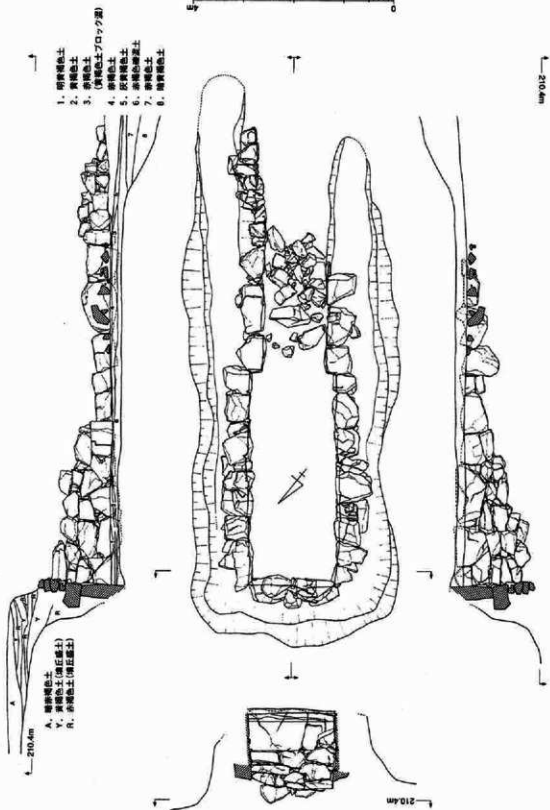


圖162 3号室石室横断面

僅かに残存する墳丘は、地山土である赤褐色土と弥生時代以降の堆積土である黄褐色土でない。その混合土が石室の構築に伴って、ほぼ交互に積み上げられている。全体にしまりはよくない。残存する墳丘基底部から推定して、墳丘規模および墳形は、東西約11m、南北約12mの円墳であることが判明した。斜面上方の墳丘周囲にはわずかに凹地が存在するが、明確な溝状に開削された痕跡は認められない。

3. 埋葬施設

中西山3号墳は、墳丘中央に造られた主軸方位が南から30°東偏する全長約6.6m⁽¹⁾の両袖式の横穴式石室を埋葬施設とする。墳丘が大きく損なわれ、石室上半部は破壊を受けているが、幸い玄室奥壁付近を中心に、少なくとも最下段の石組みは遺存していた。

石室の構築は、丘陵頂部から南東に向かって傾斜する斜面に、上端幅約4m、下端幅3m、長さ約8.5m、奥壁部分の最深部1.7mほどの墓壇掘方を、底面が水平になるようにコ字形に穿っている。前底部付近では、下方に向かう傾斜面が残され、掘方と同一の高さまで盛土されている。

石室は掘方主軸の断面形がL字形をなしていることから、奥壁は5～6段、側壁は奥壁に近い部分で4段、玄門付近から羨道にかけては1段程度が掘方内に掘えられていたとみられる。

玄室の規模は、長さ4.2m、幅1.75m(最大幅1.85m)で、平面形は整正な長方形を呈する。

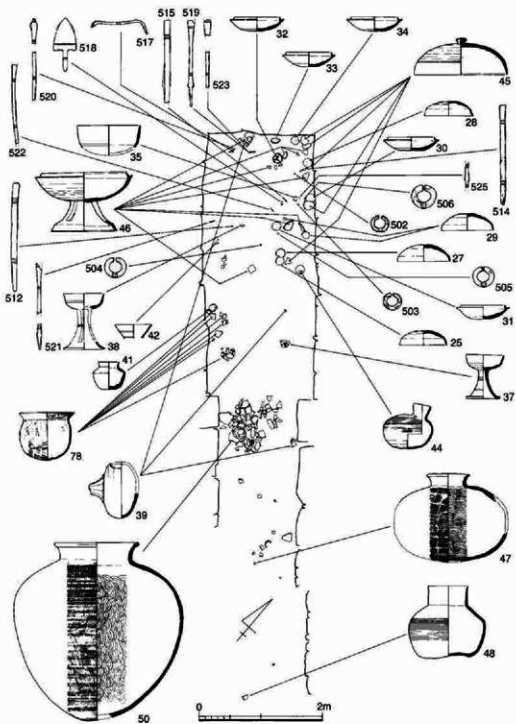
奥壁は床面から高さ1.6mほどまでが現存している。最下段は掘方底面を浅く掘りくぼめた上に、幅1.2m、高さ0.85m、厚さ0.3mほどの偏平な大型の石材を立て鏡石とし、隙間を小型の石材を同様に立てて積んでいる。2段目からは面を良く整えた割石材を順次小口積みして構築している。ただし、現存する最上段の石材は加工を施していない。持ち送りはほとんど認められず、前方に5°程度傾斜しているのみで、ほぼ直立している。

玄室側壁は奥壁に近い部分で遺存程度が良いが、玄門付近では最下段しか残っておらず、羨道に向かって下降するように残存している。残存している側壁は墓壇掘方内にあったため、破壊から免れたのであろう。両側壁の最下段は7石からなるが、左側壁は隙間を埋め合わせる小石材があるので、基本的には6石からなるのであろう。いずれも良く面を整えた割石を小口積みにして構築している。持ち送りはほとんどなく、直立している。

玄室床面は墓壇底面に厚さ20cm程度の赤褐色土を水平に敷いているのみで、敷石、排水溝などの施設は認められない。床面は1面のみである。右側壁に近い床面上に石材がみられ、棺台であることも考慮したが、おそらく奥壁もしくは側壁の転落石と考えられる。

羨道は玄室主軸と平行に取り付けられ、左右に袖部がある両袖式である。右側壁の遺存が良好で、長さ2.4m、幅1.3mの規模を計る。壁体は最下段の1段のみが残っているだけである。袖幅は左右とも25cmほどである。

遺存状態の良い右側壁では、玄門から3.1m付近で石積み列が20cmほど外側に下げられ、幅をひろげている。使用された石材も異なり、玄門から2.4mほどの3石目(石材の間に充填さ



第17图 3号墳遺物出土状況

れた小石を含めると5石)までは大型の石材が墓壇底面に据えられているのに対し、4・5石目はやや小振りの石材が使用されている。さらに前面の石列が20cmほど後方に下げられた結果、幅がひろがる部分では、さらに小型の石材が使用されていて、それらはすべて墓壇底面から浮いた状態で積まれている。つまり、水平に掘り込まれた墓壇が旧地形の斜面に達し、下方に傾斜しているため、床面を水平に保つために盛土された上に石が据えられている状況である。

左側壁は3石目までしか遺存しておらず、羨道前方は石積みが抜き取られている。構造は右側壁と同様と考えられるが、袖石が縦に据えられている点が右袖石と異なっている。

このような羨道付近の石積みの状況から、天井石が架けられていたとみられる羨道部として良い部分と、天井石が構築されなかったであろう小型の石材を積んだ部分とに分けることができ、後者を前庭部と呼び両者を区分しておく。

玄門から羨道の奥半部にかけて、羨道閉塞石ではないかとみられる石材の集積が認められた。

4. 遺物の出土状況

石室内における遺物の出土状況は、石室開口時もしくは石室の削平時に大きく移動されたらしく、原位置を保っている遺物は少なかった。石室内の出土遺物については、一々、番号を与えて取り上げたが、石室内各所の離れた位置で出土した破片が接合する場合や、石室内出土遺物とかけ離れた地点で採集された遺物が互いに接合する場合などもあり、明らかに後世の擾乱が認められた。しかし羨道閉塞石と考えられる石積みの直下で、破砕された甕が1個体まとまって出土し、出土状況から中西山3号墳の中で唯一、原位置を保っている遺物と判断される。

5. 出土遺物

中西山3号墳から出土した遺物には、以下のような土器・鉄製品・青銅製品がある。土器には土師器と須恵器があり、埋葬施設である石室内と石室前面周辺から出土している。出土した土器には古墳造営時に副葬ないし使用されたものと、後世の再利用時に遺されたものがある。鉄製品には馬具・武器・木棺緊縛具・不明鉄製品があり、石室床面および石室前面から出土した。銅製品には装身具があり、いずれも石室床面から出土している。本項では古墳造営時に伴う遺物について説明を行い、再利用の遺物については第3節において別記する。

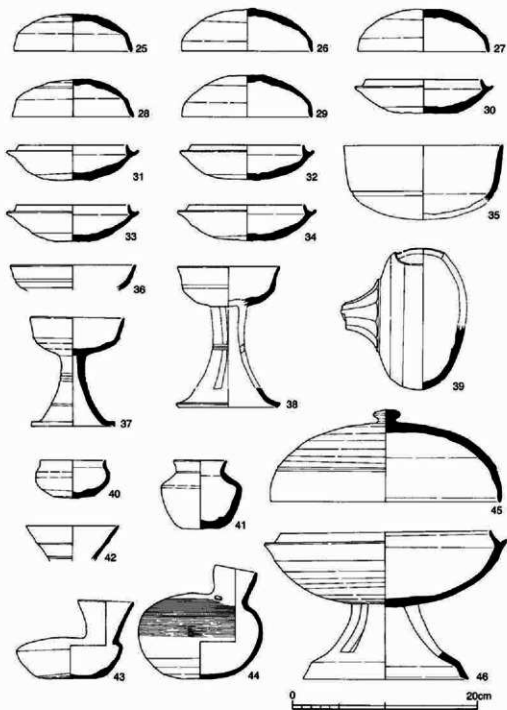
(1) 土器

A. 須恵器

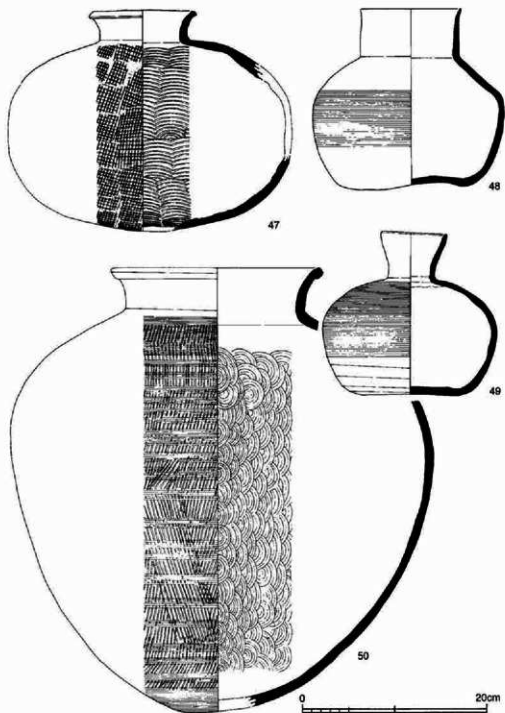
3号墳の造営に伴う須恵器には、蓋杯・鉢・無蓋高杯・有蓋高杯・特殊扁壺・短頸壺・甕・平瓶・横瓶・直口壺・甕がある。なお、土師器は出土していない。

蓋杯(25-34) 矮小化した低い立ち上がりとし、浅く扁平な体部からなる杯と、器高が低く、天井部と口縁部の境界が不明瞭な壺のセットからなる。

壺(25-29)のうち、25・26は天井部外面をロクロケズリ調整し、天井部と口縁部の境界を屈曲させている。他の3点(27-29)は天井部外面が不調整で、天井部と口縁部の境界の屈曲が不



第18图 3号坟出土土器(1)



第19图 3号墳出土土器(2)

明瞭である。蓋には2種の形態と手法があり、前者は後者のものと比較して口径がやや小さく、13cm以下である。なお、すべての蓋の天井部内面には仕上げナデが施されている。ロクロ回転方向には左右両廻りが存在する。

杯(30-34)は類似した形態と手法をもち、底部外面は不調整で、底部内面には仕上げナデを施す。ロクロ回転方向は左廻りが多いが、右廻りのものが1点(31)ある。

鉢(35) 口縁部の小片であるが、真つすぐ立ち上がる口縁部と、丸い底部をもつ鉢であろう。復元口径17.0cmと大型品である。口縁部と底部の境界は凹線によって分けられる。

高杯(36-38・45・46) 無蓋高杯3点(36-38)と特異な大型有蓋高杯のセット(45・46)がある。

無蓋高杯のうち、完形品である37の脚部は長脚で透かし穴はなく、2条と1条の凹線が2段に廻らされている。38は杯部と脚部が直接接合しないが同一個体であろう。脚部は長脚2段透かしであると推定される。36は小片であるが、無蓋高杯の杯部片であろう。杯部は口縁部と底部の境界にわずかに突出したにぶい稜をもつもの(37)と、凹線を廻らすもの(36・38)の2種がある。

有蓋高杯のセットは大型品の類例の少ない器種である。高杯は口径22.6cm、器高16.0cm、杯部高8.0cmで、底部は丸味をもち、内傾する立ち上がりをつける。立ち上がりの端部は内傾する端面をなし、浅く凹む。脚部は短脚で、裾部で大きく広がり、脚端部が屈曲する。長方形の透かしが1段3方に穿たれている。成形・調整とも極めて丁寧で、胎土も精良されている。底部外面の3/4以上をロクロケズリする。底部内面は乱方向の仕上げナデを施している。蓋は口径24.7cm、器高9.9cmで、丸味をもつ天井部と口縁部の境界は凹線が廻らされ、突出部の稜は不明瞭である。口縁端部は内傾する端面をなし、浅く凹む。天井部中央には中高の偏平なつまみをつける。高杯同様、整形・調整は丁寧で、天井部全面をロクロケズリする。天井部内面の約1/2に乱方向の仕上げナデを施す。

特殊蓋(39) 提瓶の体部に似た前面が丸く、背面がほぼ平らな扁球形の器体の上部を隅円長方形にへら状の工具で切り取り、背面中央部に棒状の筒部をつけた異形の須恵器である。体部の成形は提瓶の成形手法と同一である。平らな背面を下に偏平な蓋を成形し、前面の中央部を円盤状の粘土でふさいで、推定胴部径16cm、厚さ9.5cmの体部を成形している。背面の2/3はロクロケズリを施し、その他の外面はロクロナデによって調整している。体部前面に1条の凹線を廻らしている他は加飾はない。口縁部は凹線を廻らした後にへら状の工具によって切り取っている。口縁部は一部しか残存していないが、復元長8.5cm、幅5.5cmほどである。筒部は基部から4cm程度しか残存していないが、背面の中央部に径8cm、高さ3mmの正円形の台座にむかって裾を広げるように10面体に丁寧に面取りされた筒部をつけている。現存している筒部先端径は2.8cmほどである。

短頸壺(40・41) 2形態ある。40は口径7.0cm、器高4.1cmで、肩部がほとんどなく短い口頸部をつける。41は底部と肩部の境界が屈曲した体部に外反する口頸部をつける。

壺(42) 口縁部の破片である。口縁部と頸部の境界は不明瞭で、凹線によってわずかに区別される。頸部にも凹線が巡らされている。

平瓶(43・44) 2形態の平瓶がある。44は体部が丸味をもち、肩部はカキ目、底部はロクロケズリによって調整されている。体部上面には小さな円形の粘土粒を2個口縁の左右に張り付けている。口縁部はやや内湾しながら外反する。43は肩部と底部とも平らで、偏平な体部となっている。肩部と底部の境界は稜を有する。底部はロクロケズリによって調整されている。口縁部は外上方に広くひろく。

横瓶(47) 外反して短い口頸部をつける。口縁端は肥厚して外傾する端面をつくる。体部は外面に縦格子目叩き、内面に同心円叩き目を施している。

直口壺(48・49) 平底気味の底部に丸味をもつ偏平な体部の壺で、形態的には平瓶と良く似ている。48は真っすぐ延びる口頸部をつけ、端部が外方にわずかにおれる。底部と肩部はやや屈曲している。体部上半にカキ目を施す。49は平瓶としたほうがよいかもしれない。ただ、口頸部が体部上面中央に真っすぐ上方につくことから直口壺に含めた。口頸部は漏斗状を呈する。体部上半はカキ目調整を施す。

(2) 銅製品

A. 装身具

装身具は耳環のみで、銅芯金張耳環が4点、銅芯銀張耳環が1点出土している。

耳環(502-506) いずれも玄室床面から出土している。銅芯金張耳環のうち、502と503は錆化が著しく金張が剥落しているが、形状が類似しているので、一対になると考えられる。復元長径2.5cm、短径2.2cm、環部の幅0.63cm、厚さ0.71cmで、形状はややいびつな円形を呈する。開口部幅は2.0-3.7mmで、八字状に開き、小口には金張の絞った痕跡がみられる。重量は502が4.51g、503が5.09gである。504と505はわずかに金張が剥落しているが、遺存度は比較的良好である。長径2.84cm、短径2.61cm、環部の幅0.63cm、厚さ0.96cmで、形状はややいびつな円形を呈する。開口部幅は1.0-2.5mmで、八字状に開き、小口には金張の絞った痕跡がみられる。重量は504が17.69g、505が17.96gである。504と505は形状が類似し、一対になるとみられる。

506は銅芯銀張耳環で1点のみの出土である。長径3.38cm、短径3.04cm、環部の幅0.69cm、厚さ0.73cmの大型品で、形状はややいびつな円形を呈する。開口部幅は2mmで、小口には金張の絞った痕跡がみられる。重量は25.42gである。

(3) 鉄製品

A. 馬具

馬具には鞍金具の鞍(507)・鉸具(508)・辻金具(509)・革金具(510・511)がある。

鞍(507) 後輪の鞍とみられ、座金具と足からなる。いずれも鉄製品である。508の鉸具は鞍の輪金になる可能性があるが、分離して出土している。座金具は円形で、径3.95cm、高さ6.8cmで、中央に足を通す11.5×6.5mmの長方形の孔がある。足は鞍橋に打ち込まれた方の一端が欠損している。幅8mm、厚さ3mm程度の偏平な鉄板を、一端から3cmほどのところで輪金を固定するために環状に折り曲げている。折り曲げられた鉄板の先端部分は細くなっており、幅6mm、厚さ1~2mmほどである。もう一方の先端は欠損しているが、鞍橋に固定するために先端部分をし字形に折り曲げているらしい。

鉸具(508) 鞍の輪金であった可能性があるが、507とは分離して出土しているため、別記する。輪金の環部は6mmほどの円形の鉄棒を半円形に曲げ、基部は4~5mmほどの方形の鉄棒を直角に近く折り曲げてついている。刺金を固定する部分は欠損し、刺金も遺存していない。輪金の環部の幅は4.2cm、推定全長6cm程度。

辻金具(509) 半球形の伏鉢の断片であろう。鉄地の上に僅かに痕跡が残っていることから、金剛張であったとみられる。伏鉢頂部に4mmほどの円孔があり、飾りをのせていたと推定されるが、飾りは遺存していない。

革金具(510・511) 確認できる革金具は爪形のものが2点ある。いずれも鉄地金剛張で、2個の鋸が打たれている。他に鋸のみが数点存在することから、革金具は2点以上副葬されていたと考えられる。地板の遺存しているもの(510)は長さ2.7cm、幅1.6cm、厚さ2mmである。他の1点(511)は幅が1.8cmほどである。鋸は円頭で、先端は折り曲げるが、丸め込まれている。

B. 木棺繫縛具

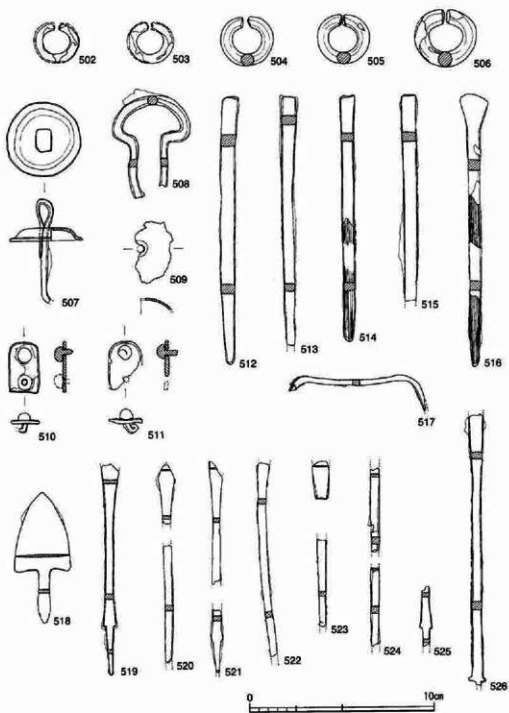
鉄釘(512~516) 5点出土している。内4点はほぼ原型を保っており、全長13~15cm、幅6~8mm、厚さ4~5mmの比較的大型品である。欠損している1点も、ほぼ同様の形態であろう。512~515の頭部は全体に偏平で、胴部とはほぼ同じ幅で折り曲げず、単純に終わっている。516の頭部は山形に打ちのばしている形態をとる。棺材の痕跡が残っている鉄釘があるが、明確でなく使用方法は明らかでない。

鉤(517) 1点のみの出土である。幅4mm、厚さ3mmほどの方形の鉄棒をコ字形に折り曲げている。足の部分は欠損している。1点のみの出土であり、木棺に使用されたものかどうか明らかでない。

C. 武器

武器は鉄器のみである。

鉄鎌(518~526) 残片が多く、正確な個体数は明らかでないが、2種の有茎鎌が出土している。518は有茎の三角形式鎌である。逆刺は浅く、薄手の平造りである。茎部は薄く、現状では端部は収束し短茎鎌のように観察されるが、欠損しており、篋であるかもしれない。現存長7.0cm、刃幅3.1cmを測る。519~526は長茎鎌である。出土品には原形を留めるものがなく、



第20图 3号墳出土銅製品・鉄製品

少なくとも5本以上が確認される。いずれも両丸造りの籬篋被柳葉形式織であろう。籬篋被は突起を造るもの、台形になるもの、及び菱形になるものの3形態がある。長茎織のうちでも全長に差異があり、13~20cm程度の幅があるとみられるが、これは籬篋被の長さ起因していることが考えられる。

6. 小結

3号墳は南東に開口する横穴式石室を埋葬施設とする径11~12mの円墳で、武庫川中流域の三田盆地西側に展開する丘陵頂部付近に造営されている。横穴式石室は全長6.6m(玄室長4.2m、幅1.75m、羨道長2.4m、幅1.3m)で、武庫川中流域ではやや大型の部類に入るが、際立って大型の石室ではない。かつて指摘したように、三田盆地西側にあたる武庫川の支流である内神川と池尻川に挟まれた地域では、横穴式石室は中西山3号墳を除くとその存在が知られておらず、6世紀後半にいたっても、主として木棺直葬、もしくは横穴式木室を埋葬施設とする古墳群が築造されている。この地域の後期古墳は、6世紀中葉前後に新たに編入された渡来系氏族、もしくはその後継者によって築造された西山6号墳の被葬者を盟主とし、同族的系譜関係にある被葬者が造営した古墳群であろうと考えられる⁽²⁾。

このような古墳群の構造のなかで、中西山古墳群は他の尾根筋にある古墳群に比べて古墳数は4基と少ないが、3号墳以外は通有の木棺直葬墳であるにもかかわらず、3号墳が他地域では一般的な埋葬施設である横穴式石室を採用していること自体が極めて特異な存在である。

副葬品には、馬具・鉄鍬・耳環・須恵器などがあり、他に鉄釘・鋸等の木棺緊縛具が出土した。後世の擾乱が著しく、必ずしも当初の副葬品がすべて遺存しているとは考えがたいが、中でも注目される遺物として、大型の有蓋高杯と特殊扁壺がある。いずれも出土例が少なくいわゆる「特殊須恵器」にふくまれる。特殊扁壺については、山田邦和氏が出土例、使用法、系譜等について簡潔にまとめられている⁽³⁾。ただ出土例が少なく、時期やこれらの遺物を副葬した古墳の意義については今後の課題であろう。

註

- (1) 羨道の前方に付設された石組みについては、天井石が構築されなかったとみられる部位で、前庭部として羨道とは区別する。土生田純之「埋葬施設—横穴系の埋葬施設」『古墳時代の研究7』1992
- (2) 井守徳男「畿内周縁部における古墳の展開と終末」『歴史における政治と民衆』1986
- (3) 山田邦和「須恵器特殊扁壺に関する覚書」『考古学与生活文化』1992

第2節 中西山4号墳

1. 古墳の位置

4号墳は標高213～214mほどの丘陵頂平坦部の北東隅に位置し、北および北西に延びる支尾根の基部にあたる。南東側に位置する3号墳とは丘陵最高所を挟んで9m（墳丘基底間）ほどの距離がある。

2. 墳丘

中西山城を築いた際に削平をうけたらしく、墳丘は全く遺存していなかった。調査中においても墳丘状の高まりは認められず、周溝状の浅い落ち込みの痕跡が一部で検出されたのみである。この浅い落ち込みが墳丘裾部であろうとみられることから、墳丘径がおおよそ9m前後の円墳であったと推定される。

3. 埋葬施設

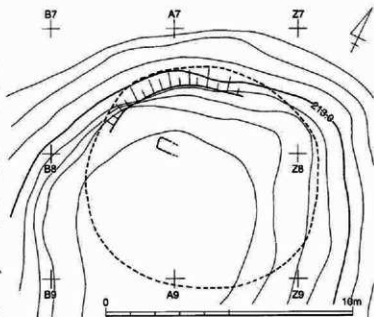
推定墳丘の中心からやや北西に寄ったところで、須恵器の蓋杯が2セット組み合わされた状態で隣接して出土した。この部分に埋葬施設が存在した可能性が考えられたため、周辺部分を精査したところ、幅45cm、長さ92cm、深さ1cmの浅い長方形の落ち込みが検出され、須恵器の出土状態からみて墓竈の痕跡と判断された。墓竈の長軸方向は、北から78°東偏している。なお、木棺の位置が中央からやや偏っていることや、周辺の木棺直葬墳の埋葬施設の状況から、別に埋葬施設があったことも

考えられる。

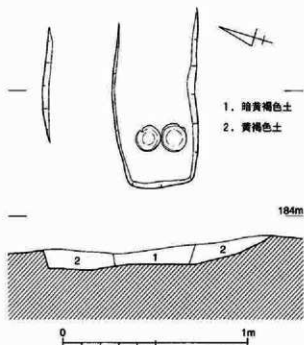
4. 出土遺物

4号墳に伴う遺物と特定できるものは、須恵器の蓋杯2セットのみである。

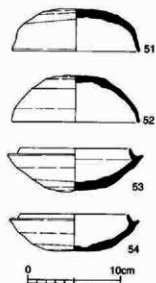
蓋杯(51～54) 51と52の蓋はそれぞれ53および54の杯とセットで出土した。54を除くと、いずれも焼成度が悪く、胎土・手法等にも共通性があり、本来セットとして生産されたものであろう。ただし、54は焼成は良好で焼



第21図 4号墳墳丘地形図



第22図 4号墳埋葬施設実測図



第23図 4号墳出土土器

き締まっている。51は口径13.5cm、器高4.5cmで、調整手法は杯と同様、頂部外面は粗い右廻りロクロケズリ調整、頂部内面は一方向の仕上げナデ調整を施している。52も同様のものであろう。53は口径11.8cm、器高4.5cm、54は口径11.6cm、器高3.9cmで、口径はほぼ同じであるが、底部がやや丸味をもつものと偏平なものがあり、器高差となっている。底部外面は粗い右廻りロクロケズリ調整、底部内面は一方向の仕上げナデ調整を施している。

5. 小結

4号墳は極めて遺存度が悪かったが、木棺直葬を埋葬施設とする径9mほどの円墳であったと推定される。三田盆地の西に展開する丘陵部に存在する後期古墳群が終末期古墳を除いて木棺直葬墳ないし横穴式木室を通常の埋葬施設としているのと同通し、他の三田盆地の後期古墳が一般的に横穴式石室を埋葬施設とする古墳であるのと同対照的である。出土遺物は須恵器の蓋杯のみであるが、形態・手法の特徴からTK209型式に併行すると考えられる。3号墳出土の蓋杯と比較した場合、3号墳の蓋杯の法量がわずかに小型であること、杯受部および蓋口縁部の形態に差異がみられること、天井部ないし底部外面にロクロケズリ調整を残していることなど、3号墳の蓋杯と異なる特徴をもち、4号墳がわずかに先行すると考えられる。

第3節 その他の出土遺物

弥生時代に伴う遺物、ないしは中西山3・4号墳および中西山城跡以外に、調査地から土師器と須恵器が若干量出土している。そのうち約半数は古墳時代に属する須恵器で、その他に平安時代の土師器・須恵器がある。

1. 古墳時代の土器

古墳時代の土器はすべて須恵器で、蓋杯・高杯・短頸壺・甕・広口壺などの器種がある。丘陵頂部付近から出土した須恵器には中西山3号墳の床面出土の須恵器と接合するものがあり、本節で取り上げる須恵器のなかには中西山3・4号墳破壊時に散乱した副葬品であった可能性がある。なお、3号墳床面出土の土器と接合したものについては、3号墳出土土器として扱った。また、3号墳ないし4号墳以外に古墳が存在したことも想定されるところである。

蓋杯(55-62) 蓋が3個体(55-57)、杯身が5個体(58-62)ある。58・59は3・4号墳出土の杯に比べて、立ち上がりが直立気味で、底部はやや丸みをもつ。また、底部外面はロクロケズリされ、先行する型式とみられる。他の蓋杯は3・4号墳のものと同大差がない。

高杯(63・64) いずれも脚部片である。63は短脚である。64は長脚2段透かして、脚端部に1条、透かし間に2条の凹線を巡らす。

短頸壺(65-68) 短頸壺3個体(66-68)と、短頸壺の蓋が1個体(65)である。65・66はセットになるとみられる。蓋は端部が肥厚し、頂部に宝珠状のつまみを付けている。66は口径3.5cm器高5.7cmの小型品で、体部に2条のヘラ記号がある。

甕(69) 口縁部の破片である。細い頸部に大きく外傾する口縁部を付ける。

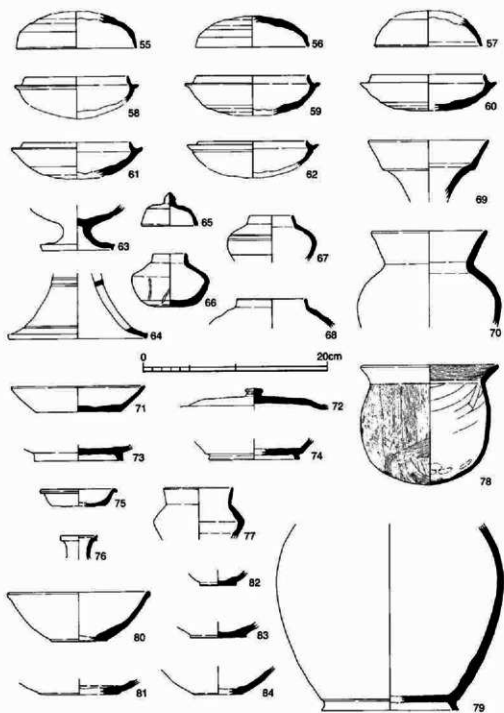
広口壺(70) 球形の体部に真っすぐ外傾する広口の口縁部を付ける。体部は内外面とも丁寧にロクロナデ調整されている。

2. 平安時代の土器

平安時代の土器は、調査地の各所と3号墳石室内から出土している。土師器には甕A、須恵器には杯A・杯B蓋・皿E・壺Lのほか、碗がある。なお、77-80は、3号墳石室内から出土している。ここでは、土師器のみ取り上げる。

土師器

甕A(78) 大きく外傾する口縁部と球形に近い体部からなる広口の甕で、口縁端部は丸く収めている。口径14.4cm、器高12.8cmを測る。体部外面と口縁部内面はハケ目を行い、体部内面の上半はヘラケズリしている。体部内面底部は指頭圧痕を残す。



第24図 中西山遺跡出土のその他の土器

第5章 中西山城

第1節 遺構

1. 中西山城の位置

中西山城は武庫川中流域右岸に展開する丘陵頂部に位置する。この丘陵頂部は南西方向から北東に延びる尾根の先端部にあたり、丘陵頂部から東方は三田盆地を良く見通すことができる。丘陵頂部の最高所は標高約213.7mで、標高213m前後より上方は傾斜の緩やかな平坦地が広がっている。標高約213mの等高線から下方は傾斜が変換し、急傾斜となって北、南、および東の3方向に下降している。東は三田盆地に向かって急な斜面となっており、北、西、南の3方向は谷が入り込んでいる。僅かに南西側に武庫川右岸の丘陵を構成する尾根の稜線が続いている。なお、東側の丘陵直下の可耕地との比高差は約50～60mほどで、山城からは三田盆地を一望できる地点にある。

中西山城のある丘陵頂部には、弥生時代中期後半の集落および古墳時代後期の古墳群が存在するが、中西山城の築城の際に削平を受け、その一部が破壊されている。

2. 遺構

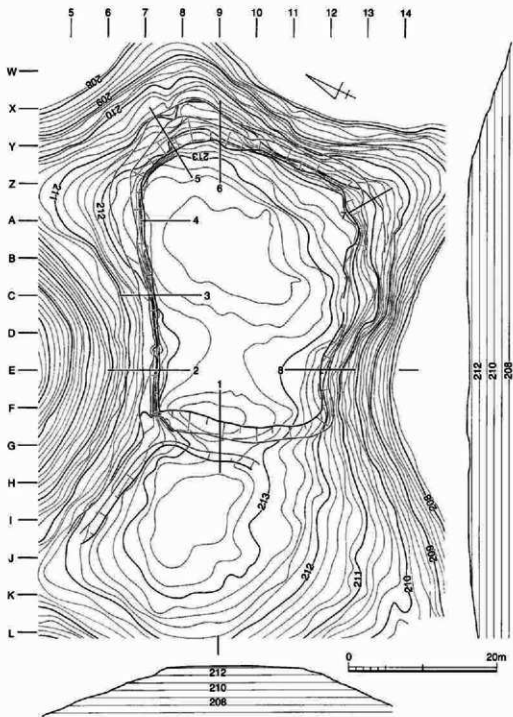
検出できた遺構には、尾根筋を切断した堀切と土塁、および斜面部の傾斜変換点付近を切土と盛土によって区画した丘陵頂部平坦面の曲輪がある。ただし、いずれも山城とするには極めて簡略化された構造の遺構で、果たして山城として機能していたか疑問が残る。しかし、後述のように、少量であるが当該時期の遺物が出土したことから、本報告では山城の一類型として扱うことにする。

堀切

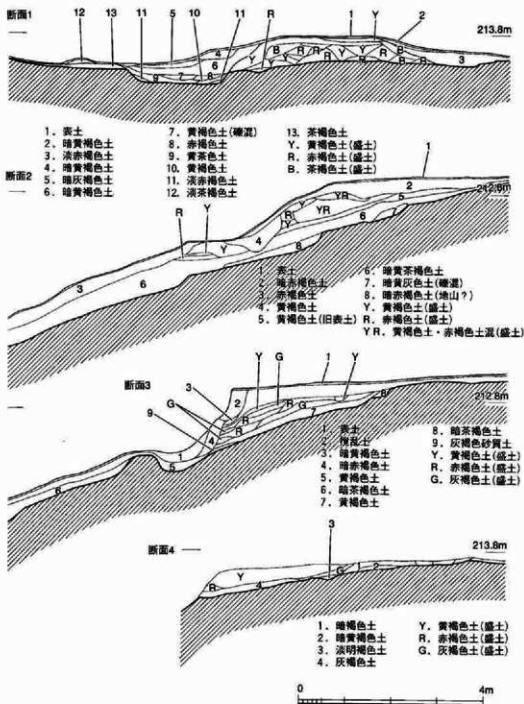
尾根稜線の鞍部からやや西に寄った地点に、稜線に直交した堀切が開削され、山城の西限となっている。東には隣接して土塁が構築されているが、西側には構築物が認められなかった。堀切は北側では傾斜変換点まで確認することができたが、南側では標高213m付近で不明瞭となっている。検出した長さは15mである。堀切は上幅3m前後で、下幅は2m前後を測り、底面が平坦な逆台形状を呈する。堀切の東側は堀切の開削土を盛ったとみられる土塁があり、土塁の上肩からの深さは1m前後で、地山面からの掘り込みは30cm程度である。西側は40cm程度の深さとなっている。

土塁

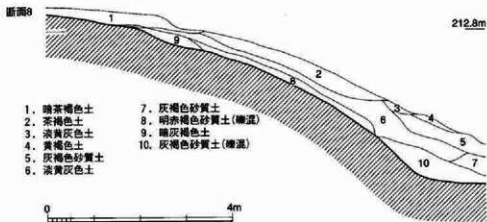
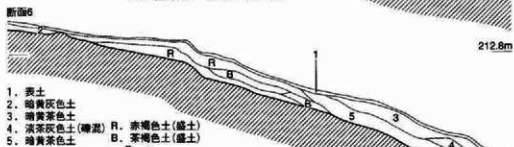
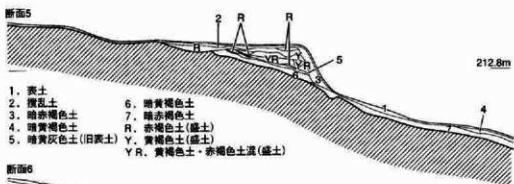
堀切の東側に接して土塁が構築されている。土塁は現状では断面形が台形状を呈し、下端幅4.7m、上端部2.4m程度を測る。土塁の西側にある堀切は、ほぼ埋没していた状況であることや、東側にも堀切が認められたことから、土塁は後世の崩落もしくは削平があったとみられ、本来



第25图 中西山城地形测量图



第26图 中西山城土层断面图(1)



第27图 中西山城土層断面图(2)

は甕鉢状の断面形をなしていたものと考えられる。土塁の東側、即ち曲輪内にも深さ15cm程度の浅い掘り込みがみられ、比高は60cmほどである。土塁は断面観察によれば、中心部から外方に向かって盛土されていることが判明したが、全体に締まりが悪く、突き固めや、黄褐色土と赤褐色土を交互に盛り上げるといった構築方法は採られていない。なお、堀切および土塁からの出土遺物はない。

曲輪

曲輪は丘陵頂部の平坦な地点を選定し、南西から延びる尾根稜線を堀切と土塁によって西端を面している。他の3方は土塁によって囲むことをせず、斜面の整形と盛土によって平坦面を造り出しているだけである。曲輪の平面形は地形に制約されたためか、東西方向に長いびつな台形を呈している。堀切と土塁によって画された西辺とそれから直角方向に屈曲する北辺は、ほぼ直線的に延びる。また、この北辺の外郭線は極めて明瞭な段差をもっている。東辺は弧を描きながら南辺につながる。この東辺は北東部の短辺と南東側の長辺に分けることも可能である。南辺はやや不明瞭であり、凹凸がみられる。曲輪の東西方向の最大長は約37.5m、南北方向は、西側で約22m、東側で約27mを測り、面積は約900㎡である。

曲輪は斜面の整形と縁辺部に盛土することによって区画されているが、盛土は北辺では明瞭に落差を設け、0.5～0.7m程度の段となっている。盛土はおおむね黄褐色土と赤褐色土が互層状に積み重ねられているが、全体に叩き締められたような状態は観察できなかった。この段下には幅1～1.5mほどの平坦面がみられる。東辺および南辺では北辺のような明瞭な段差は認められず、盛土の土層厚もない傾向がある。北辺のみが比較的丁寧に段差を設ける作業を行っている理由については明らかではない。東辺および南辺が崩落しやすい盛土層であったのか、本来、北辺のような造作をおこなわなかったのか、いずれとも決しがたい。

曲輪内では、遺構は全く検出されなかった。曲輪にあたる丘陵頂部は堆積土がほとんどなく、遺構が削平されたことも考えられるが、本来、構造物をもたなかったと推定される。

第2節 出土遺物

中西山城に伴う遺物は、土器が3点出土しただけである。土器は土師器の小皿・鍋と瀬戸・美濃焼の天目茶碗がある。

土師器 (85・87) 85は復元口径7.8cmの小皿である。体部外面を指押さえ調整し、口縁部をヨコナデする。にぶい黄褐色を呈する。87は復元口径21.3cm、器高8.7cmの鍋である。体部外面はタタキ目が施され、煤が付着している。口縁部は内外面とも強くヨコナデ調整されている。

瀬戸・美濃焼 (38) 天目茶碗が1点出土している。復元口径11.8cmで、口縁部はS字状にくびれる。腰部以下は露胎で、さび軸が施されている。高台は欠損しているが、高台輪は水平に

削り出している。

第3節 小結

中西山城は曲輪・堀切および土塁が検出されたが、いずれも極めて単純な構造であることが特徴である。曲輪に相当する平坦地は簡単な削平と盛土によって区画されるが、顕著な防衛施設は認められない。

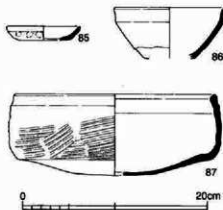
中西山城からの出土土器は数少ないという制約があるが、16世紀後半の所産とみて大過なく、かつ1978～79年度にかけて調査を行った同じ北摂ニュータウン中央地区内の釜屋城と、ほぼ同時期とみて差し支えない。釜屋城は標高220mほどの丘陵頂に土塁を巡らしているが、土塁以外には顕著な施設はない。曲輪全周に土塁を巡らしているかどうかという点を除けば、その他は同質的であるといえる。釜屋城からは多量の出土遺物があったが、大半が土塁盛土中に含まれていて、曲輪内から出土はほとんどなかった点も、中西山城の場合と共通している。

三田盆地を中心とする三田市域における山城については、山上雅弘氏が3タイプに分類し、その中で中西山城は③タイプに該当し、「16世紀後半の城郭の意識からは外れており、タイプとしては古い物と考えられる」とする見解を示している⁽¹⁾。中西山城から出土した遺物の年代観とは、異なるようにも見えるが、発掘調査例が数少ない現状では機能・系統に性急な結論はえられないように思える。

北摂ニュータウン建設に伴って釜屋城と中西山城の二つの山城の調査を行ったが、調査を行った1978～81年ごろには兵庫県下を始め、他地域でも山城の考古学的発掘調査を行った事例があまり知られておらず、また、調査担当者経験・知識も乏しい実状の中では、ほとんど手探り状態での発掘調査であった。したがって、今日の調査レベルからすれば、調査内容が必ずしも十分であったとは言いがたい点があることを最後に断っておきたい。

註

- (1) 兵庫県教育委員会『中尾城跡』1989。なお、この報告書では「中西山砦」ないし「中西山城」とされている。



第28図 中西山城出土土器

第3部 平方遺跡群

3部
平
方



第1章 遺跡群の位置と立地と概要

第1節 遺跡群の位置

平方遺跡群は三田市けやき台3丁目に所在する。開発以前の地名は三田市貴志字平方1957.1360番地・下西山776.775.773.759番地であった。丘陵下には西野上の集落が存在する。

なお、後述する小銅鐸の鋳型は下西山776番地から、平方城は下西山775番地を中心とした場所に所在する。

遺跡の北方100mの谷を挟んだ場所には中西山遺跡、中西山古墳群、中西山城などの中西山遺跡群が位置する。また西方200mの尾根づたいには平方西遺跡が位置する。また南東方300mには西山遺跡、西山古墳群、西山西古墳群などが位置する。

第2節 遺跡群の立地

平方遺跡群は武庫川右岸の丘陵上に立地する遺跡である。奈良山古墳群が立地する尾根と、西山古墳群が立地する尾根との間に延びる開析谷の最も奥の谷部と、丘陵部にかけて存在する。丘陵上の平坦面は標高215m前後で広がっている。

第3節 遺跡の概要

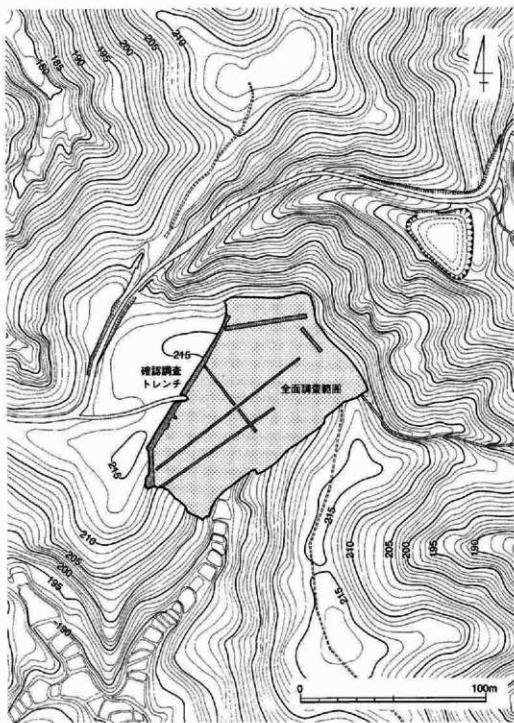
遺跡の推定範囲は旧地形から判断すれば、調査地の西側の平坦地全面と斜面の一部を含めて15,000㎡以上になると考えられる。今回は既に周囲が削られていたことにより、このうちの7,400㎡しか調査できなかった。

平方遺跡群は弥生時代から中世までの複合遺跡である。立地は丘陵部に存在しており、その地形は丘陵上の平坦面と斜面部に分類できる。斜面部は谷を挟んで南西向き斜面、南東向き斜面に大きく分けられる。これらの地形の違いは各時代の遺構の立地の違いになって現れている。

弥生時代中期は丘陵の平坦面と南西向き斜面に遺構が存在している。古墳時代後期は南東向き斜面部のみに遺構が存在している。

中世は丘陵平坦面の武庫川に面した場所に山城が立地している。なお、丘陵平坦面から南東に延びる尾根上、谷部の標高202m以下は、遺物は出土するが、遺構は検出できなかった。このように各時代によって遺跡の立地は異なっている。

また少量ではあるが、縄文時代草創期の有舌尖頭器も出土した。



第1図 平方遺跡群位置図

第2章 調査の経過

第1節 調査に至る契機

昭和45年度の北摂ニュータウン建設に伴う分布調査において、「No240平方遺跡」として発見された。分布調査報告書によると遺跡の現状は「松林道路放牧地 道路の切通しに焼土が帯状に見える。」と記述され、「須恵器片・焼けた栗石が採集され、窯跡が11基存在する。」とされている。

第2節 第1次確認調査

昭和56年7月17日から7月27日まで実施した。

分布調査の成果をもとに遺跡の有無、性格、範囲、深さなどを確認するため、トレンチを設定し、確認調査を実施した。トレンチは等高線に平行して2本と直行する1本を設定して調査を行った。

調査では、炭や古墳時代の須恵器が出土した。しかし、確実に窯だと断定できる遺構の検出や遺物の出土はなかった。そこで何らかの遺跡の存在が指摘されたが、第2次確認調査の必要性を指摘して、第1次確認調査を終了した。

第3節 第2次確認調査

昭和62年6月6・11・12日に伐採を実施し、6月12日から6月24日まで発掘調査を実施した。

第1次確認調査に於いて性格不明の遺構を検出した。このため、今回は前回調査を実施したトレンチの再確認調査及び遺構を確認した地点の全面調査を予定した。しかし、調査の事前に対象地の踏査を行ったところ、周囲は既に造成工事が行われており、その崖面より多量の須恵器・土師器・サヌカイト片などを採集した。このため調査予定地の周囲で旧地形が保たれている場所を踏査したところ堅穴住居状の窪みや、隣の中山遺跡で見られた様な土塁や堀切りが観察できた。そこで予定していた全面調査は急遽とりやめ、前回確認調査を実施したトレンチの再精査および周囲の旧地形を保っている部分の全面について確認調査を実施することに計画変更した。

調査は基本的に1m幅のトレンチで実施した。

この結果、確認調査を実施した全面についてなんらかの遺構や遺物を検出したため、残された調査地について全面調査が必要であることが判明した。確認した遺構は弥生時代の住居跡、古墳、古墳時代の窯跡、中世の土塁などである。

第4節 第1次全面調査

昭和62年11月19・20日に伐採を実施し、12月2日から12月7日にかけて伐採した樹木の搬出作業を実施した。その後、12月8日にヘリコプターにより調査前の写真撮影を行い、調査前の地形測量を実施した。調査面積は7,400㎡である。

発掘調査は昭和62年12月9日から昭和63年3月27日まで実施した。調査では事前に金属器を探索するため、奈良国立文化財研究所(奈文研)埋蔵文化財センターの西村康氏に金属探索をお願いした。また調査の途中、昭和63年1月27日10時58分に小銅鐸の完形の鋳型が弥生時代中期後半の堅穴住居跡から出土したため、事務所に連絡し、大村課長補佐が午後2時に来跡し、当日午後急遽、奈文研岩永省三氏に来跡願い、指導を受けた。また翌28日には奈文研埋蔵文化財センター佐原眞氏に来跡願い、指導を受け、その重要性が指摘された。

このため、同時に調査を進めていた横穴式木室を含む古墳群である西山古墳群と合わせて、2月16日に報道機関への発表を行い、2月21日に現地説明会を開催した。見学者は200人以上に達した。その後3月14日、小銅鐸の鋳型が出土したSH2のすぐ脇の土坑から銅鐸(小銅鐸)の舌と考えられる石製品が出土した。また調査終了直前の3月24日、鋳型のもう一方がSH3内に残っていた畦の中から出土した。このため、1対の小銅鐸の鋳型が揃ったことになり、より一層重要性が高まった。さらに、遺構の年代を測定するため、富山大学の広岡公夫氏に弥生時代の住居跡と古墳時代の窯の地磁気による年代測定をお願いした。須恵器窯については3月4日、大谷女子大学の中村浩氏に現地において指導を受けた。

このように、全国的にみて非常に重要な発見であることから、兵庫県教育委員会では遺跡保存を要求していくため、遺構を断ち割らずに、保存可能な状況で3月27日に調査を中断した。

この様な成果に対して兵庫県教育委員会では住宅・都市整備公団に対して、遺跡を保存し活用する様に申し入れた。この保存計画について、協議を重ねてきたが、既に保存対象となる遺跡の周囲が造成により削られており、整備するにあたって安全勾配を確保するとすれば、本来保存すべき遺構が削られてしまうため、難しいという返事を得た。このため、兵庫県教育委員会では、仕方なく遺跡の保存を断念した。

第5節 第2次全面調査

第2次全面調査は平成2年6月29日から8月30日にかけて実施した。

前回の調査では、保存を前提として調査を終了していたため、今回は遺構の完掘がなされていなかった2,727㎡について全面調査を行った。調査は1・2号墳、1・2・3号窯、SH2・3・9・10・12、SB2の範囲で実施した。調査はすべて手掘りで行い、遺構の完掘と断ち切りを行った。

第3章 平方遺跡—弥生時代—

第1節 遺構

弥生時代の遺構は竪穴住居跡7棟、方形住居状遺構1基、掘立柱建物跡1棟、段状遺構1基、溝1条と土坑を検出した。

1. 竪穴住居跡

(1) SH1 (第3・4図)

丘陵平坦面の東端部のやや下った所に位置している。中世の山城の土塁にその大部分が覆われていたため、比較的残りは良い。検出面は基盤層であり、埋土は炭を含む軟らかい土であったため明瞭に識別できた。床面精査の段階で同一面から周壁溝が複数確認でき、また柱穴も多数検出できたため慎重に調査を進めた。その結果、柱穴と周壁溝の関係はすべて柱穴が周壁溝を切っている事実が判明し、さらに一部内側で検出した周壁溝に貼床の痕跡が残っている部分が存在した。さらに調査を進めた結果、中央土坑の下層にも中心をやや南にもつ中央土坑の存在を確認した。結局、周壁溝は5本検出した。したがって、中心を南から北へ移し、規模を拡大しながら5基の竪穴住居跡が重複していることが判明した。これらの住居跡は中心を南から北へ移しながら規模を拡大し、これに伴い主柱穴も4本から6本、6本から8本と増加していることが判明した。以下、各期ごとに詳しく説明する。

— I期 —

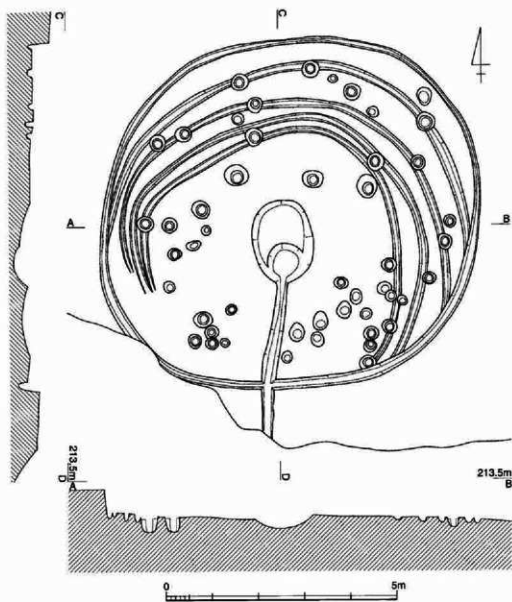
一辺5.50m×5.20mの楕円形の竪穴住居跡である。柱穴は4本存在し、柱掘形は直径0.45m～0.28mで床面からの深さは平均0.28mを測る。周壁溝は幅0.14mで深さ0.05mを測る。中央土坑は直径約0.80mの円形で深さ0.20mあるがIV期以降の中央土坑に上部を削平されているため、当時の規模ははっきりしない。

— II期 —

一辺6.20m×5.30mの楕円形の竪穴住居跡である。柱穴は6本存在し、柱掘形は直径0.45m～0.3mで床面からの深さは平均0.28mを測る。周壁溝は幅0.15mで深さ0.07mを測る。中央土坑は直径約0.80mの円形で深さ0.20mあるがIV期以降の中央土坑に上部を削平されているため、当時の規模ははっきりしない。

— III期 —

一辺7.20m×6.20mの楕円形の竪穴住居跡である。柱穴は6本存在し、柱掘形は直径0.36m～0.28mで床面からの深さは平均0.23mを測る。周壁溝は幅0.09mで深さ0.05mを測る。中央土坑は直径約0.80mの円形で深さ0.20mあるがIV期以降の中央土坑に上部を削平されているため、当時の規模ははっきりしない。



第3図 壑穴住居跡SH1

— IV期 —

一辺7.80m×6.80mの楕円形の壑穴住居跡である。柱穴は8本存在し、柱掘形は直径0.4m～0.3mで床面からの深さは平均0.20mを測る。周壁溝は幅0.10mで深さ0.07mを測る。中央土坑は一辺1.75m×1.35mの楕円形で深さ0.18mある。この中央土坑から南に向かって幅0.23m、長さ3.13m、深さ0.11mの排水溝が取りついている。排水溝の方向はN-8°-Eを



I期



II期



III期



IV期



V期

第4図
壑穴住居跡SH1
変遷図

指している。

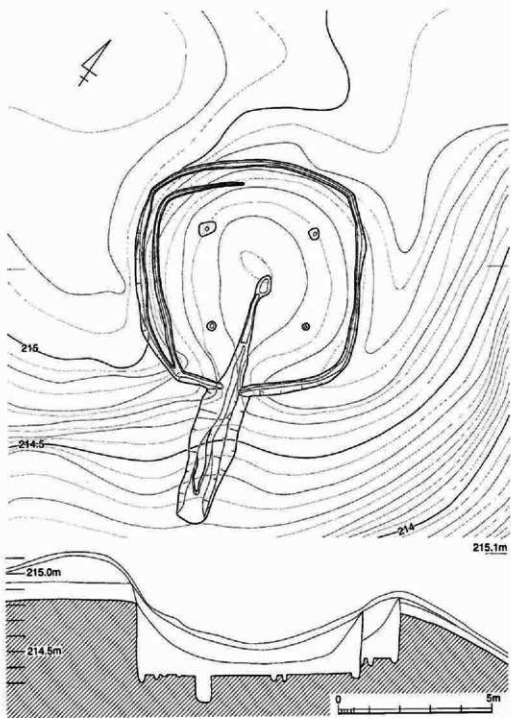
— V期 —

一辺8.40m×7.50mの楕円形の壑穴住居跡である。床面の標高は213.1mを測り、壁の高さは最大0.42mを測る。柱穴は8本存在し、柱掘形は直径0.38m～0.3mで床面からの深さは平均0.35mを測る。周壁溝は幅0.12mで深さ0.08mを測る。中央土坑は一辺1.75m×1.31mの楕円形で深さ0.18mある。この中央土坑から南に向かって幅0.23m、長さ3.13m、深さ0.11mの排水溝が取りついている。

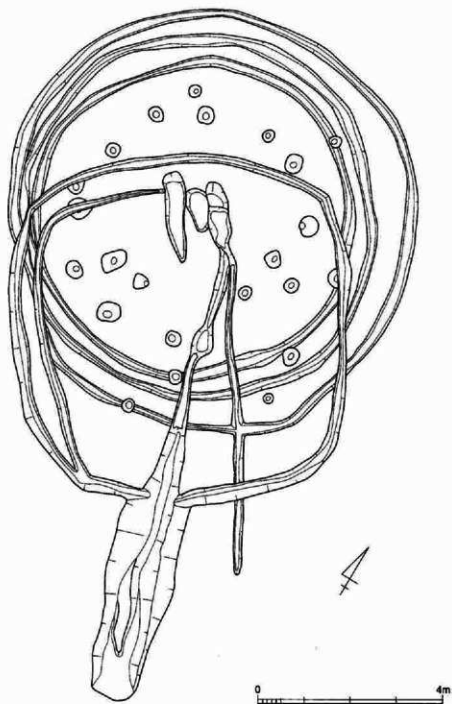
遺物は弥生土器壺・高坏・器台・堯と石鏃・サヌカイトの剥片が出土している。

(2)SH2(第5・6・7図)

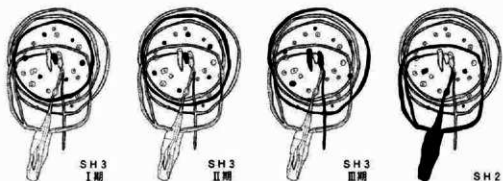
SH1の西方25mの丘陵平坦面に位置している。当該地は調査前から大きく窪んでいた。この窪みは直径7.5m、深さ0.55mで円形を呈していた。また、窪みの周囲には幅約2mの隆起帯が存在していた。この隆起帯は南東部で一箇所切れている部分があり、前面には平坦部が存在していた。このような状況からこの遺構状の窪みは壑穴住居跡の可能性が高いと判断して調査を進めていった。まず南東方向の開口部が入口ではないかと判断して、これを一つの基準とした。この開口部から窪みの中心部を通るラインと、中心部で直交するラインを設定した。この基準ラインに沿って幅0.3mのトレンチを設定し調査を行った。この結果、松の落ち葉など表土が全体を覆い、窪みの部分は下層に灰色のシルト層が溜まっていた。したがって、徐々に堆積していった事が判断できた。層内からはサヌカイトの小片、土器片などが多数出土した。下層は小粒の炭が混じった褐色土が堆積していた。この層からは多量のサヌカイトの小片、土器片などが出土した。この層の下は基盤層が水平になっており床面であると判断できた。さらに東側と西側では基盤層を掘り込んだ壁を検出し、周壁溝も確認した。北側では周壁溝を確認したが、基盤層を掘り込んだ壁は検出できなかった。床面は北方へさらに続くため、別の住居跡の重複が考えられた。断面の観察により窪んでいる住居跡のほうが新しいと判断できた。周囲の隆起帯は基盤層のブロック土や土器片、サヌカイトなどが混じっており盛土と判断できた。この隆起帯の盛土は住居跡掘削時の盛土であると考えられる。



第5圖 壑穴住居跡SH2調査前地形図



第6圖 豎穴住居跡SH2・3



第7図 竪穴住居跡SH 2・3 変遷図

以上のことから、この窪みは埋没過程の竪穴住居跡であると判断した。発掘調査にあたっては、トレンチ調査時にサヌカイト製の石器や小剥片が多量に出土したため作業は慎重に行うこととし、併せて電動ふるいをを用いて土をふるい、微細遺物の採集に努めた。

周堤帯上では垂木等の柱の痕跡は検出できなかった。周堤帯の盛り土の中からはサヌカイトの剥片、土器、鉄器などが出土した。これは竪穴住居閉鎖時に於いて、包含層を掘削、もしくは前住居跡に残された遺物、あるいは竪穴住居が放棄された後、窪みに遺物が流入、あるいは遺物を廃棄、あるいは窪みを利用して製作活動を行っていたためであると考えられる。

SH 2は東西7.51m、南北7.20mのやや胴の張った隅丸方形である。床面の標高は214.3mを測り、壁の高さは最高0.6mを測る。周壁溝は壁存在部分に併設し、幅0.3m～0.2m、深さ0.2m～0.1mを測る。さらに、北壁の西半分と西壁際には周壁溝から約0.4m内側に溝が取りつく。幅約0.2m、深さ約0.1mを測る。中央土坑は、ほぼ中央部に位置している。中央土坑は円形で、直径0.5m深さ0.2mを測る。下層には炭が存在していた。中央土坑からは南に向かって排水溝が住居外まで取りつく。全長は8mを測り、住居内では幅0.2m～0.5m、深さ0.1m～0.2mを測る。住居外では幅約1.4m、深さ0.3m～0.4mと住居内に比べて大きくなる。全体的に住居外に傾斜している。壁方向の主軸はN-33°-Eを示す。主柱穴は4本確認でき、柱掘形は直径0.25m～0.2mで、柱痕跡は直径0.2mを測る。深さは平均0.3mである。周堤帯は幅約1.5m、高さ約0.2mである。

遺物は弥生土器壺・甕・高坏・器台、石鏃・石錐・石斧・砥石、鉄製斧・刀子、ガラス小玉、小銅鐸錐型・中子が出土している。特にサヌカイトの石器や剥片が多い。また最上層からは古墳時代後期の須恵器高坏と土師器甕が出土している。

(3)SH3(第6・7図)

SH2の北側に半分程度、重複して存在している。土層の切り合い関係からSH3はSH2より古い。検出面は基盤層であり、埋土は炭を含む軟らかい土であったため明瞭に識別できた。床面精査の段階で床面は貼り床であることが認められ、下層からも周壁溝が確認できた。下層の周壁溝のほう为上層より内側に位置している。したがって、規模を拡大しながら3基の竪穴住居跡が重複していることが判明した。

— I期 —

直径6.9mの円形の竪穴住居跡である。柱穴は6本存在し、柱掘形の直径は平均0.34mを測り、床面からの深さは平均0.40mを測る。周壁溝は幅0.22m、深さ0.10mを測る。中央土坑は一辺1.0m×0.45mの楕円形で深さ0.3mあるがSH2の床面で上部を削平されているため、当時の規模ははっきりしない。炉は存在していない。

— II期 —

直径8.0mの円形の竪穴住居跡である。柱穴は6本存在し、柱掘形の直径は平均0.33mを測り、床面からの深さは平均0.42mを測る。周壁溝は幅0.20m、深さ0.08mを測る。中央土坑は一辺1.0m×0.45mの楕円形で深さ0.3mあるが、SH2の床面で上部を削平されているため、当時の規模ははっきりしない。炉は存在していない。

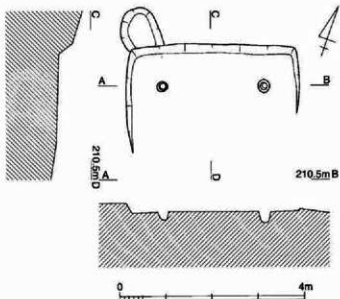
— III期 —

直径9.1mの円形の竪穴住居跡である。床面の標高は214.4mを測り、壁の高さは最高0.3mを測る。柱穴は7本存在し、柱掘形の直径は平均0.34mを測り、床面からの深さは平均0.59mを測る。周壁溝は幅0.3m～0.2m、深さ0.2m～0.05mを測る。中央土坑は1.3m×0.5mの楕円形で深さ0.3mあるが、SH2の床面で上部を削平されているため、当時の規模ははっきりしない。炉は中央土坑の西側に位置しており、南北に長い長円形で、長さ1.92m、幅4.4m、深さ0.1mを測る。いずれも下層には炭が入っていた。排水溝は中央土坑からN-32°-W方向の南に向かっており、周壁溝の外まで延びる。全長は7.0m、幅0.24m、深さ0.05m～0.15mを測る。

遺物は弥生土器壺・甕・水差し・高坏、石織・石錐・サヌカイトの割片、鉄製鑿・鉋、小銅鐸の鋳型が出土している。

(4)SH 4 (第8図)

SH 4はSH 1の南方約13mの所に位置し、斜面に立地している。斜面に立地している為、住居跡の半分程度しか残っていない。南北方向は2.0mしか残っていないが、南北方向の一辺が3.8mの隅丸方形の住居跡と推定できる。床面の標高は209.9mを測り、壁の高さは最高0.25mを測る。周壁溝は存在しない。中央土坑も確認できなかった。北壁は $N-68^{\circ}-E$ を示す。



第8図 竪穴住居跡SH 4

支柱穴は2本確認でき、柱掘形は直径0.25m・0.22mで、柱痕跡は直径0.18m・0.16mを測る。深さは0.19m・0.15mである。本来は支柱穴4本の竪穴住居跡であったと考えられる。

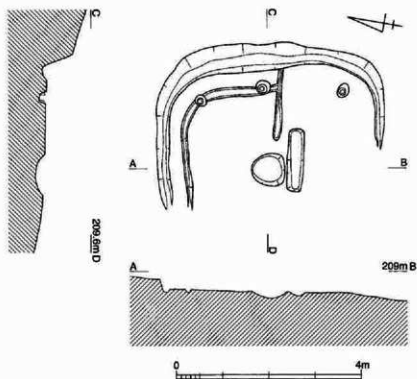
遺物は弥生土器壺・甕・高坏が出土した。

(5)SH 5 (第9図)

SH 1の南方25mの所に位置し、斜面に立地している。斜面に立地している為、住居跡の半分程度しか残っていない。東西方向は3.1mしか残っていないが、南北方向の一辺が4.2mのやや扁の張った隅丸方形の住居跡と推定できる。床面の標高は208.6mを測り、壁の高さは最高0.48mを測る。周壁溝は壁存在部分に併設し、幅0.10m、深さ0.05mを測る。さらに、東壁の北半分と北壁際には周壁溝から約0.4m内側に溝が取りつく。幅0.1~0.2m、深さ約0.1mを測る。中央土坑の東側から前述の溝に接続して周壁溝まで延びている。

中央土坑はほぼ中央部に位置し、炉は中央土坑の南側に位置している。中央土坑は円形で、直径0.72m深さ0.09mを測る。炉は東西に長い長円形で、長さ1.35m、幅0.33m、深さ0.08mを測る。いずれも下層には炭が存在していた。東壁は $N-13^{\circ}-E$ を示す。支柱穴は2本確認でき、柱掘形は直径0.28m・0.25mで、柱痕跡は直径0.18mを測る。深さは0.15m・0.16mである。他に支柱穴が支柱穴の間に1本存在している。本来は支柱穴4本の竪穴住居跡であったと考えられる。

遺物は東の壁際から弥生土器壺・甕・鉢・脚などと、サヌカイトが出土した。



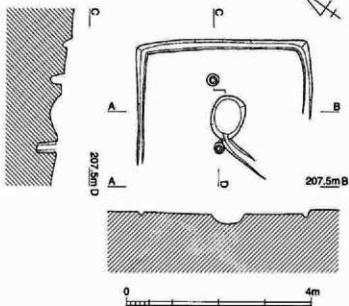
第9図 竪穴住居跡SH 5

(6)SH 6 (第10図)

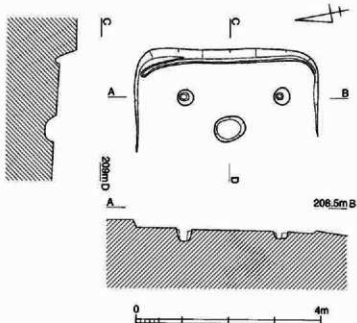
SH 5の西方8mの所に位置し、斜面に立地している。斜面に立地している為、住居跡の半分程度しか残っていない。東西方向は3.0mしか残っていないが、南北方向の一边が4.3mの方形の住居跡と推定できる。床面の標高は207.0mを測り、壁の高さは最高0.21mを測る。周壁溝は幅0.15m、深さ0.06mである。

中央土坑はほぼ中央部に位置している。中央土坑は楕円形で、長径0.92m、短径0.72m、深さ0.25mを測る。下層には炭が入っていた。中央土坑から南へ向かって排水溝が取り付く。長さ1.3m、幅0.21m、深さ0.20mを測る。東壁はN-34°-Wを示す。主柱穴は2本あり、中央土坑の両側に位置する。柱掘形は直径0.22m・0.23mで、柱痕跡は直径0.18mを測る。深さは0.49m・0.30mである。柱の位置と住居跡の規模から考えて、主柱穴2本の竪穴住居跡であったと考えられる。

遺物は弥生土器の細片、サヌカイトが出土した。



第10図 竪穴住居跡SH 6



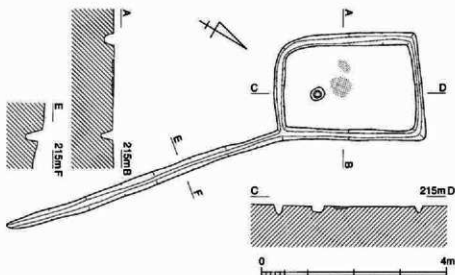
第11図 竪穴住居跡SH 7

[7]SH 7 (第11図)

SH 5の南方18mの所に位置し、斜面に立地している。斜面に立地している為、住居跡の半分程度しか残っていない。東西方向は2.0mしか残っていないが、南北方向の一辺が4.8mの隅丸方形の住居跡と推定できる。床面の標高は208.0mを測り、壁の高さは最高0.35mを測る。周壁溝は東壁から南壁にかけて存在し、幅0.06m、深さ0.03mである。

中央土坑はほぼ中央部に位置している。中央土坑は楕円形で、長径0.66m、短径0.52m、深さ0.09mを測る。下層には炭が存在していた。東壁はN-10°-Eを示す。主柱穴は2本確認でき、柱掘形は直径0.38m・0.35mで、柱痕跡は直径0.20mを測る。深さは0.14m・0.21mである。本来は主柱穴4本の竪穴住居跡であったと考えられる。

遺物は弥生土器の細片が出土した。



第12図 方形住居状遺構SH 8

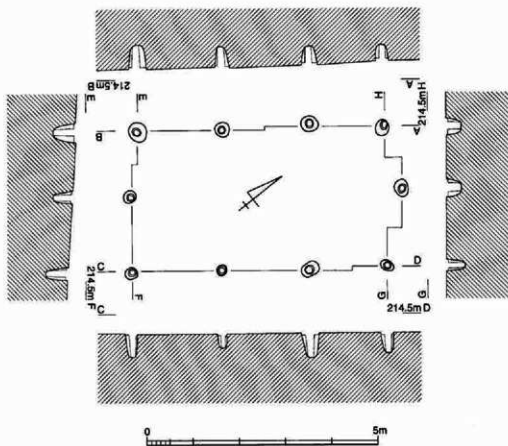
2. 方形住居状遺構

(1)SH 8 (第12図)

SH 2の西方約7mの所に位置している。標高は214.8mを測り、遺跡の最高所に所在しており、推定遺跡範囲のはほぼ中央部にあたる。平面形は長辺3.20m×2.30mの隅がやや丸い長方形を呈している。長軸はN-30°-Wを指している。まわりには周溝が巡っている。幅は22.0m~30.0mで、深さは0.12m~0.18mを測る。断面形はU字状を成す。東隅からはN-50°-Wの方向へ向かい、コンタに直交する排水溝が取り付け。長さは6.20mあり、傾斜している。幅は0.18m~0.30mある。断面形はU字形で、深さは0.18m~0.20mある。

遺構のはほぼ中央部には焼土面が2ヶ所存在する。一つは直径0.45mの範囲に厚さ0.04mの赤変した焼土を認めた。一つは前者の西方に直径0.20mの範囲に厚さ0.04m赤変した焼土を認めた。尚、この遺構内に柱穴が1本存在しているが、時期がやや新しく、この遺構に伴う柱穴は存在しない。また壁の高さは検出面が遺構内部と同一のため不明である。

遺物は周溝及び排水溝から弥生時代中期後半の土器、サヌカイトの剥片が出土している。



第13図 掘立柱建物跡SB1

3. 掘立柱建物跡

(1) SB1 (第13図)

SB1はSH1の北方7.5mの丘陵先端に位置する掘立柱建物跡である。検出面は基盤層で、中世の山城造成のため削平されており床面は確認できなかった。桁行3間(5.54m)、梁行1間(3.06m)の規模をもつ。柱は一直線にきれいに並んでいない。桁行の柱間は1.90m～1.65m、梁行のほぼ中間には棟持柱様な柱穴が存在する。桁方向はN-37°-Eを示す。柱掘形は直径0.28m～0.38mで、平均0.32mを測る。深さは0.34m～0.57mで、平均0.45mを測る。柱痕跡は直径0.17m～0.20mである。埋土は柔らかく、焼土粒が入っているものがある。

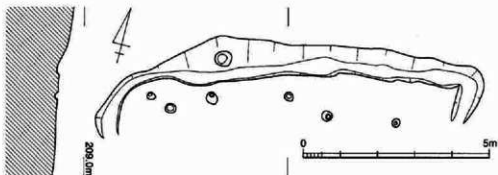
遺物は柱穴から、弥生土器の細片が出土した。

4. 段状遺構

(1) 段状遺構 (第14図)

SH4の南方下6.0mに位置する段状遺構である。斜面に立地しており、長辺は等高線方向に向いている。全長10mを測り、両端は屈曲する。深さは最高0.3mを測る。壁際には溝が巡る。幅0.3m前後、深さ0.1m前後を測る。平坦面は標高207.7mを測り、最大幅は3.0mを測る。平坦面には柱穴が5本存在するが、綺麗に並ばない。

遺物は弥生土器甕・高坏とサヌカイトの剥片が出土した。



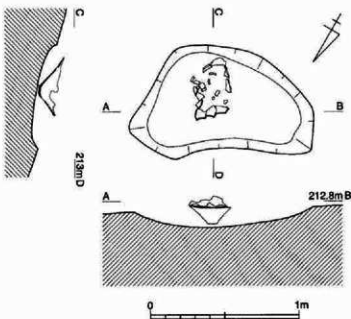
第14図 段状遺構

5. 土坑

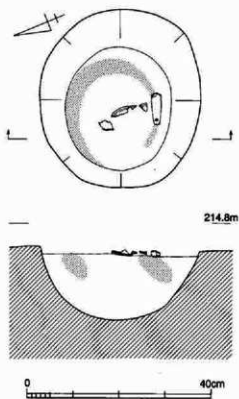
(1) SK1 (第15図)

SK1はSH2・3の北方20mの北向きの斜面に位置している。長辺1.2m、短辺0.7mの不正円形を呈する。検出面からの深さは0.2mを測るが、土器の出土状況からみてさらに深いものと考えられる。ほぼ中央には横位の甕体部が出土した。他に甕の破片も出土している。遺物の出土状況から土器棺である可能性が高い。

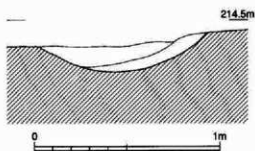
出土遺物は弥生土器壺・甕がある。



第15図 土坑SK1



第16図 土坑SK 3



第17図 溝SD 1断面図

(2)SK 2

SK 2はSH 6の西方約5mの西向斜面に位置している。直径0.5mの円形を呈し、中心部の深さは0.3mを測る。

出土遺物は弥生土器脚部がある。

(3)SK 3〔舌ビット〕(第16図)

方形住居状遺構SH 8の南東に延びる排水溝の先端の北東側に位置している。平面形は直径約0.35mの円形で、深さ約0.15mを測る。検出面から0.02m掘り下げた所で、石製の舌が頭部を西北西に向けて水平の状態出土した。同一面で、弥生土器脚部とサヌカイトの剥片が出土した。

出土遺物は石製の舌のほか弥生土器脚部の破片とサヌカイトの剥片がある。

(4)SK 4

SK 4はSH 2の南方50mの南東向斜面に位置している。直径0.8mの円径を呈し、中心部の深さは0.4mを測る。

出土遺物は羽口がある。

6. 溝(第17図)

SD 1はSH 2・SH 8の南側下方に位置する溝である。溝の主軸はN-78°-Eを指す。全長24mの直線的な溝で幅1m前後、深さ0.15m前後で、断面形は浅いU字型を呈する。埋土は土壌化した土が堆積していた。遺物は出土していない。この溝はSH 2の排水溝とほぼ直交し水の流れる溝というより、むしろ道の機能を持ったものではなかったかと考えられる。

第2節 遺物

弥生時代の遺物はすべて弥生時代中期に限られる。種類は弥生土器、石器、鉄器、鋳造関係遺物、石製品、玉がある。土器は完形で出土しているものはなく、遺存状況は良くない。

1. 土器

(1) SH1 (第18図)

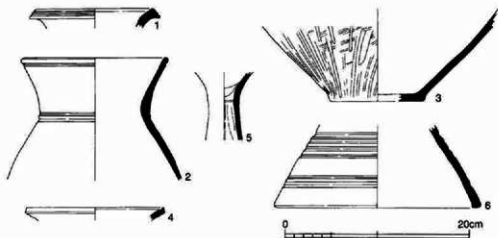
第1号住居跡からは、広口壺・短頸壺・甕・高坏・器台が出土している。

広口壺(1)は口縁部の破片で口縁端部を上方に拡張させ外傾した面をもち、2条の凹線文を巡らしている。短頸壺(2)は外開きの口縁部をもち、口唇下に1条、頸部に2条の凹線文を巡らしている。体部外面から口頸部にかけては丁寧なヨコナデを行っている。大型壺の底部(3)は外面に縦方向のヘラミガキを行っており、内面はヘラケズリを行っている。甕(4)は小形の甕の口縁部の破片で、端部は上方に拡張している。高坏(5)は坏部から脚部にかけての破片である。器台(6)は僅かに内彎ぎみに開く裾部の破片で、4条と2条の凹線文を巡らしている。

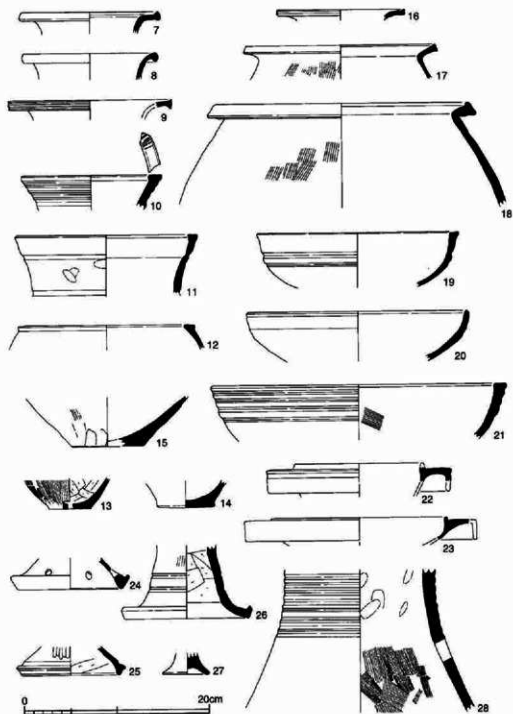
(2) SH2 (第19図)

第2号住居跡からは、広口壺・短頸壺・無頸壺・甕・高坏・器台が出土している。

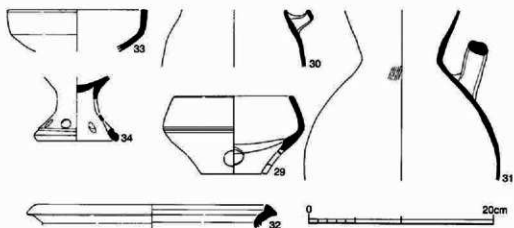
広口壺は口縁部が大きく外反するもの(7~9)と口縁部が有段のもの(11)とがある。7は口縁端部を上方に拡張しており、8は下方に拡張している。9は上下に拡張し、2条の凹線文を巡らしている。11は口縁部下の段部に1条の凹線文と頸部に1条以上の凹線文を巡らしている。短頸壺(10)は口縁部外面に4条以上の凹線文を巡らし、口縁端部にクシによる列点文を部分的に施している。無頸壺(12)は段状の口縁部をもつ。底部は小型のもの(14)と大型のもの(15)と



第18図 竪穴住居跡SH1出土土器



第19图 雙穴住居跡SH 2出土土器



第20図 聖穴住居跡SH 3出土土器

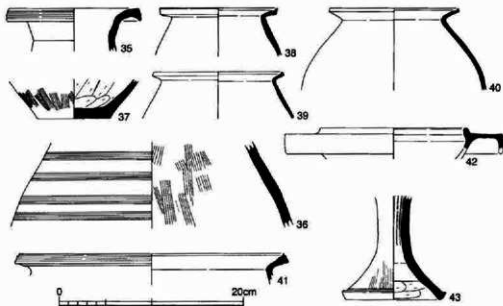
がある。

甕は小型のもの(16)と中型のもの(17)と大型のもの(18)とがある。16は口縁部を上方に拡張し、端面に凹線文を巡らす。17・18は口縁端部を上方に拡張する。体部外面はハケ調整を施している。高坏は口縁部が腰部で屈曲気味に立ち上がるもの(19~21)と水平口縁のもの(22・23)とがある。19は腰部に2条の凹線文を、21は口縁部外面に4条の凹線文を巡らしている。底部(13)は焼成後の穿孔を穿っている。24~26は脚部の破片である。いずれも脚端部を上方へ拡張させており、脚内面は横位のヘラケズリを行っている。24は円孔透かし穴を、26は2条の凹線を巡らしている。器台(28)は体部に凹線文を巡らす大型品で、円孔透かしを設けている。

(3)SH 3 (第20図)

第3号住居跡からは、無頸壺・水差し・甕・脚が出土している。

無頸壺(29)は算盤玉状の体部に内傾する口縁部をもつ。脚台部は完存していないが円孔透かしを開けている。ただし円孔の数は不明である。また体部の最大径の部分に2条の沈線を巡らす。精緻な胎土を用い全体をよく磨いており、全面に赤色顔料を塗布している。水差し(30・31)は体部から口縁部にかけての破片であるが、口縁端部は残っていない。肩部に横位の半環状把手が付く。把手の断面は長方形である。甕(32)は大型品の口頸部で、「く」の字形に外反し、口縁端部は上方に拡張する。高坏(33)は坏部の破片で直立した口縁部をもつ小型品である。脚(34)は端部を丸くおさめ、円孔透かしを穿つ。



第21図 聖穴住居跡SH4出土土器

(4)SH4(第21図)

第4号住居跡からは、広口壺・甕・高坏が出土している。

広口壺(35)は口頸部の破片で、口縁部は下方に拡張しており、3条の凹線文を施している。広口壺体部(36)は上半の破片で、6条の櫛掛直線文を施している。壺底部(37)は外面はハケ、内面はケズリの調整を施している。

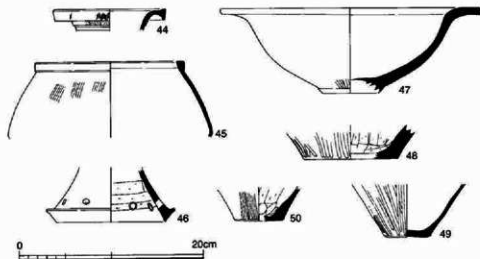
甕は小型のもの(38-40)と大型のもの(41)とがある。いずれも口縁端部を上方に拡張しており、41は凹線文を巡らしている。

高坏は口縁部の破片(42)と脚部の破片(43)がある。42は水平口縁をもつ高坏である。

(5)SH5(第22図)

第5号住居跡からは、広口壺・無頸壺・鉢・脚が出土している。

広口壺(44)は斜め上方にのびる口頸部で、口縁端部は上下に拡張している。端部にはクシ描の波状文を施している。頸部に1条以上の凹線文を巡らしている。無頸壺(45)は段状口縁をもつ形態で、算盤玉状の体部に内傾する口縁部をもつ。壺底部(48)は大型のもので外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリの調整を行っている。壺底部は中型のもの(49)と小型のもの(50)とがある。49は外面をヘラミガキの調整を行っている。50は外面をハケ、内面をヘラケズリの調整を行っている。鉢(47)は小さな底部から体部にかけて大きく開き、水平の口縁部をもつ。内外とも丁寧にヘラミガキ調整されている。脚(46)は端部を上方に拡張させており、基部に円孔透かしを穿つ。



第22図 竪穴住居跡SH5出土土器

(6)段状遺構(第23区)

段状遺構からは、広口壺・甕・高坏が出土している。

広口壺は口縁部の破片(51)と体部の破片(52)とがある。51は大きく外反する口縁部の端部を上下に拡張させている。端面には櫛描波状文を施す。52は頸部から体部にかけての破片で、頸部は口縁部に向かって緩やかに拡がっている。内外ともハケメ調整の後体部上半は3帯以上の櫛描波状文を施す。

甕は口縁部(53)と底部(54)がある。53は中型の甕の体部上半から口頸部にかけての破片で、「く」の字形に外反する口頸部に上方に拡張する口縁端部をもつ。体部外面は縦方向にハケメ調整を行っている。54は底部中央に焼成後の穿孔を行っている。

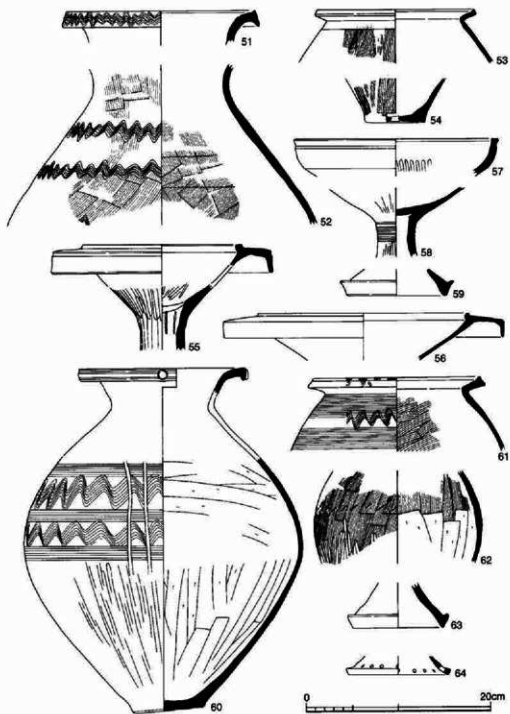
高坏は水平口縁のもの(55・56)と腰部で屈曲気味に立ち上がるもの(57)とがある。55は口縁垂下部に1条の凹線文を巡らす。坏部から脚部にかけては縦方向のヘラミガキを行っている。57は口唇下に1状の凹線文を巡らす。57は坏部から脚部にかけての破片で、筒状の脚の最上部に6条の沈線を巡らす。59は脚部の破片で、上方に拡張した脚端部をもつ。

(7)SK1(第23区)

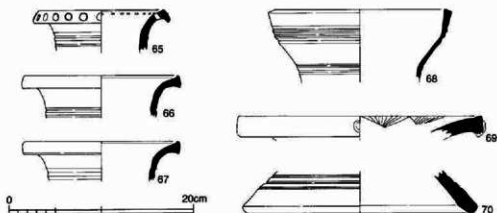
SK1からは壺と甕が出土している。

壺(60)は広口壺で頸部から体部上半を欠く。口縁部は下方に拡張し、2条の凹線文を巡らし円形浮文を貼り付けている。体部上半は8条の櫛描による直線文と波状文を交互に施している。下半は縦方向のヘラミガキ調整を行っている。体部内面は下半で縦方向のヘラケズリ、上半で横方向のヘラケズリを行っている。

甕は中型のもの(61)と小型のもの(62)とがある。61は口縁端部を上方に拡張させている。体



第23圖 段状遺構・土坑SK1～3出土土器



第24図 包含層出土土器

部は櫛描による直線文と波状文を交互に施している。内面はハケメ調整を行っている。62は体部の破片である。外面はハケメ調整の後、最大径よりやや上部に列点文を巡らす。下半は縦方向のヘラミガキを行っている。内面は下半を縦方向のヘラケズリを行っている。

(8)SK 2 (第23図)

SK 2からは脚(63)が出土している。端部は上方に拡張している。

(9)SK 3 [舌ビット] (第23図)

SK 3からは脚部の破片(64)が出土している。脚端部の破片で円孔の透かしを推定16個穿つ。

(10)包含層(第24図)

包含層から出土したもののなかから、主要なものを紹介する。

65~67は広口壺でいずれも頸部に凹線文を巡らしている。65は口縁端部を下方に拡張させ、円形浮文を貼り付けている。口縁部には約1cm間隔で直径0.3cm程度の穿孔を巡らしている。68は有段口縁の広口壺で段部に3条、頸部に2条の凹線文を巡らしている。69・70は器台で、69は口縁部の破片である。内面にはヘラガキによる鋸歯文が施されている。70は脚部の破片で外面に3条の凹線文が施されている。

2. 石器

(1) 概要

平方遺跡出土の石器の組成は、第3表に示した通りである。出土した石器の多くは、小銅鋸鋸型を出土した、SH2・3から出土しており、著しい集中をなす。これは平方遺跡の包含層(古土壌)の遺存状況が良好とは言いがたいこと、同型穴住居跡が特に入念に調査され、遺構埋土の跡かけ等が実施されたことという要因によるところもあろう。しかし一方で製品のみ出土数・組成をみても、遺跡内で突出した存在であり、他の住居跡の遺存状況・調査精度の差などを考慮してもなお、平方遺跡における石器分布の大きな特徴と言えよう。

本項ではこうした石器分布の偏りを考慮して、各遺構を単位として石器を図示し、本遺跡出土の石器群について検討をおこなう。なお、各石器の計測値は項末の表に一括した。

平方遺跡石器組成表

部	種	遺 構	内	包含層・他	合 計
打製石器	石 鏃	86	3	89	
	スクレイパー	9	1	10	
	楔形石器	69	6	75	
	ドリル	12	0	12	
	二次加工銅片	13	3	16	
	不明	1	0	1	
	銅片・銅片	4758	170	4928	
	石鏃	1	0	1	
	鍬け鏃	1	0	1	
	打製石包丁	0	1	1	
	有蓋尖頭器	0	1	1	
	尖頭器	0	1	1	
	尖頭器未製品	0	1	1	
	磨製石器	石包丁	0	2	2
ハンマー		2	0	2	
砥石		8	3	11	
土形船形石斧		0	1	1	
柱状片刃石斧		0	2	2	
環状石斧		0	1	1	
磨製石剣		1	1	2	
磨製石鏃		2	0	2	
不明磨製石器		1	0	1	
珪化水		7	3	10	
合計		4971	200	5171	

平方遺跡石器組成表 (遺構内)

部	種	住 居 跡	他の遺構	合 計
石 鏃	86	1	86	
スクレイパー	9	0	9	
楔形石器	67	2	69	
ドリル	12	0	12	
二次加工銅片	11	2	13	
不明	1	0	1	
銅片・銅片	4732	25	4758	
石鏃	1	0	1	
鍬け鏃	1	0	1	
砥石	8	0	8	
ハンマー	2	0	2	
珪化水	7	0	7	
磨製石剣	1	0	1	
磨製石鏃	2	0	2	
不明磨製石器	1	0	1	
合計	4941	30	4971	

平方遺跡石鏃形別組成表

形 型	遺 構	包含層	合 計
凹縁無蓋石鏃	11	1	12
平縁無蓋石鏃	6	1	7
有蓋石鏃	55	0	55
不明	14	1	15
合計	86	3	89

第3表 平方遺跡の石器組成

(2) 弥生時代の石器

a. 遺跡内の石器分布

石器を出土した遺構は、SH1-4・9および数基の土坑・柱穴である。しかし、そのほとんどを占めるのは、SH2・3という重複した2棟の堅穴住居跡の出土資料である。石器の多くは、住居跡内の埋土・床面から出土している。また、製品以外にも土壌の崩かけにより4733点もの剥片・破片が出土しており、他の住居跡の遺存状況がSH2・3に及ばないため即断は避けねばならないとはいえ、ほぼ連続して居住されたであろう両住居跡が、遺跡内にあって石器製作においても突出した位置を占めていた可能性を考慮しておきたい。

磨製石器の分布にも、注目すべき点が認められる。砥石・ハンマー・磨製石鏃・石剣等の器種は、そのほとんどが遺構（住居跡）内からの出土であるのに対し、石斧類・石包丁は住居内からは出土していない。石器の使用される場所、住居でおこなう作業とそれ以外の作業といった区分が、石器の分布にも反映しているのであろうか。少数の出土例であるため、断定はしづらいが、注目しておきたい。

b. 遺構内出土の石器

〔SH2・3〕

武器・狩猟具

（石鏃）

両住居跡出土の石器のうち剥片・破片を除けば、最も多数を占める器種で、計80点が出土している。ほぼ標準的な石鏃の形態が揃っており、その形態組成は第3表に示した通りである。平基式の石鏃は組成比率が低く、有茎石鏃が半数以上を占めている。有茎石鏃には、幅広い一群と幅が狭く紡錘形に近い平面形態を呈する一群とが認められる。

この形態組成の比率は、出土点数の少ない他の住居跡でも同様の傾向が見られる。

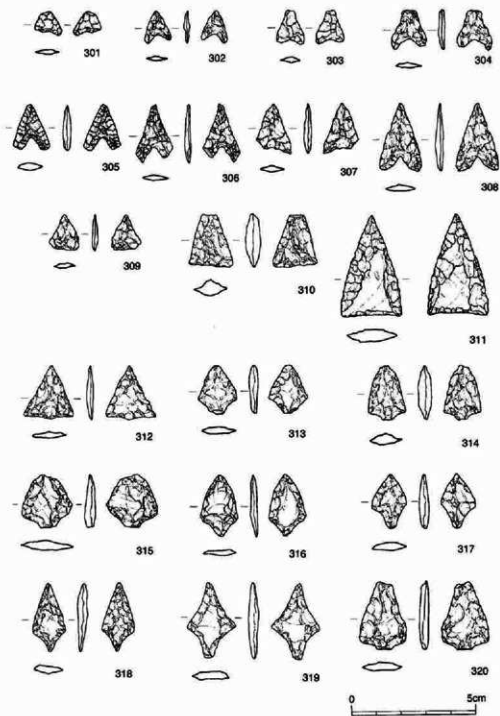
使用された石材はほとんどがサヌカイトであるが、2点のみチャートが用いられている（第25図305・306）。この2点の資料は、石鏃としてはやや古い形態を呈しており、また、チャートは本遺跡の他の石器ではまったく用いられておらず、剥片等も出土していないことから、縄文時代の石鏃の混入の可能性を完全に否定することはできない。

二次加工は、素材となった剥片の性状に応じて施されており、縁辺のトリミングのみに終わるものから、器表面全体に丁寧な剝離を施すものまで様々である。加工度の低い欠損品が認められることと、既述のように微細な破片が多数出土していることを考えれば、住居跡内で石鏃の製作もおこなわれていたものと思われる。

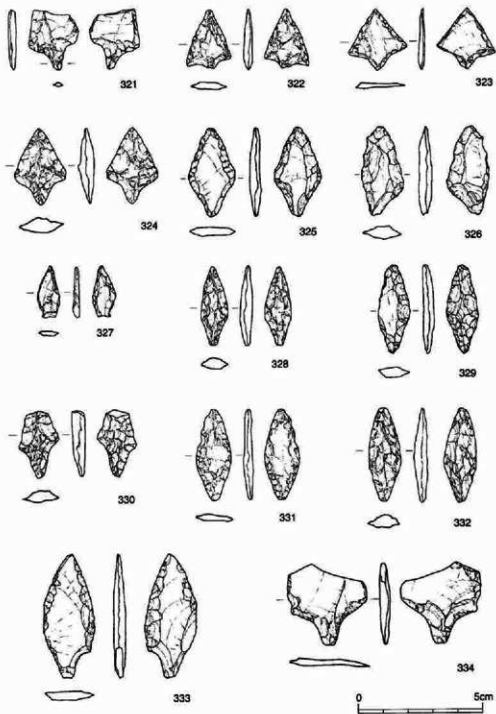
（磨製石鏃・石剣）

磨製石鏃2点、石剣1点が出土している。石材はいずれも粘板岩である。

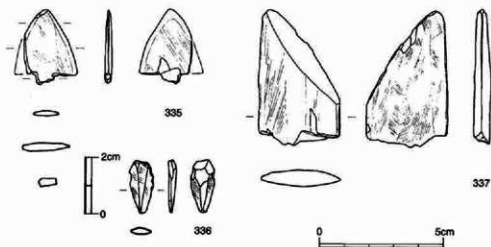
335は扁平に仕上げられた石鏃で、両面ともに平坦に研磨されており、稜線は認められない。



第25図 壺穴住居勝SH2出土の石鏃(1)



第26図 豊穴住居跡SH2出土の石鏃(2)



第27図 壱穴住居跡SH2出土の磨製石鏃・石剣

336は磨製石鏃の基部と考えられる。基端部が尖り、その先端に収束する2条の稜線が、両面に認められる。両側縁の上には、研磨によってわずかな決りがつくり出されている。

337は磨製石剣と考えられる。上部は筋理面で折損しており、下部も折損している。両面ともに、中央には稜線が通っている。

工具・その他

(石鏃)

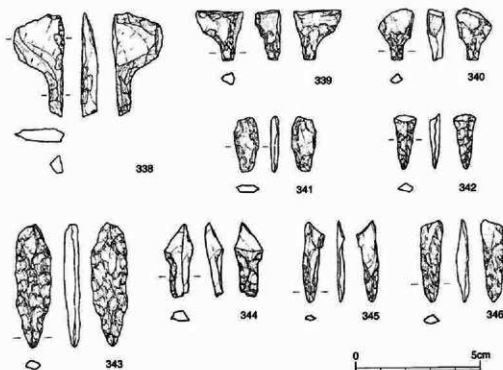
石鏃は両住居跡で合計9点が出土しているが、そのほとんどがSH2の出土であり、SH3出土の石鏃は1点のみである。他の石器では、数量・組成比率がほぼ拮抗する両住居跡にあって、石鏃についてはSH2が優位である。

形態には、鏃部と偏平な基部をもつものと、全体に紡錘形を呈するものが見られるが、組成の主体は前者である。この他に鏃としてはやや偏平な断面形を呈する一群(第28図 344～346)が見られる。

344～346は石鏃に分類した。いずれも完形品ではないため即断しがたいが、一端の尖る細長い鏃状の石器である。他の石鏃に比べて断面形が偏平で、この形状のまま回転穿孔という作業に耐えうるのか、やや疑問が残る。二次加工は、両側縁で表裏両面から平坦に施されており、むしろ石鏃の二次加工に近い印象を受ける。鏃以外の機能をもつ器種であった可能性も考慮しておきたい。

(楔形石器)

楔形石器をこの項目で分類することには、些かの問題があるかもしれない。しかし、楔形石器の機能は必ずしも明確ではないため、便宜的に本項目で記載をおこなう。本器種の機能を工



第28図 竪穴住居跡SH2出土の石鏃

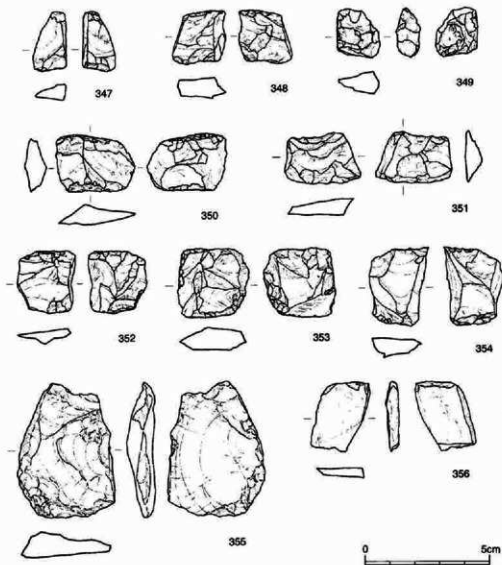
具と断定するものではないことを、お断りしておく。

楔形石器は、平方遺跡では石鏃に次いで多数を占める器種である。その大きさや形態は多様であり、截断面が形成されているものといないもの、折れ面が形成されるものなど、最終的に石器に残された剥離の状況にも差異が認められる。本器種の分類は、両極打撃による石器の整形を基準としておこなっているが、最終形態に示された差異は、本器種内にさらに分類されうる機能の差が存在することを示唆するのかもしれない。

弥生時代の石器にあっては、打製石剣の基部に、やはり両極からの打撃によって縁辺を潰したものが見られ、断片であれば、一見楔形石器のような形態を示す場合がある。しかし、本遺跡での楔形石器には、打製石剣の基部のように両側縁がほぼ平行し、なおかつ器表面に丁寧な二次加工を施した上で縁辺を潰した例は認めらず、打製石剣基部が混入している可能性はないものと思われる。

(スクレイパー類および二次加工のある剥片)

両器種は、機能的には近似したものと推定される。スクレイパー類には定型的なものではなく、多様な剥片の縁辺に二次加工を施したものによって占められている。二次加工の程度が、比較的連続的であるものをスクレイパーとして分類し、二次加工が不連続なものを二次加工のある

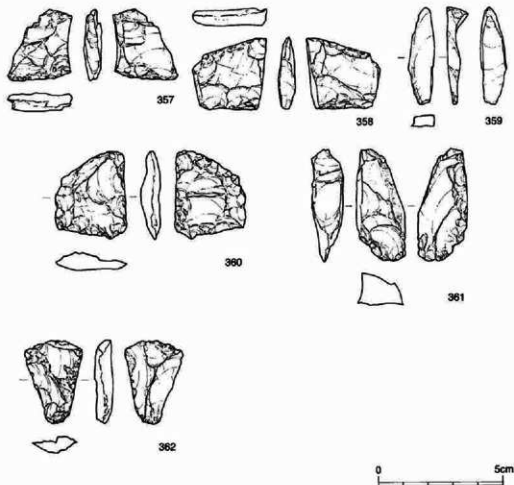


第29図 壱穴住居跡SH 2出土の楔形石器(1)

剥片として分類している。

両器種を合わせて、石器組成全体に占める割合は11%になり、加工具として安定的に組成されていると判断される。

機能は切削を中心としたものであろうが、二次加工が施された刃部は直線的なもの、やや鋸歯縁となるもの、凸刃となるものなど多様である。二次加工のある剥片では、二次加工の剝離痕が不連続であることなどから、むしろ剥片の縁辺の利用が中心であったのかもしれない。



第30図 豊穴住居跡SH 2出土の横形石器(2)・削器

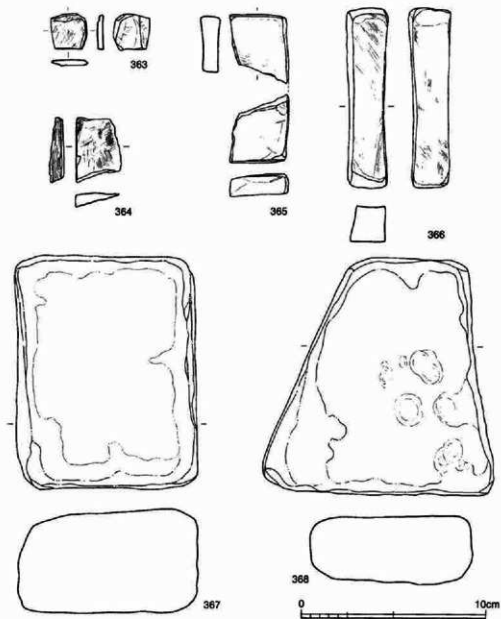
(砥石・その他の磨製品)

SH 2・3から出土した砥石等は合計7点である。分布は両住居跡に各3点の砥石および、SH 2から出土した不明磨製品1点である。

砥石は、砂岩・粘板岩・泥岩等を用い、角柱状ないしは扁平な形に仕上げたものである。いずれも使用の痕跡は明瞭で、砥面が窪むまで使用されたものが見られる。

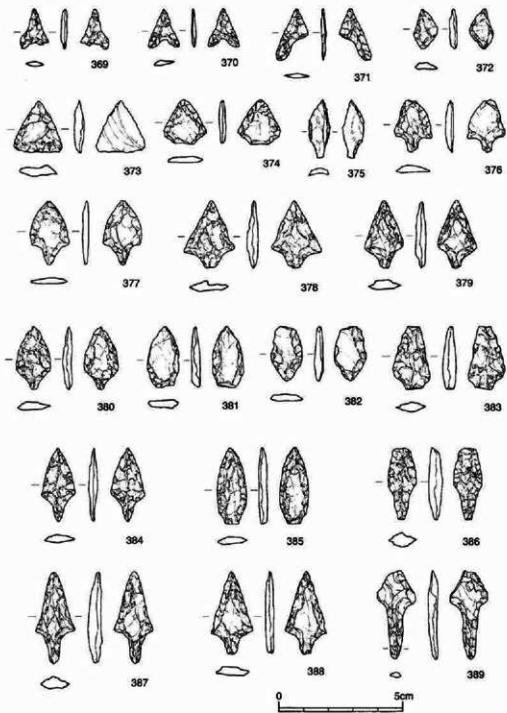
不明磨製品(363)は、研磨された泥岩の断片的資料である。片面は剥離してしまっており、もとの形態や研磨状況には不明の点があるが、残存形態から、ごく薄い製品であったものと思われる。砥石の断片である可能性もあるが、現状では断定しがたい。

上記のほかにはSH 2からは、砂岩製の扁平な台石(?) 2点が出土している(367・368)。367

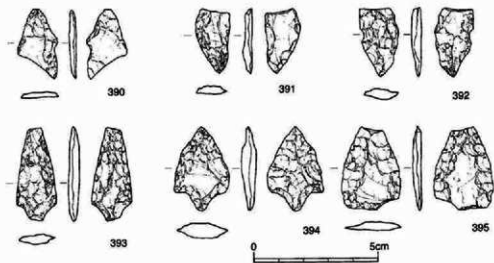


第31図 竪穴住居跡SH2出土の礫石・その他の石器

ほぼは長方形を呈し、厚さは5.5cmを測る。368は台形を呈し、厚さは3.6cmである。ともに両面が焼けて著しく脆弱になっており、表面の調整・研磨などはまったく観察できない。368の



第32圖 豊穴住居跡SH3出土の石鏃(1)



第33図 竪穴住居跡SH3出土の石礫(2)

表面には、数カ所のまとい窪みが観察されるが、人為的な加工か否か判断に苦しむ。

砥石の可能性もあろうが、両者ともによく火熱を受けていることをどのように考えればよいのか、銅鐸鋳型を出土したという、住居跡の特殊な環境も考慮しておくべきだろうが、現状では判断は保留せざるをえない。

〔SH1〕

SH1からは、SH2・3に次いで多数の石器が出土している。剥片・碎片類は35点が出土しており、SH2・3には劣るというものの、石器製作も行なわれていたのであろう。なお本住居跡では、埴土の筒かけは行なわれていない。

石器は、石礫が5点、石錐5点、楔形石器2点、砥石2点のほか、石核、ハンマーが各1点出土している。遺構内での製品の組成比は、楔形石器が著しく少ないこと、スクレイパーが出土していないことが特徴的といえようか。

なお、石核としたものは図示しなかったが、ごく小破片で、最終残核と思われる。

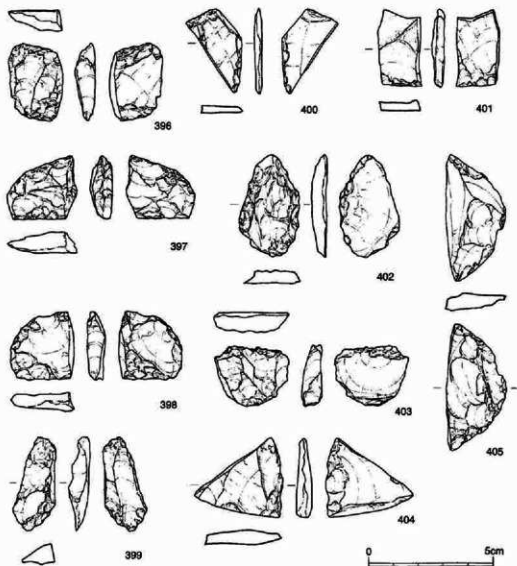
(石礫)

石礫は、有茎石礫のみが出土している。形態組成・二次加工の状況などは、先述のSH2・3に類似している。

(石錐)

石錐は5点が出土しており、本住居跡内で出土した石器総数に占める割合は大きい。形態はSH2・3で述べたように、細長い錐部に幅の広い扁平な基部をもつものと、紡錘形に近い錐部のみのものが見られる。着柄方法や使用方法の差異などを考慮すべきであろうか。

(楔形石器)

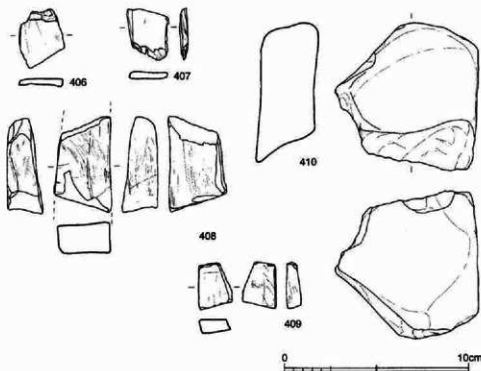


第34図 壑穴住居跡SH3出土の楔形石器・副器

楔形石器は、2点が出土している(423・424)。ともに相対する2辺から二次加工が施されており、423では折面が、424では截断面が形成されている。

(剥片)

第36図に示した剥片(421・422)は、ともに点状ないしは薄い線状の打面を有しており、楔形石器の二次加工の際に剝離されたものかと考えられる。特に421は、背面・腹面ともに剝離面に観察されるリングの密度が高く、楔形石器の器表面の剝離痕に類似している。



第35図 豊穴住居跡SH3出土の礫石・その他の石器

なお、このほかに本住居跡からは、横長の剥片1点が出土しており、段状遺構1から出土した剥片と接合しているが、この資料については接合資料の項で詳述する。

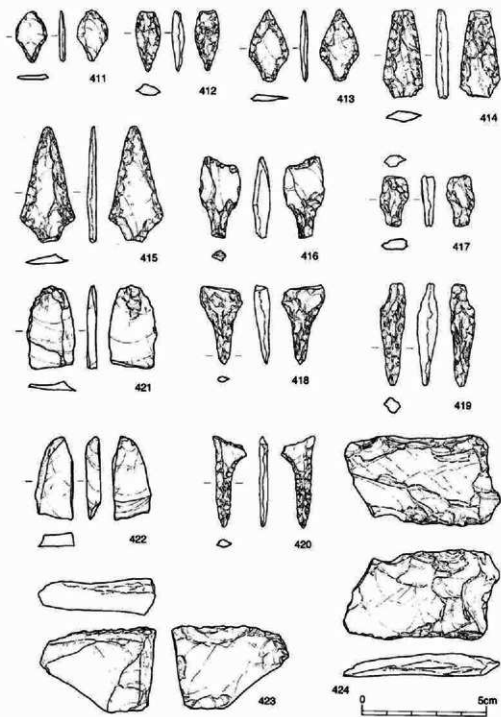
〔その他の遺構出土の石器〕

住居跡では、上記の他にSH4・9から剥片11点が出土している。住居跡以外の遺構では、土城柱穴から石鏃1点、楔形石器2点、二次加工のある剥片2点および剥片・碎片25点の、合計30点が出土している。しかし、全遺構内出土の石器の中で占める割合はわずかに0.3%にすぎず、本遺跡の石器組成から逸脱した遺物も認められない。

〔接合資料〕

本遺跡では、接合資料1組が確認された。横長剥片2点が接合したものであるが、1点はSH1から、他の1点は段状遺構1から出土している。両遺構は、斜面の上下に近接しており、あるいは偶然剥片1点が流入したのものかもしれないが、遺構を越えた接合作業の重要性を認識させる資料といえる。

横長剥片は、連続して剥離された2点であり、SH1で出土したものの(425)が先に剥離されている。425は、2枚の剥離痕で形成された打面を打撃して剥離されている。背面側には2枚の剥離痕が観察され、打点を横方向に移動させながら剥離がおこなわれたことが理解される。



第36図 竪穴住居跡SH1出土の石器

426では、打面は剥離の際に欠損したものと思われる。背面は425が接合する剥離痕によって構成される。

本接合資料で注目されるのは、両剥片の背面側に見られる石核上の面である。この面は、旧石器時代の瀬戸内技法による翼状剥片の底面と同様の位置にあって、石核が剥片素材のものであったことを示している。この「底面」は、ポジティブな剥離面であり、剥片剥離作業は「底面」が形成された剥離（石核の素材剥片の剥離）の際の打面部側から進められている。

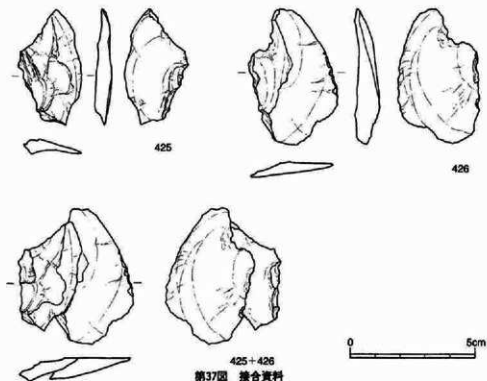
しかし「底面」の風化度は、2点の剥片の主剥離面および背面の剥離痕の風化度に対して著しく進行している。従って石核の素材となった剥片は、弥生時代中期よりもかなり古い時期に剥離されたものと思われる。

c. 包含層出土の石器

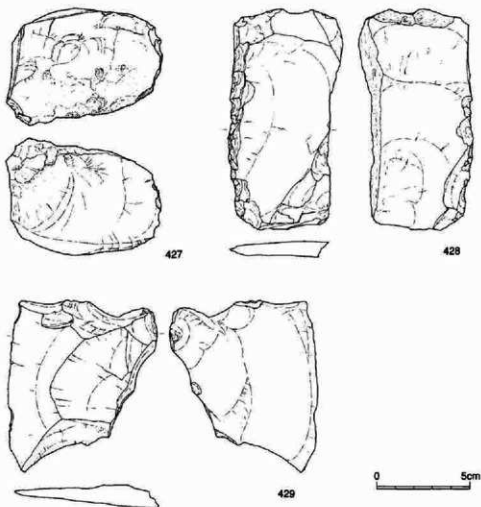
包含層出土の石器は、平方遺跡出土の石器のうち0.4%を占めるにすぎない。しかし、その中には遺構内からはまったく出土しなかった器種も含まれており、遺構を離れた資料とはいえ必ずしも無意味とはいえないようである。

(素材剥片)

素材剥片としたものは、石核ないしは大型剥片石器の素材と考えられる、厚手の剥片である。



425+426
第37図 接合資料



第38図 包含層出土の石器(1)

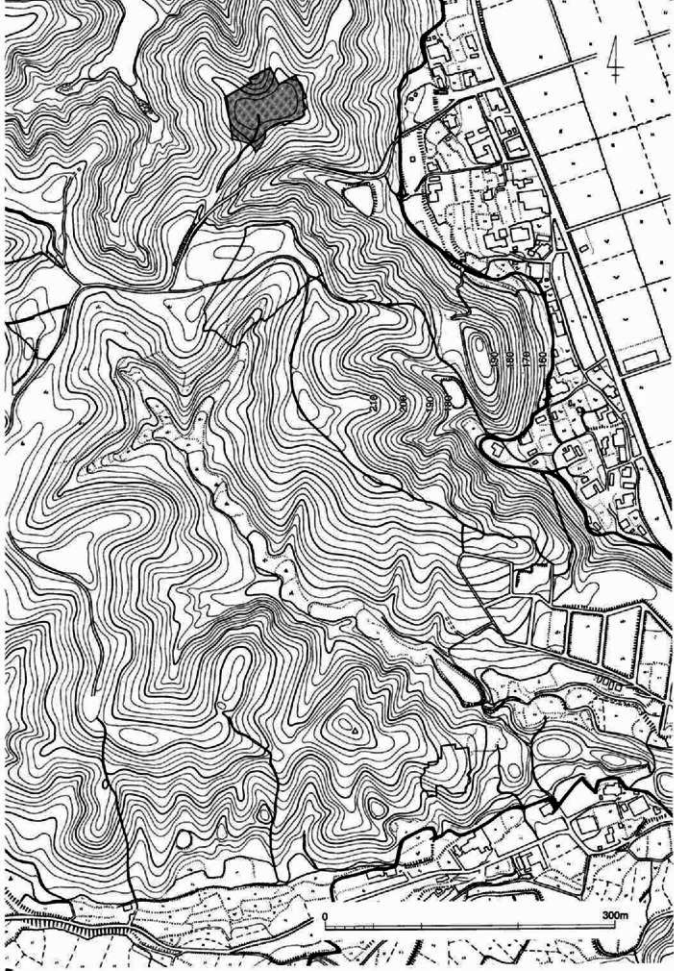
平方遺跡では、数点が出土しているにすぎないが、本書所収の中西山遺跡で見られたように、弥生時代中期の中核の遺跡にあっては、まとまった形で大型剥片が搬入されている例が知られている。本遺跡の出土例は、いずれも打面部の構成が明らかではないが、うち1点(429)は背面側にポジティブな剝離面をとどめており、さらに大型の剥片素材石核から剝離されたことが知られる。

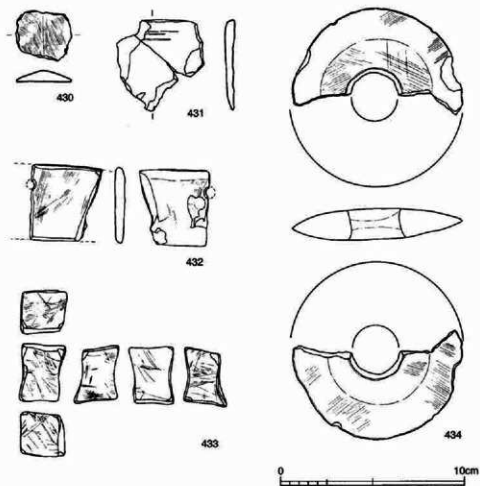
(磨製石剣)

磨製石剣は1点が出土している。器身中央部の破片であるが、裏面は剝落しており、片面のみ研磨状況を観察できる。中央部に研磨による稜線が見られる。粘板岩を石材としている。

(石包丁)

第2部 中西山遺跡群





第39図 包含層出土の石種(2)

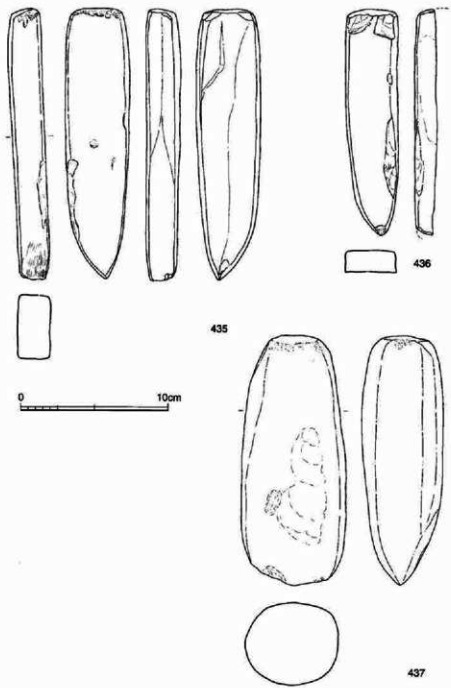
平方遺跡では、わずかに磨製石包丁2点、打製石包丁1点が出土したのみである。

磨製石包丁2点(431・432)は、ともに粘板岩を用いている。いずれも中央部の破片であるため、全体の形状は明らかではない。ともに粘板岩製である。

打製石包丁は、大型の横長切片を素材とし、その末端側の縁辺に表裏から二次加工を施したものである。

(砥石)

砥石は1点を図示した。歪んだ直方体を呈しており、6面とも研磨が施されているが、石材が極めて細粒の凝灰岩であるため、研磨の痕跡は観察が困難である。長軸にある4面には長軸



第40図 包舍層出土の石器(3)

に対して直交する方向の細かな傷が、多寡の差はあれ認められる。通常の砥石よりも長軸が非常に短く、研磨する対象物に興味が持たれる。

(環状石斧)

環状石斧は、1/2を欠損した資料1点が出土している。石材は、ごく細粒の砂岩かと思われる。器表面は極めて丁寧に研磨されており、光沢がある。中央部に復原径25mmの穴が穿たれている。器表は両面ともに、中央部からゆるやかな膨らみをもちつつ縁辺に至る。縁辺は一般の石斧の刃部と同様に仕上げられているが、この器種の機能的側面との関連は明瞭ではない。

(石斧)

石斧は、太形蛤刃石斧1点、柱状片刃石斧2点が出土している。

太形蛤刃石斧は粗粒・硬質の砂岩を用いている。敲打により整形をおこなったのち、刃部を研磨して仕上げている。

柱状片刃石斧は、ともに片麻岩(?)が石材となっている。器表は丁寧な研磨によって仕上げられている。いずれも、器長に比べて幅が小さいが、435では片側面が破損した面となっており、使用時に石理に沿って破損したものである。436でも片側側面は、凹凸が研磨によって除去しきれておらず、極めて丁寧に仕上げられた他の面に比べて、明らかに粗雑であり破損面を研磨で再生したものと考えてよいであろう。

(3)縄文時代草創期の石器

平方遺跡では、弥生時代の遺物包含層等に遊離した状態で、縄文時代草創期に属すると思われる有舌尖頭器・木葉形尖頭器およびその未製品各1点(いずれもサヌカイト製)が出土している。しかし、弥生時代の遺物検出面の下層は丘陵構成層(大版層群)であることから、当該時期の文化層は遺跡内に遺存しないものと判断された。

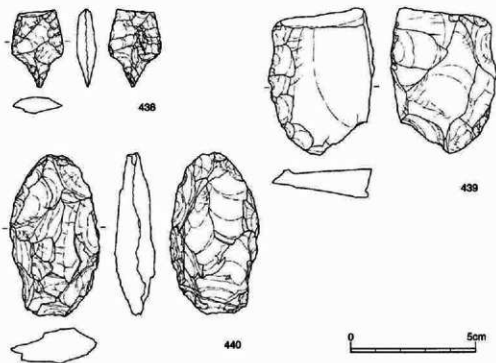
三田盆地では、縄文時代草創期の遺物として北台遺跡・木器荘園遺跡出土の有舌尖頭器(前者はチャート、後者はサヌカイト製)が知られており、平方遺跡の出土例は、これに新たな資料を追加することとなった。

有舌尖頭器(第41図438)

上半部を折損している。器表面は、押圧剝離による丁寧な調整が施されている。概ね均整のとれた凸レンズ状の断面形を呈するが、図右側面の調整はわずかに稜脊状となっている。返しの部分は顕著にはつくり出さず、なめらかに舌部に至っている。

尖頭器およびその未成品(第41図439・440)

やや粗い調整を施した尖頭器である。尖頭部も顕著につくり出されていないことから、未製品である可能性が高い。調整剝離は全周からおこなわれ、部分的には顕著な階段状となっている。剝離痕がいずれも粗大、ないしは器面に対して急斜度であることから、押圧剝離は用いられていないと判断される。器表面の風化は著しい。



第41図 縄文時代草創期の石器

439は未成品(?)としたい。両面ともに素材剥片上の剝離面をひろくとどめており、厚手の横長剥片が素材であることが知られる。1側縁に表裏から二次加工を施し、ジグザグ状の側面観を呈すること、折れ面となっている他の1側縁からも平坦な剝離を施していることから、尖頭器の未製品と考えて大過ないだろう。

(4)小結

平方遺跡出土の弥生時代の石器には、遺跡内での分布に著しい偏りがある。そのひとつは、SH2・3に見られたような、サヌカイト製の打製石器の量的な偏りであり、今一つは器種分布の偏りである。弥生時代の集落内における石器の分布や、石器製作の状況（職能的な製作の分業）については、明らかでない点が多い。さらに石材の移入の単位や、集落内での分配・完成された石器の保有については、十分な分析がなされていないのが現状である。

遺構内だけでなく、包含層を含む遺跡内全体での石器分布の状況を、把握できるような記録をおこなうことが、今後の調査では重要となってこよう。そうしたデータの蓄積によって、弥生時代の石材採掘から、石材の移動・分配、石器製作と保有といったシステムを支配していた社会構造の一端を知ることができる可能性がある。

遠隔地から移入される石材と、近隣で採取可能な石材（平方遺跡では遠隔地のサヌカイト、近隣の粘板岩・砂岩など）を支配するシステムの差についても今後の検討課題である。

第4表 石器計測表(1)

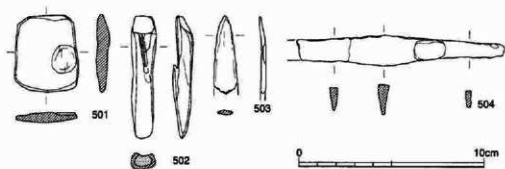
No.	挿固	器種	長さ	幅	厚さ	重量	遺構	石材
301	25	石鏃	(9.3)	(10.0)	2.1	0.2	SH 2	Sn
302	25	石鏃	12.5	11.0	2.0	0.6	SH 2	Sn
303	25	石鏃	(13.0)	11.1	2.2	0.2	SH 2	Sn
304	25	石鏃	(15.8)	14.0	2.5	0.6	SH 2	Sn
305	25	石鏃	(18.0)	15.0	3.0	0.8	SH 2	Ch
306	25	石鏃	(22.9)	(15.0)	2.3	0.7	SH 2	Ch
307	25	石鏃	19.6	(14.0)	2.7	0.8	SH 2	Sn
308	25	石鏃	27.0	17.0	2.8	1.1	SH 2	Sn
309	25	石鏃	14.0	(12.0)	2.3	0.4	SH 2	Sn
310	25	石鏃	(21.0)	17.8	4.6	1.6	SH 2	Sn
311	25	石鏃	40.1	24.7	4.9	3.7	SH 2	Sn
312	25	石鏃	21.0	19.7	2.5	0.9	SH 2	Sn
313	25	石鏃	(19.0)	15.5	3.7	1.1	SH 2	Sn
314	25	石鏃	(21.2)	15.0	5.2	1.2	SH 2	Sn
315	25	石鏃	(20.9)	20.1	4.2	1.6	SH 2	Sn
316	25	石鏃	24.2	15.0	2.8	0.7	SH 2	Sn
317	25	石鏃	21.7	14.0	3.5	1.0	SH 2	Sn
318	25	石鏃	27.0	13.0	3.0	0.7	SH 2	Sn
319	25	石鏃	30.0	19.7	3.5	1.3	SH 2	Sn
320	25	石鏃	(27.0)	19.0	3.3	2.8	SH 2	Sn
321	26	石鏃	(23.5)	20.0	3.0	1.4	SH 2	Sn
322	26	石鏃	(23.5)	17.9	3.0	0.8	SH 2	Sn
323	26	石鏃	24.1	23.3	2.5	0.6	SH 2	Sn
324	26	石鏃	30.0	20.7	6.0	2.2	SH 2	Sn
325	26	石鏃	35.5	18.6	3.4	2.4	SH 2	Sn
326	26	石鏃	35.7	17.0	5.0	2.8	SH 2	Sn
327	26	石鏃	20.0	8.9	3.0	0.7	SH 2	Sn
328	26	石鏃	31.4	10.8	4.5	1.8	SH 2	Sn
329	26	石鏃	35.2	12.8	4.0	0.8	SH 2	Sn
330	26	石鏃	(26.5)	18.0	4.8	2.1	SH 2	Sn
331	26	石鏃	36.0	14.0	3.6	1.7	SH 2	Sn
332	26	石鏃	37.0	13.2	5.2	2.4	SH 2	Sn
333	26	石鏃	14.0	(12.0)	2.3	0.4	SH 2	Sn
334	26	石鏃	(32.0)	32.0	3.8	3.5	SH 2	Sn
335	27	磨製石鏃	29.3	21.5	2.9	2.2	SH 2	Sr
336	27	磨製石鏃	13.7	6.3	2.0	0.2	SH 2	Sr
337	27	磨製石鏃	52.4	32.6	6.8	14.3	SH 2	Sr
338	28	石鏃	(40.8)	20.5	5.0		SH 2	Sn
339	28	石鏃	(20.0)	18.9	10.0	2.9	SH 2	Sn
340	28	石鏃	(20.2)	14.0	7.0	2.2	SH 2	Sn
341	28	石鏃	(21.8)	9.4	2.9	1.1	SH 2	Sn
342	28	石鏃	(20.5)	(9.0)	(4.0)	0.7	SH 2	Sn
343	28	石鏃	48.8	18.8	6.0	4.2	SH 2	Sn
344	28	石鏃	(29.0)	(11.5)	6.5	1.8	SH 2	Sn
345	28	石鏃	(32.0)	(8.7)	2.8	0.8	SH 2	Sn
346	28	石鏃	(32.0)	8.9	5.0	1.3	SH 2	Sn
347	29	楔形石鏃	23.9	14.2	6.1	1.9	SH 2	Sn

第5表 石器計測表(2)

No.	挿図	器種	長さ	幅	厚さ	重量	遺構	石材
348	29	楔形石器	21.5	20.0	8.5	3.7	SH 2	Sn
349	29	楔形石器	18.5	20.0	7.0	3.2	SH 2	Sn
350	29	楔形石器	19.7	17.2	9.8	5.3	SH 2	Sn
351	29	楔形石器	20.2	30.5	7.5	5.1	SH 2	Sn
352	29	楔形石器	24.6	23.7	6.8	3.5	SH 2	Sn
353	29	楔形石器	28.2	27.5	8.2	7.9	SH 2	Sn
354	29	楔形石器	31.5	23.2	7.7	6.5	SH 2	Sn
355	29	楔形石器	22.6	31.0	7.8	23.8	SH 2	Sn
356	30	楔形石器	30.6	20.2	7.5	3.5	SH 2	Sn
357	30	楔形石器	24.6	23.7	7.0	4.9	SH 2	Sn
358	30	楔形石器	29.1	27.7	8.0	7.2	SH 2	Sn
359	30	楔形石器のスポール	31.0	22.0	7.9	2.1	SH 2	Sn
360	30	削器	53.1	32.4	10.0	8.2	SH 2	Sn
361	30	楔形石器	53.1	38.4	10.0	13.8	SH 2	Sn
362	30	削器	32.4	23.2	6.3	4.6	SH 2	Sn
363	31	不明磨製石器	19.0	19.9	2.7	1.7	SH 2	Sr
364	31	砥石	33.7	24.8	5.7	4.8	SH 2	Sr
365	31	砥石	36.3	30.3	10.8	16.8	SH 2	Sr
366	31	砥石	96.3	21.3	20.7	77.7	SH 2	Sr
367	31	台石(?)	122.6	97.4	51.3	960.6	SH 2	S
368	31	台石(?)	125.0	124.9	37.1	702.3	SH 2	S
369	32	石鏃	15.5	11.3	2.2	0.4	SH 3	Sn
370	32	石鏃	15.3	12.5	2.0	0.4	SH 3	Sn
371	32	石鏃	20.0	(13.2)	1.8	0.5	SH 3	Sn
372	32	石鏃	15.9	9.4	2.5	0.5	SH 3	Sn
373	32	石鏃	20.5	20.0	4.8	1.3	SH 3	Sn
374	32	石鏃	(18.3)	17.2	2.3	0.9	SH 3	Sn
375	32	石鏃	21.5	8.9	3.5	0.6	SH 3	Sn
376	32	石鏃	(20.7)	(14.9)	3.3	0.8	SH 3	Sn
377	32	石鏃	25.5	15.8	2.4	1.0	SH 3	Sn
378	32	石鏃	(26.5)	20.5	4.5	2.0	SH 3	Sn
379	32	石鏃	26.7	15.5	3.8	1.3	SH 3	Sn
380	32	石鏃	25.0	13.8	3.4	1.2	SH 3	Sn
381	32	石鏃	24.2	17.3	3.8	1.4	SH 3	Sn
382	32	石鏃	(21.7)	12.8	3.1	0.9	SH 3	Sn
383	32	石鏃	(25.0)	15.0	5.1	1.8	SH 3	Sn
384	32	石鏃	28.5	13.8	3.5	1.0	SH 3	Sn
385	32	石鏃	30.3	11.8	3.2	1.7	SH 3	Sn
386	32	石鏃	(28.0)	11.2	5.6	1.5	SH 3	Sn
387	32	石鏃	36.0	15.0	5.2	2.1	SH 3	Sn
388	32	石鏃	33.0	16.4	3.4	1.4	SH 3	Sn
389	32	石鏃	35.0	15.2	3.8	1.5	SH 3	Sn
390	33	石鏃	(27.8)	(16.0)	2.9	1.2	SH 3	Sn
391	33	石鏃	(25.5)	(14.0)	3.4	1.2	SH 3	Sn
392	33	石鏃	(27.0)	15.0	3.9	2.0	SH 3	Sn
393	33	石鏃	(37.0)	16.0	4.8	2.7	SH 3	Sn
394	33	石鏃	(33.5)	(22.0)	5.8	3.3	SH 3	Sn

第6表 石器計測表(3)

No.	挿図	器種	長さ	幅	厚さ	重量	遺構	石材
395	33	石鏃	(32.5)	23.4	3.3	3.0	SH3	Sn
396	34	楔形石器	28.8	24.5	9.1	6.5	SH3	Sn
397	34	楔形石器	25.5	28.1	9.1	6.0	SH3	Sn
398	34	楔形石器	27.3	25.7	8.6	6.3	SH3	Sn
399	34	楔形石器	27.5	17.8	8.3	3.8	SH3	Sn
400	34	削器	33.7	14.8	3.0	2.2	SH3	Sn
401	34	削器	29.3	8.8	4.4	3.5	SH3	Sn
402	34	削器	40.1	23.7	5.8	6.8	SH3	Sn
403	34	削器	29.7	25.2	7.2	6.6	SH3	Sn
404	34	削器	36.0	31.5	6.8	7.0	SH3	Sn
405	34	削器	49.5	23.4	8.3	8.8	SH3	Sn
406	35	不明磨製石器	27.6	24.4	3.9	3.1	SH3	Sr
407	35	砥石(?)	23.9	23.1	3.5	2.9	SH3	Sr
408	35	砥石	51.5	31.5	18.3	36.1	SH3	Sr
409	35	砥石	22.9	18.2	8.0	4.5	SH3	Sr
410	35	砥石	77.5	67.4	40.0	225.4	SH3	Sr
411	36	石鏃	20.1	12.0	2.1	0.8	SH1	Sn
412	36	石鏃	(24.0)	9.8	4.5	1.1	SH1	Sn
413	36	石鏃	28.1	15.4	3.0	1.2	SH1	Sn
414	36	石鏃	(35.0)	15.5	4.6	3.1	SH1	Sn
415	36	石鏃	(46.0)	21.5	3.4	2.9	SH1	Sn
416	36	石鏃	(32.5)	16.0	6.3	3.2	SH1	Sn
417	36	石鏃	(20.0)	16.5	5.0	1.2	SH1	Sn
418	36	石鏃	30.6	16.1	6.2	2.3	SH1	Sn
419	36	石鏃	40.2	18.0	7.8	2.8	SH1	Sn
420	36	石鏃	(36.0)	(12.0)	5.0	1.2	SH1	Sn
421	36	楔形石器の削片	33.0	19.2	3.6	2.7	SH1	Sn
422	36	楔形石器の削片	33.7	15.2	5.2	3.5	SH1	Sn
423	36	楔形石器	33.2	42.0	9.8	22.5	SH1	Sn
424	36	楔形石器	36.0	72.5	8.8	23.0	SH1	Sn
425	37	削片(接合資料)	25.0	45.4	4.5	4.5	SH1	Sn
426	37	削片(接合資料)	32.7	54.1	5.2	8.2	形状不明	Sn
427	38	削片	87.5	58.3	12.0	74.1	包含層	Sn
428	38	削器(打製石包丁か)	118.2	60.3	11.2	114.9	包含層	Sn
429	38	削片	79.0	91.6	9.5	55.9	包含層	Sn
430	39	磨製石包丁	24.6	30.3	5.5	5.7	包含層	Sr
431	39	磨製石包丁	46.4	48.1	4.4	11.0	包含層	Sr
432	39	石包丁	37.7	40.1	5.1	13.0	包含層	S
433	39	砥石	30.1	24.4	22.5	20.3	包含層	Sr
434	39	環状石斧	91.3	—	16.1	81.0	包含層	S
435	40	柱状片刃石斧	181.2	44.8	22.8	428.0	包含層	片麻岩
436	40	柱状片刃石斧	150.6	35.6	14.4	160.8	包含層	片麻岩
437	40	太形片刃石斧	165.4	69.8	55.4	993.5	包含層	S
438	41	有舌尖頭器	30.1	20.7	6.9	4.1	包含層	Sn
439	41	尖頭器(未成品)	56.1	43.0	11.6	36.5	包含層	Sn
440	41	尖頭器	64.0	35.1	14.9	33.6	包含層	Sn



第42図 壑穴住居跡SH2・3出土鉄器

3. 鉄器(第42図)

鉄器はSH2とSH3から出土している。

(1)SH2

SH2からは斧と刀子が出土している。斧(501)は遺存状況が悪いが、小型の板状鉄斧である。最大長4.1cm、最大幅3.5cm、最大厚0.6cmを測る。

刀子(504)は埋土上層から出土しており、必ずしも弥生時代中期のものとはいええない。刃部の先端を欠くが、現存長11.2cm、最大幅1.6cm、最大厚0.6cmを測る。

(2)SH3

SH3からは鑿と鉞が出土している。鑿(502)は遺存状況が悪いが、袋部を持つ形である。最大長6.5cm、最大幅1.3cm、最大厚1.0cmを測る。鉞(503)は刃部しか残存していない。現存長4.1cm、最大幅1.3cm、最大厚0.3cmを測る。

4. 鑄造関係遺物(第43図)

鑄造関係遺物は小銅鐔の鑄型2個1対と中子の破片1点がSH2・3から出土している。また土坑SK4からは羽口が出土している。なお、埴塼・取瓶・鉾澤などは出土していない。

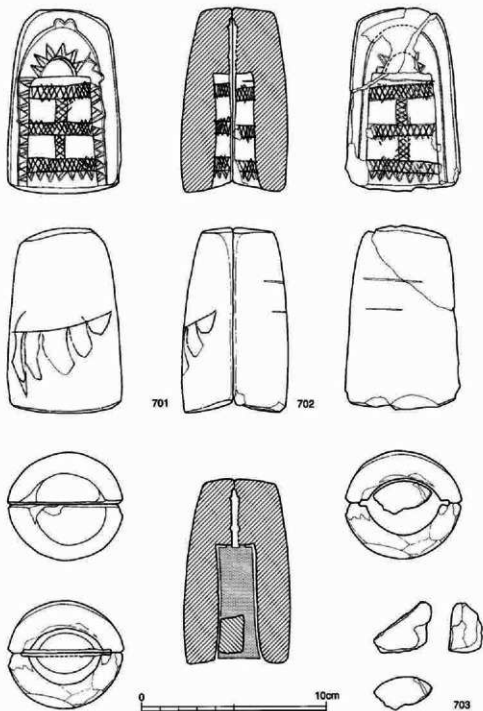
(1)小銅鐔鑄型A

この鑄型(701)は、壑穴住居跡SH2の北端壁際の床面に近い場所から接合面を上に向けて出土した。

鑄型はほぼ完形である。材質は粘土製で、表面は黒褐色を呈しており、他の面は褐色を呈している。他の土器に比べて焼成は極めて良い。

鑄型は縦9.8cm、横6.2cm、厚さ2.8cm、重量152.24gを計る。幅と厚さが底部から上部へと徐々に細くなっていく先細りのカマボコ形である。上・底・接合面はそれぞれ稜により明らかに分けることができるが、側面から裏面にかけては稜がなく、断面半円形であり、面としては明確には分けられない。このため、上・底・接合面以外は裏面と呼称する。

上・裏面はナデにより調整されている。



第43圖 豎穴住居跡SH 2・3出土銅造關係遺物

表面は中央部より下半部に細いヘラ状工具による線画が認められる。この線画は内面の線刻とは様相を異にし、細く浅く精緻である。これは異なったヘラ状工具を使用したか、焼成前の乾燥した時に掘ったものであろうか。文様は左下がりの線の下に、右から左にかけて大きくなる突起を垂下させている。何を意匠しているかは不明である。

底面はヘラによる成形痕と思われる痕跡が認められる。

接合面は微妙な凹凸があるが、平坦に形成されている。小銅鐸の型は中心よりやや左に寄って彫り込まれている。

上・底・側面には型合わせの刻み目は認められない。

接合面に刻まれている小銅鐸の型は鑄部の深さ0.1cm～0.15cmを全体に下げている。飾耳を除く最大高8.6cm、鈕高2.6cm、鑄を含む鈕の幅4.4cm、舞幅0.9cm、鑄裾部での両鑄端幅4.9cm、鐸身幅3.9cm、深さ1.0cm鑄幅0.5cmを計る。

鈕は幅0.2cm、深さ0.2cmの菱環部を表現しており、外縁部の鐸身鑄部から続く縁部は右側の一部に鋸歯文を表現しようとした線刻が認められるが、原則的に無文である。菱環部の外側は外向きの鋸歯文が6個廻り、右下がりの斜線を1本充填している。ただし、左端の2個は左下がり様に見える。鈕孔部は孔を穿つためには接合面と同じ高さが必要であるが、接合面までの高さはない。鈕頂部には高さ0.5cmの双頭の飾耳が表現されている。また鈕と鐸身左側の鑄との境にも飾耳様の表現が認められる。

舞部は無文である。成形の時のままで、丁寧な調整は成されていない。

鐸身鑄部は左辺で外向きの鋸歯文が9個施され、内部は1本ないしは2本の右下がりの斜線を充填している。右辺は外向きの鋸歯文が8個施され、内部は1本ないしは2本の右下がりの斜線を充填している。鋸歯文の大きさにばらつきがある。鈕孔部は接合面まで達していない。

鐸身は上端に幅0.5cmの無文帯を残し、4区の装束文を施している。先に横帯を3帯施し、後に縦帯を施している。縦帯は中央のみで側縁にはない。第1横帯は幅0.6cm前後の2本の平行線の間に、斜格子文を刻んでいる。斜格子文は右下がり13本の斜線、左下がり11本の斜線で構成されている。第2横帯は幅0.6cm前後の2本の平行線の間に、斜格子文を刻んでいる。斜格子文は右下がり15本の斜線、左下がり16本の斜線で構成されている。第3横帯は幅0.7cm前後の2本の平行線の間に、斜格子文を刻んでいる。斜格子文は右下がり17本の斜線、左下がり17本の斜線で構成されている。いずれの横帯の斜格子文も先に右下がりの斜線を描き、後から左下がり斜線を描いている。

第3横帯下の鋸歯文帯は外向きの鋸歯文を7個施しており、内部は左側で左下がりの斜線、右側で右下がりの斜線を1本充填している。

中央縦帯は上段と下段ではややずれており、上段では幅0.6cm前後の平行線の間に、斜格子文を刻んでいる。斜格子文は左下がり3本の斜線、右下がり4本の斜線で構成されている。下

段では幅0.5cm前後の平行線の間に、斜格子文を刻んでいる。斜格子文は左下がり4本の斜線、右下がり4本の斜線で構成されている。

鐸身の区画内には平滑にした時に落ちたであろう砂粒の穴が5箇所ほどあいている。

(2)小銅鐸鑄型B

この鑄型(702)は、竪穴住居跡SH3の埋土内(大破片)とSH2の埋土内(小破片)から2個の破片になって出土した。大破片の鑄型B-1は検出の際に底面と裏面にかかる部分を一部削った。また小破片の鑄型B-2は検出の際に手撥で鑄型面に傷をつけた。鑄型B-1は表土に近い部分に埋蔵されていたため保存状態が良くなかったと思われ、細かなひびが無数に見受けられる。以上2点の破片を接合したところ一部に欠損部はあるものの、ほぼ完形に近い。材質は粘土製で、裏面は黒褐色を呈しており、他の面は褐色を呈している。焼成は鑄型Aに比べて悪いが他の土器に比べればはるかに良い。

鑄型は縦9.8cm、横6.1cm、厚さ2.9cmを測る。重量は鑄型B-1が122.60g、鑄型B-2が33.68gを測り、2片合わせて156.28gとなり、すでに鑄型Aに比べて重い。さらに欠損部を含めると数十g重くなる。幅と厚さが底部から上部へと徐々に細くなっていく先細りのカマボコ型である。上・底・接合面はそれぞれ稜により明らかに分けることができるが、側面から裏面にかけては稜がなく、断面半円形であり、面としては明確には分けられない。このため、上・底・接合面以外は裏面と呼称する。

上・裏面はナデにより調整されている。

裏面は鑄型Aと異なって明らかに文様と考えられるものは認められない。ただ意識的なものか不明であるが、底辺と平行する2本の線が認められる。

接合面は鑄型Aより丁寧ではないが、平坦に成形されている。小銅鐸の型は鑄型Aと違ってほぼ中央に彫り込まれている。

上・底・側面には鑄型Aと同様に型合わせの刻み目は認められない。

接合面に刻まれている小銅鐸の型は鑄部の深さ0.1~0.15cmを全体に下げている。最大高推定8.5cm、鈕高推定2.5cm、鑄を含む鈕の幅4.1cm、舞幅0.9cm、鑄部での両鑄端幅4.8cm、鐸身幅4.0cm、深さ1.2cmを計る。

鈕の菱環部は欠損しており、外縁部の鐸身鑄部から続く縁辺部は無文であり、菱環部に取り付く部分は外向きの鋸歯文、内部は左下がりの斜線を充填している。鈕孔部は欠損のため不明である。舞部は無文である。成形の時のままで、丁寧な調整は成されていない。

鐸身鑄部は鑄型Aと異なり無文である。

鐸身は上端に幅0.7cm~0.6cmの無文帯を残し、4区の装束帯文を施している。無文帯には割付線と思われる横線が引かれている。先に横帯を3帯施し、後に縦帯を施している。縦帯は中央のみで側縁にはない。第1横帯は幅0.7cmの2本の平行線の間に、斜格子文を刻んでいる。

斜格子文は右下がり17本の斜線、左下がり12本の斜線で構成されている。第2横帯は幅0.6cmの2本の平行線の間に、斜格子文を刻んでいる。斜格子文は右下がり13本の斜線、左下がり12本の斜線で構成されている。第3横帯は幅0.6cmの2本の平行線の間に、斜格子文を刻んでいる。斜格子文は右下がり15本の斜線、左下がり10本の斜線で構成されている。いずれの横帯の斜格子文も先に右下がりの斜線を描き、後から左下がり斜線を描いている。

下段横帯下の鋸歯文帯は外向きの鋸歯文を7個施しており、内部は左下がりの斜線を1～2本充填している。

中央縦帯は上段と下段ではややずれており、上段では幅0.6cm前後の平行線の間に、斜格子文を刻んでいる。斜格子文は右下がり5本の斜線、左下がり5本の斜線で構成されている。下段では幅0.5cmの平行線の間に、斜格子文を刻んでいる。斜格子文は右下がり4本の斜線、左下がり4本の斜線で構成されている。

(3)中子

中子(703)はSH2の運土から出土した小破片である。検出の際に一部傷をつけた。鋳型と同様に焼成は非常に良い。褐色を呈している。

中子は縦2.6cm、幅2.8cm、厚さ1.6cm、重量8.18gを計る。鋳造面の縦断面の角度や横断面カーブから底部に近い部分の破片であると考えられる。鋳造面は丁寧に研磨されている。内部の構造は中心部から放射状になっており、ある程度柱状に形を整えた粘土を鋳型内に押し込み製品分の厚みだけ削り、中子としたものと思われる。

(4)羽口(第44図)

羽口(704)はSK4から出土している。比較的精良な粘土を用いている。先端部の破片で外径5.2cm、通風孔径2.8cmを計る。鋳滓の付着は認められないが、先端が若干黒変している。

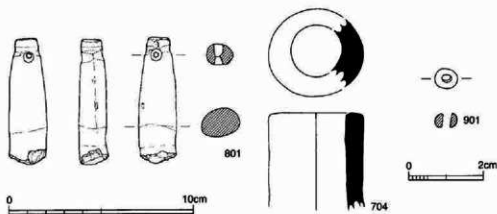
5. 石製品・玉(第44図)

石製品には銅鐸もしくは小銅鐸の舌がある。

(1)石舌

石舌(801)はSK3から出土している。石材は片岩である。形状は断面形が偏平な孔棒状を呈する。上部から1.0cm下がった所に穿孔がみられる。穿孔は両面から回転により行われている。この穿孔の上部に接した部分には帯状の浅い窪みが存在する。これは紐を掛けやすくなるためであると思われる。また下部から約1.4cm上がった部分には幅約1.2cmの帯状の浅い窪みが存在する。これは銅鐸との接触による磨耗と考えられる。

全長6.7cm、最大幅2.0cm、孔部分の幅1.4cmを測り、厚みは1.5cmを測る。孔径は0.5cmを測る。



第44図 土坑SK3・4出土遺物、竪穴住居跡SH2出土玉

(2) ガラス小玉

ガラス小玉(901)は1点、SH2の埋土から出土している。直径6mm、孔径2mm、厚さ3.8mmを計る。空色透明～半透明を呈し、内部には細かな気泡が存在する。引延し技法で作られている。

第3節 小結

弥生時代の遺構は竪穴住居跡7棟、方形住居状遺構1基、掘立柱建物跡1棟、段状遺構1基、溝1条と土坑を検出した。

竪穴住居跡は大きく平坦地に築かれるもの(SH1～3)と傾斜地に築かれるもの(SH4～7)とに分類できる。これは前者が大規模で重複が著しいのに対して、後者は小規模で重複関係が認められないという規則性があることからいえる。重複関係のあるものは小規模なものから大規模へ、円形から方形へと変遷している。

掘立柱建物跡SB1は尾根先端の見晴らしの良い場所に位置しており、興味深い。

遺物は土器、石器、鉄器、土製品、石製品等がある。土器の時期は弥生時代に限れば中期後半の限られた時期のみである。このことから、小銅鐸の鋳型も弥生時代中期後半に位置づけられる。また、土坑(SK3)からは銅鐸(小銅鐸)の舌が埋納された状態で出土しており、小銅鐸の鋳型が使用されたかどうかは別にして、この地で銅鐸(小銅鐸)が使用されていたことが裏付けられる資料として貴重である。

また、竪穴住居跡(SH2・3)からは多数の石器が出土しており、そのあり方が注目される。

第4章 平方遺跡—古墳時代—

第1節 遺構

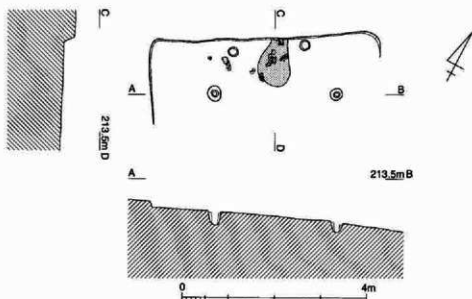
古墳時代の集落に関連する遺構は竪穴住居跡4棟と掘立柱建物跡1棟、土坑2基などがあげられる。遺構としては竪穴群との関係で捉えた方が良いものも存在するが、竪あるいは竪に付随する溝と古墳を除いた他の古墳時代の遺構をここで扱う事とする。

1. 竪穴住居跡

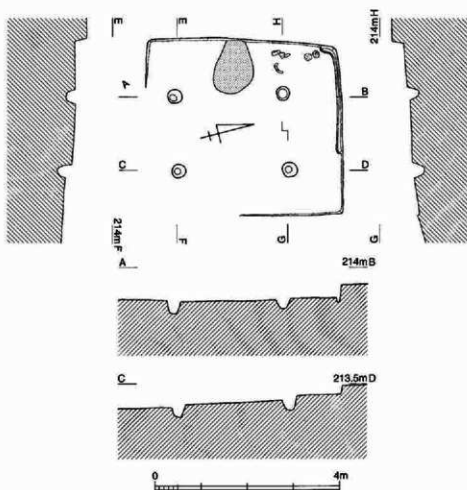
(1) SH 9 (第45図)

弥生時代の方形住居状遺構SH 8の南方20mの所に位置し、平坦面から斜面への変換地に立地している。放牧場による削平と斜面に立地しているため、住居跡の半分以上が残っていない。南北方向は2.0mしか残っていないが、北壁の一边が4.8mの方形の住居跡と推定できる。床面の標高は212.8mを測り、壁の高さは最高0.32mを測る。周壁溝は存在しない。北壁中央部にカマドが存在する。カマドは0.70m×1.08mの範囲に暗褐色・赤色に焼けた粘土を含む焼土が残っている。カマドの中軸線はN-27°-Wを示す。主柱穴は2本確認でき、柱掘形は直径0.32mで、柱痕跡は直径0.20mを測る。深さは0.20m~0.22mである。北壁際のカマドの両脇には直径0.20mの支柱穴が存在する。深さは0.13mである。

遺物はカマド周辺から出土しており、須恵器坏・坏蓋、土師器甕がある。



第45図 竪穴住居跡SH 9



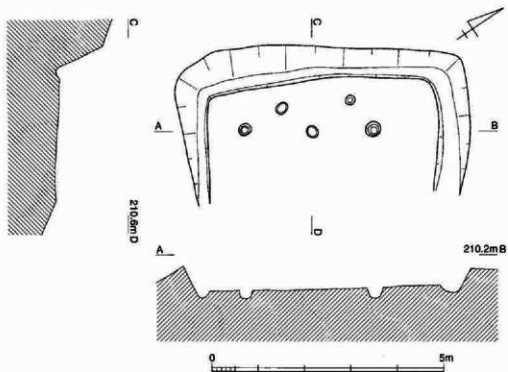
第46図 竪穴住居跡SH10

(2)SH10(第46図)

SH9の西方5mの所に位置し、平坦面から斜面への変換地に立地している。放牧場による削平と斜面に立地している為、住居跡の一部は残っていない。平面形は南北方向4.2m、東西方向3.6mの方形の住居跡である。床面の標高は213.4m～213.2mを測り、壁の高さは最高0.31mを測る。周壁溝は北壁の西半分に存在する。幅0.10m、深さ0.05mである。西壁中央部にカマドが存在する。カマドは0.88m×1.18mの範囲に暗褐色・赤色に焼けた粘土を含む焼土が残っている。カマドの中軸線はN-72°-Wを示す。支柱穴は4本確認でき、柱掘形は直径0.30mで、柱痕跡は直径0.20mを測る。深さは0.16m～0.20mである。

遺物はカマドおよびカマドの北側のコーナー付近の床面からまともに出て土している。

出土遺物は須恵器坏・坏蓋、土師器甕がある。



第47図 竪穴住居跡SH11

(3)SH11(第47図)

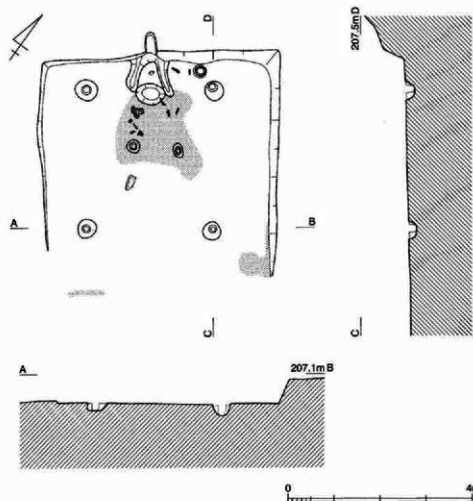
SH10の南方25mの所に位置し、斜面に立地している。放牧場による削平と斜面に立地している為、住居跡の半分以上は残っていない。東西方向は3.6mしか残っていないが、西壁の一边が6.2mの方形の住居跡と推定できる。床面の標高は209.5mを測り、壁の高さは最高0.80mを測る。周壁溝は幅0.30m、深さ0.11mである。カマドは存在しないが、北壁付近に炭片が散らばり、遺物も集中していたためカマドは北壁に存在した可能性が高い。西壁に直交するラインはN-60°-Wを示す。主柱穴は2本確認でき、柱掘形は直径0.30m・0.34mで、柱痕跡は直径0.20mを測る。深さは0.18m・0.15mである。他に支柱穴が3本存在している。

出土遺物は須恵器坏・坏蓋、土師器甕があり、北壁周辺から出土している。

(4)SH12(第48図)

SH9の東方18mの3号窓付随テラスの一角に位置し、斜面に立地している。斜面に立地している為、住居跡の一部は残っていない。平面形は東西方向5.2m、南北方向5.0mの方形の住居跡である。床面の標高は206.5mを測り、壁の高さは最高0.8mを測る。周壁溝は存在しない。

西壁中央部にカマドが存在する。カマドは1.0m×0.9mの範囲に暗褐色・赤色に焼けた粘土

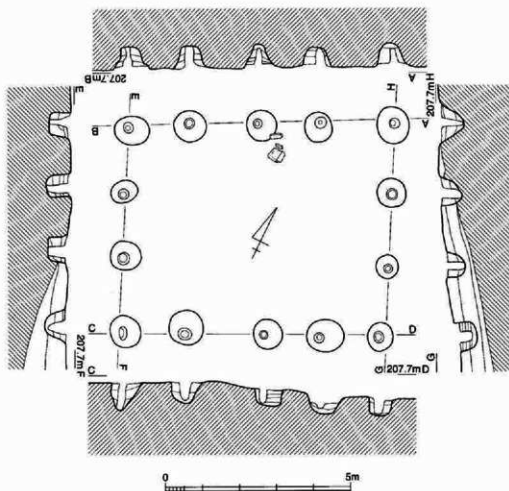


第48図 竪穴住居跡 S H12

を含む焼土が残っている。カマドの壁面から外方へ直交する煙道が取り付け。長さ0.45m、幅0.25mを測る。カマドの前庭部は0.7m×0.4m、深さ0.2mの窪みが存在する。カマドの中軸線はN-34°-Wを示す。主柱穴は4本確認でき、柱掘形は直径0.4m前後で、柱痕跡は直径0.25m前後を測る。深さは0.3m～0.25mである。床面には多量の炭化材が存在した。

住居跡の北西外側には溝が併設されている。この溝はS B 2に併設されている溝と同一である。

出土遺物は須恵器杯・坏蓋、土師器甕があり、北壁周辺から出土している。



第49図 掘立柱建物跡 SB 2

2. 掘立柱建物跡

(1) SB 2 (第49・60図)

SB 2はSH12の北東に接して構築されている。もともとは傾斜のきつい、南東向き斜面であったが、山側を大きく切土して、谷側に盛土している。山側の最大掘削深度は0.8m、谷側の最大盛土深度は1.3mを測る。桁行4間(7.0m)、梁行3間(5.6m)の規模をもつ。桁行の柱間は2.0m～1.6m、梁行の柱間は1.9m～1.7mを測る。桁方向はN-27°-Wを示す。柱掘形は直径1.0m～0.6mの円形で、平均0.8mを測る。断面形は箱形のものが多いがV字形をなすものもある。深さは0.7m～0.5mで、平均0.6mを測る。柱痕跡は直径0.3m～0.25mであり、一部柱痕が掘形より沈んでいるものもある。埋土は基盤層を掘削した土で丁寧に埋められている。山側中央柱の外側には斜面にかけて焼土の広がりが見られ、カマドが設置されていたもの

と考えられる。床面はほぼ水平であったと考えられるが、検出時に東方は下げ過ぎた為調査後は傾斜を成している。床面の標高は207.6mを測る。カマド前面の床面には作業台と考えられる平坦な石が3個置かれていた。

建物跡の北西部の山側には幅0.3m、深さ0.1m程度の溝が設置されており、南西側はSH12と共有している。

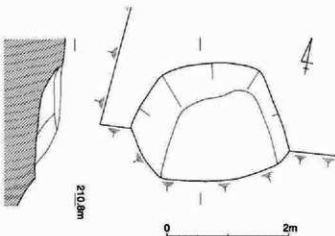
遺物は須恵器坏蓋・壺・碗・甕がカマド周辺から出土している。

3. 土坑

(1)SK 5 (第50図)

SK 5は調査区南端の南東向き斜面に位置する土坑である。南側は調査前に既に削平されており、当時の規模は不明である。長辺2.6m、短辺1.8m以上、深さ0.4mを測る。埋土は礫混じりであり、性格は不明である。

遺物は須恵器坏身・坏蓋・壺が出土している。

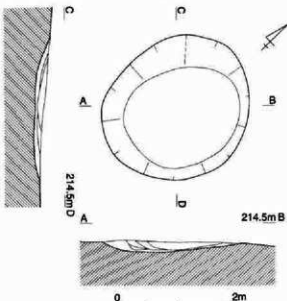


第50図 土坑SK 5

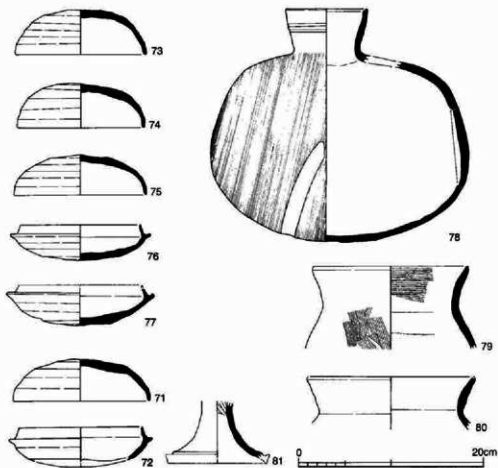
(2)SK 6 (第51図)

SK 6は2号窯の焼成部の煙道部寄りの北方1mに位置している。形態は平面は円形、断面は浅い皿状を呈している。削平が著しいが、検出面での規模は長径2.8m、短径2.5m、深さ0.2mを測る。埋土はレンズ状の堆積を呈し、その中には、遺物と共に炭片や焼土粒が含まれていた。遺構の位置や埋土の状況から窯に関連する土坑の可能性が高い。

遺物は須恵器坏身・坏蓋・甕が出土している。焼成不良の物が多い。



第51図 土坑SK 6



第52図 壺穴住居跡SH9・10・11出土土器

第2節 遺物

古墳時代の集落関係から出土した遺物は須恵器と土師器の土器類のみである。

1. 土器

(1)SH9(第52図)

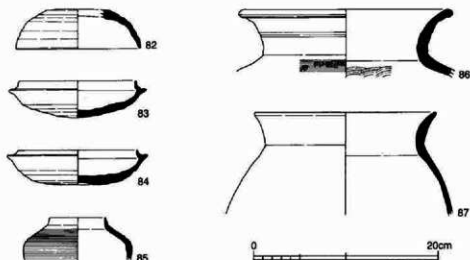
SH9からは須恵器坏・坏蓋が出土している。

須恵器坏蓋(71)は口径14.55cm、高さ4.5cmを測る。天井部外面には回転ヘラケズリを施す。
 須恵器坏身(72)は口径13.0cmを測る。立ち上がりは内傾し、1.2cmを測る。端部は丸くおさめる。
 底部外面には回転ヘラケズリを施す。

(2)SH10(第52図)

SH10からは須恵器坏・坏蓋・横板、土師器甕が出土している。

須恵器坏蓋(73~75)は口径13.5cm~14.05cm、高さ4.3cm~4.8cmを測る。天井部外面には回



第53図 竪穴住居跡SH12出土土器

転ヘラケズリを施す。須恵器坏身(76・77)は口径12.9cm、高さ3.8cm～4.0cmを測る。立ち上がりは内傾し、1.0cmを測る。端部は丸くおさめる。底部外面には回転ヘラケズリを施す。須恵器横瓶(78)は口径8.65cm、体部径20cmを測る。口縁端部は内傾して段をもつ。体部外面にはカキメを施し、内面はナデ調整である。

土師器甕(79・80)は口径16.6cm～18.0cmの中型甕である。

(3)SH11(第52図)

SH11からは須恵器高坏(81)が出土している。脚部の破片である。透かしはない。

(4)SH12(第53図)

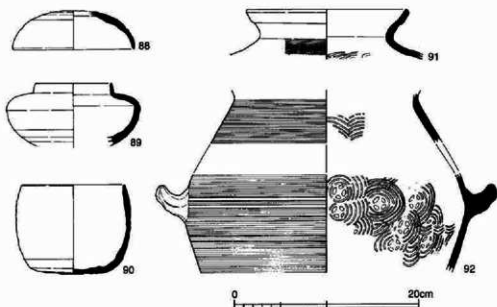
SH12からは須恵器坏・坏蓋・壺・甕、土師器甕が出土している。

須恵器坏蓋(82)は口径13.4cm、高さ4.2cmを測る。天井部外面には回転ヘラケズリを施す。須恵器坏身(83・84)は口径12.6cm～12.8cm、高さ3.7cm～3.9cmを測る。底部外面には回転ヘラケズリを2/3程度施す。須恵器壺(85)は有蓋短頸壺である。口頸部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。肩の張りが顕著で、肩部と体部との境に2条の沈線を巡らす。肩部と体部はカキメを施している。須恵器甕(86)は口径22.2cmの中型品であり、緩やかに外反する短い口頸部が付く。口縁端部は折り曲げて丸くおさめる。頸部中央に1条の沈線を巡らしている。体部外面には平行タタキの後にカキメを施す。内面には同心円タタキ調整を行う。

土師器甕(87)は長胴形の体部に外反する口縁部が付く形態である。口径は19.4cmを測る。調整は磨滅のため不明である。

(5)SB2(第54図)

SB2からは須恵器坏蓋・壺・甕・甕が出土している。



第54図 須立柱遺跡SB2出土土器

坏蓋(88)は天井部から口縁部までゆるやかにカーブする丸みをもつ形態で、口縁端部は丸く仕上げられており、段をもたない。口径は13.0cmを測り、器高は4.05cmを測る。天井部は回転ヘラケズリをおこなっている。壺(89)は有蓋短頸壺で、直立した口頸部に肩の張った体部が接続する。底部は回転ヘラケズリを行っている。椀(90)は底部から口縁部までやや内湾しながら直立する深めの椀で、底部は回転ヘラケズリを行っている。壺は口縁部の破片(91)と体部の破片(92)とがある。91は口縁部外面が肥厚し段をつくる。胴部は外面はタタキの後カキメを施しており、内面は同心円アテ具の痕跡を残す。92は把手付の壺で、推定1対の把手が付けられている。胴部外面はカキメを施し、最大径部に沈線を巡らし把手を付けている。内面は車輪文の同心円アテ具の痕跡が残っている。

(6)SK 5 (第55図)

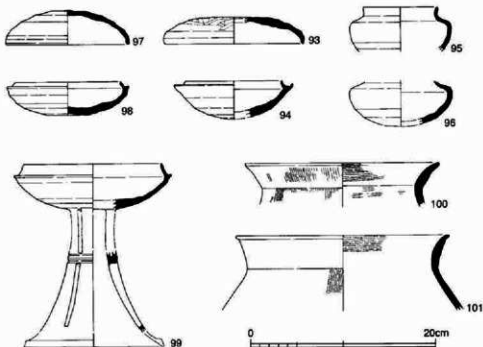
SK 5からは須恵器坏・坏蓋・壺が出土している。

須恵器坏蓋(93)は扁平な天井部からやや内湾した口縁部をもつ形態で、天井部は手持ちヘラケズリで仕上げている。須恵器坏(94)は口径10.3cmを測り、小振りりで深めである。底部は回転ヘラケズリを行っている。須恵器壺(95・96)は有蓋短頸壺で、直立した口頸部にやや肩の張った体部が接続する。底部は回転ヘラケズリを施す。

(7)SK 6 (第55図)

SK 6からは須恵器坏・坏蓋が出土している。

須恵器坏(98)は短い立ち上がり方が内傾し、受部も短い。口径は13.0cmを測り小振りである。



第55図 土坑SK5・6、SH2上層出土土器

底部は回転ヘラケズリを行っている。須恵器坏蓋(97)は天井部から口縁部までゆるやかにカーブする丸みをもつ形態で、口縁端部は丸く仕上げられており、段をもたない。口径は11.3cmを測り、器高は3.55cmを測る。天井部は回転ヘラケズリを行っている。

(8)SH2上層(第55図)

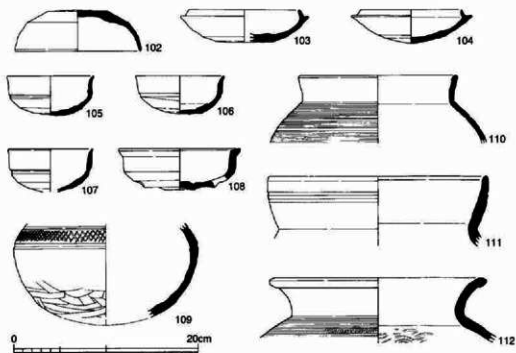
SH2の上層からは須恵器高坏、土師器甕が出土している。

須恵器高坏(99)は口径14.8cmを測る有蓋高坏である。長脚2段透かしが付く。透かしは長方形の3方透かしであり、面取りはしていない。上段と下段の境には2条の沈線が巡る。土師器甕(100・101)は口縁部の破片である。口縁部は外反しており、体部は長刷形の形態を成すものと考えられる。外面はタテ方向のハケメ、口縁部内面はヨコ方向のハケメを施す。

(9)包含層(第56図)

包含層からは須恵器坏身・坏蓋・碗・壺・甕・焼台、土師器甕などが出土している。そのうち主なものを図示した。

須恵器坏身(103・104)は口径10.8、11.8cmを測る。底部は回転ヘラケズリを施す。須恵器坏蓋(102)は口径13.5cm、高さ4.4cmと大振りである。天井部はヘラ切未調整である。須恵器碗(105-107)は口縁が直立し、底部との境に沈線を巡らす。口径は9.0-9.4cmであり、底部は丁寧な



第56図 包含層出土土器

回転ヘラケズリを施している。須恵器焼台(108)は碗形の焼台で、底部から直立する体部に続き、口縁端部は外方に屈曲する。底部脇には2個の円孔が穿たれている。底部はヘラキリ未調整である。須恵器壺は、長頸のもの(109)と短頸のもの(110)とがある。109は体部の破片で、丸く張った最大径部に2条の沈線を巡らし、その間をヘラ掻きの斜格子文で埋めている。底部は手持ちヘラケズリの調整が施されている。110は直立した短い口頸部をもち、肩部に続く。肩部はカキメ調整が施されている。須恵器甕は、口縁部が直立気味のもの(111)口縁部が大きく外反するもの(112)とがある。111は口縁部が内湾気味に直立し、丸くおさめる。頸部には2条の沈線が巡る。112は口縁部が大きく外反し、口縁部を下方に拡張させる。体部はタタキの後カキメを施す。

第3節 小結

古墳時代の遺構で、古墳や須恵器窯に関係するもの以外のものは竪穴住居跡4軒、掘立柱建物跡1棟、土坑2を調査した。いずれも須恵器窯の近くに位置しており、通常の住居跡では出土しない提瓶が出土したり、焼成不十分な須恵器が出土している。

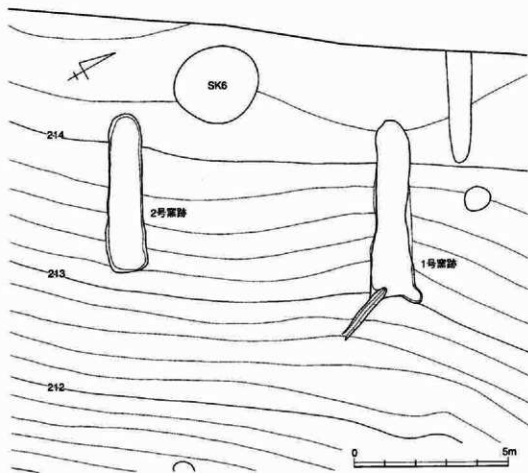
以上のことからこれらの古墳時代の遺構は須恵器窯との関係が深いものといえる。このことは出土遺物の時期が、須恵器窯出土のものと同時期であることから窺い知れる。

第5章 平方窯跡群

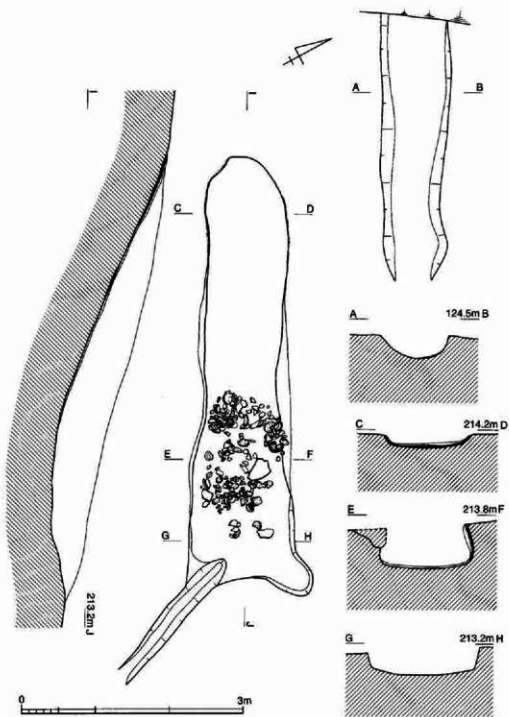
第1節 遺構

平方窯跡群は発掘調査地内で3基を確認し、調査を実施した。平方窯跡群は分布調査によって存在が知られていた。実際、調査によって確認されたのは第2次確認調査の際である。命名は確認調査及び全面調査で発見した順に行った。

1号・2号窯は竪穴住居跡SH10と平方1号墳との間に位置しており、3号窯は竪穴住居跡SH12・掘立柱建物跡SB2の南西に位置している。1号・2号は牧場造成の為に大きく削平されており、窯体の一部が残っているのみで灰原は残っていなかった。3号窯の残りは良い。



第57図 平方1・2号窯跡



第58回 平方1号遺跡

1. 平方1号窯跡(第58図)

(1)位置と立地

調査地の西隅、平方1号墳の北東20mに位置し、南東向き斜面から丘陵平坦地に変換する場所に立地している。標高は212.6m～214.2mを測り、谷底からの比高差は約20mある。また、北東5mには堅穴住居跡SH10がある。

(2)窯の構造

窯体は牧場の造成のために削平されており、遺存状態は良くない。削平されているためはつきりしないが、基盤層を掘り抜いて構築された半地下式無階無段の登窯である。窯体は焚口・燃烧部から焼成部にかけて残存しており、焼成部上半以上は削平されている。また燃烧部から続く排水溝、焼成部の北側に付随する排水溝が遺存していた。窯体の主軸方位は、N-61°-W、主軸ラインでの現存長3.8mを測る。窯跡全体長5.6mを測る。窯体幅は焼成部最大幅1.1m、焚口開口部幅1.0mを測る。窯体高は焼成部で0.7mを測る。床面積は現況で3.8㎡を測る。床面の傾斜は焼成部平均傾斜角は21°、焼成部最大傾斜角は25°を測る。また焚口傾斜角は5°を測る。煙出しは削平のため残っていない。焼成部の北側には窯から1.2m離れて溝が平行して走る。幅0.9m、深さ0.3mを測る。埋土は焼土粒が混じる土で埋まっていた。

窯床は粘土を貼っておらず、焚口から焼成部下半と煙出し部は基盤層が還元し、青変している。窯壁は焚口から焼成部にかけて粘土を貼り、壁としている。赤色酸化層と青色還元層が認められる。3基存在する中で最も良く焼けている。

窯体内の埋土の堆積状況は、上方から天井部の赤色酸化粘土と青色還元粘土のブロックが流れて、燃烧部から焼成部下方に堆積した状況が観察できた。上層は自然の堆積による基盤層に近い土が堆積している。

削平のため前庭部の存在は不明であり、明確な灰原は存在しない。

(3)排水溝

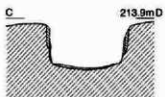
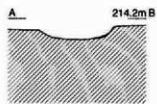
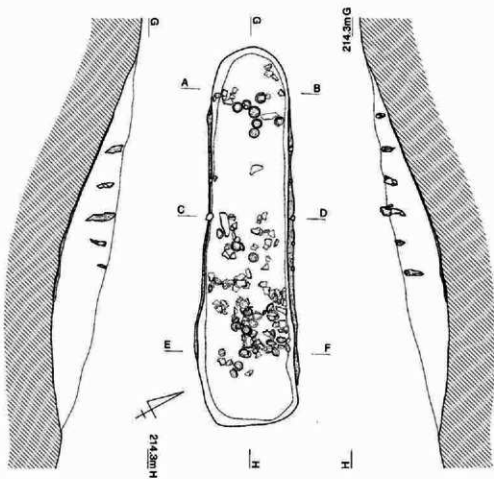
燃烧部から取りつく排水溝は左燃烧部隅から主軸に対して41°開いて真っ直ぐ延びる。長さ2.1m、幅0.3m、深さ最大0.2mを測る。

(4)遺物の出土状況

窯体内の遺物の出土状況は焚口周辺の床面に近い部分に集中していたが、焼成状況を示すものは存在しない。焼台は拳大の石を利用しているものと、壺の体部の破片を利用しているものがある。

(5)出土遺物

1号窯からは須恵器壺・壺・甕・提瓶が出土している。焼成は概して良好なものが多い。



第59图 平方2号家跡

2. 平方2号窯跡(第59図)

(1)位置と立地

1号窯跡の南西7mの所に並列して位置している。南西約10mには平方1号墳がある。立地は1号窯跡とまったく同じである。

(2)窯の構造

窯体は牧場の造成のために削平されており、遺存状態は良くない。窯体は燃焼部から焼成部にかけて残存していた。窯体の主軸方位は、N-62°-W、主軸ラインでの現存長3.3mを測る。窯跡全体長4.9mを測る。窯体幅は焼成部最大幅1.0m、焚口開口部幅1.1mを測る。窯体高は焼成部で0.6mを測る。床面積は現況で3.1㎡を測る。床面の傾斜は焼成部平均傾斜角は20°、焼成部最大傾斜角は23°を測る。また焚口傾斜角は8°を測る。煙出しは削平のため残っていない。

窯床は粘土を貼っており、焚口から焼成部にかけて主として赤色酸化層が存在している。窯壁は焚口から焼成部にかけて粘土を貼り、壁としており、赤色酸化層が認められる。焼成部の窯壁の基盤層と貼り壁の粘土層との間には上層構造の構築材と考えられる炭化材が右側で5本、左側で6本確認できた。炭化材は垂直に設置されており、間隔も0.3m~0.4mと左右が対になるように設置されている。材は広葉樹の低木が利用されており、直径0.1m~0.05mのもので下方に基部が上方に先端がくるように設置している。基部は斧などによる切りっぱなしの状況が見られた。

窯体内の埋土の堆積状況は、上方から天井部の赤色酸化粘土と青色還元粘土のブロックが流れて、燃焼部から焼成部下方に堆積した状況が観察できた。上層は自然の堆積による基盤層に近い土が堆積している。

削平のため前庭部の存在は不明であり、明確な灰原は存在しない。

(3)遺物の出土状況

遺物の多くは焚口から焼成部下半の床面に集中して出土した。そのほとんどが還元していない焼成不十分のものであった。しかも破片や歪みのある不良品がほとんどであった。ただ焼成部上方において窯詰め状態と思われる様相を示す場所が存在した。ここでは焼け歪んだ甕を一部焼き台として利用し、坏身・坏蓋を重ね合わせて設置した状況が伺い知れた。ただ調査においては生焼けで脆く、しかも内側が空洞であったため潰れたものが多い。

(4)出土遺物

2号窯からは須恵器蓋坏・壺・甕・横瓶が出土している。2号窯は概して焼成不十分の須恵器が多い。

3. 平方3号窯跡(第60・61図)

(1)位置と立地

1号窯跡の東方30mに位置している。谷部の南東向き斜面の中腹に立地している。窯体は牧場造成の盛土で埋められていたため1号・2号に比べて遺存状態は良い。

(2)窯の構造

窯体は基盤層を掘抜いて構築された地下式無階無段の登窯である。窯体は前庭部から焼成部端にかけて残存している。また煙道部から続く焼成部の南側に付随する溝が遺存していた。窯体の主軸方位は、N-36°-Wを示す。窯跡全体長9.1mを測り、窯体内全長は6.3mを測る。窯体幅は焼成部最大幅1.35m、焚口開口部幅1.3m、奥壁付近幅0.7mを測る。窯体高は奥壁で0.7m、焼成部で1.1m、焚口で1.4mを測る。床面積は6.3㎡を測る。床面の傾斜は焼成部平均傾斜角は28°、焼成部最大傾斜角は35°を測る。また焚口傾斜角は20°を測る。煙出し部の上部に直径1.0mの土坑を設け、そこから左手に溝が窯から1.0m-1.7m離れて平行して走り、窯尻まで延びている。全長9.7mで、幅は煙道部脇では0.5mを測り、焼成部横では0.4mを測る。深さは0.15m-0.4mを測り、断面形はU字状を呈する。

窯床は粘土を貼っておらず、焚口から焼成部下半と煙出し部に基盤層の赤変したところが存在するが、焼成部の上半は赤変していない。窯壁は焚口から焼成部下半で粘土を貼り、壁としている。

窯体内の埋土の堆積状況は、上方から焼土が流れて燃焼部から焼成部下方に堆積した状況が観察できた。これは焼成部の窯床や窯壁に赤変した痕跡が残っていないことに対応するものであろう。上層は自然の堆積による基盤層に近い土が堆積している。焚口の下層には還元した粘土粒の堆積がみられた。窯体内を掘り抜いた残土は窯の前方に盛土し、前庭部としている。

(3)前庭部

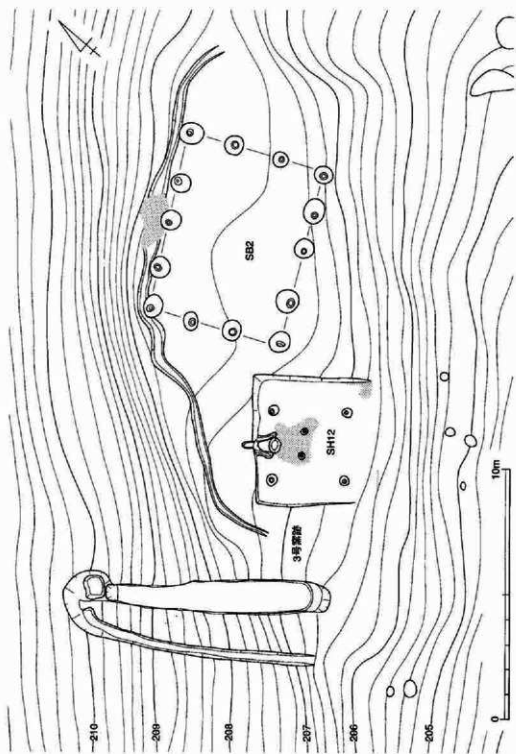
焚口の前面に存在し、3号窯跡のテラスに続いている。窯の主軸方向の長さは約3mを測る。直交する方向は南西部が排水溝まで、北東部がテラスに続いている。この前庭部は旧表土上に基盤層を掘削した土で盛土している。盛土の中からは遺物は出土していない。明確な灰原は存在しない。ただし前庭部およびSB2やSH12が位置するテラスの下方には須恵器坏身・坏蓋の完形に近いものが数点出土した。

(4)遺物の出土状況

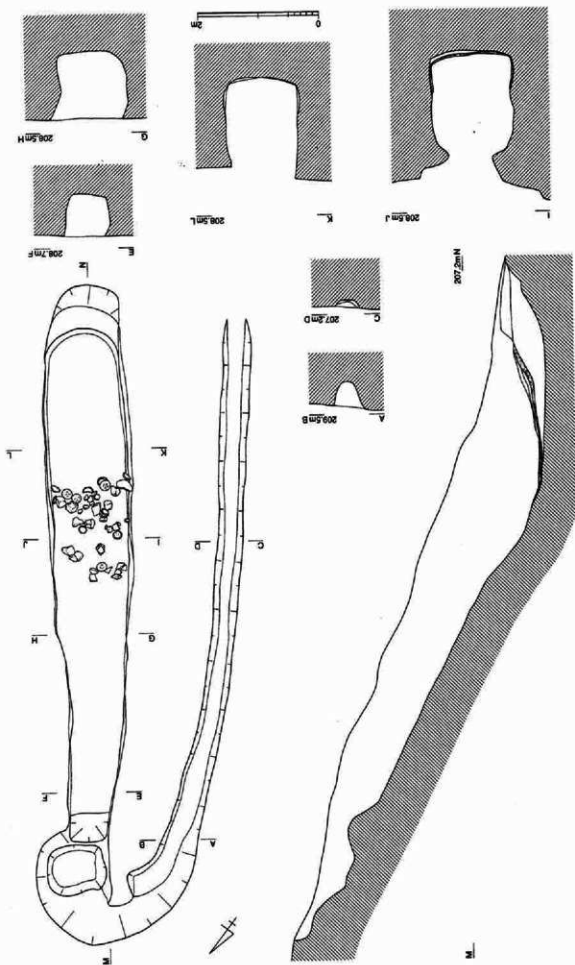
窯体内の遺物の出土状況は焚口周辺の床面に近い部分に集中していたが、焼成状況を示すものは存在しない。焼台は拳大の石を利用しているものと、甕の体部の破片を利用しているものがある。

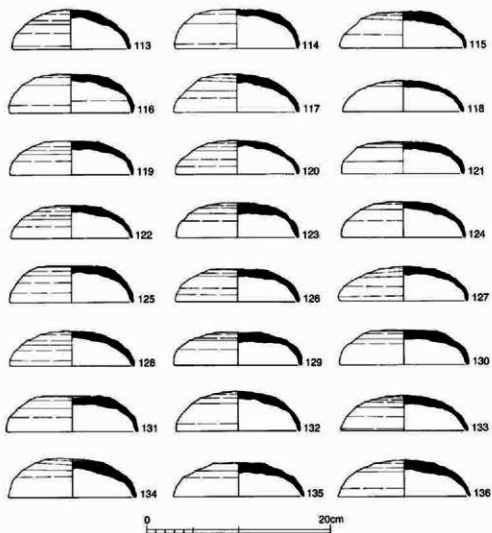
(5)出土遺物

3号窯からは須恵器蓋坏・高坏・壺・甕が出土している。遺物量は非常に少ない。



第60圖 平方3号窟・壑穴住居跡SH12・獨立柱建物跡SB2位置圖





第62図 平方1号窟出土土器(1)

第2節 遺物

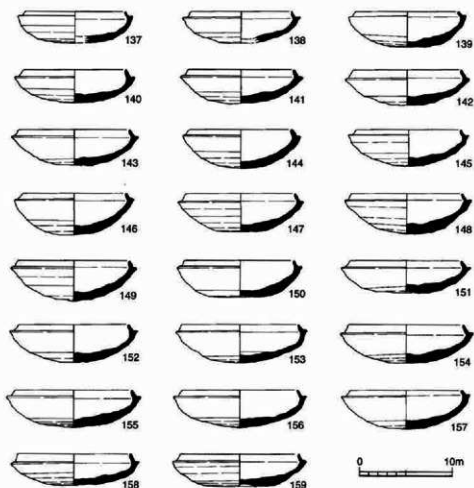
平方窟群出土の須恵器は、1・2号窟跡は灰原等が残っていない為、すべて窟体内から出土した。3号窟はわずかに灰原から出土したが、多くは窟体内からである。

1. 1号窟

1号窟からは須恵器蓋坏・壺・壺蓋・大型高坏・提板・甕が出土している。

坏蓋(第62図)

坏蓋(113~136)はいずれも天井部外面の調整は右回転のヘラケズリを施している。天井部内面は仕上げナデを施していない。口径は12.7cm~14.1cmで平均13.3cm、器高3.3cm~4.2cmで



第63図 平方1号竪出土土器(2)

平均3.8cmの範囲に分布する。形態から4種類に分類できる。

113～117は天井部が厚く、口縁部は薄く作っている。口縁端部はやや内湾している。口径が小さく器高が高い。口径は12.7cm～13.3cmで平均13.0cm、器高4.1cm前後の範囲に分布する。118～131は口縁端部は直立気味で、端部は丸く納めている。口径は13.0cm～13.7cmで平均13.3cm、器高3.3cm～4.1cmで平均3.6cmの範囲に分布する。133・134は口縁部が大きく外方へ開いており、口径は13.6cm～13.7cm、器高3.8cm～4.2cmを測る。135・136は口縁部が大きく外方へ開いており、口径が大きく器高が低い。口径は14.1cm、器高3.6cm～3.7cmを測る。

坏身(第62図)

坏身(137～159)はいずれも底部外面の調整は右回転のヘラケズリを施している。受部、立ち上がりともに短い。底部内面は仕上げナデを施していない。口径は10.9cm～12.7cmで平均

11.8cm、器高3.3cm～4.5cmで平均3.9cmの範囲に分布する。形態から7種類に分類できる。

137は底部が丸く、回転ヘラケズリの範囲が広い。口径は10.9cm、器高3.3cmを測る。138は立ち上がりは上方へ短く立ち上がる。口径は11.0cm、器高3.3cmを測る。139は底部が丸く短い。立ち上がりは内湾している。口径は11.4cm、器高3.8cmを測る。140～143は器高が低く、浅めである。口径は11.0cm～11.8cmで平均11.5cm、器高3.5cm～3.8cmで平均3.7cmの範囲に分布する。144～149はやや深めで、底部は丸く仕上げられている。口径は11.2cm～12.0cmで平均11.7cm、器高3.9cm～4.5cmで平均4.2cmの範囲に分布する。150～157は浅めで扁平に仕上げられている。口径は11.9cm～12.5cmで平均12.3cm、器高3.4cm～4.1cmで平均4.0cmの範囲に分布する。158・159は浅めで、立ち上がりが直立気味である。口径は12.2cm・12.7cm、器高3.4cmを測る。

壺蓋(第64図)

壺蓋(160・161)は小型のもの(160)と大型のもの(161)の2種が存在する。160は口径8.1cm、器高3.9cmを測る。口縁端部は丸く納めており、天井部はヘラケズリを行っている。161は口径13.5cm、器高3.1cmを測る。口縁部は外反し、天井部は扁平である。天井部はカキメを施している。

壺(第64図)

壺(162・163)は有蓋短頸壺である。短く直立する口頸部に体部が付く。162は最大径が体部上半にあり肩が張る。163は最大径が体部中央にあり、球形を成す。体部下半は厚みを増している。

高坏壺(第64図)

高坏壺(164・165)は天井部から口縁部まで緩やかにカーブする丸みをもつ形態で、天井部はヘラケズリの後、中央に扁平なつまみが付く。164は口縁部が直立気味である。165は口縁部が外方に開く。

大型高坏(第64図)

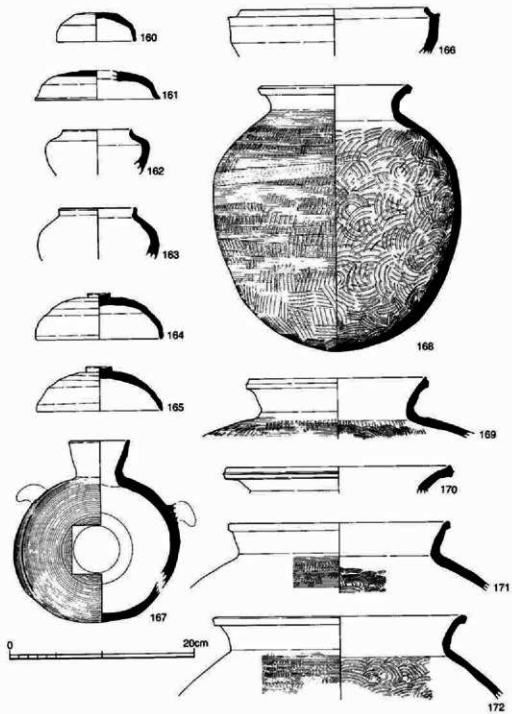
大型高坏(166)は口縁部の破片のため本来脚が存在していたか、脚が存在せずに単なる大型の坏であったかは不明である。口径20.2cmを測る。立ち上がりは内傾し、短く、端部は丸く納める。受部は短い。体部の器厚は約1cmと厚い。

提瓶(第64図)

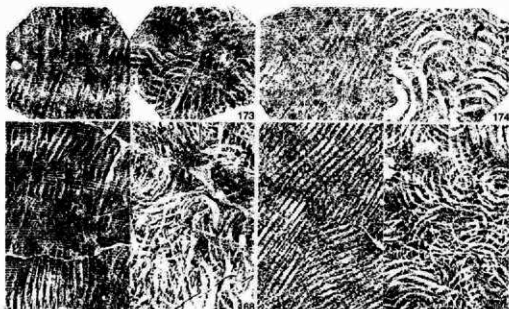
提瓶(167)は口頸部がほぼ直線的に外方へ開く。体部前面は丸みをもち、高い。背面はやや扁平である。肩部には、1対の鍵状の把手が付いていた痕跡が残る。体部は全体にカキメを施している。

甕(第64図)

甕(168～172)は、小型のもの(168)と中型のもの(169～172)の2種類が存在する。いずれも口頸部が短いタイプの甕である。



第64图 平方1号窟出土土器(3)



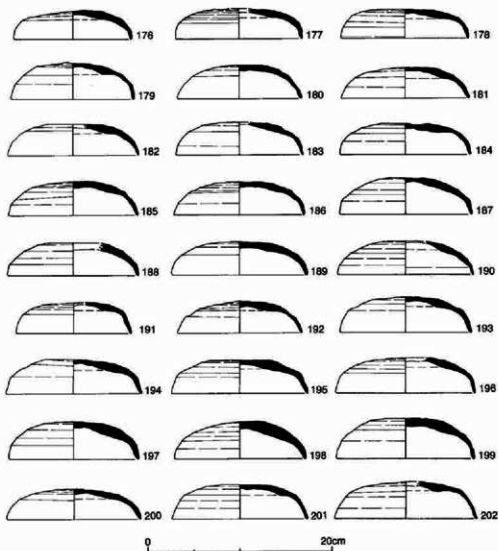
第65図 平方1号窟出土土器(4)

小型の甕(168)は完形で口径15.1cm、器高28.4cmを測る。口頸部は短く外反して、端部を下方に肥厚させる。体部は球形を呈しており、外面は格子風タタキの後、体部下半 $1/3$ を除き部分的にカキメを施している。内面は同心円の当て具の痕跡を残す。

中型の甕は口径19.2cm~26.3cmを測る。口頸部は外反し、球形の体部が付く。169・170は口縁端部中央部を突出させており、171・172は口縁端部を下方に拡張させている。体部は外面に格子風タタキの後部分的にカキメを施している。内面は同心円の当て具の痕跡を残す。

タタキ(第65図)

1号窟から出土した甕や瓶類のタタキの種類は外面が格子風タタキのもののみである。173・174・168は部分的にタタキをカキメですり消している。内面は例外なく同心円タタキの痕跡を残す。同心円の大きさと刻みの深さは各種存在する。



第66図 平方2号窟出土土器(1)

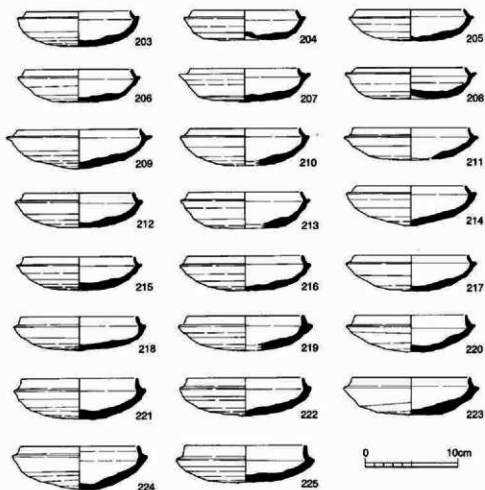
2. 2号窟

2号窟からは須恵器蓋坏・壺・甕・横瓶が出土している。

坏蓋(第66図)

坏蓋(176~202)はいずれも天井部外面の調整は右回転のヘラケズリを施しており、天井部内面は仕上げナデを施している。口径は12.4cm~15.3cmで平均14.1cm、器高3.1cm~4.3cmで、平均3.6cmの範囲に分布する。形態から5種類に分類できる。

176~178は直立気味の口縁部をもつ。口径は12.8cm~13.7cmで平均13.4cm、器高3.1cm~3.2cm

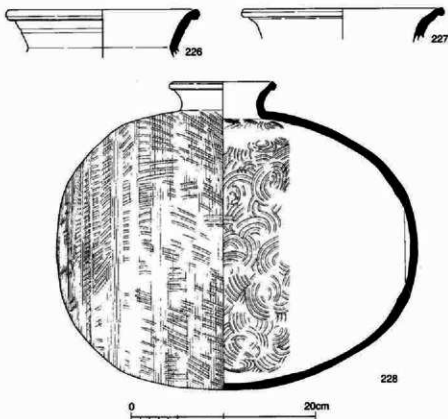


第67図 平方2号窟出土土器(2)

で、平均3.1cmの範囲に分布する。183～187、191～196は天井部と口縁部の境が屈曲している。口径は12.4cm～14.9cmで平均13.9cm、器高3.3cm～3.8cmで、平均3.5cmの範囲に分布する。188は天井部の回転ヘラケズリの範囲が広い。口径は14.0cm、器高3.5cmを測る。197～199は全体的に厚手に作られている。口径は14.0cm～14.8cmで平均14.4cm、器高4.0cm～4.3cmで、平均4.1cmの範囲に分布する。200～202は口径が大きく器高も高い。口径は14.6cm～15.3cmで平均14.8cm、器高3.2cm～3.9cmで平均3.6cmの範囲に分布する。

坏身(第67図)

坏身(203～225)は立ち上がりが内傾しているもの(203～214)と直立しているもの(215～225)とがある。いずれも受部は短い。底部は回転ヘラケズリを行っている。口径は11.3cm～13.3cmで平均12.2cm、器高3.2cm～4.6cmで平均3.8cmの範囲に分布する。形態から4種類に分類できる。



第68図 平方2号窟出土土器(3)

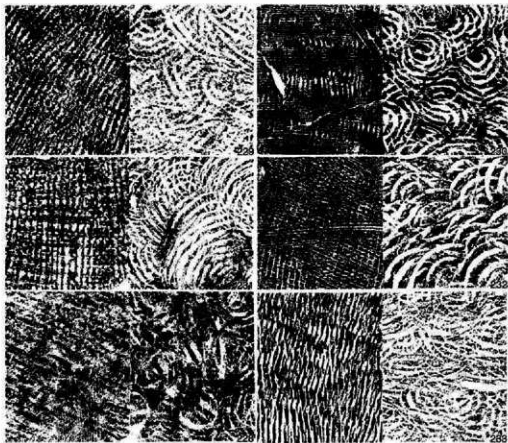
203～206は底部は扁平で器高は低い。口径は11.3cm～11.6cmで平均11.5cm、器高3.2cm～3.8cmで平均3.4cmの範囲に分布する。207～209は比較的受部が長いものである。口径は11.7cm～13.3cmで平均12.3cm、器高3.3cm～4.2cmで平均3.7cmの範囲に分布する。210～214は受部と立ち上がりの境に沈線を巡らす。口径は11.9cm～12.3cmで平均12.1cm、器高3.4cm～4.3cmで平均3.8cmの範囲に分布する。立ち上がりが内傾しているものうち215～219は器高が低く、220～225は器高が高く全体的に厚く作られている。口径は12.0cm～13.0cmで、平均12.4cmを測り、器高は3.5cm～4.6cmで平均3.9cmを測る。

甕(第68図)

甕(226・227)は口頸部の短いタイプの甕である。口頸部は大きく外反し、端部を下方に拡張させ、丸く納める。226は頸部に沈線が1条巡る。

横瓶(第68図)

横瓶(228)は俵形の体部に口頸部を付けている。口径は10.8cmを測り、体部最大径は30.0cmを測る。体部外面は平行タタキ後、部分的にカキメを施している。内面は同心円タタキの痕跡

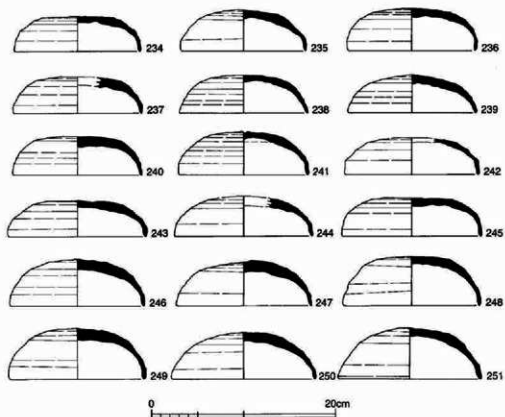


第69図 平方2号窯出土土器(4)

を残す。焼成は不良である。

タタキ(第69図)

2号窯から出土した甕や瓶類のタタキの種類は外面が格子風タタキのもの(229-232・228)と平行タタキのもの(233)がある。出土量は前者の方が多い。格子風のタタキのものはカキメですり消すもの(230・232・228)がある。233は荒く、深い平行タタキである。内面は例外なく同心円タタキの痕跡をのこす。同心円の大きさや刻みの深さは各種存在する。



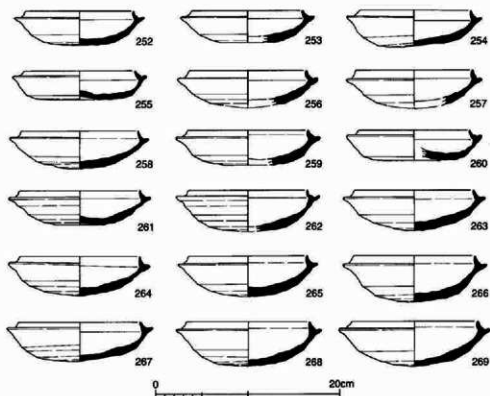
第70図 平方3号窟出土土器(1)

3. 3号窟

3号窟からは須恵器蓋坏・高坏・壺・甕が出土している。

坏蓋(第70図)

坏蓋(234～251)はいずれも天井部外面の調整は右回転のヘラケズリを施しており、天井部内面は仕上げナゲを施している。口径は13.5cm～15.4cmで平均14.3cm、器高3.7cm～5.4cmで平均4.4cmの範囲に分布する。形態から4種類に分類できる。234～237は口縁部が直立気味である。口径は13.5cm～13.8cmで平均13.6cm、器高3.7cm～4.5cmで平均4.1cmの範囲に分布する。238～241は口縁部が外方に開く。口径は13.8cm、器高4.0cm～4.6cmで平均4.2cmの範囲に分布する。242は口縁部が直立しており、全体的に薄く作られている。口径は14.3cm、器高3.9cmを測る。243～245は天井部は扁平で、口縁端部は丸く仕上げている。口径は14.8cm～15.0cmで平均14.8cm、器高3.8cm～4.2cmで平均4.0cmの範囲に分布する。246～251は口径が大きく、器高が高く、天井部は厚く作られている。口径は14.4cm～15.4cmで平均14.8cmを測り、器高は4.8cm～5.4cmで平均5.1cmの範囲に分布する。247は天井部にヘラ記号「×」が刻まれている。



第71図 平方3号窯出土土器(2)

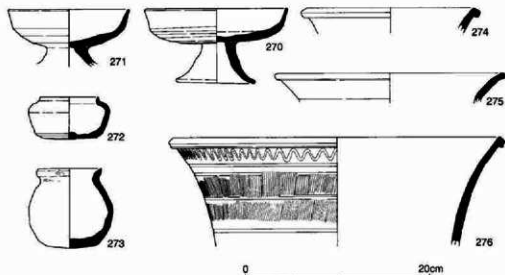
坏身(第71図)

坏身(252~269)は1・2号に比べて口径が大きく、器高が高い。底部の調整は右回転のヘラケズリを施しており、底部内面は仕上げナデを施している。口径は11.7cm~13.6cmで平均12.7cm、器高3.1cm~4.9cmで平均4.0cmの範囲に分布する。形態から4種類に分類できる。

252~255は比較的口径が小さく、底部が扁平に仕上げられている。口径は11.7cm~12.0cmで平均11.9cm、器高3.1cm~3.9cmで平均3.5cmの範囲に分布する。256~259は比較的口径が小さく、底部は丸く仕上げられている。口径は12.6cm~13.0cmで平均12.7cm、器高3.7cm~4.0cmで平均3.8cmの範囲に分布する。260・261は口径に比べて器高が低く、扁平に仕上げられている。口径は12.9cm、器高3.2cm・3.6cmを測る。262~269は口径が大きく、器高が高く、底部は厚く作られている。口縁端部は薄く鋭く仕上げている。口径は12.9cm、器高3.2cm~3.6cmで平均3.4cmを測る。

高坏(第72図)

高坏(270・271)は無蓋の低脚高坏である。270は口径15.2cm、器高8.0cmを測る。坏部は口縁部が直線的に開き、底部は扁平である。脚部は細い基部から大きく外に開き、端部は丸く納



第72図 平方3号窟出土土器(3)

める。坏底部は広い範囲に回転ヘラケズリを行っている。270は内面に同心円当て具の痕跡を残す。

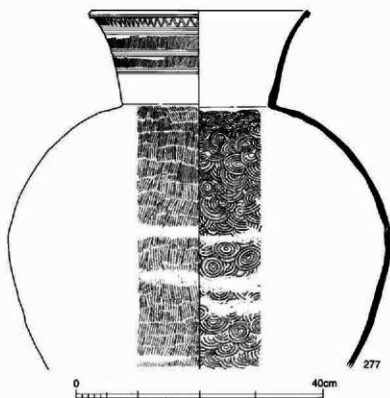
壺(第72図)

壺(272・273)は有蓋短頸壺(272)と無蓋の壺(273)とがある。272は口径6.2cm、器高4.5cmを測る。直立した口頸部に肩の張った体部が付く。底部は平底で、ヘラキリ未調整で周囲に補助ケズリを施す。273は須恵器に一般的に見られない器形である。口径6.8cm、器高8.5cmを測る。短く外反した口頸部に球形の体部が付く。全体にロクロナデの痕跡は残っていない。内面は指の痕跡を残す。

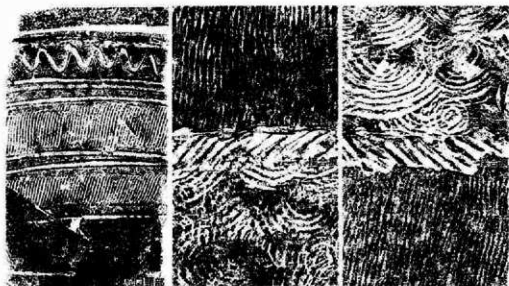
甕(第72～74図)

甕(274～277)は、中型で頸部の短いもの(274・275)と大型で頸部の長いもの(276・277)とがある。前者は口頸部の破片で、外反する短い口頸部の端部を下方に拡張させている。

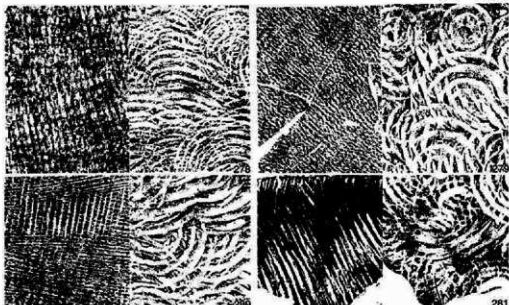
277は3号窟と2号窟の両方で出土し、接合関係のある資料である。3号窟では燃焼部において他の坏類とともに出土しており、固化した大半をしめる。焼き歪みが大きい。2号窟では焼成部の床面から出土しており、焼き歪みや2次の附着などが散見される。このため焼き台として使用されたものと考えられる。したがって本来3号窟で焼かれたものと考えられる。口径35.0cm、現在高49.9cmを測る。口縁部から体部上半にかけての破片である。口頸部は外反して伸び、端部は肥厚させ段を作り丸く納める。体部はやや肩が張る。頸部には波状文と3条の凹線文を巡らし、凹線文の間にはクシによる斜線文を施している。体部外面は平行タタキ、内面は同心円タタキを残す。なお、体部中央の最大径の部分には接合痕が残っている。この接合痕



第73图 平方3号窟出土土器(4)



第74图 平方3号窟出土土器(5)

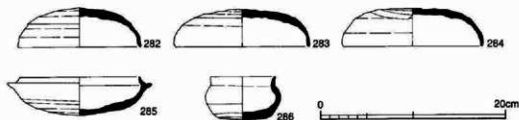


第75図 平方3号窯出土土器(6)

は下部に平行タタキを施し、上部と接合しやすい様に工夫しており、大型甕の成形技法として良好な資料である。

タタキ(第75図)

3号窯から出土した甕や瓶類のタタキの種類は外面が格子風タタキのもの(278-280)と平行タタキのもの(281)がある。出土量は前者の方が多い。格子風のタタキのものはカキメですり滑すもの(280)がある。内面は例外なく同心円タタキの痕跡を残す。同心円の大きさや刻みの深さは各種存在する。



第76図 平方3号窯灰原出土土器

4. 3号窯灰原

3号窯の灰原からは須恵器蓋坏・壺が出土している。遺物量は極めて少量である。

坏蓋(282-284)は天井部から口縁部までゆるやかにカーブする丸みをもつ形態で、口縁端部は丸く仕上げられている。口縁部は282は外方に開き、283・284は直立している。口径は13.2~15.0cm、高さは4.0cm前後を測る。

坏身(285)は立ち上がりは内傾しており口縁端部は薄く鋭く仕上げている。底部は回転ヘラケズリを行っている。口径は12.8cm、高さは4.0cmを測る。

壺(286)は有蓋短頸壺である。短く直立する口頸部に体部が付く。最大径は体部上半にある。口径は7.8cmを測る。

第3節 小結

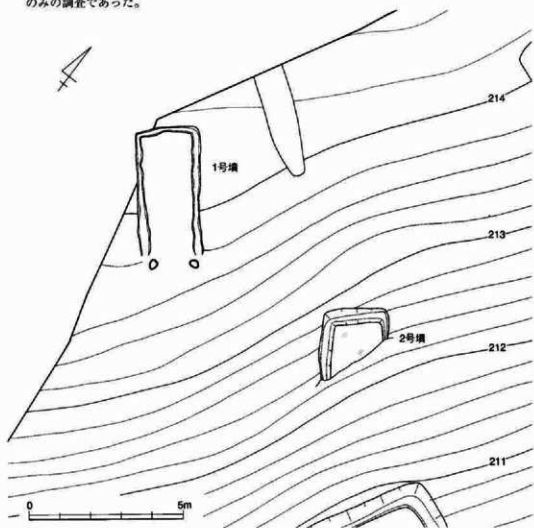
古墳時代の窯跡は調査地内で3基の調査を行った。後で詳細に報告するが、遺物から3号→2号→1号と順に築かれたものと考えられる。3号と2号の遺物の接合、2号と1号の並列状況から考えても追認できる。

構造は地下式(3号)から半地下式(2・1号)へと変化している。3号の窯尻から窯体に平行して走る溝の機能や、2号の半地下式の上部構造から推定できる炭化材の検出など注目できる資料が多い。

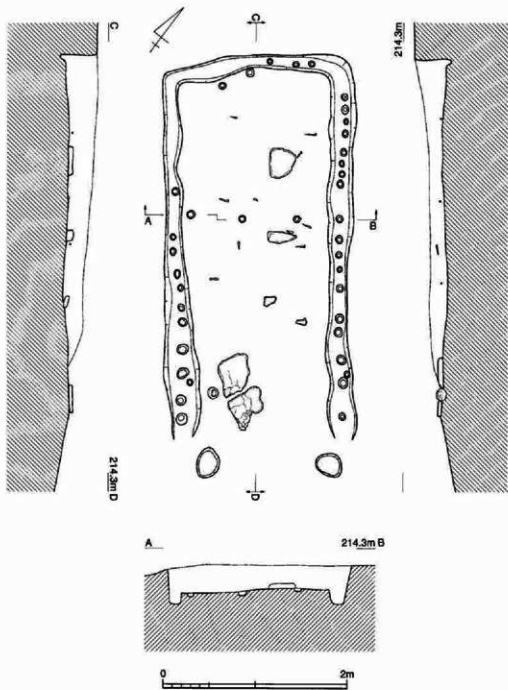
第6章 平方古墳群

平方古墳群は今まで存在が知られていなかった。昭和62年夏の第2次確認調査により新たに発見された。この時確認したものを、第1号墳とし、平成元年の第2次全面調査により発見したものを第2号墳と命名した。周囲は造成により大きく削平されており、旧地形から考えて更に古墳の存在が考えられるが、現状では2基で構成される古墳群とする。すぐ北東方向には平方窯跡群がある。

なお、墳丘の盛土はすべて削平されており1号墳の周溝の一角が存在したのみで、埋葬施設のみの調査であった。



第77図 平方1・2号墳位置図



第78图 平方1号坑

第1節 遺構

1. 平方1号墳(第78図)

(1)古墳の位置

平方1号墳は調査地の西隅に位置し、南東向き斜面から丘陵平坦地に変換する場所に立地している。標高は214m前後を測る。本古墳東8mには2号墳が位置している。また、北東10mには平方2号窟跡があり、南東10mには堅穴住居跡SH11がある。

(2)墳丘

墳丘は削平の為平坦化され、全く墳丘の痕跡を留めていなかった。また、造成工事のため北西方向が大きく削平されていた。北東方向でかろうじて周溝の一部を確認したため、埋葬施設を中心と仮定すると、直径7.5m前後の円墳であることが推定された。周溝は現存長3.5m、最大幅1.0mで、深さ0.1mを測る。断面形は浅いU字状で、埋土は黒色の土壌化した層が堆積していた。

(3)埋葬施設

埋葬施設は削平されているため残りは良くないが、南東方向に開口する横穴式木室であると考えられる。掘形は基盤層を掘り込んでおり、長辺4.1m、短辺2.0m、奥壁2.0mの長方形を呈し、最大深さ0.32mを測る。主軸はN-34°-Wを示す。墓壇の壁際には溝が巡り、底には柱穴の痕跡を残す。溝は幅0.4-0.2m、深さ0.1m前後を測る。柱穴は直径0.1m前後、深さ0.05m前後を測る。開口部には柱穴が2本存在し、玄室と羨道の境界を成す。柱穴は直径0.25m、深さ0.15mを測る。

玄室は奥行き4.0m、幅1.5m、奥壁1.6mを測る。床面の標高は213.85mを測り、床面上には凝灰質砂岩の平坦な石3個と遺物類が出土した。また炭化材も少量出土した。奥壁から1/3の所に3か所の柱穴が確認された。玄門の幅は1.0mを測る。羨道は斜面に立地し、削平されているため不明である。

(4)出土遺物

1号墳に伴う遺物は玄室の床面から出土した須恵器短頸壺1点と鉄釘12本、北周溝内の上層から出土した須恵器輪がある。

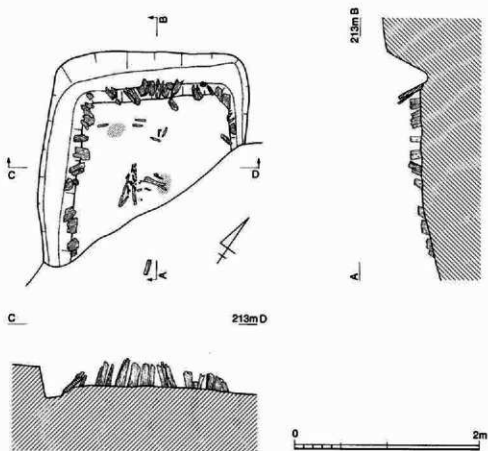
2. 平方2号墳(第79図)

(1)古墳の位置

平方2号墳は1号墳の東方8mに位置し、斜面に立地している。標高は212m前後を測る。

(2)墳丘

1号墳と同様に、放牧地の造成のため大きく削平されており、全く墳丘の痕跡を留めていなかった。このため古墳の規模および墳形については全く不明である。



第79図 平方2号墳

(3)埋葬施設

墳丘と同様に、放牧地の造成のため大きく削平されており、辛うじて埋葬施設の半分程度が確認できただけであった。埋葬施設は南東方向に開口する横穴式木室であると考えられる。掘形は基盤層を掘り込んでおり、長辺2.2m、短辺2.2m、奥壁2.0mのやや刷張りの長方形を呈し、最大深さ0.4mを測る。主軸はN-34°-Wを示す。墓壁の壁際には溝が巡っている。溝は幅0.4m～0.15m、深さ0.16m～0.07mを測る。溝の内側には炭化したスギ材が左12本、奥15本、右3本残されていた。炭化材はいずれも内傾していたが、土圧によるものと考えられる。スギはいずれも0.1m～0.2m程度の材を使用したものと考えられた。

玄室はスギ材で構築されていたものと考えられ、奥行き1.75m以上、最大幅1.60m、奥壁1.44mを測る。床面の標高は212.35mを測り、床面上には炭化した材と焼けた人骨が出土した。

(4)出土遺物

2号墳に伴う遺物は玄室の床面から出土した須恵器甕、鉄釘、人骨がある。

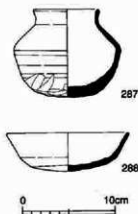
第2節 遺物

1. 土器(第80図)

(1)1号墳

1号墳では玄室から壺1点と周溝から須恵器碗が出土している。

壺(287)は完形で、有蓋の短頸壺である。口径6.75cm、器高9.3cmを測る。口頸部は直立し、緩やかに傾斜する肩部に接続する。底部は丸く作り、丁寧な手持ちヘラケズリで仕上げている。碗(288)は口径12.9cm、器高4.1cmを測る。丸底気味の底部から口縁部が大きく開く形態を成す。底部はヘラキリの後、ナデられている。



第80図 平方1号墳出土土器

(2)2号墳

2号墳では玄室から須恵器壺の破片が出土している。須恵器は細片のため図示していない。

2. 鉄器(第81図)

(1)1号墳(505~516)

鉄釘は合計12点出土している。この内、頭部の残存しているものは5点あり、いずれも先端を薄く叩き延ばして頭部を造っている。全長は完全に残っているもので、3.6cm~4.1cmを測るが、破損しているもの(515・516)でも8.8cmを測り、大小2種類存在した可能性がある。断面は一辺0.5cm~0.7cmの正方形もしくは長方形である。木質は比較的良好に残存しており、木質の残りから板材の厚さは3.5cm前後と推定できる。

(2)2号墳(517~523)

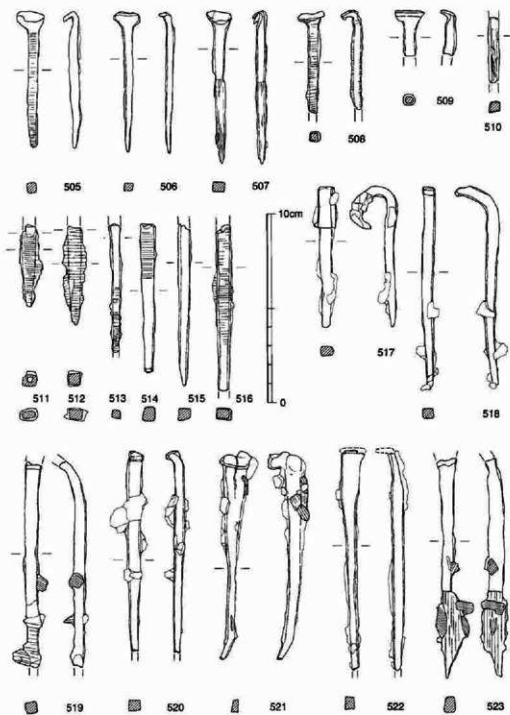
鉄釘は合計7点出土している。頭部は短く屈曲させるもの(517~519)と先端を薄く叩き延ばすもの(520~523)とがある。全長は517を除いて11cm前後を削る。

3. 人骨

2号墳の玄室床面から、人骨が出土した。人骨は片山氏によると、火を受けており、しかも横方向のヒビが多くみられる事から生身からの焼成であり、しかも高温で焼かれているとのことである。ほとんど細片になっており、大腿骨の一部のみみられるが、個体数、性別、年齢、身長等は不明である。

第3節 小結

平方古墳群は調査区内で2基確認した。削平が著しく墳形は不明な点が多いが円墳が推定される。埋葬施設はいずれも横穴式木室で、2号墳は火を受けており、炭化材が残っていた。



第81图 平方1·2号出土铁器

第7章 平方城

第1節 遺構

1. 位置と立地

平方城は、西野上の西方の平野を見下ろす、丘陵平坦面の先端に位置する。標高は214.2m前後で、平野部との比高差は60mを測る。隣の中西山遺跡はもちろんの事、三田盆地の西野上、東野上、沢ノ本、福島をはじめ、対岸の有馬富士も一望できる。

平方城と他の城との関係は、南方約2.4kmに釜屋城が存在し、谷を挟んだ北方約0.3kmに中西山城が位置する。また北西方向約2kmには風呂ヶ谷城が存在する。対岸の北東方向約3.8kmには東野上城が存在する。

2. 城の構造(第82図)

平方城の構造は立地が丘陵平坦面の先端に位置しているため、うまく地形を利用している。

検出した遺構は、堀切と土塁、および切土と盛土によって区画された平坦面の曲輪がある。

(1)堀切

堀切は、丘陵平坦面の尾根方向に直行して開削され、山城の西限となっている。ほぼ中央付近で、若干土塁側に屈曲し、南端から約6mの所で鉤の手に曲がっている。検出した長さは33mである。東には隣接して土塁が構築されているが、西側には何も存在していない。堀切の上幅は4m前後、下幅は3m前後で、断面形は逆台形を呈する。深さは旧地表面から0.3m程度で、土塁上からは0.5mを測る。

堀切の掘削土は、内側に盛り上げ土塁としている。

(2)土塁

土塁は西側の堀切に接した部分と南側の谷に面した部分に構築されている。土塁は幅4～6m、高さ1.2mである。南端では、溝・土塁ともに屈曲させている。

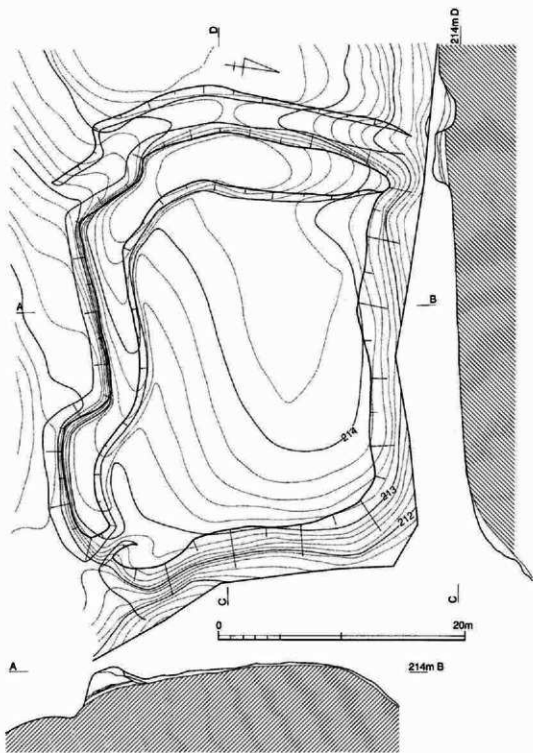
南側は斜面を大きくカットして平坦地を設け、内側に盛り、土塁としている。平坦地の幅は6～3mである。土塁は幅4m前後で、外側からの高さ最大1.8m、内側からの高さは0.5m程度を測る。ほぼ中央で屈曲しており、東半分は5m程南側に張り出している。南東コーナーでは幅約1.5m土塁が切れる部分があり、虎口の様相を呈している。

盛土は全体に締まりが悪い。

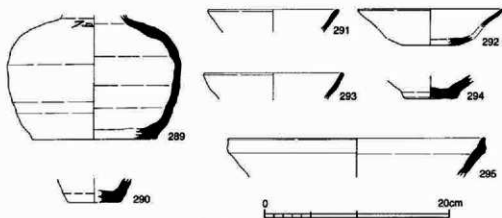
(3)曲輪

曲輪の規模と形態は東西約30m、南北約20mの長方形を基調とした平面形をとる。北面と東面は盛土をしてはいるものの土塁などの施設は設けず、丘陵崖をそのまま利用している。調査地区以外の方はさらに急斜面になっている。

曲輪内では全く建物などの遺構は検出されなかった。



第82圖 平方城跡



第83図 中世以降の土器

第2節 遺物(第83図)

平方城に伴う遺物かどうか不明であるが、平安時代以降のものをここでは扱う。遺物は土塁及び土塁内の曲輪から出土した丹波焼きの小壺と土塁内の曲輪から出土した須恵器碗がある。

丹波焼壺(289)は口縁部を欠く。体部上層に最大径をもち、最大径は17.0cmを測る。肩部に「石」?の刻書がみられる。

須恵器壺(290)は小壺底部の破片で底径5.25cmを測る。須恵器碗(291~294)は口縁部もしくは底部の破片で、口径14.0cm~15.6cmを測る。294は高台状の底部でヘラ切の痕跡を残している。須恵器鉢(295)は口縁部の破片で口径37.6cmを測る。

以上、古墳時代以降のものをまとめて報告した。時期は平安時代から鎌倉時代初頭のもものが中心である。したがって、これらの遺物は平方城に直接伴うものかどうかわからない。

第3節 小結

平方城は丘陵平坦地先端を利用した山城で、西側には堀切を設けている。西・南面は土塁を設け、北・東面は盛り土をして急斜面をつくりだしている。南東隅には虎口様の切れた部分がある。土塁と急斜面に囲まれた曲輪は、東西約30m、南北約20mの規模である。

出土遺物の時期は、平安時代から鎌倉時代初頭のもものが中心である。しかし、これらの遺物が直接平方城に伴うかどうかわからない。もし、これらのものが平方城に伴うものであれば、この城の位置付けがかわってくる。

第8章 自然科学分野における調査

第1節 分析にあたって

平方遺跡群は弥生時代中期後半と、古墳時代後期を中心とする複合遺跡である。遺跡の残存状態が良好であったものや、遺跡を理解する上で必要と考えたものを中心に分析を行った。

1. 遺跡の年代

遺跡の年代に関しては、遺跡の種類が古墳時代後期の竈跡や弥生時代の住居跡など火を受けたものが存在したため現地において1～3号竈と、弥生時代のSH1・2の2基について考古磁気の測定を行った。また、2号墳の横穴式木室墳や、2号竈からまとまった量の良好な炭が出土したため、横穴式木室墳では奥壁の材の一部(H-1)、2号竈では右側の材の一部(H-2)を資料として放射性炭素年代測定を行った。

2. 産地分析

産地分析は、弥生の石器石材として多量に使用されているサヌカイトの産地分析を依頼した。また、平方の3基の竈で焼かれた須恵器の胎土を分析し、特性を明らかにするため各窯20点の分析を実施した。弥生土器も平方遺跡の土器の特性を明らかにするため、18点について成分分析を行い他地域との比較を行った。

3. 材質分析

材質の分析は、弥生土器に塗布された赤色塗料の分析と、弥生時代のガラスの成分分析を行った。また、2号墳と、2号竈に使われていた炭化材の樹種同定を行った。

第2節 平方遺跡放射性炭素年代測定

社団法人 日本アイソトープ協会

当方のコード	依頼者のコード	C-14年代
N-6210	H-1	1420 ± 75yB.P. (1380 ± 70yB.P.)
N-6211	H-2	1590 ± 75yB.P. (1540 ± 70yB.P.)

年代は¹⁴Cの半減期5730年(カッコ内はLibbyの値5568年)にもとづいて計算され、西暦1950年よりさかのぼる年数(yearsB.P.)として示されています。付記された年代誤差は、放射線計数の統計誤差と、計数管のガス封入圧力および温度の読取の誤差から計算されたもので、¹⁴C年代がこの範囲に含まれる確率は約70%です。この範囲を2倍に上げますと確率は約95%となります。

第3節 三田市平方遺跡の考古地磁気測定

富山大学理学部地球科学教室
広岡公夫 塩浜修一 森定 尚

1. はじめに

土に含まれている“砂鉄”は、磁石になることができる性質を持つ磁性体である。チタン磁鉄鉱($(\text{Fe,Ti})_2\text{O}_3$)、磁鉄鉱(Fe_3O_4)、赤鉄鉱(Fe_2O_3)などの鉄およびチタンの酸化鉱物で、通常の土には1~3%程度含まれている。これらの磁性体は加熱して温度を上げていくと、それぞれの鉱物に固有の、ある温度で磁性を失う。この温度をキュリー点といい、磁鉄鉱では578℃、赤鉄鉱では670℃である。チタン磁鉄鉱の場合は、チタンの含有量によって異なるが、チタンが少ないほどキュリー点は高くなり、チタンの含有量が0の場合は磁鉄鉱の578℃となる。土に含まれているのは、少しチタンが混じったキュリー点が550℃程度のチタン磁鉄鉱が多いがその土をもたらしただけの母岩の磁性鉱物の種類に左右される。これらの磁性鉱物を、キュリー点より高い温度(磁性を失った状態)から冷却すると、キュリー点の温度を通過した瞬間から、再び磁性を取り戻し、そのときに作用している磁場に平行な方向の磁化を持つ磁石となる。このようにして獲得される磁化を熱残留磁化という。

このように、炉跡や窯跡に含まれる磁性鉱物は、かつてそれらが焼かれたときの地磁気の方向に磁化されているので、焼土には過去の地球磁場の方向が熱残留磁化の形で記録されていることになる。このような考古学的な焼土遺構の熱残留磁化を測定して、過去の地磁気の変動の様子を明らかにする研究を考古地磁気学という。

一方、地球磁場の方向は、ほんの少しずつではあるが年々変わっていて、百年単位でみると充分その違いが検出できるくらいの変化をしている。このような変化を地磁気永年変化という。残念ながら、日本で継続的に地磁気の観測が行われるようになったのは、明治時代になってからなので、断片的な偏角のみの観測記録以外に、それ以前の永年変化については記録がない。しかし、西南日本各地の、時代が明らかな考古遺跡の焼土遺構の熱残留磁化の測定から、過去2000年間(弥生時代中期中頃から現代まで)についての永年変化(考古地磁気永年変化)の大略が明らかにされている(Hirooka, 1971; 広岡 1977)。

弥生中期中頃以降のものであれば、遺構焼土の熱残留磁化の方向を測定し、過去2000年間の西南日本の考古地磁気永年変化曲線と照合することによって、その遺構が熱を受けた年代を求めることができる。考古地磁気年代はこのようにして推定される。この年代推定法には、地球磁場の方向の地域差が無視できない場合のあることや、何枚も床がある窯跡の場合に、先の焼成時に獲得された磁化が後の床に及ぼす影響、あるいは、後の焼成によって先の床の磁化が影

響を受けるなど、まだ、いくつかの未解決の問題点(Hirooka, 1981)が残っているが、炉跡や古窯跡などの焼土遺構の年代を推定する方法として定着しつつある。とくに、遺構の種類が異なる場合でも、よく焼けた焼土が残されていれば、その残留磁化方向から年代推定が可能であり、同じ基準で対比することができる。兵庫県内の遺跡では、和田山町の岡田1号窯・明石市の高丘古窯跡群(Hirooka, 1971)、佐用町の西下野遺跡(広岡, 1976)、豊岡市の高屋古窯(広岡・渋谷, 1981)、尼崎市の田能遺跡(広岡, 1982)、加古川市の札馬古窯址群(広岡他, 1982)、明石市の魚住古窯跡群(広岡, 1985)、竹野町の鬼神谷窯跡(広岡他, 1990)、社町の吉馬古窯跡群(中島他, 1990)などの考古地磁気測定の結果が報告されている。

今回は、三田市平方遺跡の1・2・3号窯および弥生住居跡SH1、SH2に残された焼土の測定結果を報告する。

2. 試料の採取

窯跡では、最終焼成後の埋積中に、天井は崩落し、壁は内側に傾いているものが多いので、考古地磁気測定用の試料はそのような危険性の少ない床面から採取するようにしている。床面でも壁ぎわや竈奥、焚き口付近は、磁化の方向が場所毎に少し違っていることが経験的に知られているので(Hirooka, 1971)、窯中央部の中軸線沿いの部分でサンプリングを行う。炉跡のような焼けがあまり良くないものはできるだけよく焼けた部分を選んで採取する。

試料採取は次のような手順で行う。

まず、焼成後に動いた形跡がないよく焼けた部分を選び、動かないように注意しながらこぶし大の焼土の周りに深さ数cmの溝を掘り、焼土を削りだす。削りだした焼土に薄めにといた石膏をかけて固める。次いで、濃くとした石膏を試料表面にのせ、アルミ板を押し付けて平面を作る。石膏が固まると、アルミ板をはがし、石膏平面の最大傾斜線の方位と傾斜角を特製クリノメーターで測定し、方位を示すマークを試料表面の平面上に記入する。このときの方位測定の精度が年代に大きく響くので、できるだけ精密に測らなければならない。石膏で固めた焼土試料を遺構から切り離し、切り離した試料の裏面も石膏で覆い補強してから、紙に包んで研究室に持ち帰る。このような試料を1遺構から10～15個採取する。こうして遺跡現場で採取した試料は、方位を測定した平面をもった不定形をしているので、磁力計で測定できるように整形する。研究室でダイヤモンド・カッターを用いて、34mm幅で、方位の測定を行った平面の両側を切断し、切断面をうすい石膏で覆う。次いで、平面の上下も34mm幅で切断し石膏で覆う。34mmの厚さにして平面の裏側も切断、石膏をかけて、34mm×34mm×34mmの石膏で覆われた立方体に整形する。

平方遺跡では、1号窯から14個(試料番号 SHY 271～284)、2号窯から12個(SHY 291～302)、3号窯から13個(SHY 311～323)、弥生住居跡SH1から11個(YHY 21～31)、SH2から14個(YHY 1～14)、の総計64個の試料を採集した。

3. 残留磁化測定の結果

試料の残留磁化の測定にはリングコア型スピナー磁気計(夏原技研製 SMM-85型)を用いた。試料を6回置き直して、立方体試料の各面(6面)それぞれについて直交する2つの磁化成分を測定した。したがって、残留磁化ベクトルを表す直交3成分をそれぞれ4回ずつ測定したことになる。これら4つのデータの平均値をそれぞれの成分とし、3次元の磁化ベクトルの方向とその強度を得た。

測定した残留磁化ベクトルは偏角・伏角・磁化強度で表される。偏角は、磁化ベクトルを水平面に投影した水平分力の方向が真北から何度振れているかの角度を表したもので、東偏を正にとる。伏角は磁化ベクトルの水平からの傾斜角を示す。よく焼かれた通常の窯跡の場合には、磁化強度は $10^3 \sim 10^4$ (e. m. u./gr)の値になる。また、個々の試料の偏角・伏角は、大体過去2000年間の永年変化の範囲にあり、偏角は $+30^\circ \sim -30^\circ$ 、伏角は、 $35^\circ \sim 70^\circ$ の範囲内のその時代に特有の方向にまとまる。

これらの測定結果は第7～11表に示されている。表からも分かるとおり、第3号窯、住居跡SH1、2の3遺構の測定結果は、磁化強度が弱く、あまり焼けていないことを示している。磁化方向のばらつきも非常に大きく、考古地磁気学的な年代を決めるのが困難であった。このように焼けがよくない焼土の場合は、含まれている磁性鉱物のうち、キュリー点の低いものしか熱残留磁化を獲得していないので、磁化の安定性が悪く、焼かれた後に二次的な磁化成分が付加されていることが多い。そのため残留磁化方向が乱されて、正しい過去の地磁気の方向を示さなくなる。この二次的な磁化成分を消去するには、交流消磁実験が有効である。コイルに交流電流を流し、交番磁場を発生させ、その電流をなめらかに減じて発生している交番磁

第7表 平方1号窯の磁化測定結果 (MRN)

試料番号	偏角 (°E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ emu/g)
SHY 271	-20.1	50.5	0.702
272	-16.6	50.8	0.471
273	-21.1	53.1	0.453
274	-18.5	51.4	0.423
275	-18.4	53.0	0.861
276	-13.7	53.5	0.423
277	-20.6	55.3	0.814
278	-19.3	52.9	0.617
279	-16.1	50.7	0.421
* 280	-9.7	56.3	0.301
281	-17.4	48.8	2.20
* 282	-14.3	44.5	5.01
283	-20.7	54.8	6.49
284	-13.9	54.5	5.67

第8表 平方2号窯の磁化測定結果 (MRN)

試料番号	偏角 (°E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ emu/g)
SHY 291	-19.6	49.9	0.410
292	-16.9	53.8	0.757
293	-11.8	54.0	6.06
294	-12.3	51.9	0.408
295	-12.1	52.1	4.84
296	-18.4	58.0	0.609
297	-10.1	51.9	0.227
298	-15.6	51.7	0.191
299	-18.0	50.9	0.0687
300	-18.6	56.9	0.109
301	-17.1	57.0	0.419
302	-13.9	50.8	0.271

*: 統計計算の際に除外したもの。

場の強度を小さくする。このコイルの中に試料を入れて、この交番磁場で描すると不安定な成分が選択的に消去される。これを交流消磁という。消磁をしていない元のままの残留磁化を自然残留磁化(Natural Remanent Magnetization、略してNRM)という。今回の平方3号窯跡および住居跡SH1、2のように磁化が弱く磁化方向のばらつきの大きいものについては、50ccの交流消磁実験を行ったところ、磁化方向のまとまりがよくなったので、消磁後のデータを考古地磁気測定結果として採用した。交流消磁をした結果は第12～14表に示されている。

試料の中には、同一窯から得たそれ以外の多数の試料が示す磁化方向から外れた方向を示す試料が少数見受けられる場合がある。第1号窯のSHY 280、282の2試料がその例である。これらの試料には表中で*印が付けてあり、窯跡ごとの平均磁化方向を求める統計処理の際に除外した。

平均磁化方向と磁化のばらつきの大きさを求める計算にはフィッシャーの統計法(Fisher, 1953)を用いた。統計計算では、平均偏角・平均伏角・95%レベルのフィッシャーの信頼角(α_{95})・フィッシャーの精度変数(K)および平均磁化強度を求める。 α_{95} およびKはともに同一遺構から得られた試料の残留磁化方向が、どれくらいばらついているかを示すもので、 α_{95} は、平均磁化方向(平均偏角・平均伏角)のまわり $\pm\alpha_{95}$ の範囲に真の磁化方向が95%の確率で存在することを示している。測定試料数が多くなるほどその平均磁化方向の信頼度が高くなるので、同一遺構からの試料数が多くなるほど、 α_{95} の値は小さくなり、測定結果の精度は上がるが、試料採取・測定に要する時間が膨大になるので、通常、上記のように1遺構から10～15個の試料を採ることになっている。よく焼けた窯跡の場合には、 α_{95} は3°以内におさまる。Kは、同一遺構内の任意の2つの試料の磁化方向の平均的な違いの大きさを表すパラメータで、値が大きいはばらつきが少ないことを意味し、陶磁器窯では数百以上の値となる。この値は試料の数には関係なく、その遺構の個々の試料の磁化方向がどれくらいばらついているかを示す。統計計算の結果は第15表に示されている。NRMの磁化方向のばらつきが非常に大きい第3号窯、住居跡SH1、2については、年代の推定は消磁後のデータで行うことにし、NRMについては、一応平均磁化方向の計算のみをしておいた。表中に()でくくってあるのはそのことを表している。第1号窯、第2号窯については、 α_{95} がそれぞれ1.35°、1.78°の値となっており、磁化方向のまとまりが非常によいことがわかる。また、SH1、2の焼土が同時期のものである場合として、両方のデータを併せて計算を行い、平均磁化方向を求めたものを、「住居跡Total」として同表に入れておいた。

4. 考察

偏角 $-25^{\circ}\sim+20^{\circ}$ 、伏角 $30^{\circ}\sim65^{\circ}$ の部分を広大したシュミット・ネット(等積ステレオ投影図)に、第15表の考古地磁気測定結果を投影したのが第84図である。同図には、過去2000年間の西南日本の考古地磁気永年変化の曲線も記入されている。考古地磁気年代は第84図を用いて

第9表 平方3号案の磁化測定結果 (MRN)

試料番号	偏角 (°E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ emu/g)
SHY 311	-24.7	50.8	1.60
312	-32.0	45.1	2.02
313	-25.2	61.2	0.0859
314	2.8	62.6	0.181
* 315	11.8	33.0	0.116
* 316	-71.5	57.3	0.0573
317	-23.0	60.2	0.260
318	7.4	65.4	0.400
* 319	-8.8	17.7	0.0315
320	-6.6	54.3	0.274
321	-7.8	50.5	0.0422
322	-17.5	72.0	0.587
323	-32.5	57.1	0.612

* : 統計計算の際に除外したもの。

第12表 平方3号案の磁化測定結果 (50 oe 消磁)

試料番号	偏角 (°E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ emu/g)
SHY 311	-19.8	49.2	1.08
312	-18.3	44.9	1.36
* 313	-30.6	32.0	0.101
314	-4.0	57.2	0.134
* 315	11.9	34.0	0.118
* 316	-85.5	81.4	0.0456
317	-19.8	53.1	0.209
318	-4.6	59.5	0.302
* 319	1.8	37.7	0.0182
320	-4.2	53.3	0.219
* 321	-24.1	40.2	0.0431
* 322	-105.7	80.1	0.461
323	-23.3	52.2	0.506

* : 統計計算の際に除外したもの。

第10表 平方遺跡住居跡 SH1 の磁化測定結果 (MRN)

試料番号	偏角 (°E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ emu/g)
*YHY 21	-16.7	65.8	0.234
22	21.9	71.5	0.0786
23	22.2	60.6	0.621
24	26.9	58.7	0.523
25	13.8	64.6	0.202
* 26	36.8	57.5	0.209
27	19.2	64.6	0.421
28	23.2	71.0	0.362
* 29	-4.5	61.3	0.241
30	14.0	57.7	0.331
31	40.0	50.7	0.0920

* : 統計計算の際に除外したもの。

第13表 平方遺跡住居跡 SH1 の磁化測定結果 (50 oe 消磁)

試料番号	偏角 (°E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ emu/g)
YHY 21	6.4	62.4	0.143
22	11.1	62.1	0.0539
23	28.6	54.8	0.460
24	21.1	55.9	0.316
25	19.9	55.6	0.132
26	27.4	51.8	0.140
27	18.1	54.8	0.299
28	20.0	60.1	0.234
29	1.3	53.1	0.160
30	14.8	49.8	0.229
* 31	22.6	34.3	0.0618

* : 統計計算の際に除外したもの。

第11表 平方遺跡住居跡 SH2 の磁化測定結果 (MRN)

試料番号	偏角 (°E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ emu/g)
*YHY 1	29.3	27.6	0.0602
* 2	3.4	24.7	0.0479
* 3	-63.0	21.4	0.247
* 6	-7.6	65.3	0.0366
* 7	-48.1	60.9	0.0375
* 8	7.2	34.5	0.0641
9	26.3	57.4	0.136
* 11	17.7	27.1	0.0420
12	23.3	56.6	0.214
13	23.9	53.4	0.126
14	22.2	52.7	0.0493

* : 統計計算の際に除外したもの。

第14表 平方遺跡住居跡 SH1 の磁化測定結果 (50 oe 消磁)

試料番号	偏角 (°E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ emu/g)
*YHY 1	24.3	24.7	0.0524
* 2	3.5	33.6	0.0379
* 3	-72.2	19.6	0.250
* 6	-10.8	56.1	0.0359
* 7	-19.4	59.6	0.0256
* 8	5.7	38.6	0.0438
9	23.7	57.5	0.106
* 11	16.8	16.1	0.0346
12	16.3	51.0	0.169
13	18.8	54.7	0.102
14	14.7	49.4	0.0385

* : 統計計算の際に除外したもの。

第15表 平方遺跡群の考古地磁気測定結果

遺 構 名	N	D (°E)	I (°)	α_{95} (°)	K (°)	平均磁化強度 ($\times 10^{-3}$ emu/g)
1号窯(NRM)	12	-18.0	52.5	1.35	1035.6	1.63
2号窯(NRM)	12	-15.3	53.3	1.78	594.5	1.20
3号窯(NRM)	10	-17.0	58.6	6.51	56.0	0.606
3号窯(50 oe 消磁)	7	-14.0	53.0	5.28	131.5	0.544
住居址SH1(NRM)	7	20.1	64.2	4.47	183.7	0.363
住居址SH1(50 oe 消磁)	10	17.2	56.3	3.86	157.7	0.217
住居址SH2(NRM)	4	23.9	54.9	2.75	1113.7	0.131
住居址SH2(50 oe 消磁)	4	18.1	53.2	4.91	351.8	0.104
住居址Total(50 oe 消磁)	14	17.5	55.4	2.92	185.8	0.184

N: 試料個数, D: 平均偏角, I: 平均伏角, α_{95} : フィッシャーの信頼角,

K: フィッシャーの精度パラメーター, NRM: 自然残留磁化, 50 oe: 50 oe で消磁

求める。それぞれの窯の平均磁化方向を示す黒丸が永年変化曲線のどの年代のところにあるかで年代の推定がなされ、 α_{95} の円内に含まれる永年変化曲線の線分の長さが年代誤差を与える。もし、西南日本の永年変化曲線が過去の地磁気の変動を正しく表しているとする、平方遺跡の窯跡および住居址の考古地磁気推定年代は、

第1号窯	A. D. 580 ± 10年	
第2号窯	A. D. 580 ± 20年	
第3号窯	A. D. 580 ± 50年	又は、A. D. 750 ± 70年
住居址SH1	A. D. 300	{ +50年 -90年
住居址SH2	A. D. 330	{ +30年 -60年
住居址Total	A. D. 310	+40年

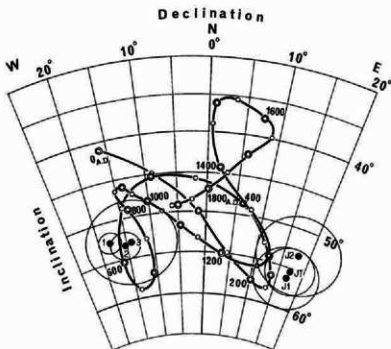
となる。2つの年代値がある場合は、考古地磁学的には先に挙げた年代の方が確率が高い。

引用文献

Fisher, R. A. (1953) Dispersion on a sphere, Proc. Roy. Soc. London, A, vol. 217, 295-305.

Hirooka, K. (1971) Archaeomagnetic study for the past 2000 years in southwest Japan, Mem. Fac. Sci., Kyoto Univ., Ser. Geol. Mineral., vol. 38, 167-207.

広岡公夫(1976)「西下野遺跡磁気測定結果について」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告(佐用編)』兵庫県教育委員会、Ⅷ-34-Ⅷ-38



第84図 平方遺跡群の考古地磁気測定結果と考古地磁気永年変化

- 広岡公夫(1977)「考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向」『第四紀研究』
vol.15,200-203.
- 広岡公夫(1981)「考古地磁気による年代推定とその問題点」『考古学研究』第28巻,第1号(通巻109号),
69-78.
- 広岡公夫(1982)「田能遺跡の考古地磁気測定」『田能遺跡発掘調査報告書』尼崎市文化財調査報告第15集,
尼崎市教育委員会,586-588
- 広岡公夫・渋谷秀敏(1981)「高屋古窯の考古地磁気測定結果」『但馬・高屋古窯』豊岡市文化財調査報告
書第11集,豊岡市教育委員会,33-36
- 広岡公夫・中島正志・夏原信義・牧野智志志・酒井美男(1982)「札幌古窯址群の考古地磁気測定」『札
馬』古窯址群発掘調査報告書,加古川市文化財調査報告7,加古川市教育委員会,67-76
- 広岡公夫・奥村俊八・中島正志・夏原信義(1985)「魚住古窯址群の考古地磁気測定結果」『魚住古窯跡
群発掘調査報告書』明石市教育委員会,平安博物館,54-58.
- 広岡公夫・味喜大助・塩浜修一(1990)「鬼神谷窯跡の考古地磁気」『鬼神谷窯跡発掘調査報告』竹野
町文化財調査報告書第7集,兵庫県城崎郡竹野町教育委員会,37-40.
- 中島正志・谷崎有里・夏原信義・広岡公夫(1990)「吉馬古窯跡群の考古地磁気年代推定」『社・吉馬,
—古窯跡群等の発掘調査報告書—』大谷女子大学資料館報告書第24冊,大谷女子大学資料館,143-156.

第4節 平方遺跡出土のサヌカイト製遺物の石材産地分析

京都大学原子炉実験所 薬科 哲男

1. はじめに

自然科学的な手法を用いて、石器石材の産地を客観的に、かつ定量的に推定し、古代の交流、交易および文化圏、交易圏を探ると言う目的で蛍光X線分析法により研究を始めた。当初は手近に入手できるサヌカイトを中心に、分析方法と定量的な産地の判定法との確立を目標として研究したが、サヌカイトで一応の成果を得た後に、同じ方法を黒曜石にも拡張し、本格的に産地推定を行なっている⁽¹⁾⁽²⁾⁽³⁾。

サヌカイト、黒曜石などの主成分組成は、原産地ごとに大きな差はみられないが、不純物として含有される微量成分組成には異同があると考えられるため、微量成分を中心に元素分析を行ない、これを産地を特定する指標とした。

蛍光X線分析法は試料を破壊せずに分析することができ、かつ、試料調整が単純、測定の手続きも簡単である。石器のような古代人の日用品で多数の試料を分析しなければ遺跡の正しい性格が分からないという場合にはことさらに有利な分析法である。分類の指標とする元素組成を遺物について求め、あらかじめ、各原産地ごとに数十個の原石を分析して求めておいた各原石群の元素組成の平均値、分散などと、遺物のそれと対比して産地を推定する。この際多変量解析の手法を用いて、各産地に帰属される確率を求めて産地を同定する。

平方遺跡から出土したサヌカイト遺物のうち、弥生時代中期後半Ⅳ様式の60個について産地分析の結果が得られたので報告する。

2. サヌカイト原石の分析

サヌカイト原石の風化面を打ち欠き、新鮮面を出し、塊状の試料を作り、エネルギー分散型蛍光X線分析装置によって元素分析を行う。主に分析した元素はK、Ca、Ti、Mn、Fe、Rb、Sr、Y、Zr、Nbの各元素である。

塊試料の形状差による分析値への影響を打ち消すために元素量の比を取り、それでもって産地を特定する指標とした。サヌカイトでは、K/Ca、Ti/Ca、Mn/Sr、Fe/Sr、Rb/Sr、Y/Sr、Zr/Sr、Nb/Srをそれぞれ用いる。

サヌカイトの原産地は、西日本に集中してみられ、石材として良質な原石の産地および質は良くないが考古学者の間で使用されたのではないかと話題に上る産地など、合わせて25ヶ所の調査を終えている。第84図にそれらの地点を示す。このうち、金山・五色台地域では、その中の多くの地点からは良質のサヌカイトおよびガラス質安山岩が多量に産出し、かつそれらは数ヶの群に分かれる。これらの原石を良質の原石を産出する産地を中心に元素組成で分類する

● 石炭原材として良質と考えられる産地

▲ あまり良質と考えられない産地



第85図 サマサイトの原産地

第16表 各サマサイト原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値

原産地名	分析個数	K/Ca X±σ	Ti/Ca X±σ	Fe/Sr X±σ	Rb/Sr X±σ	Y/Sr X±σ	Zr/Sr X±σ	Nb/Sr X±σ	
岐阜県 下呂	56	1.475±0.041	0.218±0.010	0.745±0.011	0.283±0.005	0.029±0.005	0.442±0.010	0.060±0.008	
奈良県 二上山	57	0.243±0.009	0.227±0.010	4.389±0.145	0.212±0.008	0.055±0.010	0.582±0.016	0.180±0.010	
大阪府 和泉	15	0.433±0.011	0.337±0.011	3.741±0.074	0.299±0.007	0.075±0.010	0.659±0.007		
兵庫県 岩屋第一	17	0.576±0.018	0.249±0.009	3.559±0.096	0.369±0.006	0.056±0.010	0.800±0.023		
兵庫県 岩屋第二	19	0.482±0.017	0.269±0.007	3.399±0.070	0.337±0.007	0.041±0.008	1.038±0.023		
香川県 五色台	分光寺	32	0.408±0.016	0.259±0.008	3.558±0.061	0.304±0.009	0.040±0.011	0.837±0.026	
	栄光寺	20	0.418±0.013	0.255±0.009	3.541±0.060	0.303±0.007	0.043±0.013	0.943±0.022	
	白峰寺	57	0.486±0.015	0.267±0.007	3.349±0.070	0.339±0.009	0.041±0.012	1.033±0.023	
	法印谷	34	0.349±0.013	0.244±0.009	4.590±0.121	0.283±0.011	0.068±0.013	1.105±0.026	
	金山	34	0.367±0.014	0.223±0.009	4.491±0.124	0.291±0.010	0.064±0.008	1.035±0.023	
金山東	37	0.437±0.016	0.230±0.006	4.496±0.050	0.320±0.012	0.064±0.009	1.133±0.030		
五色台	57	0.785±0.031	0.129±0.008	2.915±0.052	0.495±0.014		0.648±0.025		
広島県 冠山	冠山東	58	0.564±0.023	0.534±0.020	2.940±0.068	0.188±0.006	0.025±0.010	0.421±0.011	
	冠山中	38	0.366±0.016	0.385±0.033	1.497±0.043	0.047±0.005	0.004±0.007	0.375±0.043	0.017±0.013
	冠山北	34	1.087±0.114	0.523±0.034	2.018±0.066	0.259±0.007	0.019±0.007	0.483±0.012	0.268±0.011
佐賀県 多久	第一	53	0.734±0.045	0.417±0.011	4.696±0.194	0.502±0.026	0.051±0.010	0.807±0.020	
	第二	23	0.738±0.051	0.429±0.018	3.235±0.372	0.521±0.045	0.061±0.017	0.813±0.029	
	第三	9	0.811±0.040	0.369±0.013	5.270±0.200	0.635±0.016	0.069±0.015	0.788±0.020	
	老松山	26	0.624±0.029	0.329±0.011	5.255±0.141	0.538±0.027	0.051±0.010	0.633±0.019	
	寺西	22	0.546±0.022	0.319±0.008	5.525±0.101	0.484±0.014	0.051±0.012	0.587±0.014	
有田	17	0.387±0.017	0.352±0.006	6.728±0.154	0.306±0.014	0.172±0.004	0.480±0.021		
長崎県 大牟田	第一	13	0.943±0.034	0.142±0.006	1.674±0.014	0.246±0.004	0.023±0.006	0.432±0.009	0.064±0.007
	第二	17	0.978±0.038	0.157±0.007	1.675±0.017	0.244±0.004	0.017±0.006	0.441±0.006	0.069±0.006
	第三	29	0.697±0.086	0.375±0.017	4.617±0.151	0.824±0.119	0.215±0.028	0.679±0.049	0.316±0.035
	川福	13	0.531±0.044	0.354±0.018	7.530±0.387	1.086±0.091	0.334±0.034	0.942±0.060	0.506±0.043
	福井	15	0.436±0.017	0.310±0.006	4.190±0.089	0.219±0.007	0.081±0.007	0.739±0.029	0.348±0.007
	崎針尾	24	0.460±0.010	0.334±0.008	7.106±0.100	0.916±0.018	0.286±0.010	0.845±0.016	0.437±0.015
	第二	45	0.337±0.026	0.255±0.009	4.037±0.123	0.171±0.012	0.053±0.007	0.383±0.018	0.071±0.013
熊本市 阿蘇	9	0.889±0.070	0.539±0.031	2.693±0.161	0.294±0.013	0.093±0.008	0.996±0.038		

* : ガラス質安山岩

X : 平均値

σ : 標準偏差値

と31の群に分類できる。その結果を第16表に示した。金山・五色台地域のサヌカイト原石を分類すると、金山西群、金山東群、国分寺群、蓮光寺群、白峰群、法印谷群の6ヶの群に、ガラス質安山岩は五色台群の単群に分類された。

金山・五色台地域産のサヌカイト原石の諸群にほとんど一致する元素組成を示すサヌカイト原石が淡路島の岩屋原産地の堆積層から円礫状で採取される。これら岩屋のものを分類すると、全体の約2/3が第17表に示す割合で金山・五色台地域の諸群に一致し、これらが金山・五色台地域から流れ着いたことがわかる。淡路島中部地域の原産地である。西路山地区および大崩地区からは、岩屋第一群に一致する原石がそれぞれ92%および88%と群を作らない数個の原石とがみられ、金山・五色台地域の諸群に一致するものはみられなかった。第18表に示す和泉・岸和田原産地からも全体の約1%であるが金山東群に一致する原石が採取される。第19表に示す和歌山市梅原原産地からは、金山原産地の原石に一致する原石はみられない。仮に、遺物が岩屋・和泉・岸和田原産地などの原石で作られている場合には、産地分析の手続きは複雑になる。

第17表 岩屋原産地からのサヌカイト原石66個の分類結果

群名	個数	百分率	岩屋原産地に関係する他群名
岩屋第一群	20個	30%	淡路島、岸和田、和歌山に出現
第二群	22	33	白峰群に一致
第三群	6	9	法印谷群に一致
*	5	8	国分寺群に一致
*	4	6	蓮光寺群に一致
*	3	5	金山東群に一致
*	2	3	和泉群に一致
*	4	6	不明（どこの原石群にも属さない）

第18表 和泉・岸和田原産地からのサヌカイト原石72個の分類結果

群名	個数	百分率	岩屋原産地に関係する他群名
岩屋第一群	12個	17%	淡路島、岸和田、和歌山に出現
和泉群	9	13	* * *
岩屋第二群	6	8	白峰群に一致
	4	6	二上山群に一致
	1	1	法印谷群に一致
	1	1	金山東群に一致
	39	54	不明（どこの原石群にも属さない）

第19表 和歌山市梅原原産地からのサヌカイト原石21個の分類結果

群名	個数	百分率	岩屋原産地に関係する他群名
和泉群	10個	48%	淡路島、岸和田、和歌山に出現
岩屋第一群	1	5	* *
	10	48	不明（どこの原石群にも属さない）

その遺跡から10個以上の遺物を分析し、第17・18表のそれぞれの群に帰属される頻度分布を求め、確率論による期待値と比較して確認しなければならない。二上山群を作った原石は奈良県北葛城郡当麻町に位置する二上山を中心にした広い地域から採取された。この二上山群と組成の類似する原石は和泉・岸和田の原産地から6%の割合で採取されることから、一遺跡10個以上の遺物を分析し、第18表のそれぞれの群に帰属される頻度分布をもとめて、和泉・岸和田原産地の原石が使用されたかどうか判断しなければならない。

3. 結果と考察

遺跡から出土した石器、石片は、風化のためサヌカイト製は表面が白っぽく変色し、新鮮な部分と異なった元素組成になっている可能性が考えられる。このため遺物の測定面の風化した部分に、圧縮空気によってアルミナ粉末を吹きつけ風化層を取り除き新鮮面を出して測定を行った。

今回分析した遺物の結果を第20表に示した。

石器の分析結果から石材産地を同定するためには数理統計の手法を用いて原石群との比較をする。説明を簡単にするためK/Caの一変量だけを考えると、第20表の試料番号26003番の遺物ではK/Caの値は0.241で、二上山群の〔平均値〕±〔標準偏差値〕は、 0.243 ± 0.009 である。遺物と原石群の差を標準偏差値(σ)を基準にして考えると遺物は原石群から 0.3σ 離れている。ところで二上山原産地から100ヶの原石を採ってきて分析すると、平均値から $\pm 0.3\sigma$ のずれより大きいものが76ヶある。すなわち、この遺物が、二上山群の原石から作られていたと仮定しても、 0.3σ 以上離れる確率は76%であると言える。だから、二上山群の平均値から 0.3σ しか離れていないときには、この遺物が二上山群の原石から作られたものでないとは、到底言い切れない。ところがこの遺物を金山東群と比較すると、金山東群の平均値からの隔たりは、約 12σ である。これを確率の言葉で表現すると、金山東群の原石を採ってきて分析したとき、平均値から 12σ 以上離れている確率は、一兆分の一であると言える。このように、一兆個に一個しかないような原石をたまたま採取して、この遺物が作られたとは考えられないからこの遺物は、金山東群の原石から作られたものではないと断定できる。これらのことを簡単にまとめて言うと、「この遺物は二上山群に76%、金山東群に百億分の一の確率でそれぞれ帰属される」。各遺跡の遺物について、この判断を第16表のすべての原石群について行い、低い確率で帰属された原産地を消していくと残るのは、二上山群の原産地だけとなり、二上山産地または和泉・岸和田原産地の石材が使用されていると判定される。実際はK/Caといった唯一ヶの変量だけでなく、前述した6ヶの変量で取り扱うので変量間の相関を考慮しなければならない。

例えばA原産地のA群で、Ca元素とRb元素との間に相関があり、Caの量を計ればRbの量は分析しなくても分かるようなときは、A群の石材で作られた遺物であれば、A群と比較したとき、Ca量が一致すれば当然Rb量も一致するはずである。したがって、もしRb量が少しず

第20表 平方遺跡出土のサヌカイト製片分析結果

試料番号	元 素 比							
	K/Ca	Ti/Ca	Rb/Sr	Zr/Sr	Fe/Sr	Y/Sr	Mn/Sr	Nb/Zr
26003	0.241	0.231	0.206	0.612	4.618	0.064	0.077	0.032
26004	0.376	0.222	0.360	1.064	4.886	0.062	0.094	0.031
26005	0.391	0.230	0.335	1.125	4.653	0.048	0.089	0.000
26006	0.233	0.230	0.235	0.589	4.240	0.043	0.065	0.018
26007	0.384	0.230	0.345	1.057	4.131	0.042	0.068	0.024
26008	0.240	0.242	0.242	0.552	4.886	0.052	0.077	0.022
26009	0.237	0.237	0.201	0.573	4.652	0.064	0.079	0.000
26010	0.386	0.229	0.324	1.150	4.419	0.050	0.065	0.033
26011	0.370	0.224	0.358	1.048	4.408	0.041	0.094	0.029
26012	0.395	0.225	0.340	1.107	4.010	0.065	0.068	0.030
26013	0.396	0.232	0.336	1.104	4.599	0.036	0.093	0.029
26014	0.240	0.234	0.208	0.613	4.731	0.060	0.077	0.013
26015	0.386	0.231	0.331	1.115	4.461	0.062	0.087	0.037
26016	0.363	0.234	0.357	1.043	4.425	0.059	0.084	0.014
26017	3.005	5.022	1.579	5.864	29.663	0.383	0.122	0.360
26019	0.379	0.225	0.337	1.044	5.274	0.076	0.103	0.040
26020	0.391	0.229	0.328	1.109	4.850	0.083	0.096	0.027
26021	0.235	0.233	0.228	0.579	4.374	0.062	0.075	0.000
26022	0.239	0.229	0.220	0.556	4.621	0.065	0.073	0.009
26023	0.401	0.237	0.374	1.053	4.721	0.049	0.094	0.026
26024	0.242	0.235	0.223	0.576	4.269	0.044	0.074	0.018
26025	0.394	0.232	0.317	1.093	4.904	0.053	0.090	0.035
26026	0.371	0.224	0.348	1.074	4.623	0.030	0.088	0.026
26027	0.395	0.242	0.362	1.122	4.244	0.055	0.083	0.039
26028	0.390	0.244	0.325	1.063	4.333	0.047	0.074	0.033
26029	0.397	0.227	0.378	1.122	4.720	0.050	0.088	0.031
26030	0.380	0.227	0.333	1.108	4.505	0.041	0.084	0.038
26031	0.390	0.235	0.328	1.093	4.257	0.062	0.084	0.045
26032	0.239	0.237	0.207	0.576	4.831	0.056	0.080	0.036
26033	0.406	0.240	0.355	1.224	4.969	0.066	0.092	0.044
26035	0.404	0.234	0.335	1.107	5.181	0.067	0.107	0.023
26036	0.385	0.233	0.346	1.066	4.533	0.058	0.086	0.042
26037	0.392	0.230	0.378	1.076	4.860	0.030	0.092	0.042
26038	0.235	0.227	0.201	0.589	4.364	0.060	0.066	0.029
26039	0.388	0.238	0.366	1.046	4.265	0.066	0.087	0.035
26040	0.399	0.233	0.361	1.112	4.637	0.043	0.086	0.048
26041	0.239	0.235	0.204	0.568	4.743	0.061	0.079	0.009
26042	0.381	0.229	0.369	0.990	4.777	0.028	0.093	0.034
26043	0.387	0.236	0.358	1.040	4.611	0.022	0.086	0.044
26044	0.432	0.275	0.359	0.931	3.336	0.044	0.050	0.038
26045	0.382	0.228	0.301	1.162	4.219	0.060	0.071	0.038
26046	0.392	0.227	0.343	1.116	5.142	0.044	0.096	0.038
26047	0.399	0.236	0.318	1.084	4.708	0.041	0.085	0.046
26048	0.222	0.216	0.201	0.552	4.723	0.052	0.079	0.020
26049	0.392	0.225	0.323	1.110	4.997	0.068	0.094	0.027
26051	0.391	0.229	0.358	1.095	4.541	0.040	0.093	0.035
26052	0.373	0.225	0.326	1.092	5.007	0.065	0.097	0.014
26053	0.235	0.234	0.209	0.598	3.836	0.076	0.060	0.011
26054	0.239	0.237	0.254	0.559	4.048	0.051	0.068	0.025
26055	0.225	0.236	0.205	0.607	4.059	0.049	0.067	0.016
26056	0.391	0.229	0.312	1.083	4.745	0.041	0.091	0.033
26057	0.396	0.239	0.344	1.108	5.086	0.055	0.103	0.019
26058	0.384	0.227	0.363	1.140	4.400	0.030	0.080	0.040
26059	0.439	0.271	0.349	1.005	3.690	0.048	0.068	0.033
26060	0.383	0.234	0.361	1.134	4.359	0.047	0.081	0.014
26061	0.239	0.238	0.226	0.555	4.123	0.037	0.068	0.017
26062	0.390	0.243	0.356	1.019	4.297	0.040	0.085	0.036
26063	0.393	0.223	0.399	1.038	5.287	0.047	0.101	0.040
26064	0.365	0.219	0.361	1.070	4.607	0.055	0.087	0.031
26065	0.399	0.232	0.380	1.077	4.532	0.049	0.082	0.012

第21表 平方遺跡出土サヌカイト製石片の原材産地推定結果

試料番号	N _{o.}	位置	時代 (伴出土器)	原石産地 (確率)	判定	遺物品名
26003	1, SH2	1区	弥生時代中期後半 (V様式)	二上山 (53%)	二上山	割製片
26004	2, SH2	1区	弥生時代中期後半 (V様式)	金山東 (0.1%)	金山東	割製片
26005	3, SH2	1区	弥生時代中期後半 (V様式)	金山東 (2%)	金山東	割製片
26006	4, SH2	1区	弥生時代中期後半 (V様式)	二上山 (30%)	二上山	割製片
26007	5, SH2	1区	弥生時代中期後半 (V様式)	岩屋第2群 (D ² -96)	岩屋	割製片
26008	6, SH2	1区	弥生時代中期後半 (V様式)	二上山 (0.1%)	二上山	割製片
26009	7, SH2	1区	弥生時代中期後半 (V様式)	二上山 (0.4%)	二上山	割製片
26010	8, SH2	1区	弥生時代中期後半 (V様式)	金山東 (0.5%)	金山東	割製片
26011	9, SH2	1区	弥生時代中期後半 (V様式)	金山東 (0.2%)	金山東	割製片
26012	10, SH2	1区	弥生時代中期後半 (V様式)	金山東 (0.1%)	金山東	割製片
26013	11, SH2	2区	弥生時代中期後半 (V様式)	金山東 (23%)	金山東	割製片
26014	12, SH2	2区	弥生時代中期後半 (V様式)	二上山 (29%)	二上山	割製片
26015	13, SH2	2区	弥生時代中期後半 (V様式)	金山東 (2%)	金山東	割製片
26016	14, SH2	2区	弥生時代中期後半 (V様式)	金山東 (0.1%)	金山東	割製片
26017	15, SH2	2区	弥生時代中期後半 (V様式)	サヌカイトでない		割製片
26019	16, SH2	2区	弥生時代中期後半 (V様式)			割製片
26020	17, SH2	2区	弥生時代中期後半 (V様式)	金山東 (3%)	金山東	割製片
26021	18, SH2	2区	弥生時代中期後半 (V様式)	二上山 (4%)	二上山	割製片
26022	19, SH2	2区	弥生時代中期後半 (V様式)	二上山 (6%)	二上山	割製片
26023	20, SH2	2区	弥生時代中期後半 (V様式)	金山東 (0.3%)	金山東	割製片
26024	21, SH2	3区	弥生時代中期後半 (V様式)	二上山 (61%)	二上山	割製片
26025	22, SH2	3区	弥生時代中期後半 (V様式)	金山東 (3%)	金山東	割製片
26026	23, SH2	3区	弥生時代中期後半 (V様式)	金山東 (1%)	金山東	割製片
26027	24, SH2	3区	弥生時代中期後半 (V様式)	金山東 (D ² -97)	金山東	割製片
26028	25, SH2	3区	弥生時代中期後半 (V様式)	金山東 (D ² -80)	金山東	割製片
26029	26, SH2	3区	弥生時代中期後半 (V様式)	金山東 (3%)	金山東	割製片
26030	27, SH2	3区	弥生時代中期後半 (V様式)	金山東 (4%)	金山東	割製片
26031	28, SH2	3区	弥生時代中期後半 (V様式)	金山東 (0.1%)	金山東	割製片
26032	29, SH2	3区	弥生時代中期後半 (V様式)	二上山 (4%)	二上山	割製片
26033	30, SH2	3区	弥生時代中期後半 (V様式)	金山東 (0.3%)	金山東	割製片
26035	31, SH2	4区	弥生時代中期後半 (V様式)	金山東 (0.1%)	金山東	割製片
26036	32, SH2	4区	弥生時代中期後半 (V様式)	金山東 (0.5%)	金山東	割製片
26037	33, SH2	4区	弥生時代中期後半 (V様式)	金山東 (D ² -71)	金山東	割製片
26038	34, SH2	4区	弥生時代中期後半 (V様式)	二上山 (87%)	二上山	割製片
26039	35, SH2	4区	弥生時代中期後半 (V様式)	金山東 (D ² -86)	金山東	割製片
26040	36, SH2	4区	弥生時代中期後半 (V様式)	金山東 (4%)	金山東	割製片
26041	37, SH2	4区	弥生時代中期後半 (V様式)	二上山 (5%)	二上山	割製片
26042	38, SH2	4区	弥生時代中期後半 (V様式)	金山東 (D ² -107)	金山東	割製片
26043	39, SH2	4区	弥生時代中期後半 (V様式)	金山東 (0.4%)	金山東	割製片
26044	40, SH2	4区	弥生時代中期後半 (V様式)	岩屋第2群 (27%), 白峰 (27%)	岩屋	割製片
26045	41, SH3	1区	弥生時代中期後半 (V様式)	金山東 (D ² -95)	金山東	割製片
26046	42, SH3	1区	弥生時代中期後半 (V様式)	金山東 (D ² -73)	金山東	割製片
26047	43, SH3	1区	弥生時代中期後半 (V様式)	金山東 (4%)	金山東	割製片
26048	44, SH3	1区	弥生時代中期後半 (V様式)	二上山 (37%)	二上山	割製片
26049	45, SH3	1区	弥生時代中期後半 (V様式)	金山東 (2%)	金山東	割製片
26051	46, SH3	1区	弥生時代中期後半 (V様式)	金山東 (8%)	金山東	割製片
26052	47, SH3	1区	弥生時代中期後半 (V様式)	金山東 (0.1%)	金山東	割製片
26053	48, SH3	1区	弥生時代中期後半 (V様式)	二上山 (1%)	二上山	割製片
26054	49, SH3	1区	弥生時代中期後半 (V様式)	二上山 (5%)	二上山	割製片
26055	50, SH3	1区	弥生時代中期後半 (V様式)	二上山 (0.4%)	二上山	割製片
26056	51, SH3	2区	弥生時代中期後半 (V様式)	金山東 (13%)	金山東	割製片
26057	52, SH3	2区	弥生時代中期後半 (V様式)	金山東 (0.1%)	金山東	割製片
26058	53, SH3	2区	弥生時代中期後半 (V様式)	金山東 (1%)	金山東	割製片
26059	54, SH3	2区	弥生時代中期後半 (V様式)	岩屋第2群 (59%), 白峰 (20%)	岩屋	割製片
26060	55, SH3	2区	弥生時代中期後半 (V様式)	金山東 (D ² -91)	金山東	割製片
26061	56, SH3	2区	弥生時代中期後半 (V様式)	二上山 (9%)	二上山	割製片
26062	57, SH3	2区	弥生時代中期後半 (V様式)	金山東 (D ² -91)	金山東	割製片
26063	58, SH3	2区	弥生時代中期後半 (V様式)		金山東	割製片
26064	59, SH3	2区	弥生時代中期後半 (V様式)	金山東 (0.1%)	金山東	割製片
26065	60, SH3	2区	弥生時代中期後半 (V様式)	金山東 (8%)	金山東	割製片

れている場合には、この試料はA群に属していないと言わなければならない。このことを数量的に導き出せるようにしたのが相関を考慮した多変量統計の手法であるマハラノビスの距離を求めて行うホテリングの T^2 検定である。これによって、それぞれの群に帰属する確率を求めて、産地を同定する⁽⁴⁾⁽⁵⁾。平方遺跡より出土した遺物の産地推定の結果を第21表に示す。原産地は確率の高い産地のものだけを選んで記した。原石群を作った原石試料は直径3cm以上であるが、小さな遺物試料、例えば0.6cmとすると、原石試料との面積比は1/25になる。このため原石試料と同じ測定精度で、遺物から元素含有量を求めるには、測定時間を長時間掛けなければならない。

しかし、多数の試料を処理するために、1個の遺物に多くの時間をかけられない事情があり、短時間で測定を打ち切る。このため、得られた遺物の測定値には、大きな誤差範囲が含まれ、ときには、原石群の元素組成のパラッキの範囲を越えて大きくなる。したがって、小さな遺物の産地測定を行ったときに、判定の信頼限界としている0.1%に達しない確率を示す場合が比較的多くみられる。原産地(確率)の欄にマハラノビスの距離 D^2 の値で記した遺物については、判定の信頼限界としている0.1%の確率に達しなかった遺物でこの D^2 の値が原石群の中で最も小さな D^2 値である。この値が小さい程、遺物の元素組成はその原石群の組成と似ているといえるため、推定確率は低いが、その原産地と考えてはほぼ間違いないと判断されたものである。

平方遺跡出土のサヌカイト遺物の中で試料番号26017番の遺物は肉眼観察ではサヌカイトではないようで、同定を行っても一致する原産地はなかった。試料番号26017番の遺物を除いて、遺物の原材産地を原産地別に出現する頻度を第22表に示した。二上山群に帰属されたものおよび、岩屋原産地、金山原産地と不明である。金山原産地に帰属されたものは、岩屋原産地からも同じ組成のサヌカイト原石が採取されるため、原産地の判定は岩屋原産地におけるサヌカイト原石の組成別の分類結果の第17表にしたがって判断する必要がある。岩屋第二群の3個を基準にして考えると、金山に判定されるものの中で1個が岩屋産地から採取され、また不明の中の1個も岩屋産と考えられる。従って残りの37個の金山に同定された遺物は、金山原産地から伝播したものと推測された。金山東群に同定された1個の遺物は岩屋原産地からのものと考えられる。結局、二上山群に帰属されたものは16個(27%)岩屋原産地と考えられる物は5個(8%)で、金山原産地は37個(63%)で、不明は1個(2%)となる(第23表)結果を得た。

第22表 平方遺跡出土遺物の原産地別頻度分布

時 代	原 石 産 地 個 数 (%)			
	金 山	二 上 山	岩屋第二	不 明
弥生時代中期 後半(N様式)	38(64)	16(27)	3(5)	2(4)

第23表 岩屋第二群の3個を基準として補正した
各原産地原石の使用頻度

時 代	原 石 産 地 個 数 (%)			
	金 山	二 上 山	岩屋第二	不 明
弥生時代中期 後半(N様式)	37(63)	16(27)	5(8)	1(2)

註

- (1) 藪科哲男・東村武信(1975)「蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定(Ⅱ)」
『考古学と自然科学』8:61-69
- (2) 藪科哲男・東村武信・鎌木義昌(1977)(1978)「蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地
推定(Ⅲ)(Ⅳ)」『考古学と自然科学』10.11:53-81:33-47
- (3) 藪科哲男・東村武信(1983)「石器原料の産地分析」『考古学と自然科学』16:59-89
- (4) 東村武信(1976)「産地推定における統計的手法」『考古学と自然科学』9:77-90
- (5) 東村武信(1990)『考古学と物理学』学生社

第5節 平方窯出土須恵器の蛍光X線分析

奈良教育大学 三辻利一

1. はじめに

胎土分析により土器の産地を推定するためには、生産地が明確にわかる土器が必要である。須恵器の窯跡は全国各地に多数残っており、そこからは夥しい数量の破片が出土する。これらの破片を集めて分析すれば、須恵器の地域差についての基礎データが得られる。このような観点に立って、全国各地の窯跡出土須恵器の蛍光X線分析がはじめられては、20年を越える。既に、筆者の手元には千基を越える窯跡出土須恵器、数万点の分析データが蓄積されている。こうして、K、Ca、Rb、Srの4因子が有効に地域差を表示することが見つけられた。

他方、窯跡出土須恵器に何故、地域差があるのかを研究するため、全国各地の花崗岩類の分析も進められた。既に、筆者の手元には北海道から南西諸島に至るまでの全国各地の花崗岩類の分析データが集積されている。さらに最近では、朝鮮半島の花崗岩類の分析データも出されている。この結果、K、Rbは主としてカリ長石に、また、Ca、Srは斜長石に含まれることが判明した。花崗岩類の地域差は窯跡出土の地域差に対応する場合が多く、長石類因子が須恵器の地域差を表示するのも、花崗岩類と何らかの関連があるものと考えられている。

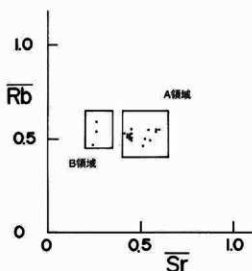
こうして、4因子を使って窯間の相互識別を定量的に行うため、2群判別分析法という統計的手法が適用されるに至った。

こうして、産地推定のための基礎データは着々と集積されてきたが、窯跡の数が多いため、このままではなかなか産地推定には結び付かない。窯の整理が必要となった。そこで、考えられたのが、「窯群の形成」と言う考え方である。同一地域内に多数の窯跡が集中する場合、窯の操業年代に関係なく、そこから出土する須恵器の化学的特性は類似することが各地で見つけられた。この結果、多数の窯は窯群として一括できることがわかった。大阪陶邑群、猿投群などがその例である。

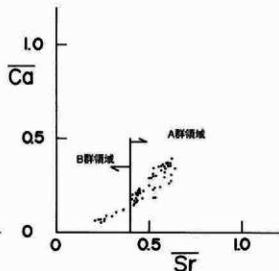
兵庫県は恐らく、全国で最大数の須恵器窯を有する県ではないだろうか。既に200~300基の窯の須恵器の分析データが出されており、相生群、加古川群、魚住群、神出群などの異なる窯群のデータがまとめられている。これらは数10基から100基を越える窯が集中する大規模窯群である。これに対し、南窯群など三田市周辺にも数10基程度の中規模窯群があることが知られている。本報告では三田窯群の中に集約されるとみられる平方窯跡出土須恵器の蛍光X線分析の結果について報告する。

第24表 平方窯群出土須恵器の分析値

	器 種	分析番号	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
1号窯	坏蓋	4860	0.495	0.231	2.44	0.529	0.447	0.178
	坏蓋	4861	0.487	0.197	2.50	0.526	0.406	0.153
	坏蓋	4862	0.484	0.211	2.47	0.522	0.437	0.159
	坏蓋	4863	0.464	0.213	2.62	0.486	0.450	0.132
	坏蓋	4864	0.476	0.214	2.50	0.517	0.427	0.153
	坏蓋	4865	0.505	0.221	2.41	0.548	0.454	0.174
	坏身	4866	0.499	0.206	2.50	0.510	0.436	0.122
	高坏蓋	4867	0.436	0.053	2.58	0.467	0.238	0.069
	短腹甕	4868	0.496	0.061	2.48	0.538	0.260	0.085
	甕	4869	0.409	0.291	2.92	0.456	0.510	0.146
	提瓶	4870	0.514	0.071	2.40	0.590	0.263	0.106
	坏蓋	4871	0.468	0.199	2.50	0.522	0.429	0.143
	坏蓋	4872	0.484	0.215	2.51	0.498	0.451	0.150
	坏身	4873	0.371	0.309	2.50	0.499	0.517	0.162
	甕	4874	0.456	0.374	2.48	0.546	0.589	0.223
	甕	4875	0.419	0.366	2.50	0.537	0.576	0.217
	甕	4876	0.454	0.218	2.48	0.504	0.440	0.163
	甕	4877	0.541	0.370	2.44	0.553	0.595	0.214
	甕	4878	0.440	0.353	2.68	0.492	0.550	0.213
	甕	4879	0.594	0.304	2.68	0.546	0.538	0.156
2号窯	坏蓋	4880	0.472	0.385	2.45	0.542	0.621	0.210
	坏蓋	4881	0.410	0.293	2.83	0.448	0.504	0.157
	坏蓋	4882	0.443	0.174	2.38	0.552	0.444	0.175
	坏蓋	4883	0.470	0.159	2.25	0.596	0.429	0.171
	坏蓋	4884	0.450	0.313	2.83	0.426	0.522	0.164
	坏蓋	4885	0.457	0.180	2.90	0.379	0.412	0.156
	坏身	4886	0.432	0.350	2.82	0.461	0.577	0.172
	坏身	4887	0.452	0.166	2.33	0.551	0.434	0.165
	坏身	4888	0.440	0.177	2.36	0.544	0.465	0.169
	坏身	4889	0.465	0.165	2.33	0.573	0.442	0.163
	坏身	4890	0.462	0.148	2.29	0.566	0.428	0.164
	坏身	4891	0.481	0.236	2.35	0.525	0.529	0.169
	坏瓶	4892	0.418	0.334	2.75	0.474	0.565	0.160
	坏蓋	4893	0.317	0.061	2.52	0.461	0.208	0.102
	坏甕	4894	0.477	0.145	2.31	0.566	0.422	0.169
	甕	4895	0.470	0.217	2.72	0.428	0.472	0.176
	甕	4896	0.448	0.368	2.50	0.534	0.598	0.200
	甕	4897	0.606	0.360	2.46	0.582	0.575	0.204
	甕	4898	0.538	0.119	2.43	0.591	0.372	0.149
	甕	4899	0.561	0.302	2.48	0.620	0.623	0.228
3号窯	坏蓋	4900	0.602	0.274	2.63	0.653	0.624	0.245
	坏蓋	4901	0.578	0.260	2.67	0.638	0.613	0.215
	坏蓋	4902	0.555	0.318	2.39	0.612	0.584	0.223
	坏蓋	4903	0.554	0.109	2.45	0.653	0.324	0.141
	坏身	4904	0.588	0.179	2.99	0.542	0.525	0.164
	坏蓋	4905	0.596	0.244	2.83	0.605	0.560	0.171
	坏蓋	4906	0.490	0.398	2.33	0.580	0.610	0.244
	坏蓋	4907	0.557	0.178	3.08	0.527	0.527	0.137
	坏蓋	4908	0.480	0.357	2.35	0.563	0.596	0.226
	坏甕	4909	0.430	0.250	2.52	0.510	0.498	0.164
	坏甕	4910	0.420	0.083	1.97	0.577	0.299	0.106
	坏甕	4911	0.479	0.380	2.33	0.561	0.613	0.241
	坏甕	4912	0.457	0.344	2.42	0.541	0.587	0.212
	甕	4913	0.593	0.230	3.00	0.558	0.533	0.169
	甕	4914	0.531	0.286	2.50	0.606	0.584	0.222
	甕	4915	0.520	0.066	2.51	0.573	0.234	0.103
	甕	4916	0.430	0.345	2.73	0.481	0.518	0.219
	甕	4917	0.539	0.341	2.44	0.611	0.639	0.247
	甕	4918	0.516	0.067	2.39	0.589	0.235	0.103
	甕	4919	0.546	0.091	2.50	0.581	0.269	0.106



第86図 平方1号窯出土須恵器の
Rb-Sr分布図



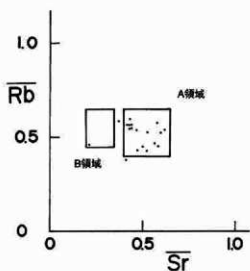
第87図 Ca-Sr相関図

2. 分析結果

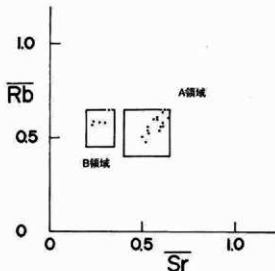
全資料の分析値は第24表にまとめられている。これらのデータのうち、Rb、Srの分析値をとり出して分布図を作成した。Rb-Sr分布図は各地の須恵器の地域差を有効に表示する分布図として知られる。第86図には平方第1号窯の須恵器のRb-Sr分布図を示す。この図には平方A領域とB領域を示してある。これらの領域は1～3号窯のほとんどの須恵器をそれぞれ包含するようにして描いたものである。勿論、定量的な領域を示すものではなく、定性的な領域である。それでも、他の窯の須恵器と比較したり、また、後述するように、平方窯群内での偏在を示すうえには有効である。また、通常なら1つの窯群は1つの領域しかたないが、平方窯群ではCa、Sr量の少ない須恵器が少数あり、これが1つの領域を示すことがわかった。

第87図には全試料のCa-Sr相関図を示す。全国の花崗岩類や粘土(須恵器を含めて)について、CaとSrの間には正の相関性があり、右上がりの直線に沿って各試料は分布することが知られている。第87図でもそのことがわかる。第87図ではSrの値が0.4を一応、境界線としてみると、全試料のうちCa、Sr量が多いものが多数派を占め主成分となるので、これをA群とし、少ない方の少数派をB群とした。このような訳で、第86図に示すように平方第1号窯にはA群、B群の2型式の胎土があることがわかった。B型は大阪層群の粘土に類似した特性をもつ。

第88図には第2号窯の須恵器のRb-Sr分布図を示す。2号窯では1点のみがB領域に分布するにすぎず、他はA領域にほぼ均等に分布していることがわかる。第86図、第88図の比較から、第1号窯と第2号窯の須恵器の化学特性はほとんど同じであることがわかる。勿論、他の因子も類似していることは表24からもうかがえる。



第88図 平方2号窯出土須恵器の
Rb-Sr分布図



第89図 平方3号窯出土須恵器の
Rb-Sr分布図

第89図には3号窯の須恵器のRb-Sr分布図を示す。5点がB領域に分布しているが、他はA領域に分布する。その分布の仕方はA領域のやや右上部分に偏在しており、3号窯の須恵器の化学特性は1、2号の須恵器に比べて、やや異なることがわかる。しかし、いずれもA領域内に分布しており、A領域こそ平方窯群領域といえよう。この領域はほぼ、南窯群の領域に対応しており、いずれは三田窯群として集約されるものと思われる。ただ、少数ではあるが、Ca、Sr量の少ない平方B群があることは今後、産地推定を行う上に注意を要する。

第8章 第6節は
公開していません

**第6節 平方遺跡出土の遺物にかかわる赤色顔料物質の微量化学分析ならび
に同遺跡出土土器の胎土の化学分析**

武庫川女子大学薬学部

安田博幸 金杉真子

第7節 平方遺跡出土ガラス玉の科学的調査

奈良国立文化財研究所 肥家隆保

1. はじめに

遺跡から出土するガラス製遺物は小形のものや破片も含めると全国で百万点以上に及ぶと推定できる。しかし、現在まで自然科学的な調査結果の公表は数百点にすぎず、ガラス材質から考古学的考察をすすめるにはあまりにも少ないデータである。

今回の平方遺跡の調査では弥生時代中期のガラス玉が出土したため、材質に関する分析調査を行った。

2. 測定および調査試料

平方遺跡竪穴住居跡SH2から出土した弥生時代中期後半のガラス小玉を調査対象とした。

3. 測定および調査方法

(1)蛍光X線分析

貴重な考古資料を分析するには、非破壊方法が最も望ましい事は言うまでもない。しかし、従来からの蛍光X線分析方法では、X線照射時に着色中心をひきおこし遺物を変色させる可能性があり、非破壊分析を困難にしていた。今回は新しく開発された微小領域ED蛍光X線分析装置を用いた研究でこれらを克服することができたので、当遺跡出土の遺物に適用した。また、本装置は0.5mm角程度の試料でも分析出来るので、広範囲の遺物について適用可能となる。測定条件の概要は以下に示す。

X線管：Mo X線管電圧：50Kvp X線管電流：3mA

検出器：SSD Si (Li) 計数時間：1000sec

コリメーター：300 $\mu\phi$ 条件 :真空

なお、定量計算はF P法により、標準試料としてはアルカリ石灰ガラスおよび鉛ガラス標準試料6種類と標準岩石試料2種類をもちいた。また、あらかじめICP等により測定した試料をもちいて分析値の精度の確認をおこなった。

4. 結果と考察

(1)蛍光X線分析の結果

平方遺跡から出土した空色透明～半透明のガラス小玉はK成分に富むカリ石灰ガラスである。

従来から公表された日本で出土する弥生時代のガラス玉類は、現在のところすべて今回の試料と同様のカリ石灰ガラスである。ただし例外的なものとして、岡山県百間川遺跡(弥生時代)出土のガラス滓と称するガラス物質は、Al成分に富むソーダ石灰ガラスである。現在のところ

ろ弥生時代出土のガラス玉類の分析例は少なく、今後、分析点数を増やして材質上の再検討が必要である。

今回の分析値はKの13.30%KOで、Ca含有量は0.55% CaOである。いささかCa含有量が少ないように思えるが、内場山遺跡(兵庫県)や須久岡本遺跡(福岡県)、登呂遺跡(静岡県)、大山墳墓群(京都府)、二塚山遺跡(佐賀県)など同様な結果を示している。韓国で出土したカリ石灰ガラスの分析例では、このようにCa成分が少ない遺物は現在のところ報告されてない。ただし、いずれも分析例が少なく比較検討するにはデータが少なすぎる。

なお、これらのガラス遺物の着色は銅イオンを中心に着色されており1.63%CuOである。その他鉄イオンやマンガンイオンも関係しており、それぞれ0.47% [Fe₂O₃] および0.38% [MnO] である。

第8章 第8節は
公開していません

第 8 節 平方遺跡出土炭化材の樹種

嶋倉 巳三郎

第9節 小結

平方遺跡群では遺跡を理解するため前記の分析を行い結果を得た。

1. 年代測定

放射性炭素による年代測定と考古地磁気による年代測定を行った。

この結果2号室では放射性炭素による年代は、西暦1950年から1590±75yB.P. 逆のはる年代が与えられ、これが70%の確率であるとのことである。

これに対して考古地磁気の年代は西日本の永年変化関係からA.D.580±10という結果が出された。

以上の2つの結果は大きくへだたったものであり、解決しておかなければならない。

ここで平方2号室出土の須恵器を考慮してみることにする。2号室出土の須恵器は第9章でもふれたように現在の考古学的成果からすれば、6世紀末に位置付けられるものである。したがって、考古地磁気の年代に極めて近いものになる。

ただし、放射性炭素による年代測定は自然科学的な年代決定法のうち最も信頼性の高い方法の1つとして定着している。このため測定方法の信頼性ではなく、試料の信頼性という問題ではなかったかと考える。

したがって、今回放射性炭素を測定した平方2号室、平方2号墳の年代は参考にしない。考古地磁気を測定した3基の窯はほぼ考古学的年代とも付合しており整合性が得られた。ただしSH1・2の年代は考古学的年代より新しくでており、あまり焼けていなかったことから考古学的年代との整合性が得られなかったと考える。

2. 産地分析

産地分析として石器石材からサヌカイトを選び行った。これによると金山原産地が63%、二上山群が27%、岩屋が8%という結果を得た。これは、通常摂津地域においては弥生時代中期後半(IV様式)になると金山より二上山が多数を占めることが一般的であることと一致しない。しかし、これは神戸市北区(塩田遺跡)¹¹⁾の分析結果とのつながりから考えても矛盾するものではないし、摂津の範囲に含まれるが、摂津中央部とは離れた山間部であり、播磨とのつながりで考えてみる必要性もある。

そこで弥生土器の胎土分析を試みた訳であるが、多くは川除・藤ノ木遺跡¹²⁾と同様に三田の領域に含まれるものであるが、何点かは播磨との関係で捉えられるものも見受けられ、また土器の様相からも播磨的な要素も見られるため、土器・石器石材からは西方的な要素も含まれていることが科学的に証明できた。

このことは、三田盆地の弥生時代中期後半の高地性集落の性格を意義付ける上で、重要である。

平方室出土の須恵器胎土の蛍光X線分析ではCa、Srの量で大きく2群に分類された。これ

で平方窯独自の分析値を提示できた。ただし相野窯群領域³⁾にほとんど包括がされるため、近隣の窯跡との比較は困難を要する。今後は他の生産地との比較を行い、さらに集落や古墳などの消費地での分析が必要となった。ただし、大きく2群に分かれるため、胎土の蛍光X線分析などの科学的なもの、考古学的な諸要素の検討を合わせて行う必要がある。

3. 材質分析

材質分析は弥生土器の赤色顔料と、SH2出土ガラス小玉の材質分析を行った。また、古墳時代の2号墳、2号窯の炭化材の樹種同定を実施した。

赤色顔料分析は、近畿地方の弥生時代中期では珍しい赤色顔料の塗布された無頸壺について行った。SH3・5出土の無頸壺は、いずれも水銀系ではなく、ベンガラであることが判明した。

SH2出土のガラス小玉はカリ石灰ガラスで、銅イオンを中心に着色していることが判明した。弥生時代のガラス玉の分析例は少ないようであるが、他遺跡と同様な結果が得られた。

古墳時代炭化材樹種の同定は、いずれも構築材として用いられたものを実施した。

平方2号墳の横穴木室の架構材に使用された炭化材の樹種はすべてスギであることから、意識的にスギを選んで使用したと思われる。このことは、加東郡社町の名草3・4号墳⁴⁾や静岡県北山遺跡A2号墳⁵⁾の横穴式木室の架構材もすべてスギであることから看取し得る。

また、2号窯の天井架構材はカシ類が主で、他にカエデ類、カマツカ？、リンボクなどの散孔材で、いずれも広葉樹である。このことは、利用に際しては手近な広葉樹を選んだもので、天井を架構するのに湾曲させやすいなどの理由によるものと思われる。今後、半地下式の窯を復原する時の参考の一部となるであろう。このような半地下式の窯の天井架構材の検出例は少なく、今後の類例が増加すれば、選材理由も解明されるであろう。

註

- (1) 藁科哲男・丸山 潔・東村武信「サスカイトの流通からみた摂播国境地域の交流関係」『昭和61年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1989年
- (2) 安田博幸・森真由美「川除・藤ノ木遺跡出土土器の胎土の化学分析」『川除・藤ノ木遺跡』兵庫県教育委員会1992年
- (3) 三辻利一「相野窯跡群の須恵器の化学特性」『相野古窯跡群』兵庫県教育委員会1992年
- (4) 鶴倉巳三郎「名草3号墳・4号墳から出土した木炭の樹種」『名草3号墳・4号墳』加東郡教育委員会1984年
- (5) 浅羽町教育委員会『北山遺跡』1987年

第9章 小 結

第1節 弥生時代

1. 弥生集落の構成

平方遺跡では集落の全域が全て調査されたわけではない。しかし調査した範囲での特質について若干検討したい。

弥生時代の主な遺構は、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、方形住居状遺構、段状遺構がある。竪穴住居跡には円形のもの、隅丸方形のものが存在する。以上の遺構を立地の上から検討してみたい。

平方遺跡の立地は武庫川右岸の丘陵上の平坦面とその南側に広がる斜面から成る。平野部との比高差は60mを測る。平坦面の遺構には、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、方形住居状遺構が存在する。斜面には、竪穴住居跡、段状遺構が存在する。平坦面に立地する竪穴住居跡は、円形(SH1、3)と隅丸方形(SH2)とがある。斜面の竪穴住居跡は隅丸方形(SH4、5、6、7)のみである。また平坦地では同一場所に建て替えがあるのに対して、斜面のものは建て替えない。規模は平坦地のものが65㎡～23㎡程度と大きいのに対して、斜面のものは推定で23㎡～15㎡程度と小さい。以上の点を考え合わせると、平坦面は同一場所で規模の大きい竪穴住居を建て替えるのに対して、斜面では小規模の竪穴住居を建てるという傾向が読み取れる。また掘立柱建物跡は、1間×3間という桁行が長い弥生時代特有の掘立柱建物跡であるが、柱掘形の規模からして、高さのある建物とは考え難い。ただ尾根の先端の見晴らしの良い場所に立地していることは、注意を要する。方形住居状遺構(SH8)は奈カリ与遺跡¹⁾と同様に平坦地に立地しており、中国山地などでも例があり、工房的な要素が考えられている。

平方遺跡は機能が異なるであろう大、小の円形、方形の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、段状遺構などの各種がそろった高地性集落といえる。

2. 弥生土器について

平方遺跡出土の弥生土器は、完形のは少なく、しかも丘陵上に立地しているため、土器の表面の遺存状態は悪い。出土した土器の器種は、広口壺、短頸壺、無頸壺、大・中・小の甕、水差し、鉢、高坏、器台などがある。これらの弥生土器のうち、壺、甕、高坏、器台の口縁や壺の頸部、器台の脚部には凹線文を盛用している。また壺や甕の内面や脚部にはヘラケズリを多用している。また甕の口縁部が拡張するものが多い。以上の特徴がみうけられる。このような特徴は奈カリ与遺跡と同様であり、弥生時代中期末(N様式後半)に位置付けられる。

3. 鋳型について

SH2・3から出土した鋳型は土製で、掘削時のキズを除けばほぼ完全な1対の鋳型である。鋳型Bは出土状況からみれば、SH2とSH3に分かれて出土しており、新しく割れたもので

はなく、かなり古い時期に割れたものと考えられる。鋳型の時期的位置付けは、SH2の床面近くから鋳型Aが出土したり、鋳型Bの一部もSH2から出土している。このことを考えると、SH2の時期と考えられるが、SH2より古いSH3の埋土から鋳型Bの一部が出土している。従ってこのことを重視すれば、SH2よりSH3により近い時期に位置付けられよう。

さて、この鋳型は本当に鋳型なのか、鋳型形土製品なのか、小銅鐸の鋳型なのかという問題が提起される。まず、最初の問題であるが、土製品であるという立場にたてば、本来銅鐸では守られるべき基本的な文様構成—たとえば鱗や地下横帯の鋸歯文の向きが逆であるとか、側縁縦帯が省略されているとか—が備わっていないという問題である。これは、銅鐸の鋳型という点ではおかしいが、小銅鐸であればおかしくない。鋳型であるという立場にたてば、二次的焼成が肉眼で観察できないこと、また鋳型面に刻まれた文様に刻彫がなく、鮮明であることからして未使用であるという問題点である。また、型合せの刻みも存在しない。この点は未使用の鋳型であること、また中子の破片も出土していることから考えれば、鋳型として作られたと考えられよう。

これを鋳型と考えた場合、銅鐸なのか小銅鐸なのかという問題について考えてみる。銅鐸は、ある一定の大きさで企画された文様構成を持つ。これに対して小銅鐸は、基本的に銅鐸より小規模であり、文様は無文もしくは簡単な文様が施されるのみである。以上の観点に立ってこの鋳型から作られたであろう製品を考えてみると、全長8.6cm、鐸身長6.0cmの4区袈裟襷文に復原できる。文様は鱗の鋸歯文が、A面では外向きであり、B面では存在しない。身の側縁縦帯が省略されていること、下辺横帯の省略や、鋸歯文が下向きになっていることなどである。したがって、小銅鐸の鋳型と考えられる。

この鋳型から作られた小銅鐸を年代的に考えてみる。

九州を除いた地域での小銅鐸の年代をみてもと弥生時代後期から古墳時代前期に位置付けられている。このような年代観からみれば平方出土のものは小銅鐸の古い段階に位置付けられよう。これは、朝鮮式小銅鐸から小銅鐸へという系譜の他に銅鐸から銅鐸を模した小銅鐸→簡略化した文様をもつものもしくは無文の小銅鐸へという系譜が考えられる。

以上平方遺跡から出土した製品は4区袈裟襷文銅鐸を模した未使用の小銅鐸の鋳型であると考えられる。

第2節 古墳時代

1. 古墳時代集落について

古墳時代の竪穴住居跡は平方遺跡で4棟、平方西遺跡で2棟検出した。平方遺跡での竪穴住居の特徴はすべて須恵器窯の脇もしくは近くに立地していることである。これは竪に非常に関係があるものと考えられる。

まず住居跡の構造について考えてみる。一辺4～6m前後の方形の住居跡で、小ぶりである。一辺には竈を作り付けており、SH12竈右手の床面には土師器甕の上半部が埋め込まれていた。出土遺物の特徴は、須恵器蓋坏に青褐色の軟質や生焼けのものが多くみられることである。また、SH10からは通常の住居ではあまり出土しない横瓶が出土したりしていることである。なお、粘土や未調整のものは出土していない。

また、竪穴住居の主軸方位や古墳は、地形に添っているのではなく、竪に合わせた方位をとっている。つまり、竈と竪穴住居の主軸方位は大きく2群に分かれるのである。一つはN-27°～36°-Wの3号竈と、SH9、SH12、SB2、1号墳・2号墳のA群。一つはN-60°～72°-Wの1・2号竈とSH10、SH11のB群である。また平方西遺跡も同様に考えるならば、3号竈と同じA群に分けられる。このことは、平方遺跡、平方西遺跡での古墳時代の竪穴住居は竪に付随したものであり、工人の作業空間、生活空間であった可能性が高い。この方位の違いは時期の差である可能性が高い。

さらに、3号竈脇のテラスには竪穴住居跡SH12と掘立柱建物SB2が併設しており、工人の作業・生活空間である竪穴住居と、作業・保管空間である掘立柱建物が同時に検出できた良好な一例である。この空間は竈を開削すると同時に斜面を切り出し、下方に盛土している大規模な造成工事であったことが窺える。

2. 竈跡群について

平方竈跡群は調査したもので3基の竈跡から成り立っている。周辺は既に削平されていた。竈の存在する地形が、さらに周辺に続いていた。従って、平方竈跡群を考えていく上には、調査した3基以外の存在の可能性も考慮していかなければならない。分布調査跡²⁾においては平方竈以外にも、同じ谷の入口に位置する西山竈や、さらに南側の2つめの谷に位置する五郎谷竈が考えられていた。ここでは竈壁や、竈壁が付着した須恵器が採集されている。以上のことから、武庫川右岸北摂三田ニュータウン内に存在したであろう竈跡群を総称して北摂三田ニュータウン内竈跡群と仮称して、論を進めていきたい。

平方竈跡群の生産須恵器の供給先は三辻氏の蛍光X線分析による産地同定によると、南領域として広域で同様の科学的特性をもつものとされている。従って、竈跡群の肉眼による胎土や形態、技法など考古学的な手法により、判断せざるをえない。幸い平方竈跡群の須恵器の胎土中の砂粒の多さや、ヘラケズリの方法、坏の受け部や立ち上りの形態など特徴的なものが目

立つ。この様な観点で、三田市内出土の似たような時期の須恵器を観察してみることにした。

三田市内には同窯から出土する該当時期の須恵器は少ない。古墳は市内に多く存在しており、中でも高川古墳群³⁾、中西山古墳群、西山古墳群⁴⁾と、奈良山古墳群などが調査されている。この中で高川古墳群出土の須恵器には、平方窯跡群の特徴的な胎土や形態技法などはほとんど存在していない。これは平方窯が地理的に離れていることが原因と考えられる。武庫川上流左岸には5世紀の群塚窯⁵⁾があり、他にも窯の存在が考えられるからである。

中西山、西山、奈良山の各古墳群からの出土須恵器は、西山古墳群出土須恵器中には多量の生焼け品が出土しており、通常古墳の副葬品とは様相が異なる。また西山1号墳出土の大甕⁶⁾は平方3号窯出土の277の甕とサイズや口頭部の文様構成、口縁端部の形態、タキヤアテ具の痕跡がまったく同一である。蓋坏も同時期のものは形態・技法等類似するものが多い。奈良山7号墳⁷⁾出土須恵器についても同様なものがみられる。

さて、ではいつ頃まで北摂三田ニュータウン内窯跡群の生産開始は通るのであろうか？西山古墳群内のやや古相の須恵器を観察したところ、6号墳⁸⁾の中盟主とでもいふべき埋葬施設6出土の須恵器蓋坏が、胎土、技法などから平方窯に類似し、しかも古い様相をもっている。このことから、北摂三田ニュータウン内での須恵器生産開始の時期は、6世紀中葉を想定したい。つまり、西山6号墳の被葬者がこの地に移転してきた際、あるいは一族の死に際して、須恵器を作る工人を連れて来たのではないかと考えられる。つまり、6号墳の被葬者は全長32mといえども前方後円墳を築き、金銅冠を頭に載せるだけの身分があったのである。従って、多くの職掌工人をかかえるだけの力があったのは当然である。ただ、どこから工人を連れて来たかという問題についてはさらに細かい検討を要する。今後の課題としたい。

次に北摂三田ニュータウン内窯跡群の終焉の問題について考えてみる。西山古墳群では平方窯より新しい古墳が存在し、須恵器が出土している。ただし、平方1号窯以降は坏身と坏蓋が逆転し、底部のヘラ切りの後の調整のヘラケズリが省略されるなど大きな形態と、技法の変化が起こってくる。従って非常に比較が困難となってくる。ここでは1号窯より新しい窯が存在したであろうことを考えるにとどめておきたい。通常の窯跡群の変遷を見ていくと、谷の入口から谷の奥へ変遷していくことを考えれば、谷の最も奥に立地している平方窯跡群は新しい時期に設定できると考えられる。ただし、平方遺跡群周辺は発掘調査されずに開発が行なわれたため、平方窯跡群が調査されたのみで、他はあくまでも想定にすぎない。

3. 須恵器窯の構造について

平方窯跡群の3基の構造について考えてみる。まず立地は3号窯が斜面の中腹、1号・2号窯が斜面最上部の平坦地に変換する地点に立地している。これはそのまま窯の構造の違いにも現れている。3号窯は地下式と考えられ、左手には窯尻から窯体に添って溝が延びている。1号・2号窯は後世の開発によって多くを削平されているが、立地から考えて半地下式の構造である。

事実2号窯では、天井部の構架材が窯体の側壁から出土している。規模は3号窯が全長9.1mで、1号、2号窯は、削平されて不明であるが、残存部分の状況からみて、ほぼ同規模であると考えられる。焼成部平均傾斜角は3号窯が28°、1号、2号窯が20°と傾斜が緩くなっている。これが2号で多くの製品が焼成不良として生焼けであった原因であろう。

3号窯の地下式窯口は窯尻から窯体右側に溝が取り付いている。これには排水溝、焼成効率及び温度上昇を図るための送風施設等と考えられている。平方3号窯でも窯尻が良く焼けており、送風施設との考えも肯定できるが決定的な証拠はない。同様な施設を持つ窯は北陸、東海、近畿、中国、九州にみられ、時期も6世紀末から7世紀前半の限られた時期にみられる。この中で今回の平方3号窯の時期は初濶的ともいえるものであり、その系譜、機能が問題になるであろう。

2号窯の側壁からは半地下式の天井部の構架材が出土しており、秋田県で5基が調査されているが⁶⁶⁾、類例が少ない調査例として貴重である。今後、調査の際は注意が必要である。

4. 須恵器の時期

平方窯跡群の3基の調査を行った。その変遷は、第5章でも述べたとおり、3号窯から2号・1号窯への変遷を考えた。ここでは須恵器坏の法量や技法から変遷と年代を考えてみる。

坯蓋の口径は3号が13.5cm～15.4cmで平均14.3cm、2号が12.4cm～15.3cmで平均14.1cm、1号が12.7cm～14.1cmで平均13.3cmと3号の口径が一番大きく、2号・1号と小さくなっている。

坯身の口径は3号が11.7cm～13.6cmで平均12.7cm、2号が11.3cm～13.3cmで平均12.2cm、1号が10.9cm～12.7cmで平均11.8cmと3号の口径が一番大きく、2号・1号と小さくなっている。

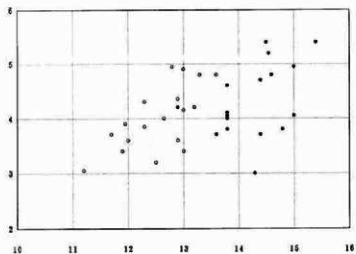
坯蓋の器高は3号が3.7cm～5.4cmで平均4.4cm、2号が3.1cm～4.3cmで平均3.6cm、1号が3.3cm～4.2cmで平均3.8cmと3号の器高が一番大きく、1号・2号がほぼ同じである。

坯身の器高は3号が3.1cm～4.9cmで平均4.0cm、2号が3.2cm～4.6cmで平均3.8cm、1号が3.3cm～4.5cmで平均3.9cmと3号の器高が一番大きく、1号・2号がほぼ同じである。

坯蓋・坯身の調整技法は1・2・3号窯のもの全てが蓋天井部外面と身底部外面をヘラケズリをしている。ただし、蓋天井部内面と身底部内面の仕上げナデは2・3号窯のものは行われているが、1号のものは省略されている。

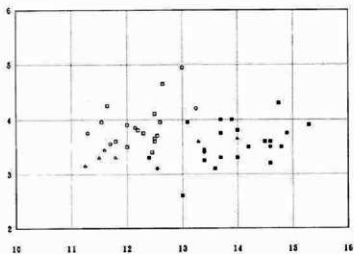
以上のように、坏の口径や器高の変遷や坏内面の技法から3号・2号・1号へと変遷していることが明らかであった。このことは、窯の立地や構造から考えられる変遷とも矛盾しない。

平方窯の操業時期は、須恵器の器種構成や形態、法量・技法から、田辺編年のTK43～TK209、中村編年のⅡ-4～Ⅱ-5期、木下編年のⅡ-4期に比定できる。年代は飛鳥寺下層の資料や準上り瓦窯資料から、6世紀第4四半期の範疇におさまるものと考えられる。これは地



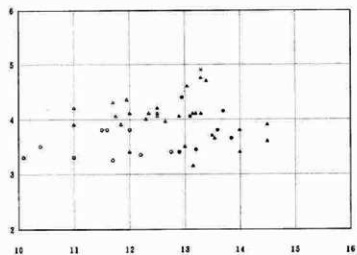
第91图 平方3号窟须惠器环·
盖 口径/器高比

○青环身 ●青环盖



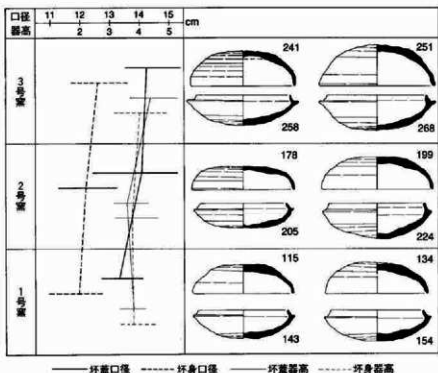
第92图 平方2号窟须惠器环·
盖 口径/器高比

○青环身 ●青环盖 △褐环身
▲褐环盖 □赤环身 ■赤环盖



第93图 平方3号窟须惠器环·
盖 口径/器高比

○青环身 ●青环盖 △褐环身
▲褐环盖



第94図 平方窯須恵器器蓋坏の変遷図

磁気による年代測定とも矛盾しない。

5. 須恵器の比率

平方窯跡群は3基の窯から構成される。須恵器の出土状況は灰原が削平されていたため、窯体内の遺物しか出土していない。このためこの窯で焼かれた須恵器の実体を示すものではないが、各窯の出土須恵器の器種別の比率を見ることにする。

各須恵器窯からは須恵器坏身・坏蓋・壺・壺蓋・高坏・高坏蓋・提瓶・横瓶・甕などが出土しており、窯によっては出土していない器種も存在する。

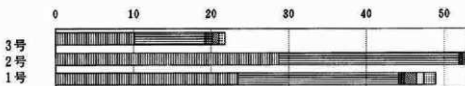
器種の比率は口縁部の延長から個体数を出す方法と重量を量り重量比率を割り出す方法の二種類で行った。口縁部計測法で行った結果は坏身と坏蓋を合わせて9割近くの比率があったが、重量計測法で行った結果は4割前後の比率であり、大きな差が存在する。反対に甕の比率は横瓶も含めて口縁部計測法では1割にも満たないが、重量計測法では4～6割の比率がある。これは甕の出土部位の差がこれらの比率に影響を与えている。つまり甕は体部の破片がほとんど

第30表 口縁部計測法による須恵器の器種の比率(単位%)

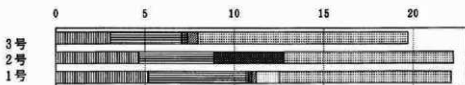
	坏身	坏蓋	壺	壺蓋	高坏	高坏蓋	提瓶	横瓶	甕	総個体数
3号窟	46.3	41.7	4.6	—	3.7	—	—	—	3.7	21.8個体
2号窟	54.4	44.0	—	—	—	—	—	1.0	0.6	52.7個体
1号窟	48.0	42.3	0.6	0.8	—	3.3	1.9	—	3.1	48.9個体

第31表 重量計測法による須恵器の器種の比率(単位%)

	坏身	坏蓋	壺	壺蓋	高坏	高坏蓋	提瓶	横瓶	甕	総重量
3号窟	15.5	20.3	1.7	—	2.9	—	—	—	59.6	19.715kg
2号窟	20.9	18.9	—	—	—	—	—	17.6	42.6	22.253kg
1号窟	23.4	24.8	0.6	0.9	—	1.1	5.8	—	43.4	22.116kg



第95図 口縁部計測法による須恵器の器種比率(個体)



■坏身 ■坏蓋 ■壺 ■壺蓋 ■高坏 ■高坏蓋 ■提瓶 ■横瓶 ■甕

第96図 重量計測法による須恵器の器種比率(kg)

であり、口縁部の破片の出土数が極端に少ないからである。

ちなみに口縁部計測法で行った個体数と重量計測法で行った総重量は3号が21.8個体、19.7kg、2号が52.7個体、22.2kg、1号が48.9個体、22.1kgであった。

6. 横穴式木室について

平方遺跡群では2基の横穴式木室墳を調査した。古墳の築造年代は、わずかな須恵器から6世紀後半から7世紀前半の範囲と考えられる。このことは、須恵器窯の操業時期や古墳時代集

落の時期と重なり興味深い。これは先に述べた方位性を比べて見れば、N-34°-Wで、A群に含まれることも注目される。横穴式木室は同じ谷で調査を実施した、西山古墳群2号、13号、18号墳の3基も合わせると、近接して5基調査しており、調査せずに消滅した古墳も想定すれば、横穴式木室墳の密度の高い地域の1つとなる。2号墳は火化されており焼けた骨が出土している。被葬者の性格は、遺物が少なく検討できない。

横穴式木室の構造は2号墳から炭化した材が出土している。炭化材は分析の結果すべてスギであり、建築材として適したものを使用しており、それなりの構造をしていたものと考えられる。

第3節 平方城について

平方城は遺構として、土塁・堀切り・平坦地を検出している。しかし、平方城に確実に伴う遺物は確認できなかった。したがって、平方城の位置付けを、他の山城の調査例から検討することにする。

北摂ニュータウン中央地区内では他に釜屋城^①、中西山城が調査されており、16世紀後半に位置付けられている。特に隣接している中西山城とは立地、構造、規模が良く似ており、同様の位置付けも許されよう。

これらは、いずれも弥生時代中期後半(IV様式)の高地性集落と重複しており、興味深い共通点である。

注

- (1) 兵庫県教育委員会「北摂ニュータウン内遺跡調査報告書」Ⅱ 1983年
- (2) 兵庫県教育委員会「北摂ニュータウン計画地域内埋蔵文化財分布調査遺跡地図及地名表」第1・2集 1970・1971年
- (3) 兵庫県教育委員会「高川古墳群」 1991年
- (4) 三田市教育委員会「北摂ニュータウン内遺跡調査報告書」Ⅰ 1983年
- (5) 兵庫県教育委員会「青野ダム建設に伴う発掘調査報告書(1)」 1987年
- (6) 桜田 隆「須恵器窯の調理・天井架構材について」『研究紀要』第6号 秋田県埋蔵文化財センター 1991年
- (7) 田辺昭三「陶邑古窯址群Ⅰ」平安学考古学クラブ 1966年
- (8) 中村 浩「陶邑Ⅲ」『大阪府文化財調査報告第30輯』 1978年
- (9) 木下 亘「摂津桜井谷古窯跡群における須恵器編年」『桜井谷窯跡群2-17窯跡』少路窯跡遺跡調査団 1982年
- (10) 奈良国立文化財研究所「飛鳥寺発掘調査報告」『奈良国立文化財研究所学報第15冊』1958年
- (11) 菱田哲郎「畿内初期瓦生産と工人の動向」『史林』第69巻第3号 1986年

第4節 発掘調査に於ける遺物の採集について

1. はじめに

今回の平方遺跡の発掘調査において確認調査の段階から、サヌカイトなどの石器や剥片が多量に出土することが想定された。また昭和62年度の中西山遺跡の発掘調査において電動フルイを使用し、かなりの成果がでた。このため全面発掘調査の当初から、人力掘削の排土を再度電動フルイを補助的に使用した。この結果人力掘削において、あまりにも多くの遺物を見逃している事が判明した。そこで恥をしのいで、結果を公表することにする。公表することによって、今後の調査方法と、出土遺物の理解に役立てたいと思う。

2. 方法

発掘調査はSH2・3においては発掘以前から堅穴住居跡の痕跡が明瞭に識別できたため、当初から人力による手掘りで調査を実施した。この人力掘削は手バチと手スコと手ガリなどの小道具を使用して掘削し箕を用いて排土した。この排土を電動フルイにかけて微細遺物を採集した。

3. 使用機種

フルイのメッシュは1辺4mmの電動フルイを使用した。

4. 結算 (第97図)

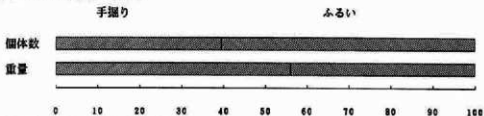
電動フルイを使用することによって得られた遺物は土器、石器、石器石材などがある。この中で数量的にあらわしやすい石器石材の内、比較的多量に出土しているサヌカイトを選び、統計処理を実施した。統計は手掘り掘削で採集したものと電動フルイを用いて採集したものを点数と重量について比較した。

SH2・3で出土したサヌカイト類は総数4908点、重量2158.71g出土した。1点あたりの平均重量は0.44gを測る。この内手掘りで採集したものは、1936点で重量1210.59gを測り、1点あたりの平均重量は0.62gを測る。電動フルイを用いて採集したものは、2972点で重量948.12gを測り、1点あたりの平均重量は0.32gを量る。

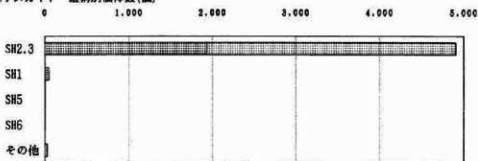
5. 分析

以上の結果を分析すると、個体数は手掘りで採集したものの39%、フルイを用いて採集したものの61%と前者より後者がはるかに多い。しかし、逆に重量では手掘りで採集したものの56%、フルイを用いて採集したものの44%と前者が後者より多い。これは平均重量をみればより明確になる。手掘りで採集した平均重量は0.63g、フルイを用いて採集した平均重量は0.32gと前者は後者の2倍の重量を量る。つまり数字的にみれば、かなり多く手掘りで採集ミスをしているように見えるが、手掘りにおいては微細なサヌカイトは採集出来ていないことが判明した。この数字をみればある程度、人間の能力の限界として理解してよいのではないであろうか。

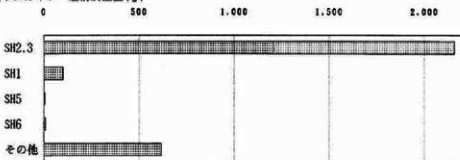
(1)SH2・3出土サヌカイト



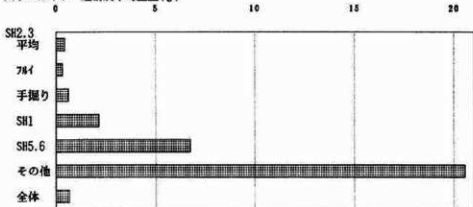
(2)サヌカイト 遺構別個体数(個)



(3)サヌカイト 遺構別重量(g)



(4)サヌカイト 遺構別平均重量(g)



第97図 平方遺跡出土サヌカイトの分析

SH2・3で出土したサヌカイトと他の遺構などとの比較を行ってみることにする。SH5・6は各1点づつしか出土していないので比較できない。SH1は比較的多く出土しているので比較・検討してみたい。SH1からは総数47点、重量100.09g出土した。1点あたりの平均重量は2.13gを測る。SH2・3と比較すると1個当りの平均重量が重い。これは遺物の性格や遺構の性格によるものが大きな要因と考えられる。しかし、他にSH2・3では手掘りした後の排土をフルイにかけているという緊張感などの精神的要因も大きかったのではないかと考えられる。

他の遺構および遺構外出土のものは30個と個体数は少ないものの、重量は616.59gあり、平均重量は20.5gを量る。他の住居跡などの遺構と比較すると傑出していることが判る。これは調査方法によるものであると考えられる。住居跡などの遺構は小道具を用いて発掘を行うが、遺構外は表土を重視で除去し、包含層や遺構検出時には大道具を用いて発掘することから理解できる。当然の結果であろう。

6. 今後の課題

今回の発掘調査では思った以上に遺物が多量に出土したため、他の遺構との比較ができなかった。参考までに他の遺構での人力掘削によるサヌカイトの出土量を提示し、改めて今回サンプルとしたSB2・3の出土量の多さに驚くであろう。これは電動フルイを用いなくても多量である。

今回は偶然にも多量の遺物が出土する遺構で使用したが、1箇所の遺構のため比較検討を行っていない。もし仮にどの遺構を調査しても、人力掘削においてこれほど高い未採集率を数えるのであれば、調査方法を再考しなければならないであろうし、今まで石器の点数などで石器の組成を考えているものは、石器の大小を考慮しなければならないであろう。

土質による採集率も異なってくるであろう。現に冬場の調査であったため凍りついて融けた水分を含んだ土からは比較的少量の遺物が電動フルイにおいて採集される。

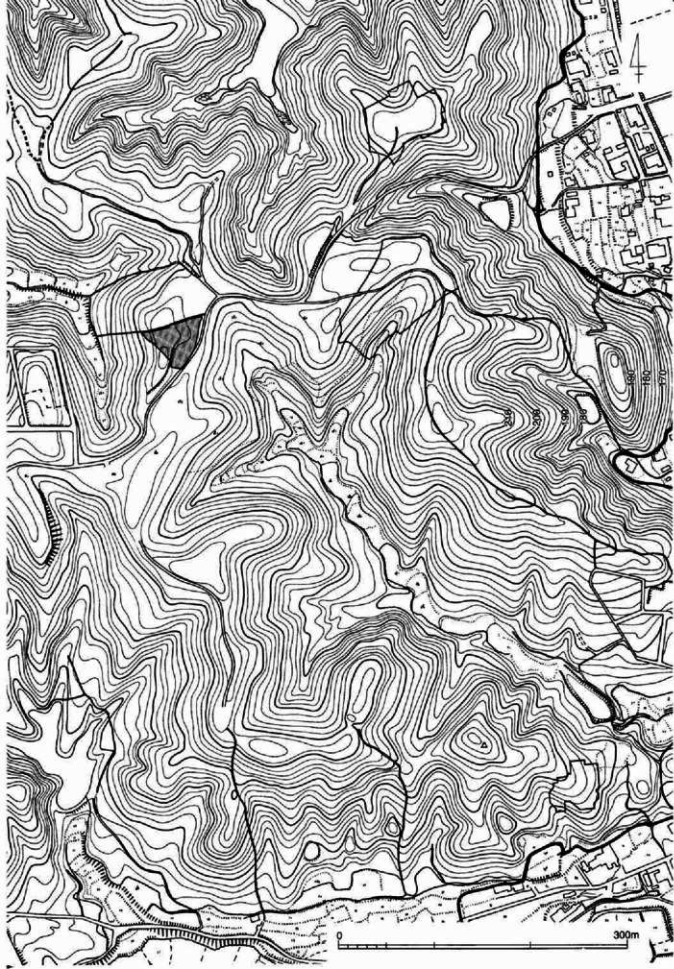
作業員の能力の個人差による精度の問題も考えられる。認識力や判断力、視力などの作業員の個人差も当然考慮に入れなければならない。また、道具による精度の問題も考えられる。

今後、機会があればあらゆる諸条件の違いによる分析を試みてみたいと思う。

今回はサヌカイトを例にとって分析を試みたが、これはサヌカイトに限った問題ではない。土器や動物遺体、植物遺体などあらゆる微細遺物にも共通する問題である。

今回の結果をふまえて、今後は限られた予算と期限の中でより精度の高い調査を実施するよう努めなければならない。

第4部 平方西遺跡の調査



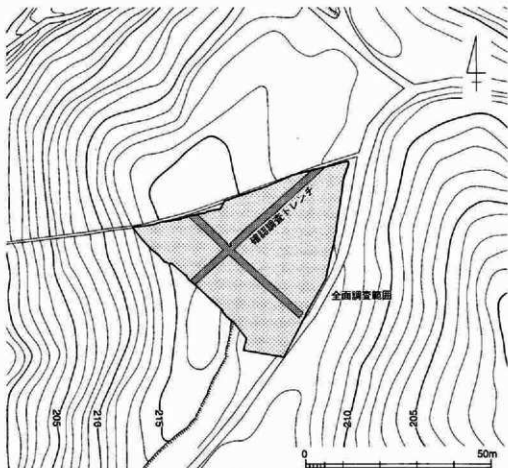
第1章 遺跡の位置と立地

第1節 遺跡の位置

平方西遺跡は三田市けやき台3丁目に所在する。遺跡の東方約200mには平方遺跡・平方窯跡群・平方古墳群が、北東方向250mには中西山遺跡・中西山古墳群が位置する。

第2節 遺跡の立地

平方西遺跡は武庫川右岸の丘陵上に立地する遺跡である。奈良山古墳群と西山古墳群との間の北西に延びる開析谷と、なめた池から南に延びる開析谷との間に挟まれた丘陵平坦面に立地する。標高は212m～214mを測る。この平坦面は開析谷により挟まれ鞍部状に狭くなっている部分がある。これにより囲まれている平坦面は12,000㎡程度存在した。



第1図 平方西遺跡 位置図

第2章 調査の経過

第1節 調査に至る契機

北摂三田ニュータウン建設に先立ち昭和45年度に当該地で分布調査を実施した。しかし当該地は当時、山林であったため遺物の採集や遺跡の発見については報告されていない。その後、ウッドイタウン内では遺跡の発掘調査を進めながら、埋蔵文化財の発見されなかった地点については合わせて造成が進められていった。このため、遺跡として調査が必要とされた地点以外は造成が進められていった。

昭和62年夏、平方遺跡の全面発掘調査ということで調査にはいったが、予定された全面調査地点以外の残されたほぼ全面で遺物が採集された。このため平方遺跡は残されたすべての部分について急遽確認調査に変更された。そこで祠の移転が進んでいなかった平方遺跡の西方の三角形の島状に残された地点についても分布調査を実施した。その結果古墳時代の須恵器が採集できた。念のため旧地形図で立地を調べて見ると平方遺跡から続く丘陵平坦地であることが判明し、遺跡の存在の可能性が高まった。これにより遺跡の確認調査を実施する事となった。

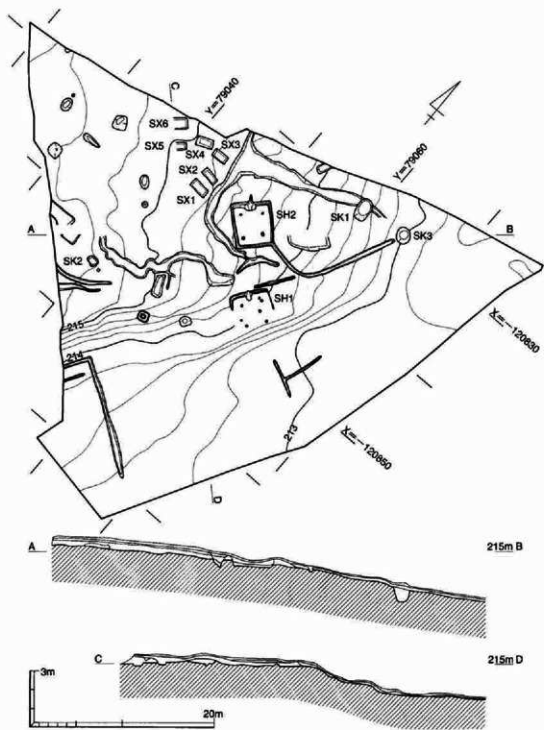
第2節 確認調査(第1図)

昭和62年度冬に分布調査の結果をふまえて、確認調査を実施した。調査は残された三角形の調査対象地に幅2mのトレンチを十字に設定して調査を実施した。検出した遺構は住居跡状の遺構、土坑、ピットなどがあり、遺物は住居跡状の遺構の床面から古墳時代後期の完形の土師器壺と須恵器杯が出土したほか、古墳時代後期の須恵器や土師器の破片が僅かながら出土した。また、祠が存在した周辺からは近世以降の土師器杯や染付磁器などが出土した。

以上の結果から全面調査が必要であると判断された。

第3節 全面発掘調査(第1図)

平成元年7月17日から8月25日にかけて全面調査を実施した。調査対象面積1,502㎡について伐木・伐開を行い、調査前の地形測量を実施した。測量の基準杭は、住宅・都市整備公団が設置した杭から引いてきた。その後、機械により表土を除去し、以下を人力により掘削を実施した。遺構を検出した後は、土層の記録をとりながら掘削を行った。遺構図は1/10もしくは1/20の作図を行った。掘削後は10cmコンタで1/50の地形測量図を作成した。写真記録は足場からの写真撮影のほか、気球写真による空中写真撮影をおこなった。



第2図 平方西遺跡全体図

第3章 古墳時代

第1節 遺跡の概要(第2図)

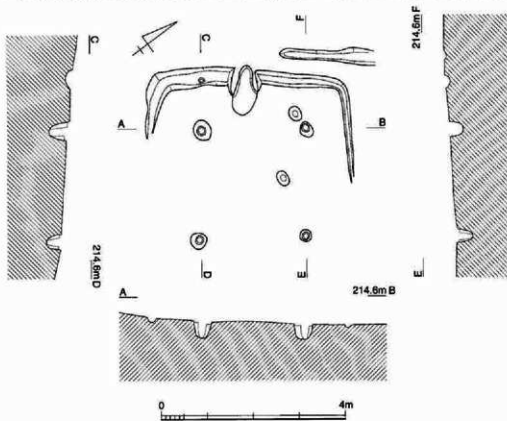
平方西遺跡は調査の結果、南側1/3程度は牧場の造成による削平で旧地形が失われていた。検出された遺構は、古墳時代後期の竪穴住居跡2基、土坑1基、溝の他、時期不明の木棺墓6基、土坑、溝などを検出した。

第2節 遺構

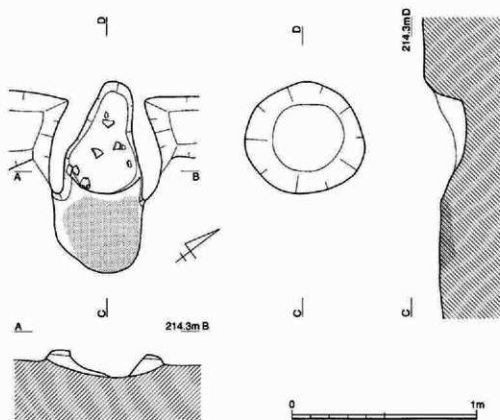
1. 竪穴住居跡

(1) SH1 (第3・4図)

調査区のはほぼ中央部に位置する竪穴住居跡である。西から東に向かってやや傾斜している場所に立地しているが、放牧場による削平と斜面に立地している為、住居跡の半分以上が残っていない。東西方向の壁は2.3mしか残っていないが、西壁の一辺が4.8mの方形の住居跡と推定



第3図 竪穴住居跡SH1



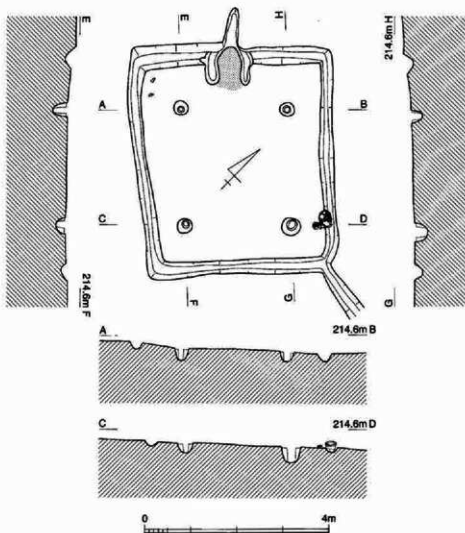
第4図 竪穴住居跡SH1カマド

できる。床面の標高は214.0mを測り、壁の高さは最高0.14mを測る。周壁溝は壁面が残っている部分しか存在していないが元は全周していたと考えられる。北壁中央部にはカマドが存在する。カマドは0.5m×1.0mの範囲に暗褐色・赤色に焼けた粘土を含む焼土が残っている。カマドの中軸線はN-36°-Wを示す。カマドは、一旦周壁溝を掘った後、それを埋めてカマドを構築している事が判明した。カマドの前面が良く焼けている。主柱穴は4本確認でき、柱掘形は直径0.25~0.38mで、柱痕跡は直径0.2mを測る。深さは0.3~0.46mである。カマドより東側の北壁外側0.3mの所に壁面と平行する溝が存在する。幅0.4m、深さ0.1m、長さ4mである。SH2に取りつく排水溝が屈曲する部分に接する。竪穴住居跡の北側には、竪穴を取り巻くように溝が巡っている。幅1m、深さ0.2m程度である。この溝もSH2の周囲を取り巻く溝と接合している。

出土遺物は須恵器がカマド西側の周壁構内から須恵器高坏が出土した。

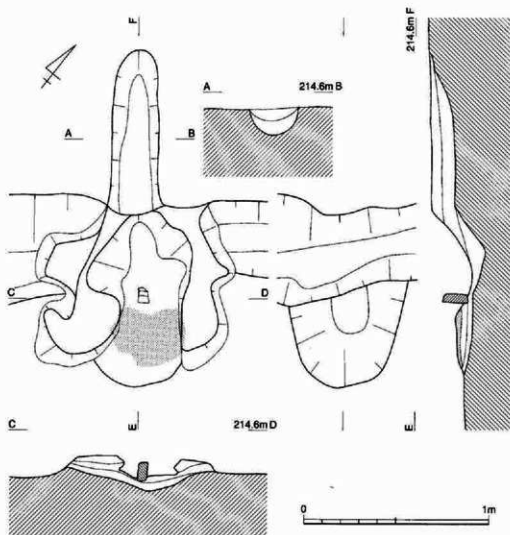
(2)SH2(第5・6図)

SH1の北東約6mに位置する竪穴住居跡である。西から東に緩やかに傾斜する場所に立地



第5図 竪穴住居跡SH 2

する。この住居跡は調査前から深さ0.2m程度窪んでおり、高さ0.2m程度の周堤帯の存在も確認できた。また周堤帯の南側には溝が取りついていることが確認できた。東西4.2m、南北4.8mの長方形の竪穴住居跡である。床面の標高は214.3mを測り、壁の高さは最高0.1mを測る。周壁溝はカマドの部分を除いて全周する。幅0.2m前後、深さ0.2m前後の規模を測る。東のコーナーからは排水溝がY字状に取りつき、約5m行ったところで左に屈曲しており、さらに10m伸びる。幅0.4m、深さ0.1m程度を測る。北壁中央部にカマドが存在し、中軸線はN-35°-Wを示す。カマドは一旦、周壁溝を掘った後、やや掘り窪め、それを埋めてカマドを構築している事が判明した。壁から外方へ煙道が延びる。幅0.25m、深さ0.15m、長さ0.8mである。



第6図 壺穴住居跡SH2カマド

カマドのほぼ中央部には、一辺5cm、高さ10cmの石柱を設置し支石としていた。材質は凝灰岩質砂岩のため火を受けてもろくなっている。主柱穴は4本確認でき、柱掘形は直径0.4~0.3mで、柱痕跡は直径0.2mを測る。深さは0.25~0.35mである。

遺物は床面の東柱周辺から須恵器坏、土師器甕、カマド内からは須恵器坏蓋・高坏駒が出土した。また床面からは砥石が出土した。

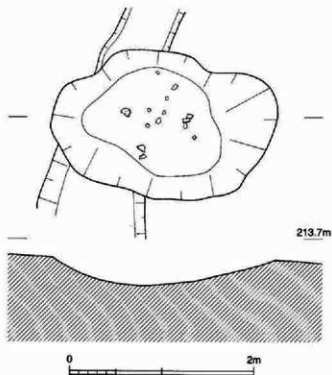
2. 土坑

(1) SK1 (第7図)

SK1はSH1の北方約13mに位置する土坑である。SH2の周囲を巡る溝を切っている。

平面形は南北2.4m、東西1.6mの不定円形を呈し、深さは0.2mの浅い窪みの土坑である。

遺物は少量で、土師器の甕の小片が散乱して出土している。



第7図 土坑SK1

第3節 遺物

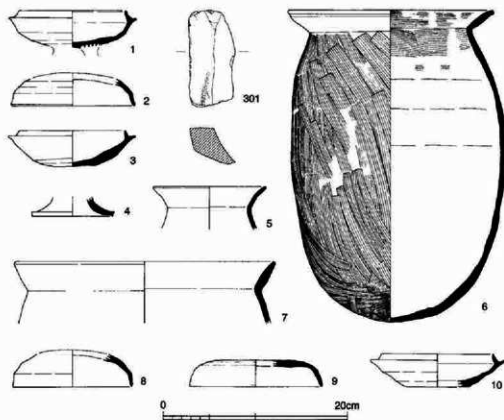
1. 土器(第8図)

(1)SH1

SH1から出土した土器は須恵器高坏がある。須恵器高坏(1)は口径11.6cm、器高3.9cmで脚部を欠いている。坏部底部は回転ヘラケズリを行い、脚接合部はナデている。

(2)SH2

SH2から出土した土器は須恵器坏、坏蓋、高坏、土師器甕などがある。須恵器坏(3)は口径11.4cm、器高3.8cmを測り、底部は回転ヘラケズリを行っている。坏蓋(2)は口縁部の破片で、口径13.2cm、器高2.85cmを測る。高坏(4)は脚部の破片で、底径8.6cm、器高2.1cmを測る。土師器甕(6)は完形品で、口径21.9cm、器高33.35cmを測る。いわゆる長胴形の甕で、底部は球形をなす。外面はタテ方向のハケメ、内面上半はヨコ方向のハケメを施す。



第8図 古墳時代遺物

(3)SK 1

SK 1からは土師器甕(7)が出土している。口頸部の破片で、口径27.5cmの大型品である。内外とも磨滅のため調整は不明である。

(4)包含層

包含層出土の遺物の中で図示したものは、須恵器坏、坏蓋がある。須恵器坏(10)は口径12.0cm、器高3.5cmを測る。坏蓋(8・9)は口径12.8cm～14.2cm、器高3.5cm～2.85cmを測る。

2. 石器

301はSH 2の床面から出土した砥石である。砂岩製の粗砥石で長さ10.1cm、最大幅4.3cmを測る。4面を砥石として使用している。かなり研ぎ減りしている。

第4章 その他の遺構と遺物

第1節 土坑

1. 遺構

(1)SK 2

SK 2は調査区の南西部に位置する。確認調査で一部深掘りしたため正確な形態は不明であるが、一辺1.5m程度の方形の土坑と考えられる。深さは0.3mである。遺物は石鏃が1点出土しているのみである。

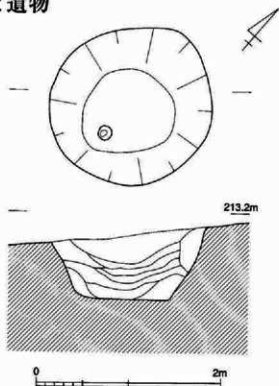
(2)SK 3 (第9図)

SK 3は調査区の北端のSK 1の東側に位置している。直径1.7mの円形で、断面形は筒形を呈する。深さ最大0.7mで、底には1カ所ピットがある。直径0.15m、深さ0.1mである。土層の堆積状況からみて、縄下ケ谷遺跡の落とし穴状の遺跡と同様のものであると考えられる。遺物は出土していない。

2. 遺物

(1)SK 2 (第9図)

302はSK 2から出土した石鏃である。凹基式のサヌカイト製である。先端と両端が一部欠損している。現長1.65cm、幅1.1cm、を測る。



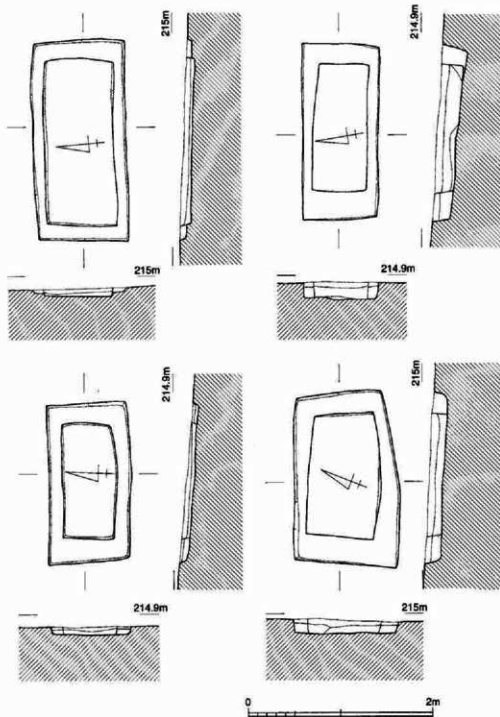
第9図 土坑SK 3



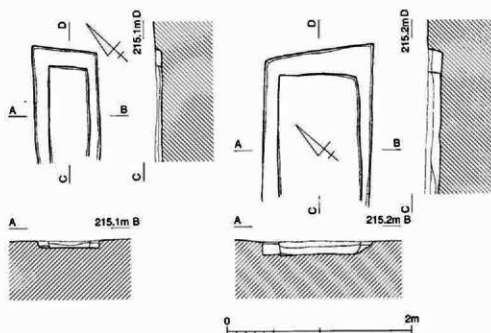
第10図 土坑SK 2出土の石鏃

第2節 木棺墓群(第11・12図)

木棺墓はSH 2の西方に6基群集して存在する。いずれも遺物が出土していないため時期は不明である。



第11回 木棺墓1~4



第12図 木棺墓5・6

1. 遺構

(1) 1号木棺

長辺2.1m、短辺1.0mの長方形の掘形をもつ墓塚の中に、長辺1.8m、短辺0.8mの木棺の痕跡を残す。深さは検出面から0.1m程度である。長軸はN-85°-Wを示す。木棺底の標高は214.8mを測る。遺物は出土していない。

(2) 2号木棺

2号木棺は1号木棺の北方約1mに並列して位置する。長辺1.9m、短辺0.8mの長方形の掘形をもつ墓塚の中に、長辺1.4m、短辺0.6mの木棺の痕跡を残す。深さは検出面から0.2m程度である。長軸はN-80°-Wを示す。木棺底の標高は214.6mを測る。遺物は出土していない。

(3) 3号木棺

3号木棺は2号木棺の北方約2mに位置する。長辺1.7m、短辺0.9mの長方形の掘形をもつ墓塚の中に、長辺1.3m、短辺0.6mの木棺の痕跡を残す。深さは検出面から0.1m程度である。長軸はN-89°-Eを示す。木棺底の標高は214.6mを測る。遺物は出土していない。

(4) 4号木棺

4号木棺は3号木棺の西方約1mに位置する。長辺1.8m、短辺1.1mの長方形の掘形をもつ墓塚の中に、長辺1.3m、短辺0.8mの木棺の痕跡を残す。深さは検出面から0.15m程度である。長軸はN-68°-Eを示す。木棺底の標高は214.8mを測る。遺物は出土していない。

(5) 5号木棺

5号木棺は4号木棺の南西方約2mに位置する。トレンチ掘削のため長辺を一部欠くが長辺1.2m以上、短辺0.7mの長方形の掘形をもつ墓塚の中に、長辺1.0m以上、短辺0.4mの木棺の痕跡を残す。深さは検出面から0.1m程度である。長軸はN-47°-Eを示す。木棺底の標高は214.9mを測る。遺物は出土していない。

(6) 6号木棺

6号木棺は5号木棺の北西方約2mに第5号木棺と並列して位置する。トレンチ掘削のため長辺を一部欠くが、長辺1.7m以上、短辺1.2mの長方形の掘形をもつ墓塚の中に、長辺1.3m以上、短辺0.9mの木棺の痕跡を残す。深さは検出面から0.15m程度である。長軸はN-40°-Eを示す。木棺底の標高は214.9mを測る。遺物は出土していない。

第3節 近世

1. 遺構

調査の直前まで、調査地のほぼ中心に「山の神」の祠が存在していた。現在は移転した。平方西遺跡の地に設置された時期は不明である。

2. 遺物(第13図)

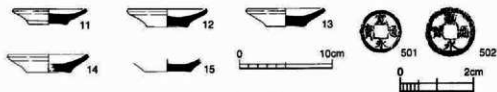
祠が存在していた周辺の表土直下から土師器杯と染付磁器徳利・碗、寛永通寶2枚などが出土した。

(1) 土器

土師器小皿(11~15)は口径8.2cm~8.5cm、底径4.2cm~5.0cm、器高1.7cm~2.0cmを測る。成形は回転ナデにより行われており、底部は回転糸切りの痕跡を残す。堅緻な焼成で、褐色を呈する。

(2) 銅銭

寛永通寶2枚が出土している。1は直径2.2cm、2は直径2.6cmを測る。



第13図 近世 遺物

第5章 小 結

平方西遺跡は「山の神」の祠の移転が遅れていたため、かろうじて調査できた遺跡である。調査面積は約1,500m²で、東側3分の1は牧場造成時の削平で遺跡の残存状況は良好ではなかった。調査地区の西側3分の2で、古墳時代後期の住居跡2基と木棺墓群、土坑群を検出した。これは周囲が既に削平された後の調査で、本来の遺跡の姿ではない。旧地形では、丘陵上平坦面は12,000m²程度広がっており、遺跡の範囲はこれ以上であったと推定される。

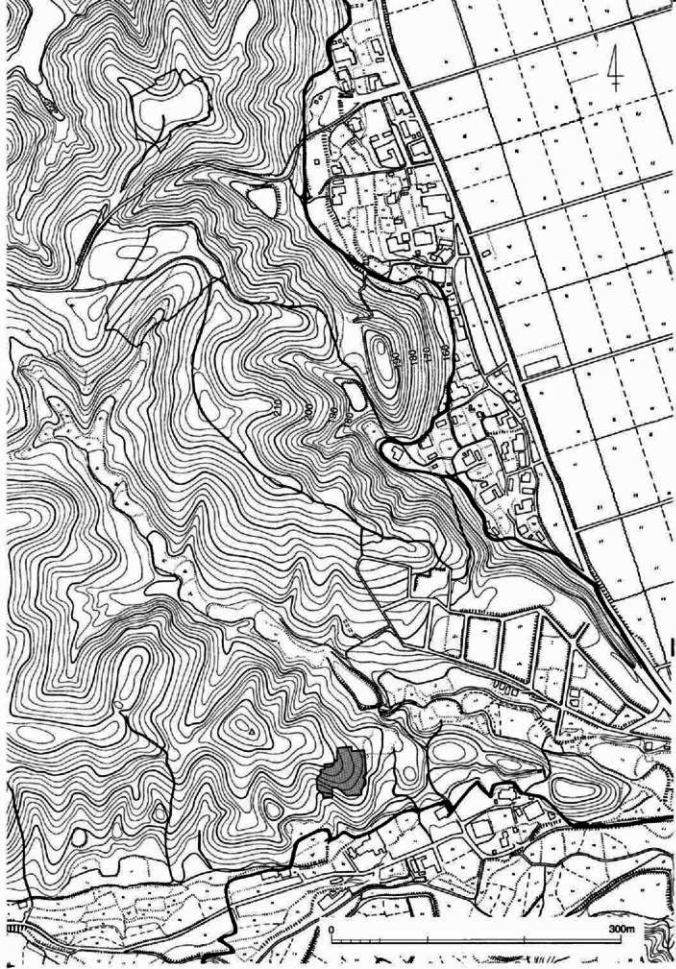
古墳時代2基の竪穴住居跡はほぼ方位を同じくすること、SH2の周囲の溝とSH1の北西側の溝が有機的に接合していること、SH2の排水溝の屈曲点とSH1の北東の溝とが接合することから考えて、同一時期に建っていたものと考えられる。これは遺物から見ても同様である。これらの住居跡は等高線に対して斜交しており、何らかの理由があったのであろう。平方遺跡の項でも述べたとおり、時期的に見ても平方遺跡と同一の性格の遺跡であろう。つまり、東方の斜面には同時期の須恵器の窯が位置していたことが想定できる。

時期不明の土坑SK3は、穴の規模や形態、埋土の埋まり方の状況から考えて落とし穴である可能性が高い。

時期不明の木棺墓群は、東西方向に主軸をとるもの(SX1~3)と、南西方向から東北方向に主軸をとるもの(SX5・6)と、その中間のものがあり、まとまりを示す。遺物は出土しなかったが、墓のあり方から考えて古墳時代より弥生時代的な位置付けをしたい。

わずかな調査面積であったが、平方西遺跡で遺跡が検出できたことにより、周辺の調査をせずに削平された地域にも遺跡が広がっていたことが想定され、重要な調査であった。

第5部 奈良山遺跡群



第1章 遺跡の位置と立地

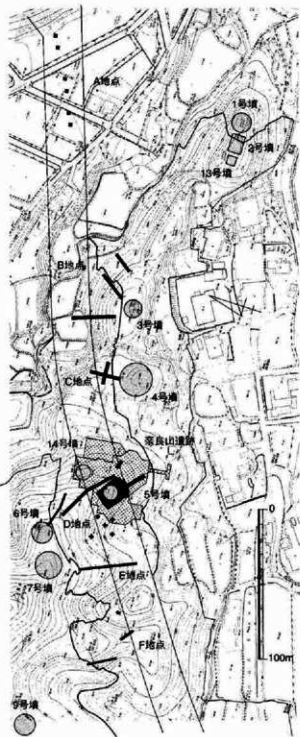
奈良山遺跡および奈良山古墳群は、三田市貴志字奈良山に所在する。

古墳群は武庫川右岸に連なる丘陵から東向きに延びた尾根上であり、稜線に沿って点々と古墳が築かれている。現在把握されている古墳の総数は14基で、発掘調査された1号墳は磯部、7号墳が木棺直葬墳、12号墳が横口式石棺墓である。今回報告する5号墳および14号墳は墳丘が流出しているものの、木棺直葬墳と考えられている。

一方、奈良山遺跡は古墳群の中央部付近にあって、南東方向を向いたややなだらかな丘陵斜面に立地している。丘陵下の低地との比高差は20～25m程度である。奈良山古墳群の北側に谷ひとつを挟んで、西山古墳群がある。

第2章 調査の経過

奈良山古墳群は、開発に際して実施した分布調査で発見した遺跡である。一部を発掘調査したものの、基本的に現状のまま公園として保存されることになった。ところが、古墳群の間を縫って幹線道路が建設されることになったために、昭和55年度に路線内の確認調査を実施した。この調査で、D地点で古墳の残骸(5号墳)と製鉄関連の遺跡(奈良山遺跡)を発見したために、全面



第1図 北摂5号線と遺跡の分布

調査を実施することになった。昭和56年度に全面調査に着手したが、約150㎡の調査が完了した時点で、工事工程の関係で中西山遺跡の調査を優先し一旦調査を中断した。翌昭和57年度には、引き続き1250㎡の全面調査を実施し、新たに古墳の残骸（14号墳）と、飛鳥および奈良時代の2時期の製鉄工房跡を発見した。また、隣接する墓地との境界部で中世墓がみつき、遺跡の範囲がさらに拡がることが判明した。そこで、昭和59年度に残り約300㎡の調査を行い、近世の墓地を確認した。

第3章 確認調査

奈良山古墳群は、これまでに、昭和48年には故磯崎正彦氏らによって奈良山1号墳(旧1号墳)が、昭和51年に故藤井裕介氏らによって奈良山7、12号墳(旧5、4号墳)のあわせて3基が調査されている。

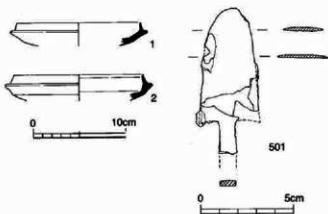
A地点

A地点は、奈良山古墳群の立地する尾根とは谷を挟んだ北側の西山古墳群のある尾根の先端部にあたる。すでに造成が行われていたために、遺跡の存在する可能性は乏しかったが、道路の中央部に沿って2×2mのグリッドを6か所設定し調査した。その結果、現地表下に若干の黄褐色土層が認められるものの、以下は全て地山層であり、遺構・遺物ともに皆無であった。

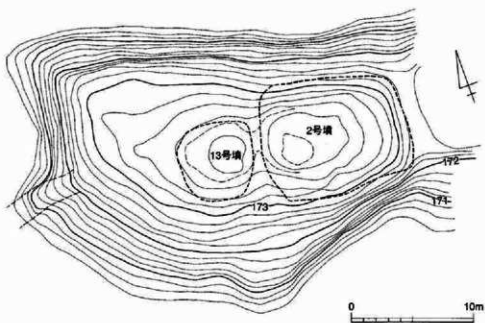
B地点

西山と奈良山の間にある谷部と3号墳の北斜面部にあたる。谷部はかつて水田経営が行われていたようだが、現在は腐絶し雑草が繁茂している。

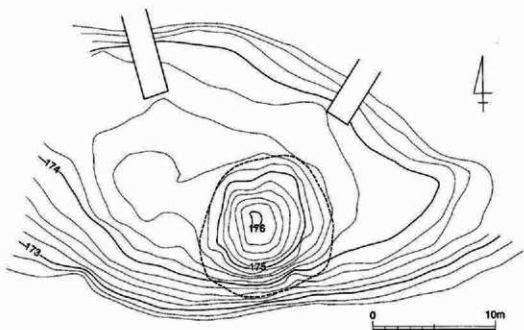
3号墳の位置する部分は、東西の両側に尾根の鞍部があり、西側鞍部には丘陵を横断する小道がある。計画道路は、西山から谷部を横断し、3号墳の位置する尾根の稜線から北側の斜面を通過する。この北側斜面に



第2図 奈良山3号墳出土遺物



第3图 奈良山2・13号墳測量図



第4图 奈良山3号墳測量図

幅2m、長さがそれぞれ30m(B-1トレンチ)、20m(B-2トレンチ)、15m(B-3トレンチ)のトレンチを3本設定した。

B-1トレンチでは、斜面部で土師器・須恵器片、鉄鎌1点が、水田部で土師器・須恵器片・近世陶磁器片が出土した。

B-2トレンチでは、須恵器・土師器があり、土師器の中に蓋と思われる破片がある。

B-3トレンチでも同様に須恵器・土師器片が出土している。

以上の出土遺物のうちに、3号墳から流出した遺物と考えられる須恵器・鉄鎌がある。これらが3号墳から流出した遺物であるとすれば6世紀後半の築造になる古墳と考えられる。

なお、3号墳について若干の紹介をしておく、古墳は標高147m付近の尾根稜線上からややはずれた南寄りの位置に築造されている。1・2号墳がおそらく築造時期が4世紀に遡る古墳である可能性が高く、奈良山古墳群中では異質であり、3号墳は後期古墳の中では最も尾根の先端部にある。墳形は円墳で、径11m、高さは南側で2.5m、その他で1.2~1.5mの規模である。これは古墳が緩やかな斜面地に立地しているためである。墳頂部は径2.5~3mほどの平坦面となっているが、それほど明瞭な形ではない。3号墳の主体部の構造は明らかではないが、おそらく木棺直葬と考えられる。

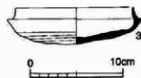
C地点

B地点西側の尾根鞍部から墓地へ通じる小道までをC地点と呼称する。

南へ少し張り出した尾根の先端に奈良山古墳群中最大の規模を有する4号墳がある。C地点では、この4号墳北側のやや平坦になった部分に十字形にトレンチを設定した。南北方向の33.2mのトレンチを第1トレンチ、東西方向の15mのトレンチを第2トレンチと呼ぶ。

両トレンチとも基本的な地層は表土(腐食土層)下に10~20cmの灰褐色土が堆積しており、その下は地山層となっている。灰褐色土層からは須恵器・土師器片が少量出土した。第1トレンチ南端では4号墳の周溝の一部を検出した。周溝は幅1.75m、深さ12cmの浅いU字形を呈し、黄灰色砂質土が堆積する。この周溝と考えられるU字状の溝肩に接して須恵器の杯が1点完形で出土した。出土状況からみて4号墳に伴う遺物と思われ、古墳の築造年代は6世紀後半と考えられる。

奈良山4号墳は群中最大の古墳である。標高は176~177mで地形の制約から南にわずかに傾斜している。墳形は円墳で、南北径23m、東西径20mとやや南北に長くなっている。墳丘の高さは、南側で2.6m、北側で1.8mで、墳頂部の径12.5~14mが平坦となっている。内部主体は明らかではないが、ボーリング調査では石室の形跡は認められないので、他の古墳と同様木棺直葬である可能性が高い。

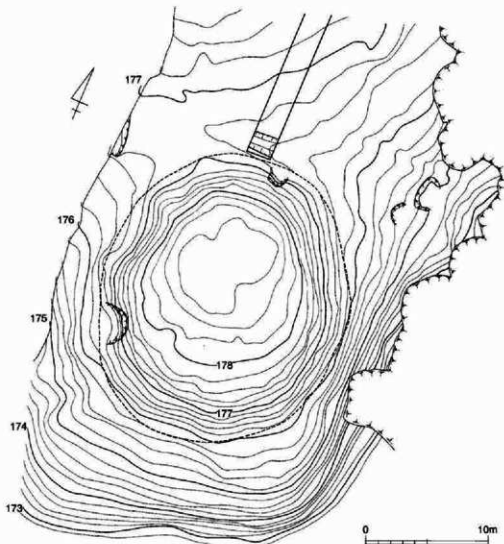


第5図 奈良山4号墳出土遺物

D地点

D地点は、墓地の西側にある南に派生する尾根の存在する地点で、計画道路は尾根中央部を横断する。北側には奈良山6・7号墳があり、遺跡の存在する可能性の高い地点であった。

D地点の調査は、6号墳から尾根稜線上に第1トレンチ(1m×24m)、第2トレンチ(2m×25m)、第3トレンチ(2m×20m)を設定し、順次調査を行った。第1トレンチでは6号墳の東側墳丘裾部を検出したが、古墳に伴う遺物は須恵器片のみで、築造時期は明確にすることができなかった。6号墳は、直径約14mの円墳で、埋葬施設はおそらく木棺直葬であろう。



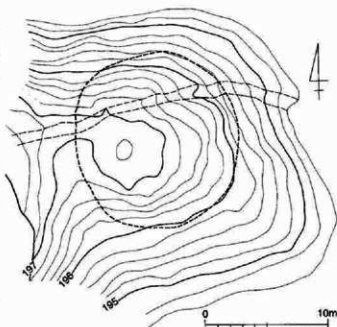
第6図 奈良山4号墳測量図

第2・3トレンチでは顕著な遺物は検出されなかったが、第3トレンチ東端で若干の土器片が出土したため、新たに第3トレンチ西側に調査区を設定した。その結果、主体部・墳丘ともに既に流出した古墳跡1基(5号墳と呼称)とその下方で小鍛冶遺構(奈良山遺跡と呼称)を発見した。

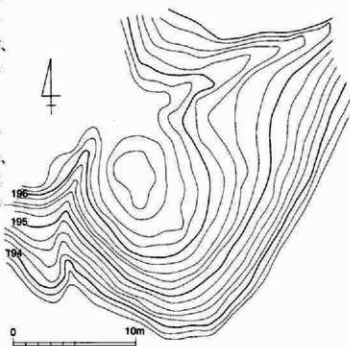
5号墳は、墳丘・主体部とも発見できなかったが、かろうじて丘陵を切断した周溝の一部が残存していた。また、斜面下方は一段低く、平坦となっていて、平坦面には、多くの須恵器・土師器・鉄器片が出土した。これらの遺物が、6世紀末～7世紀前半代に比定できるので、古墳が存在したことはまず間違いない。

周溝残存部から推定して古墳は直径約9mほどの円墳で、奈良山古墳群中では最も規模の小さい古墳である。主体部は木棺直葬であろう。

E・F地点では全く遺構・遺物は発見されなかった。



第7図 奈良山6号墳測量図



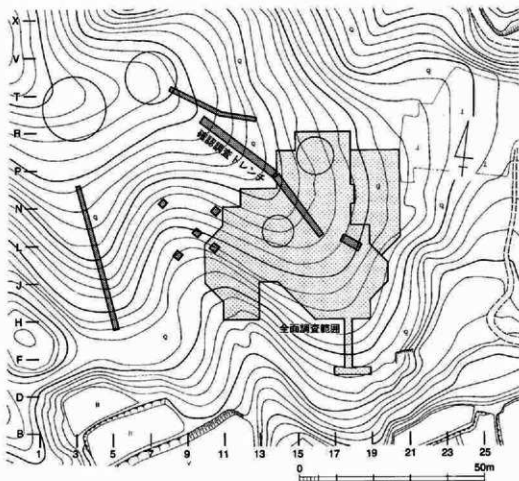
第8図 奈良山9号墳測量図

第4章 全面調査

第1節 調査の方法

調査対象範囲を磁北を基準にして5m方眼に区切り、南北ラインを西から東へ1・2・3の順に、東西ラインを南からA・B・Cの順にグリッド名を付けた。ただし、実際に調査したのは、10～20ラインとE～Rラインに囲まれた範囲である。

発掘調査は、各グリッドごとに人力で表土を除去し、遺構の検出を図った。



第9図 奈良山遺跡調査区設定図

第2節 奈良山遺跡

1. 古墳

奈良山5号墳

墳丘はすでに流出し、ほとんど痕跡を留めていない。わずかに地山を掘削した周濠の部分が残っており、古墳と断定した。推定できる直径は約10mである。埋葬主体も何ら痕跡を残さないが、墳丘の形態や、周辺に散布する遺物、奈良山7号墳の調査成果などから判断すると、6世紀後半の木棺直葬墳であると考えられる。推定できる直径は10mである。

奈良山14号墳

奈良山5号墳の北側約20mの位置にある。この古墳も、5号墳と同じく周濠のみが残存しており、同様の古墳と考えられる。

2. 第1工房跡

小鍛冶遺構

D地点奈良山5号墳の調査中に、墳丘南裾部において4か所の焼土坑と数点の鉄滓・羽口片を検出した。製鉄関係の遺構と判断し、さらにトレンチ(第4・5トレンチ)を設定して遺跡の範囲確認に努めた。第4トレンチでは、炭混じりの土坑1か所、第5トレンチでは、焼土・炉壁・鉄滓等を検出し、遺構の範囲はかなり広がることが判明したため、全面調査の必要性を認め、1号焼土坑と3号焼土坑の調査のみを終えた。

遺構は、南東に延びる尾根の南向き斜面上に立地する。地山を等高線に沿って段状に整形し、平坦面を造り出して構築している。標高は約185.4mを測る。

1号炉(SK1)

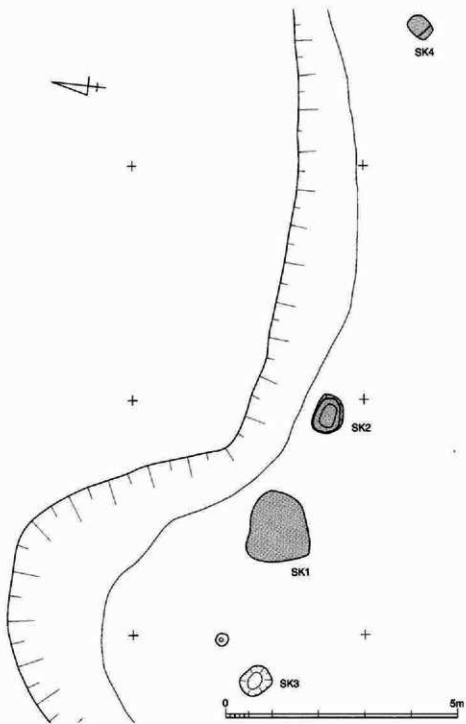
黄褐色地山土層を若干掘り込んで構築し、径約125cm、深さ約10cmの不整形円形を呈する。中心部は径約35cm、深さ約10cmにわたって焼けており、赤褐色に変色している。埋土は暗褐色の焼土・炭混じり土で、上層に土師器片が混入していた。

2号炉(SK2)

地山土を掘り込んで構築し、長軸約75cm、短軸約65cmの長楕円形の平面形態を呈する。深さは20cm、坑底は約8cmの厚さで赤褐色に焼けている。埋土は下層は暗茶褐色の焼土混じり土で、上層は、炭混じりの褐色土である。自然通風を利用したためか、等高線に対して平行に炉を構築した状況を呈している。

3号炉(SK3)

1号炉の西側約40cmに位置し基底部を若干残す。径約25cmを測る円形プランで、深さ約4cm



第11圖 第1工房跡

にわたって赤く焼けている。

2基の炉周辺では数点の鉄滓、羽口片を検出しているが、炉内には、木炭、羽口は認められなかった。

また、炉検出面および4号炉周辺では、古墳からの流出品と思われる土師器、須恵器、鉄製品がある。

4号炉(SK4)

赤く焼けた基底部分のみが残存しており、一部は木根で壊されていた。現存長約40cmの長楕円形を呈し、赤変部の厚さは6cmである。

他の炉が地山を掘り込んで造られているのに比較して、地山面より15cm高いところから採集面が2面ある可能性もある。

炉の構造については、ほとんど破壊されて赤褐色に焼けた基底部分のみが残存しているため明らかではないが、基底部分の形状から推してほぼ楕円筒柱状になると想定される。下部構造は地山を若干掘り穿めるものの、木炭を敷設するなど湿気抜き構造は認められない。

炭土坑(SK5)

長軸70cm、短軸55cmの隅円長方形を呈し、深さは12cmが残存していた。内部は炭が充填されていた。

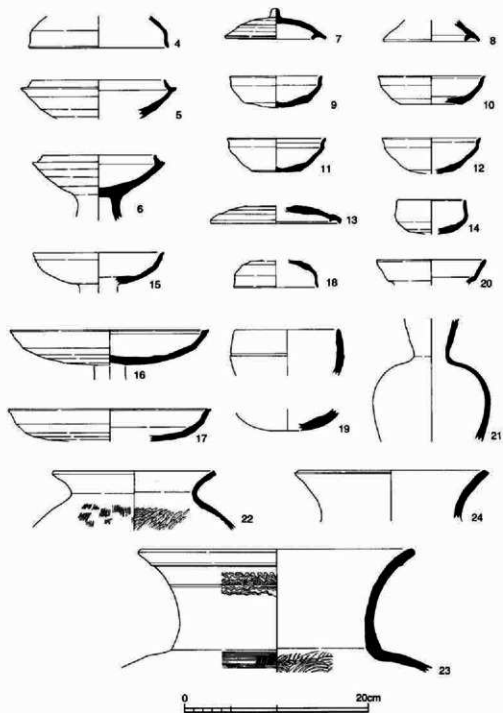
製鉄遺構は、大きく鉄生産段階の精錬炉跡、鉄精錬・加工段階の大鍛冶・小鍛冶跡に分類される。本遺跡の場合は、炉の規模、鑪羽口の出土量、鉄さいの状態から小鍛冶跡と考えるのが最も妥当であろう。

第1工房跡周辺出土遺物

第1工房跡周辺では、第12～14図の土器が出土している(No4～34)。

土器類には須恵器および土師器がある。須恵器には、杯蓋・杯身、高杯、壺、甕がある。

4は杯蓋である。比較的薄手の造りをしており、稜線部分を残している。5は立ち上がり部の短い杯身である。受け部から立ち上がり部にかけてはシャープさに欠ける。6は高杯。厚手の体部に短く厚い立ち上がり部が付く。受け部もあまり張り出さない。脚柱部は太く、杯部との結合部も鈍角をなしている。7・8は杯蓋。第Ⅲ形式初期の特徴である蓋内面の返りを持つ。7にはつまみ部が残るが、宝珠形を成さず、不整形な突起である。直径は11cm前後である。9～12は7世紀前半に特徴的な小型の杯である。20は甕の口縁部である。大きく開いた口から最も新しい段階のものであることがわかる。16・17は大型の高杯である。底部にはロクロ削りを施している。口縁端面はナデにより凹んでいる。19は碗である。体部に1条の沈線が入る。23は甕。長く外反する口縁部下に櫛描波状文を施す。体部外面は平行叩きで、内面の当具痕は同



第12图 第1工房跡出土土器(1)



第13図 甕体部内面の当て具痕

心円文となるが、接合できなかった体部の内面には、八稜のいわゆる車輪文明きが施されている(第13図)。また、内面の肩部以上はナアが施され、当て具痕が潰れている。

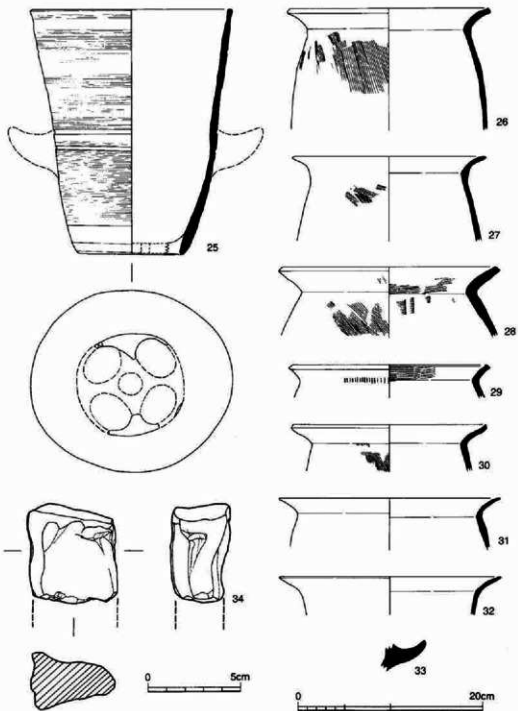
25は甕。外面には全体に横方向のカキ目を施している。底部には5個の孔が開けてある。

土師器は甕が7点(26~32)と甕の把手部分(33)が出土している。

34は用途不明の土製品である。板状の粘土板の隅部にあたるようで、端部2方向が厚くなっている。

これらの遺物は概ね古墳時代後期に属するものと飛鳥・奈良時代に属するものとに分かれる。4~6と19、20、23、25、などが古墳時代後期すなわち6世紀後半に属するものであろう。これらの土器は5号墳に副葬されたものと考えられる。

その他の土器については、第1工房に伴う土器と考えられる。その時期は、飛鳥時代から奈良時代にかけて、すなわち、7世紀前半から8世紀に属するものであろう。



第14図 第1工房跡出土土器(2)

3. 第2工房跡

竪穴住居跡(SH1)

平面の形態は方形である。規模は、南北が4.6m、東西が4.1m、北側での残存深さは35cmである。周壁溝はもたない。東側壁面の中央部に馬蹄形の竈を持つ。赤変しているものの、上部は削平されて残存していない。

北側斜面上方には建物を取り囲むように溝(SD1)が巡らされている。溝の幅は最大45cmで、深さは残存部の最も深い部分で20cmである。竪穴住居への雨水の進入を防ぐために掘られたものと考えられる。

掘立柱建物跡(SB1)

竪穴住居跡が埋まった直上に建てられたものである。その位置といい、規模といい、ほとんど竪穴住居を踏襲しているかのようである。掘立柱建物を建てる際にはまだ竪穴住居の痕跡が残っておりその位置を踏襲したものであろう。

建物は東西が2間で柱間は1.7~1.8m、南北は3間以上で柱間間は1.5~1.6mである。柱穴の直径は40~50cmで、深さは最も深いところで40cmある。残存する柱痕から判断すると、柱の太さは18cm程度と推定できる。

また、建物内部の床面には焼土面が2か所、床面の中央やや東よりの位置で見ついている。また、南東部には一辺が80cm、深さ18cmの隅円方形の土坑(SK6)がある。内部には炭が充満していた。

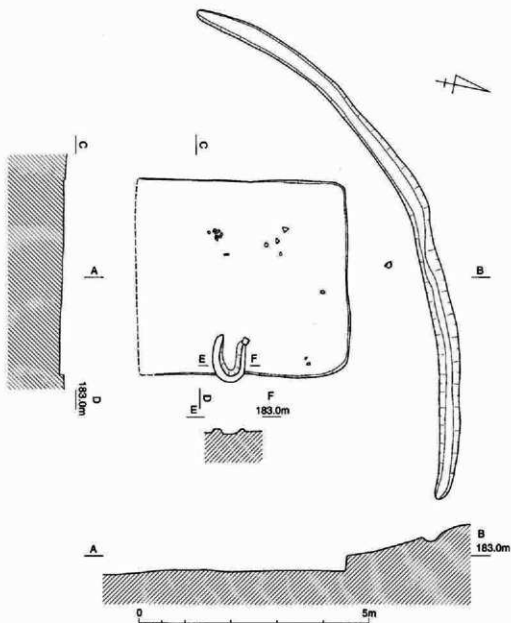
建物の南辺部付近では表土直下で椀形鉄滓(第21図506)と神巧開竇が3枚重なって(第21図509・510、もう1点は細片となっている)出土している。

第2工房跡周辺出土遺物

第2工房跡周辺から出土した土器は多くない。35~55の須恵器、56・57の土師器がある。

35~37は杯蓋。肩部が円く稜をなさない。37は高杯の蓋である。38~40は杯身である。立ち上がり部は低く、受け部との境界も不明瞭である。

41は杯蓋。内面にはかえりが、頂部には宝珠つまみがつく。天井部には2条の沈線がある。42~45は杯身。口径9cmあまりの42・44と、10.5cmの43・45とがある。42は竪穴住居跡から出土した杯身である。7世紀前半に特徴的な小型の杯である。46は粗製の椀。底部周辺に手づくねによる指圧痕を残している。47・48は短頸壺。49は高杯もしくは大型の杯。第1工房付近出土のもの比べると、端部に面を持たず、薄く仕上げられている。50は長脚2段高杯の脚部。51は長頸壺の口縁部。52はかなり開いているものの、これも長頸壺の口縁部であろう。53~55は壺。

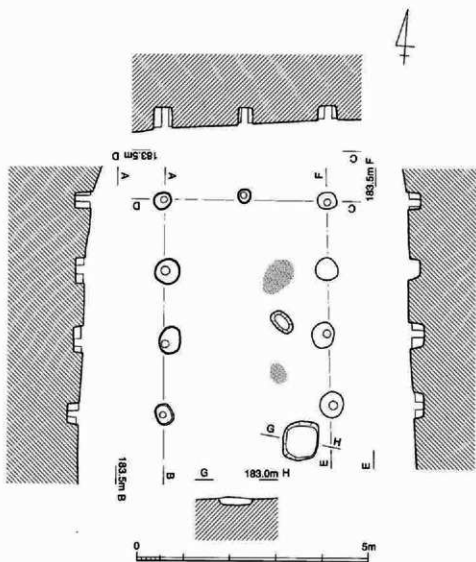


第15図 第2工房跡下層の竪穴住居跡SH1

55は6世紀前半代のものである。

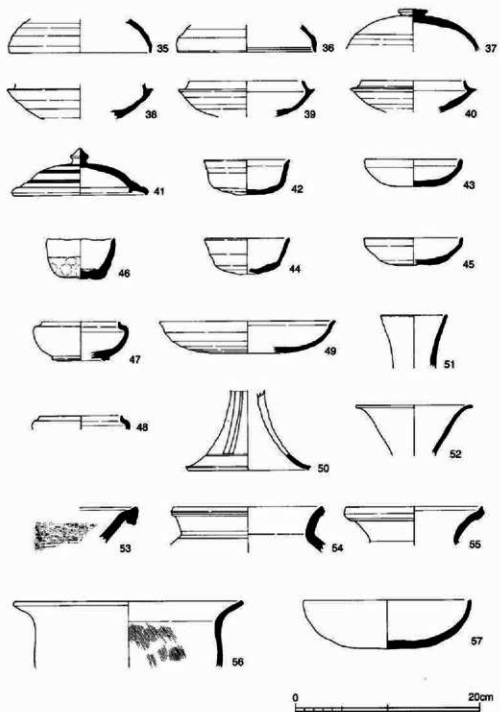
56は土師器の甕である。57は土師器の杯である。

これらの土器は第1工房跡出土土器とはやや異なって、6世紀後半のものと、7世紀前半のもの他に、奈良時代(8世紀代)に属するものがある。No35~40、50、53~55などが6世紀半

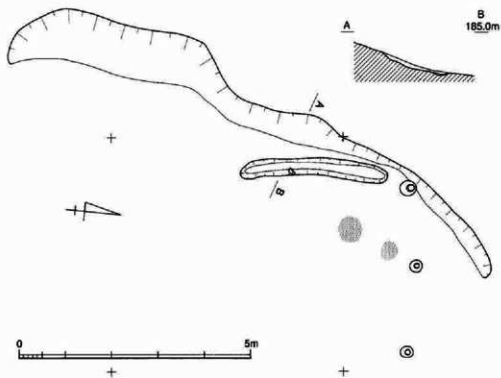


第16図 第2工房跡上層の掘立柱建物跡SB1

ばのもの、41～45、49などが7世紀前半代に属するもの、47、48などが8世紀代に属するものと考えられる。6世紀後半のものが、5号墳もしくは14号墳に伴う遺物、7世紀前半のものが堅穴住居に伴う遺物、8世紀代のものが掘立柱建物に伴う遺物と考えてよからう。



第17图 第2工房出土土器



第18図 第3工房跡

4. 第3工房跡

掘立柱建物跡(SB2)

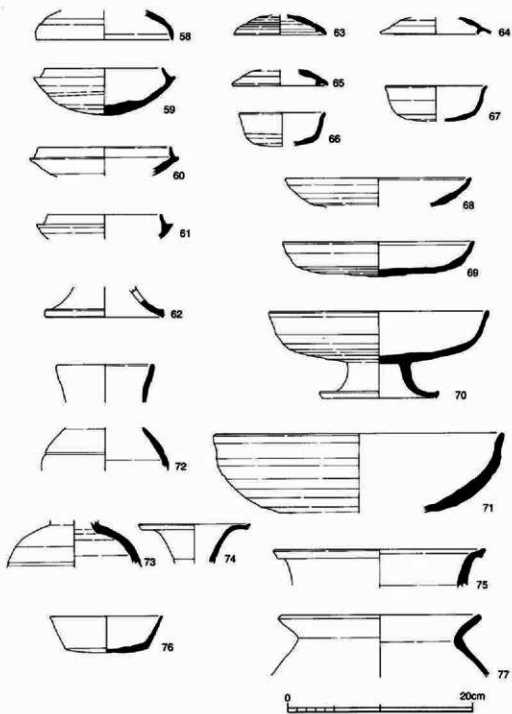
丘陵東側の比較的緩傾斜な部分の斜面を削り出して平坦面を造り出している。平坦面の北よりに3箇所の柱穴があり、掘立柱建物が築かれていたようである。建物はこの柱穴を北辺にして南向きに長いものであったのだろう。しかしながら、地面が流出しているために、南側の柱穴は残存していない。また、建物の山側の段に沿って雨落溝状の溝が1条残存している。幅は40cm、残存深さは8cmで、延長3.2mにわたって確認した。建物の内部にあたる平坦地には、2箇所の焼土面がある。直径40~50cmでオレンジ色に変色していた。

第3工房跡周辺出土遺物

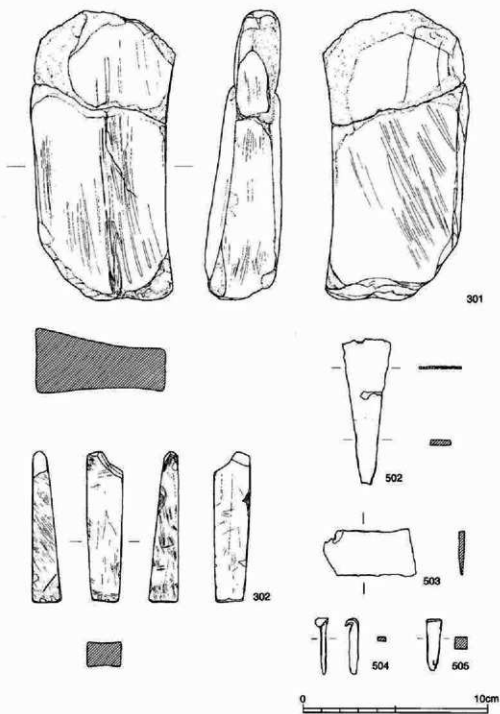
この地区でも3時期の遺物が混入している。

58は杯壺。器高が低く、肩部も明瞭ではない。59~61は杯身である。厚手であまり作りは丁寧でない。62は高杯の脚部である。長脚の1段透かしのものであろう。

58~62は古墳に伴う須恵器である。



第19图 第3工房跡出土土器



第20回 石器・金属器

63～65は杯蓋である。内面にかえりを持っている。欠損しているが、宝珠つまみを持つものであろう。66・67は杯身である。口径が小さいわりに器高が高いもので、口縁端部が外反している。

68・69は大皿である。口縁端部は内面側にわずかに肥高する。底部はロクロ削りで仕上げている。70は大型の高杯である。68・69に似た杯部に低い脚部を接続している。杯部底面は、ロクロ削りで仕上げる点も共通している。

71は鉢である。厚手の体部に口縁部は強いナデにより外反する。底部はロクロ削りで仕上げている。72～75は壺である。76は杯である。底部はヘラ切り未調整である。

77は土師器の壺である。くの字かたちの口縁部にやや胴部が張った形状をしている。

石製品(301・302)

301・302は砥石である。301は軟質のやや目の荒い砂質の岩石を使用している。刷面には深い傷が幾本も残されている。302は小型の砥石で、きめの細かい石材を使用している。

金属製品(502～505)

502は鉄鎌の先端部である。逆三角形の端部が薄く、基部側が厚くなっている。軸部は欠損している。503は板状の工具である片側に刃部を研ぎ出している。

504・505は鉄釘である。504は先端部を腐食により欠失している。505はやや太めの釘で、頭部を欠失している。いずれも長さが3cm前後と短い。

銭貨(509・510)

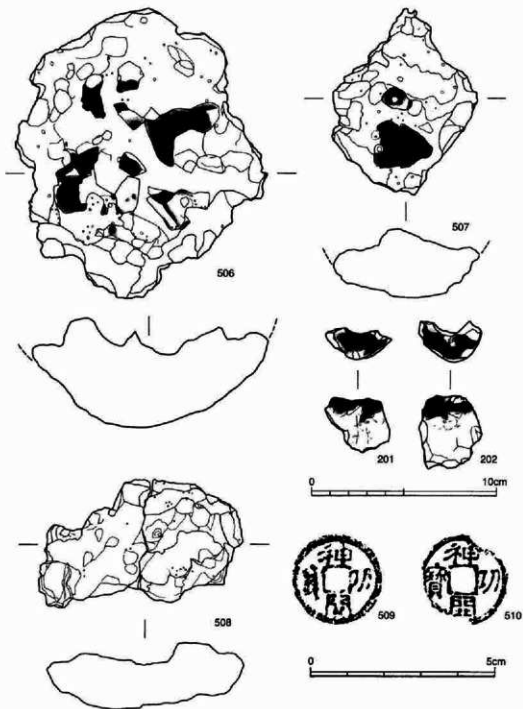
S B 1 南側で3枚重なって出土した貨幣のうちの2枚である。残りの1点は風化が著しく、細片に砕けてしまっている。すべて神功開寶で、風化が進んでおり、もろくなっている。

鉄滓(506～508)

第2工房周辺で出土した塊形滓である。大きなもの3点を図示したが、この他に小片が数点ある。灰黒色を呈し、いずれも腐食化が進んでいる。表面は全体に粗雑であり、小石を含むものが多い。

鑪(201・202)

鑪の羽口である。小片であるため、形態・法量は不明であるが、先端部には溶融した鉄が付着している。



第21図 鉄滓・羽口・鉄貨

5. 中世墓

遺構

〇-18付近の尾根の東斜面に位置する。築造にあたっては、斜面を弧状に掘り込み、直径約3.25m、高さ約50cmの盛土を築いて、小円丘を築いている。頂部には、円形の掘り込みの内部に拳大の垂角礫を敷き詰めている。礫の上部には、蔵骨器として利用したと考えられる土鍋片が散乱していた。土鍋片を復原してみると、3個体分が確認できた。また、掘り込みの北では直径15cmの小穴が検出された。卒塔婆を立てた痕跡であろうか。

出土遺物からみた遺構の年代は、12世紀代と考えられる。

出土遺物

第23図は中世墓出土の土器である。78-80の土鍋と81の土師器皿は中世墓の墳頂部から出土したものである。これらのうち78はほぼ完形に復原できたが、79・80については破片の数が大幅に足りず復原できなかった。おそらくは、78の鍋が蔵骨器として利用され、その他は蓋に転用されたものと考えられる。78の土師器鍋は、胴部がしっかりと張るが、79はあまり膨らまない。80は口縁部を玉縁状に仕上げている。

82は須恵器碗である。これは直接中世墓から出土したものではないが、直近で出土していることから年代的に近いことから考えて中世墓に伴うものと考えてよからう。

6. 近世墓

遺構

調査区東端部の緩斜面を利用して墓地が築かれている。現在の墓地に隣接しており、一部は墓地の造成時に削られているようである。甍壇状に平坦面を削り出し、途中に2か所昇降口と考えられる通路がある。

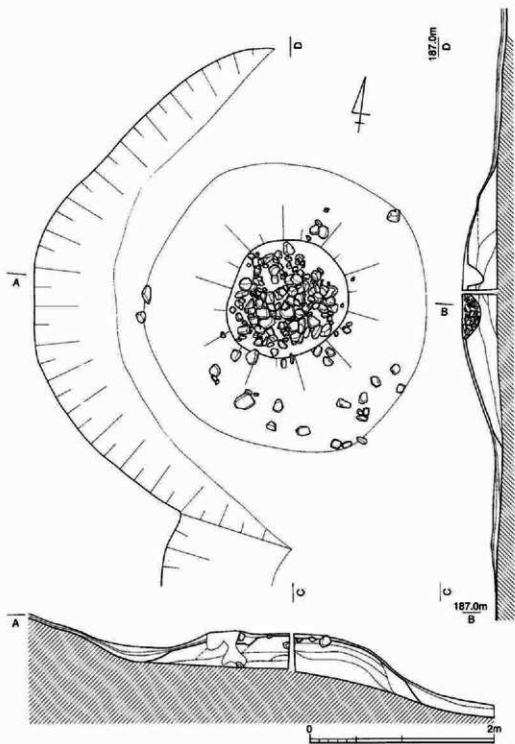
平坦面の南部に集中して、直径1mあまりの素掘りの穴が14箇所と、甍が6箇所埋めてあった。前者は、棺桶を埋めた穴である。また、中央部付近には、宝篋印塔、五輪塔などの破片が散在していた。

出土遺物

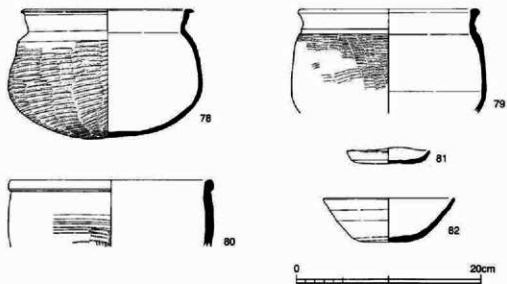
図版120-122は近世墓出土の土器類である。83-88は棺として使用されたものである。83-87は丹波焼、88は越前焼である。83の口径34cm、器高39.8cm、84の口径22.8cm、器高28cm、85の口径35.8cm、器高41.8cm、86の口径19.4cm、器高22.7cm、87の口径30.6cm、器高34.7cm、88の口径20.3cm、器高32.8cm。

図版121と122の磁器は墓地に散布していたものである。おそらく死者が生前使用していたものであろう。図示していないが、この他に、土人形、煙管、六文銭などが出土している。

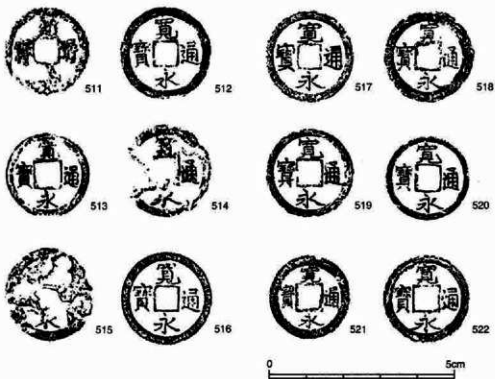
遺物の年代は、10・11の陶胎染付が18世紀前半で最も年代の古いもので、16・17の広東碗や19



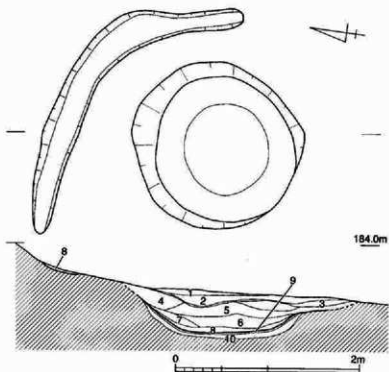
第22図 中世墓



第23回 中世墓出土土器



第24回 近世墓出土銭貨(寛永通宝)



- | | |
|---------------|-------------|
| 1. 流入土 | 6. 暗灰色土 |
| 2. 流入土 | 7. 焼土 |
| 3. 旧表土 | 8. 黒色炭層 |
| 4. 暗褐色土 | 9. 窯壁(黒灰色) |
| 5. 焼壁土を含む暗褐色土 | 10. 焼土(酸化)層 |

第25図 炭窯跡SK6

～21の湯飲みが19世紀前半のもので最も新しいものである。これらの土器類から見るかぎり、近世墓の年代は18世紀初めに始まり、19世紀前半に続くものといえよう。その後、隣接する現墓地に移行したものと思われる。

7. 炭焼窯跡

調査地の西端部でみつかった炭焼窯跡である。斜面を削って直径約1.8mの穴を掘り粘土で塗り固めてある。上半部は残存していない。塗り込めた粘土は高温のために堅く焼き締まっている。ちょうど須恵器窯の窯体と同じ状態である。坑底は平たく、内部には炭が詰まっていた。また、山側には、幅30～40cm、深さ10cm程度の排水のための溝が巡っている。遺構の年代は不明である。

第5章 小 結

奈良山遺跡は、6世紀後半の古墳2基、7世紀～8世紀にかけての製鉄遺跡、12世紀後半の中世墓、18～19世紀の近世墓地の複合遺跡であることが明らかとなった。以下に調査成果の要点をまとめておく。

1. 古墳について

今回の発掘調査で新たに発見された2基の古墳については、墳丘と埋葬施設は流出したものの、地山を削り込んだ周溝と、墳裾部から出土している土器から、6世紀後半代の直径10m程の木棺直葬の古墳であることが判明した。それぞれ奈良山5号墳、奈良山14号墳と命名する。

近畿の主要部ではこの時期すでに横穴式石室墳が主流であり、三田市域でも、武庫川左岸の加茂古墳群などでは横穴式石室を主体にした群集墳が営まれている。ところが、当古墳群や、隣接する西山古墳群では東播磨地方から北摂地区にかけて一般的な木棺直葬墳を築いているのである。しかしながら、奈良山古墳群が隣接する西山古墳群と根本的に異なる点は、西山古墳群が群集するタイプの古墳群であるのに対して、奈良山古墳群は尾根上に点々と分布している点である。両者は、いずれも木棺を直葬する古墳である点は共通しており、その年代も6世紀後半代と一致するにもかかわらず、造営方法が異なっているのである。このことは、その造営に当たった集団の質的な差を示すものと考えてよからう。すなわち、西山古墳群の造営主体が、単一の氏族集団が特定の墓域に集中してその墓を築いたものであるのに対して、奈良山古墳群は、墓域を形成せず、一定の間隔を保ちながら古墳を単独に近い形で築いている。つまり、大枠での墓域を持ちながら、決して集中して墓を築くことはしない。逆に言えば、古墳造営者は大きな集団の規制は受けながら、個別に主体性を持ち得たとも言えよう。

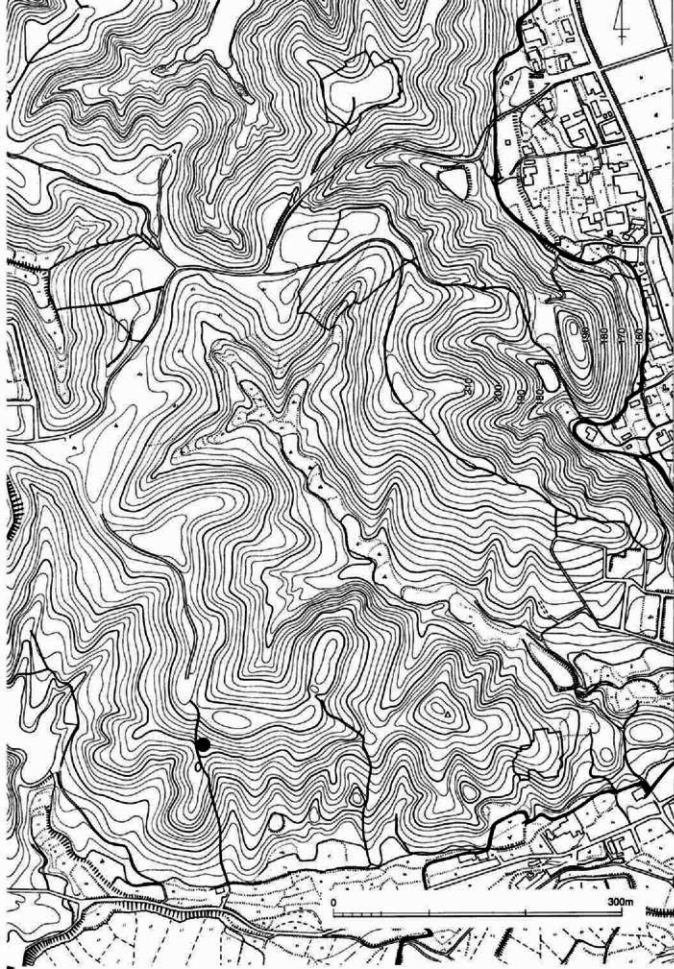
2. 工房跡について

奈良山遺跡で確認された3か所の工房跡は、当初7世紀前半と考えられる竪穴住居(SH1)に始まり、8世紀代の掘立柱建物(SB1)へと継続しているようである。工房に伴う炉跡は炉底部の焼土面を残すのみで、上部構造は明らかにできなかったが、周辺から多数出土している鉄滓片からみて、小鍛冶に伴う炉跡と考えられる。周辺では、すぐ北側の尾根に立地する下西山遺跡でも同様の遺構が確認されており、当遺跡周辺では、かなり広範囲に同様の施設が存在していたものと思われる。

奈良山遺跡発掘調査の最も大きな成果は、古墳時代終末期～奈良時代の製鉄遺跡の発見である。工房跡は3箇所営まれ、1号工房跡では建物跡は検出できなかったものの、4箇所の炉跡が確認できた。2号工房跡では、古墳時代終末期の竪穴住居を掘立柱建物に改築しているこ

とがわかった。また、その終末は奈良時代後期に及んでいることが、出土した神巧開竇から判明した。ここで行われた製鉄は、鉄の精錬ではなく、加工に伴う小鍛冶であることが明らかとなった。また、一方で、当地における壑穴住居から掘立柱建物への移行が、7世紀半ばまでに行われたことが指摘できる事例を提示できた。

第6部 奈良山中央公園遺跡の調査



第1章 遺跡の位置と立地

第1節 遺跡の位置

1. 遺跡の位置

奈良山中央公園遺跡は三田市けやき台2丁目に所在する。開発以前の地名は三田市黄志字であった。遺跡の東方へ続く尾根上には、奈良山古墳群、奈良山遺跡群が、西方には楓下ヶ谷遺跡が存在する。

2. 遺跡の立地

遺跡の範囲は不明であるが、調査を実施した地点は武庫川右岸に広がる丘陵から派生した尾根の南西斜面に立地している。標高は201m前後である。

第2節 調査の経過

1. 調査に至る契機

昭和62年度夏の北摂ニュータウン内の発掘調査の際、完成しつつあった奈良山中央公園内の「風の塔」の周辺の踏査を行った。この時、工事後間もない崖面には、弥生土器の破片と土色の変った層が認められた。これは周囲の状況から判断して、すぐ遺構であるとは認識できた。そこで、教育委員会は公団と協議して、現状のままでは崩壊の恐れがあるため、記録保存の調査を行うこととした。なお遺跡名は、東方に位置する古墳～中世の奈良山遺跡と区別するため現状を考えて、奈良山中央公園遺跡とした。

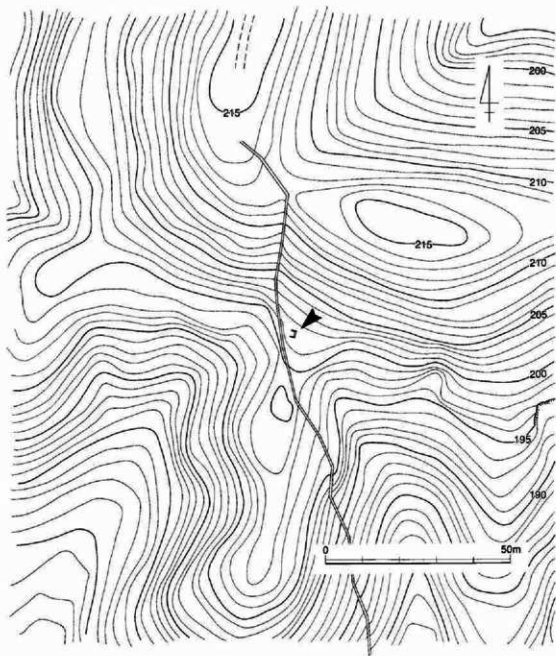
2. 調査

調査はまず崖面の精査を行うことから始めた。断面の状況から土坑であることが判明し、土器が埋まっていることも確認できた。この状況を写真と図面による記録に納めた。次に、平面的に調査を行った。断面の観察から、平面は1.5m×1.5mの範囲で調査を行った。

第3節 調査の結果

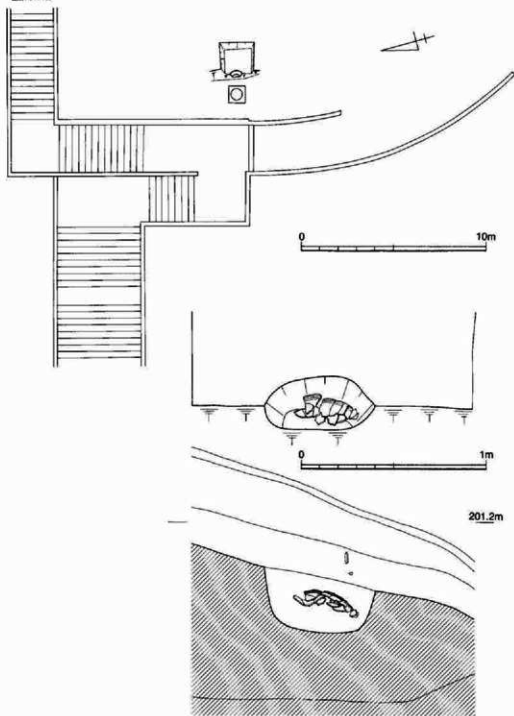
1. 遺構

検出した遺構は、土坑1基のみである。工事により既に半分程度失われていたが、直径0.6mの円形の土坑を確認した。深さ0.3mで断面形はすり鉢状である。埋土の中層には、弥生土器器台と高坏の破片が潰れた状況で出土した。

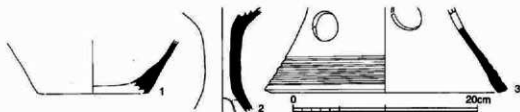


第1回 調査地点

至風の塔



第2図 遺構



第3図 出土遺物

2. 遺物(第3図)

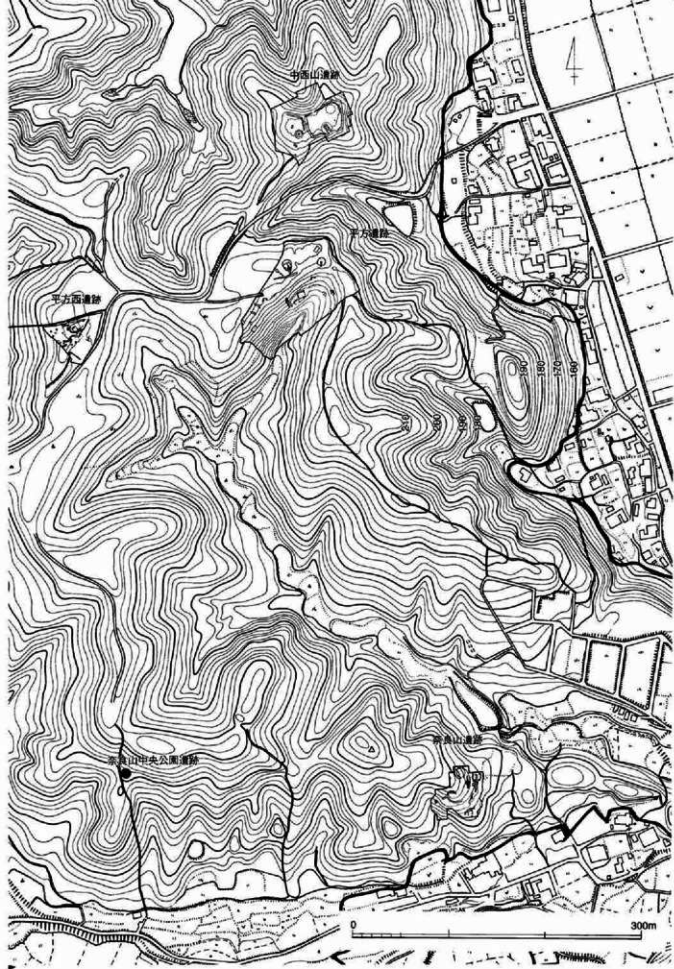
土坑から出土した遺物は、弥生土器壺・高坏・器台であった。壺(1)は底部の破片で調整ははっきりしない。高坏(2)は脚柱状部の破片で、坏部、脚裾部を欠く。器台(3)は脚下半の破片で、裾部に凹線が5条巡る。凹線文帯より上部は無文帯で直径3cm程度の円孔を5カ所開けている。

第4節 まとめ

奈良山中央公園遺跡は、不時発見の遺跡で、弥生時代中期後半の土坑1基のみの調査であった。一目地形を見ると、南方向の斜面に立地している。これは、この地点上部の塔の付近でも遺物を採集していることや、平方遺跡、奈カリ与遺跡、中西山遺跡のことも考え合わせると、さらに周辺の広い範囲にも、遺跡は広がっていたことは確実である。

なお、調査した土坑は土囊を詰めて現地保存を実施した。

第7部 まとめ



第1章 要 約

第1節 各遺跡のまとめ

今回報告の中西山遺跡群、平方遺跡群、平方西遺跡、奈良山遺跡群、奈良山中央公園遺跡の5つの遺跡群は、三田市南部に開発されている北摂三田ニュータウン中央地区（ウッディタウン）内に位置する。これらは武庫川右岸に広がる丘陵上に立地する。

1. 中西山遺跡群

中西山遺跡群は弥生時代中期後半と弥生時代後期、古墳時代後期、中世の複合遺跡である。弥生時代中期後半は円形の竪穴住居跡とササカイト集積遺構を調査した。弥生時代後期は確かな土器は出土していないが、木棺墓2基を調査した。木棺墓2からは板状鉄斧が出土した。古墳時代後期は2基の円墳を調査した。3号墳は木棺直葬であり、4号墳は横穴式石室を埋葬施設とするものであった。横穴式石室からは特殊扁壺や大型高坏など特殊な須恵器が出土している。中世の山城は土塁と堀切・曲輪を調査している。

2. 平方遺跡群

平方遺跡群は弥生時代中期後半、古墳時代後期、中世の複合遺跡である。弥生時代中期後半は竪穴住居跡、掘立柱建物跡、方形住居状遺構、段状遺構、土坑などを調査した。遺物はⅣ様式後半の弥生土器、石器、鉄器などが出土している。中でも竪穴住居跡SH2・3からは小銅鐸の土製の鋳型（外型・中型）が出土しており、特筆できる。また土坑からは銅鐸（小銅鐸）の石製の舌や羽口が出土しており、注目される。石器では竪穴住居跡SH2・3からササカイト製の石鉞や剥片が多量に出土している。

古墳時代後期は4基の竪穴住居跡と1基の掘立柱建物跡、3基の須恵器窯跡、2基の横穴式木室墳を調査した。いずれも6世紀後半を中心とする時期である。

中世の山城は土塁と堀切・曲輪を調査している。

3. 平方西遺跡

平方西遺跡は古墳時代後期を中心とした遺跡である。6世紀後半の竪穴住居跡2棟の調査をしたが、周辺にさらに広がっていたものと考えられる。木棺墓群は遺物が出土しなかったため時期は不明であるが、中西山遺跡の木棺墓群の例から考えて同様の弥生時代後期と考えられる。また土坑（SK2）は梶下ヶ谷遺跡の落とし穴と類似していることから、縄文時代の落とし穴と考えられる。

4. 奈良山遺跡群

奈良山遺跡群は古墳時代後期から奈良時代、中世、近世の複合遺跡である。古墳時代後期は6世紀後半の円墳を2基確認した。いずれも直径10m前後で、埋葬施設は流失して確認できなかったが、木棺直葬が推定されている。7世紀前半から8世紀にかけては小鍛冶に係わる工房

3棟と小鍛冶炉を調査した。工房は竪穴住居から掘立柱建物に変わっている。中世は12世紀後半の中世墓を1基、近世は18～19世紀の墓地を確認した。土坑のもの14基、埋葬を埋葬施設にしているもの6基であった。五輪塔や宝篋印塔の破片が出土している。

5. 奈良山中央公園遺跡

奈良山中央公園遺跡は弥生時代中期後半の土坑を1基調査したのみであるが、不時発見の遺跡であり、広範囲に広がっている遺跡であることは確実である。

第2節 各時代のまとめ

以上の様な各遺跡の発掘調査成果を各時代毎にまとめてみる。

1. 縄文時代

縄文時代と考えられる遺構には平方西遺跡の落とし穴状の土坑がある。これは遺物など出土していないが堀下ヶ谷遺跡と同様であるため縄文時代と考えた。また平方遺跡からは遺構からの出土ではないが、草創期の有舌尖頭器や木葉形尖頭器が出土している。これらは当時の狩猟の一端を示すものといえる。

2. 弥生時代

弥生時代中期前半までは遺構や遺物を確認していない。中期後半は中西山遺跡で竪穴住居跡2棟とサヌカイト集積を調査した。平方遺跡では竪穴住居跡、掘立柱建物跡、方形住居状遺構、段状遺構、土坑などを調査した。奈良山中央公園遺跡では土坑を1基確認した。平方遺跡は部分的な調査であるため、遺跡の範囲がさらに広がることは確実である。

いずれも三田盆地の武庫川右岸における高地性集落で奈カリ与遺跡と同様に中期後半（Ⅳ様式後半）の極限られた時期に集中しており、興味深い。同様の遺跡立地は明石川流域の中期後半の高地性集落のあり方と似ており、その関連性が注目される。

遺物は小銅鐸の銚型や石製舌などの特殊な遺物が出土したほか、多量の石鏃が出土しており、遺跡の性格を示すものと言えよう。また鉄斧や鏝や鎌が出土しており、奈カリ与遺跡も合わせて石器の鉄器化を示す資料が出土している。

弥生時代後期と考えられる遺構には中西山遺跡と平方西遺跡の木棺墓群がある。盛土を確認できない小規模なものである。中西山の木棺墓2からは大型の板状鉄斧が出土している。この時期の集落は近くでは沖積地の川除・藤ノ木遺跡があり、集落と墓地の立地の違いが指摘できる。

3. 古墳時代～奈良時代

古墳時代前期から中期にかけては遺構や遺物は検出していない。

古墳時代後期の6世紀後半からは再び武庫川右岸に広がる丘陵上が利用されるようになる。利用のされ方は一つは墓地としての古墳であり、一つは須恵器や小鍛冶などの生産地としての

場所である。

古墳は中西山と平方と奈良山で調査をしており、いずれも6世紀後半と考えられている。中西山4号墳は三田盆地の武庫川右岸としては唯一の横穴式石室を埋葬施設とする古墳であり、特殊扁壺や大型高坏などの特殊な須恵器が出土しており特殊性が目される。同様に須恵器特殊扁壺や大型高坏が出土している三田市箱塚4号墳との関連が指摘できる。

中西山3号墳と奈良山5号・14号墳は木棺直葬の円墳である。6世紀後半の三田盆地の武庫川右岸としては普遍的な古墳であり、西山古墳群でも調査している。平方1号・2号墳は横穴式木室を埋葬施設とする古墳であり、2号墳は火を受けており、炭化した木室材と焼けた人骨が出土している。西山古墳群でも3基調査しており、横穴式木室墳の密度の高い地域となった。隣接して同時期の平方窯跡群が存在し、横穴式木室と須恵器窯との関係が想定される。

須恵器生産に係わる遺跡は平方窯跡群の3基の須恵器窯とそれに係わる工房、住居跡群がある。3基の須恵器窯は6世紀第4四半期に位置づけられ、3号→2号→1号窯と変遷している。3号窯の脇に平坦地を築き、掘立柱建物と竪穴住居を配置しており、工房や倉庫・工人の住居などの機能が考えられる。これと同様に2号・1号窯周辺にも竪穴住居が存在しており、同様の性格が考えられる。少し離れているが平方西遺跡の竪穴住居も同様の性格が考えられる。

周辺では分布調査の状況や古墳のあり方から平方窯跡群に前後する6世紀中頃から7世紀中頃の窯跡が存在した可能性が指摘できる。

鉄生産に係わる遺跡には奈良山遺跡の工房跡と小鍛冶炉がある。工房は7世紀前半が竪穴住居跡であり、8世紀には掘立柱建物跡に変わっている。須恵器や土師器、神功開寶、鉄滓・砥石が出土している。周辺の梶下ヶ谷遺跡や下西山遺跡での小鍛冶遺構や工房の存在も調査されており、武庫川右岸に広がる丘陵上や谷が鉄の一大生産地であった可能性が指摘できる。

4. 平安時代以降

平安時代の遺構は検出していないが、中西山遺跡では須恵器などが出土しており、何らかの人間の行動があったものと考えられる。

中世の遺構には奈良山遺跡の12世紀後半の中世墓がある。また時期は不確定ながら16世紀後半の中西山城と平方城がある。中西山城で土師器の小皿・鍋、瀬戸美濃焼の天目茶碗が出土している。山城の形態から考えれば時期が遡る可能性もある。

近世は奈良山遺跡で18～19世紀の墓地があり丹波焼や越前焼の甕が蔵骨器に利用されていた。五輪塔や宝篋印塔の破片が出土している。また近世から現代にかけては平方西遺跡の山の神の祠があり、寛永通寶や磁器・土師器が出土している。

以上各遺跡の概要をまとめたが、多くの遺跡で縄文時代から近世までの様々な時代の遺構が重複して営まれていることが北摂三田ニュータウン中央地区(ウッデイトウン)内の遺跡の特徴である。

第2章 北摂ニュータウン内遺跡発掘調査が意味するもの

第1節 はじめに

今回の北摂ニュータウン内の調査報告書は第3冊目にあたり、発掘調査も中盤を迎えた感がある。これらの埋蔵文化財調査により明かになった事実が多く、その中には意外な発見もあった。そこで今までの発掘調査を振り返って北摂ニュータウン中央地区遺跡の分布や調査方法を再考し、広く今後の埋蔵文化財調査の指標について考えるものである。

第2節 調査の対応とその経過

北摂ニュータウンの開発計画における埋蔵文化財調査の経緯・経過については「北摂ニュータウン遺跡報告書Ⅱ」に詳しいので、ここでは要点のみ説明する。

開発計画については当時の日本住宅公団（現、住宅・都市整備公団）が兵庫県や三田市と協議を重ね、南、中央、北、西区と4箇所ある地区の内、南地区から開発事業にとりかかっている。この4地区の開発総面積は武庫川右岸の丘陵地一帯の1,244haにおよぶ。

兵庫県下における大規模開発事業については、事業に先行して埋蔵文化財分布調査を事前に実施することで、あらかじめ保存策等について開発者と協議を行っている。しかし、この広大な開発地に位置する埋蔵文化財包蔵地についてはそれまで充分把握されていなかった。

そこで事業地内の分布調査は高井伸三郎氏を調査主任として、1969・1970年度（昭和44・45年度）にわたって行われた。その結果は『北摂ニュータウン計画地域埋蔵文化財分布調査報告書』として各年度毎に報告されている。当時は三田市内の武庫川右岸丘陵地帯では一部の山城等が周知されていただけで、ほとんど遺跡の分布については把握されていなかった。この本格的な分布調査により埋蔵文化財包蔵地は85箇所におよんだ。分布調査報告書の中で「武庫川右岸の丘陵地帯にも相当数の遺跡の発見が期待されたが、意外に少ない成果におわった」ことや、「深い藪に妨げられて見通しがきかなかった」こと等が原因であるとされ、「伐採後の遺跡発見が少なくない」と予想されていた。

その後、分布調査結果や開発計画を考慮し、1971年度（昭和46年度）から1978年度（昭和53年度）にかけて遠藤順昭、河本健介、故・磯崎正彦、故・藤井祐介の各氏が各々調査団を組織し、南地区、中央地区とで発掘調査が実施された。また1978年度（昭和53年度）7月から兵庫県教育委員会が発掘調査を実施し、現在に至っている。

分布調査の結果、周知された遺跡以外にも発見された遺跡・古墳の数は多く、また分布地図に記載された遺跡が確認されず、ながらく不明であったものも存在した。藤井祐介氏が担当した『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書』Ⅰでは西山6号墳（前方後円墳）など新たに発見された古墳も多い。また、兵庫県教育委員会が調査した奈カリ与遺跡も同様で、釜屋城の調査時に

発見され、「北摂ニュータウン内遺跡調査報告書」Ⅱとして刊行されている。

その後、発掘調査は中央地区を中心に進められ、奈良山、西山、平方など当初充分把握できていなかった遺跡の調査を行なった。またこれらの遺跡発見の経緯については当地区の遺跡のありかたと共に後述したい。また、保存地区や発掘調査地区の協議についても順次、兵庫県教育委員会と住宅・都市整備公団とでおこなってきた。

第3節 遺跡発見の増加

1969・1970年度に実施した分布調査の結果以上に、その後遺跡の発見が相次いだ。これは分布調査結果をもとに周辺の再確認を実施した際に遺跡が発見された例が多い。

1. 平方遺跡等の発見

平方遺跡を語るまえに奈カリ与遺跡について説明しなければならない。奈カリ与遺跡は釜屋城の全面調査を実施した際に弥生時代の遺構が発見された。これは当初、予想もつかなかった丘陵頂上部及び斜面地での弥生遺跡の発見であり、しかもその面積は30,000㎡におよんだ。また鉄器を相当数保有することや集落規模の大きいことなど、三田盆地における弥生時代中期の大規模な高地性集落の発見は三田盆地の低地遺跡や畿内中心部とその周辺との関係や北摂ニュータウン内の遺跡立地を再考させる資料になり、その後の弥生時代遺跡の発見の糸口になった重要な発掘調査であった。しかし奈カリ与遺跡の立地する丘陵頂部および斜面と同様な地形はこの付近一帯に多く存在するものの、当時の弥生遺跡の発掘は西山遺跡の方形周溝墓など僅少であり、奈カリ与遺跡が当地区内の弥生集落として代表的存在であった。

1981年(昭和56年)本報告にもある中西山城跡の調査の際に丘陵頂上部に弥生中期の住居跡が確認された。その後1987年度(昭和62年度)の全面調査によって弥生時代中期の住居跡や木棺墓などが発掘調査された。この中西山遺跡の発掘によって集落規模は奈カリ与遺跡よりはるかに小さいものの、周辺の丘陵部に弥生時代の集落や墓が存在することは容易に予想できた。

同時に調査を予定していた平方窟跡は1970年度の分布調査で発見されており、その後1981年度に確認調査をおこなったが明確な遺構や遺跡の規模等は確定困難であったため、確認地点の周辺を残してその周囲は宅地として造成された。6年後の1987年度(昭和62年度)北摂ニュータウン内の発掘調査は中西山遺跡の全面発掘調査と平方窟跡を確認する予定であった。前述の奈カリ与遺跡や中西山遺跡等の立地や諸条件を考え、再度、確認調査に入る前に周囲の地形や遺物散布状況を見た結果、平方窟跡の調査地区として残された約8,000㎡内に土塁状の高まりや、弥生時代の遺物を発見した。そこで、この地点が遺跡であることを確認するため全域にわたって確認トレンチを配置し、遺構の検出に努めた結果、各種の遺構を検出し、遺跡であることが判明した。また全面調査では弥生時代の集落と共に、土製の小銅鐸型や石製の舌など小銅鐸鑄造に関連する重要な遺物が発見された他、横穴式木室を内部主体とする古墳や当初から想定

されていた古墳時代の窯跡や工房跡と共にその時期の住居跡、そして山城関連の土塁と数多くの成果が現れるに至った。また奈良時代の建物跡等が確認されていた榎下ヶ谷遺跡についても再度確認した結果、奈良時代の掘立柱建物跡と縄文時代中期初頭の爪型土器やサヌカイトのフレイク等を発見した。この遺跡の立地を観察すると、遺構が発見された河岸段丘だけでなく、谷を隔てた西方向の段丘も遺跡が広がることが考えられた。そこでこの西の地点も確認対象とし、同時に確認調査した結果、東の段丘と同様の遺構が存在することが確認された。その後1988年度の調査で榎下ヶ谷遺跡は奈良時代の鉄生産に係わる遺跡であることが判明し、下層から縄文時代に造られたと考えられる“落とし穴”が点在する当時の集落であることが判明した。これで予想どおりに遺跡分布が展開してきた。

2. 中央地区の遺跡分布見直し

1987年度の調査結果は北摂ニュータウン内の遺跡を分布面から再度見直す必要にせまられ、北摂ニュータウン中央地区を中心に旧地形をとどめている箇所について再度分布調査を実施した。その結果は本報告書の分布図や「三田市遺跡詳細分布調査報告書」として反映されている。まず最初に注目したのは武庫川右岸に面する丘陵地一帯で、周辺緑地と共に残されていた平方、西山、中西山が位置する地点であった。平方遺跡から続く南の丘陵頂上部はすでに造成済で不明だが、武庫川に面する斜面地にて須恵器の散布が認められ、下西山遺跡として確認調査の必要性を示した。そのすぐ南に緩やかな尾根が残って造成から免れており、須恵器の散布がみられたため、地形を細かく観察すると古墳状の僅かな隆起を発見した。これらは西山西遺跡とした。続いて西山古墳群(藤井祐介氏調査済)の南斜面部を踏査したところ低墳丘ながらも古墳らしきものが10基程度存在することが判明した。この地点は以前、係争中であったため立ち入り許されなかった場所であった。解決後再度分布調査されることなく今まで過ごされてきた地点であった。これらの古墳は西山古墳群の続き番号を付したが、低墳丘のため伐採後確認トレンチを伴う調査が必要と考えた。

一方保存地区として整備されている奈良山古墳群付近の奈良山中央公園造成地内の西向き斜面に弥生時代中期後半の土器を伴う土坑を発見した。奈良山一帯で弥生土器が散布することから当地は平方遺跡等と同様の弥生時代の遺跡が広がることは確実であろう。その他、平方遺跡の西に丘陵頂上部が造成されず残っており、その場所を踏査したところ崖面から古墳時代の須恵器が採集されたため平方西遺跡とした。

さらに1987年には北摂ニュータウン中央地区内の北部を踏査し、サヌカイトの石核等を採集した向垣内遺跡や弥生土器等を採集した西山I遺跡などが丘陵頂上部で相次ぎ発見された。確認調査の結果、西山古墳群では10基以上の古墳が確認され、内部主体は木棺直葬と横穴式木室であることが判明した。これらは武庫川対岸の左岸地帯にある横穴式石室等を内部主体とする古墳群とは内部主体を構成する材料に違いがあり、古墳の規模にも影響を及ぼしているの

あろう。また以前から考えられてきた武庫川右岸地帯の古墳数が左岸に比べ極端に少ないということは言えない状態になりつつあり、再考が必要である。また古墳群の東側には奈良～平安時代の掘立柱建物跡が多数並び、集落を構成している。また西山西遺跡では古墳状の隆起が古墳と確認された。

平方西遺跡は古墳時代の竪穴住居跡と弥生時代と考えられる木棺墓や榎下ヶ谷遺跡で検出された“落とし穴”と同様の遺構が発掘された。また下西山遺跡では古墳時代～平安時代までの各時期の遺物が包含されており全面発掘調査の成果が期待される。

以上、中西山遺跡、平方遺跡、榎下ヶ谷遺跡等の成果を含め残存する殆どの地点が遺跡であることが判明した。これらの成果をもとに調査のありかたを改めて考えたい。

第4節 調査方法再考

北摂ニュータウン開発事業に際して行われた当初の分布調査結果、中央地区では42箇所発見され、現在では100箇所以上にのぼり、結果的には遺跡数が増大した。これらの理由は立木等の繁茂によって調査が困難であったことがあげられるが、我々の遺跡分布に対する認識が少なかったのかもしれない。したがって調査の展開によって、分布調査、確認調査、全面調査、保存等の調査方法を絶えず考え直さなければならなかった。

次に調査の見直しについて各段階毎に考えてみる。分布調査については現時点での成果をもとに、精度の高い地図で最新分布資料や発掘調査資料を盛り込み、必要な場合は各々の時点で再度分布調査すべきであろう。特に丘陵山頂部で採集された遺物は故意に運ばれる以外、当時の状態を保っていたものであり、たとえ谷部で採集された遺物であっても、その地点か或いはそれより上部に遺構等があることを想定しなければならない。やはり採集された遺物はその地点での歴史のものがたる一資料であり、存在意義は冷静に考えなければならない。

確認調査については北摂ニュータウン内の地形からみて、尾根上だけを確認しても遺構を検出できる可能性は少なく、むしろ谷部の堆積作用の多い箇所にはトレンチをできるだけ多く配置し、遺跡の存在の一端を確認することが先決である。包含層を確認すれば遺構の存在する可能性のある箇所に確認トレンチを配置できるのである。今や沖積地内でも谷部や低湿地の調査成果が上ってきている。これと同様に山間部や丘陵部においても谷部の調査が必要なのは明白である。ただ、今までの経験上、遺物の散布は見られるものの、トレンチ内には遺構は検出されなかったため全面調査範囲から除外した場合もあったが、今回の経験からすると、付近に遺構が存在する可能性を考えて谷部にまず試掘坑を設定すると共にもう一步踏み込んだ調査をすることが肝要である。また山間部では立木の伐採や伐根、表土掘削作業に手間取り、注意を要する包含層や遺構の検出にかかる時間的余裕がなくなることのないよう、可能な限り機械を導入し調査を効率よく進めていかなくてはならない。確認調査の結果、遺跡を確認し、その範

圃を確定する際においても、北摂ニュータウン内の遺跡はとくに丘陵部や谷部一帯に広がる場合が多く、充分余裕をもち範囲確定する必要がある。

全面発掘調査については確認調査と同様に、可能な箇所にあつては機械力を導入し、人力掘削については必要な限りかけることを忘れてはいけない。また西山古墳群でおこなった古墳の探査や平方竈跡で実施した熱残留磁気測定や梶下ヶ谷遺跡の落とし穴と考えられる土坑内の脂肪酸及びステロール分析等の科学的な分析は遺跡の範囲や性格を明らかにし、考古学資料を生きたものとするためにも早急に対応していくべきである。

第5節 北摂ニュータウン中央地区内の遺跡復原

北摂ニュータウン中央地区の開発前は山林や放牧地、谷水田であつたこの地も過去に利用された足跡は数多く存在する。今のところ最も古い時代の遺跡は縄文時代の遺跡としては梶下ヶ谷遺跡がある。集落跡が発掘されたのではないが、落とし穴と考えられる土坑が30箇所以上発掘され、脂肪酸分析等においてもその遺構の性格が裏付けられている。また平方西遺跡で発見された土坑も落とし穴の可能性が大きく、付近にこのような落とし穴が計画的に配置された猟場であつたと考えられる。そしてまたこの時代の集落は武庫川の自然堤防上や河岸段丘、右岸に入り込む谷付近など、さほど遠くない所に存在するものと考えられる。

弥生時代の集落は中期後半に限定され、奈カリ与遺跡から始まつた大規模な発掘調査以来、西山、中西山、平方遺跡と調査されてきた。奈カリ与遺跡を除くこれらの遺跡はいずれも西山と奈良山に挟まれた谷の周囲の丘陵頂上部に位置している。住居跡などを含む集落は丘陵頂上の平坦地にあり、西山や平方西遺跡のような墓域は丘陵頂上部及び斜面に位置している。また奈良山中央公園も遺跡であることが判明している。1986年調査当時はすでに造成がはじまり、旧地形を留める部分は少なかったにもかかわらず、残された丘陵頂上部には弥生を含む遺跡が多く存在していた。このことは少なくともこの谷を囲む丘陵頂上部の平坦地には集落が存在し、その他の丘陵頂上部や斜面地には遺構が存在するという証明ではなかろうか。なお1970年度の分布調査で発見された尾治ヶ尾Ⅰ遺跡ではサヌカイトのフレイクが発見されていることから、武庫川右岸の丘陵部に2kmも入った丘陵部にも遺跡が存在したのだろう。いずれにせよ、今となっては旧地形が殆ど失われている以上、広大な面積が遺跡範囲であつた可能性は大きいと言わざるをえない。

堆積作用の少ない丘陵頂上部では平方遺跡や磯崎正彦氏が調査した下深田大山遺跡において弥生時代中期後半の住居跡が凹んだ状態のまま発見されていることから、今後このような状態で遺跡、遺構が発見される可能性も秘めている。

北摂ニュータウン中央地区の北部の分布調査によって発見された丘陵上の平坦部に立地する各遺跡もこのような状態で遺跡が広大な面積で発見されたり、この様な単位で各地に存在する

可能性もある。そういう意味では大きな視点で遺跡をとらえることが今後の課題であろう。

古墳については武庫川右岸地帯であるこの地域では左岸地帯との古墳の内部主体の違いや規模等の相違は前述したとおりだが、とくに低墳丘の古墳が存在する。これは木棺直葬墳や横穴式木室墳の存在を想定し調査を行うべきである。次に古墳時代以降、古くは戦国時代から現代にいたるまで、たえず開発の手が入ってきた当地は大きく地形が改変され注意をはらう必要がある。たとえば中西山3号墳のような横穴式石室までが山城築造時に完全に削平されていたり、平方古墳のように現代の放牧地造成時に削平された例も多い。西山古墳群が位置する緩斜面地や西山古墳群の位置する尾根にも古墳群が存在することは、この西山、奈良山に入り込む谷帯には同様の古墳が存在していた可能性は高い。また1970年の分布調査にて西山付近の窯業関係の遺跡は結局確認することはできなかったが、平方窯跡の存在等から、調査トレンチにからなかった部分に窯跡群が存在した可能性もある。窯場や工房、工人の集落や墓などを考える上で重要な地域であった。

飛鳥、奈良、平安時代におよぶ鉄生産関係の遺跡も奈良山、梶下ヶ谷、下西山と点在している。掘立柱建物跡が斜面地で多数発掘された西山遺跡も含め、谷部や丘陵斜面に入り込む生産遺跡がこの地にあることを認識し、的確に把握しなければならない。

山城の分布についても明らかな土塁のみでなく、小さな堀切や土塁状の高まりをもつ遺構も多く存在する。山城についても土塁や堀切以外には構も少なく、遺物も少ない。このように情報量の少ない遺構を押さえるには前述の小規模な遺構の発掘も見逃してはならない。

第6節 今後の展望

北摂ニュータウン内の今までの発掘調査によって判明した事例は多数ある。またその意義も大きいのであるが、各調査時の展開により、もっと多くの遺跡が発見され、発掘されていた可能性は多分にある。現在北摂ニュータウン内の発掘調査は大詰めを迎えようとしているが、これらの成果をもとに根本から考え直し、発掘調査成いは保存に力を注がなければならない。

1987年度に調査した西山18号墳の横穴式木室は現実にはどの様な構造をしていたのか、復元を試みた。結果は付近の立木等で容易に構築することができた。今後もこのような実験等をおこない、検証することが必要になろう。

このように調査を見直して、北摂ニュータウン内中央地区の遺跡分布が明らかになり、遺跡の性格も少しづつ判明してきた。今後、県下各地の開発地区の埋蔵文化財調査においてもこのような遺跡のありかたを早期に考えていかなければならないのは言うまでもない。現実に大型の開発事業に伴う調査において成果をあげている遺跡もあり、遺跡範囲をどれだけの確に押え、遺跡の真実をどれだけ引き出せるか、絶えず考えていかなければならない。

圖 版

中西山遺跡群



1. 遺跡遺景 (南から)



2. 確認調査全景 (西から)



1. 調査前

2. 確認第1・3トレンチ (西から)



3. 確認第3トレンチ

竪穴住居跡検出状況 (南から)

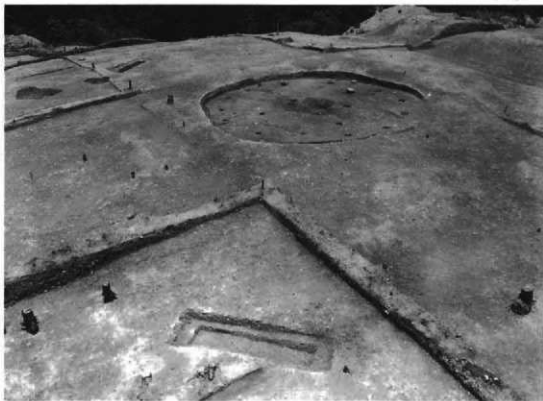


4. 確認第8トレンチ (南東から)

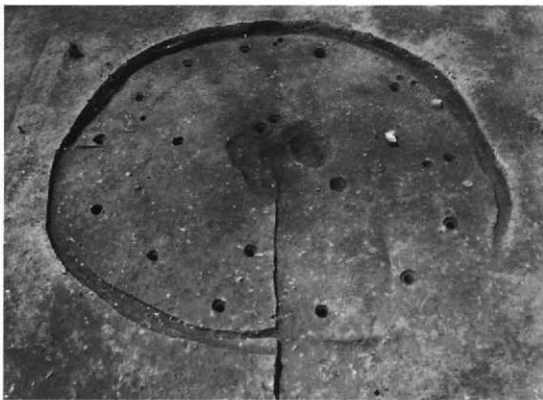


5. 掘削状況

6. 電動ふるい機による選別作業



1. 遺跡全景 (南西から)



2. 竪穴住居跡1 (南から)



1. 竪穴住居跡1 (北東から)



2. 竪穴住居跡1 中央土壇の断面

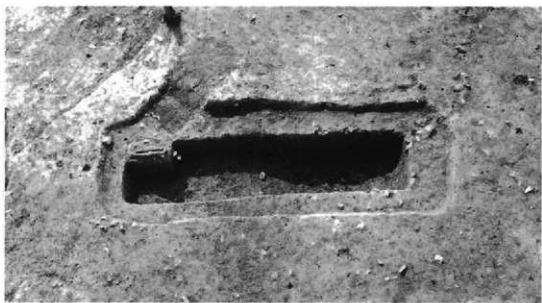
3. 竪穴住居跡1 周壁溝の断面

4. 竪穴住居跡1 柱状片刃斧出土状況

5. 竪穴住居跡1 柱穴断ち割り状況



1. 木棺墓1 (南西から)



2. 木棺墓2 (南東から)



3. 木棺墓2 板状鉄斧出土状況



4. 木棺墓2 棺内の断面



1. サヌカイト集積遺構 (上層)



2. サヌカイト集積遺構 (下層)



1. 調査前 (南東から)



2. 全景 (南から)



1. 奥壁（南から）



2. 玄門（北から）



1. 右側壁 (南西から)



2. 左側壁 (南東から)



1. 右夷道 (西から) 2. 墳丘東側の盛土状況 (南から) 3. 墳丘西側の盛土状況 (南から)



1. 石室内遺物出土状況（南から）



2. 玄室北隅付近の遺物出土状況（西から）



1. 玄室内遺物出土状況
(南から)



2. 羨道 遺物出土状況 (南から)



1. 全景 (南から)



2. 遺物出土状況 (一部復原)

図版14

中西山城



1. 調査前の全景（北西から）



2. 北側の状況（北から）



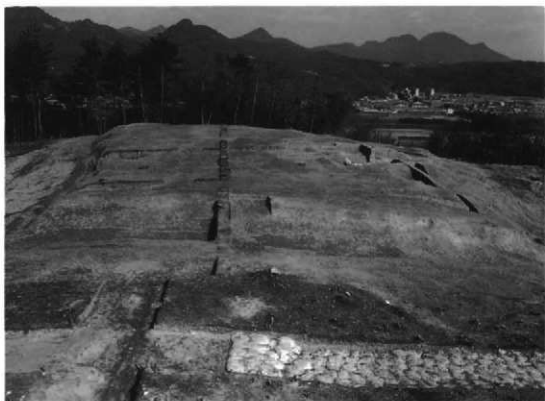
1. 北側の状況（西から）



2. 東側の状況（南から）



1. 調査後の全景（北西から）



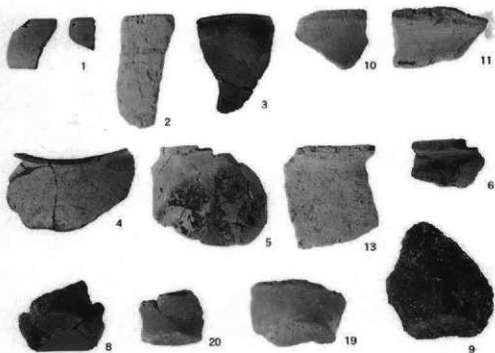
2. 調査後の全景（西から）



1. 土塁の断面（東から）



2. 土塁の断面（南から）





301

501



302



335



323



325



324



326



327



333



328



331



332



329



330



334



340



336



363



356



347



362



361



359



343



344



354



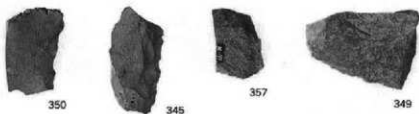
358

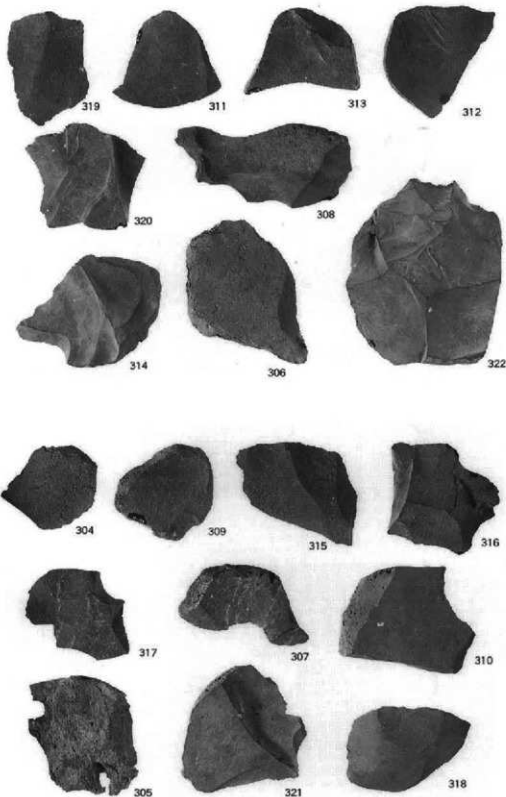


352



353

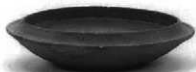




弥生時代 サヌカイト製片



25



30



27



32



29



34



45



37



46



38



49



48



40



41



39



43

44



51



47



53



54



50



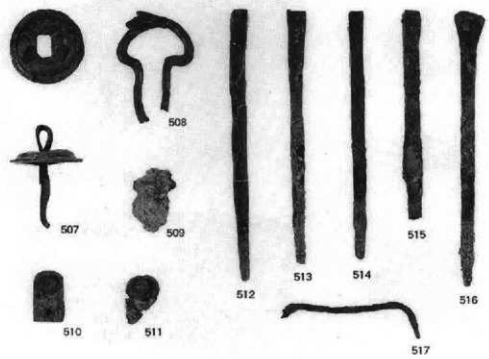
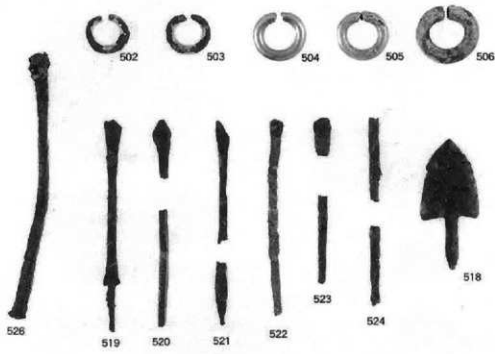
59



61



60



中西山3号墳 鉄器・耳環



69



71



85



66



67



75



77



78



80



79



87

平方遺跡群

平
方



1. 遠景 (南から)



2. 遠景 (上空南東から)



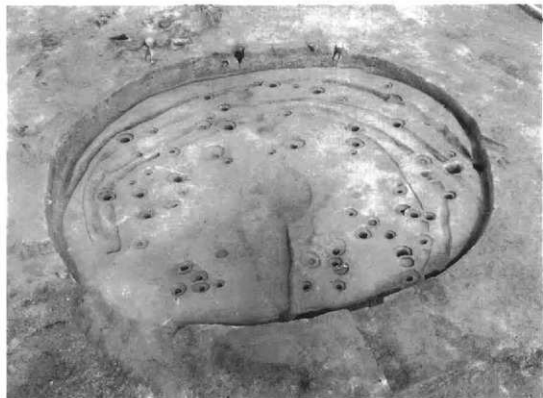
1. 全景（上空南から）



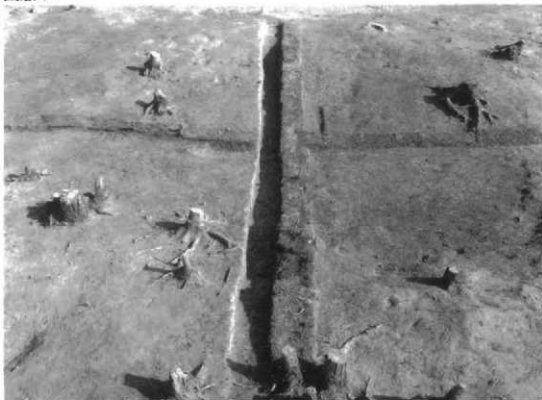
2. 全景（真上から）



1. SH1・SB1 (南西から)



2. SH1 (南から)



1. SH2調査前 (南から)



2. SH2・3 (南から)



1. SH2・3 (南から)



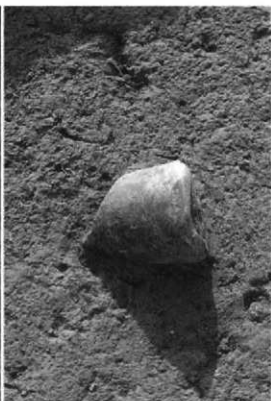
2. SH2・3 (北から)



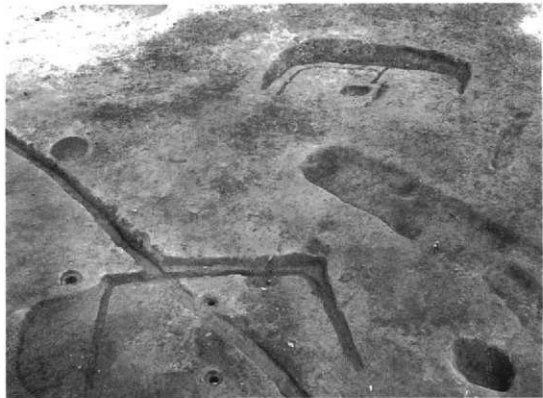
1. SH 2・3小銅鐻鎧型出土状況(東から)



2. 小銅鐻鎧型A出土状況(南東から)



3. 小銅鐻鎧型B出土状況(東から)



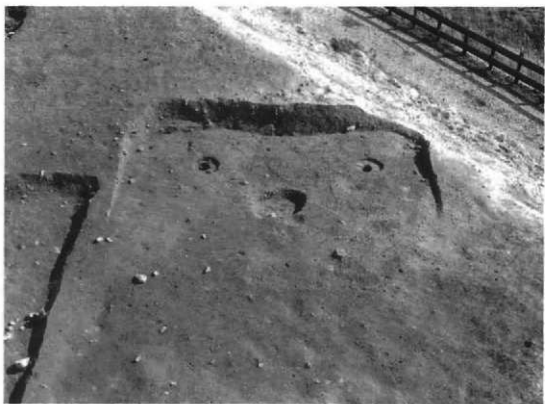
1. SH5・6 (南西から)



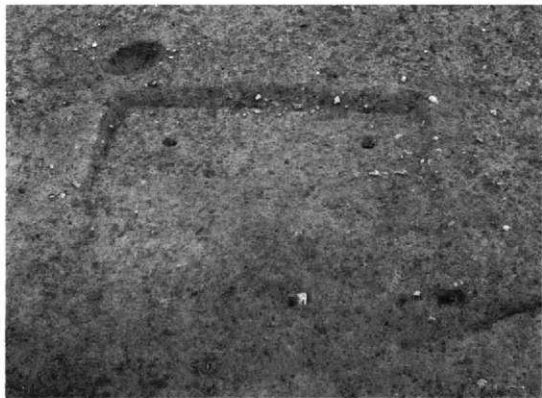
2. SH6 (南西から)



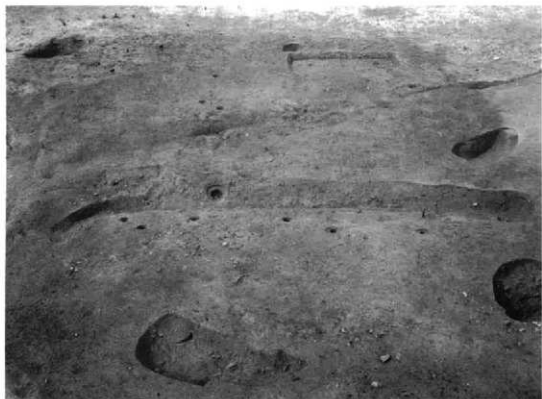
1. SH5 (西から)



2. SH7 (西から)



1. SH4 (南から)



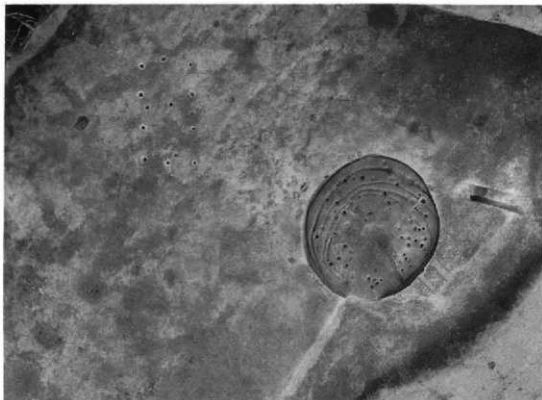
2. 段状遺構・SH4 (南から)



1. SH8・SH2・3 (西から)



2. SK3・SH8 (南東から)



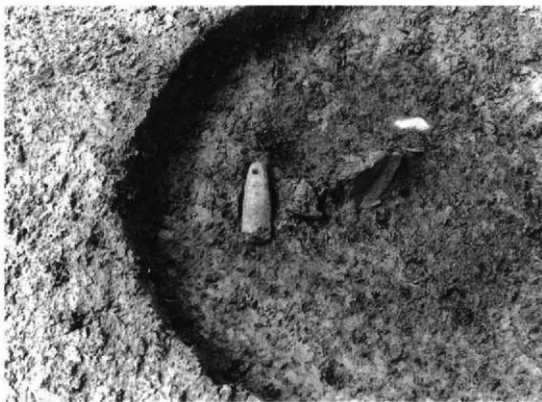
1. SBI・SHI (真上から)



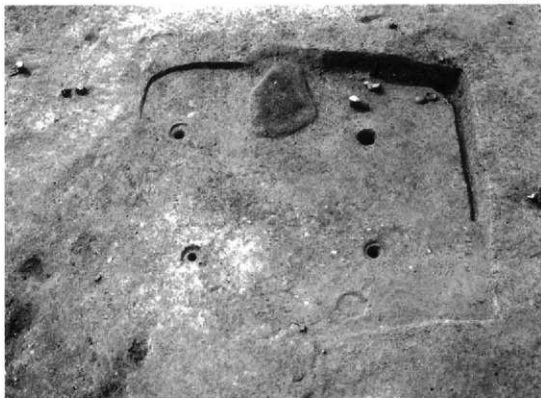
2. SBI (南東から)



1. SK 3 舌出土状況 (北から)



2. SK 3 舌出土状況 (東から)



1. SH10 (東から)



2. SH10 遺物出土状況 (東から)



1. SH9 (南東から)



2. SH11 (南東から)



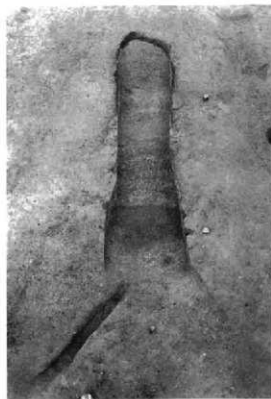
1. SH12 (南東から)



2. SH12カマド・遺物出土状況 (南東から)



1. 2・1号窟全景 (南東から)



2. 1号窟 (南東から)



3. 2号窟 (南東から)



1. 1号窯 (南東から)



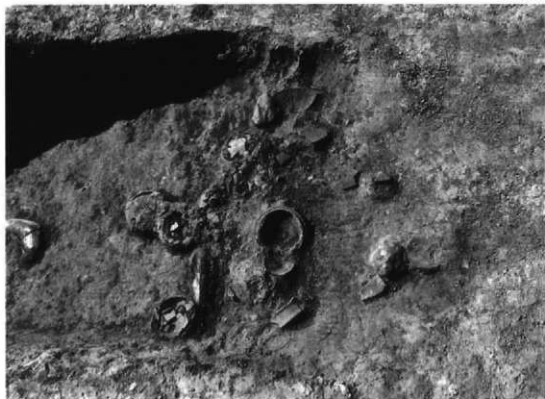
2. 1号窯土器出土状況 (南東から)



1. 2号窯 (南東から)



2. 2号窯土器出土状況 (南東から)



1. 2号窟土器出土状況（北東から）



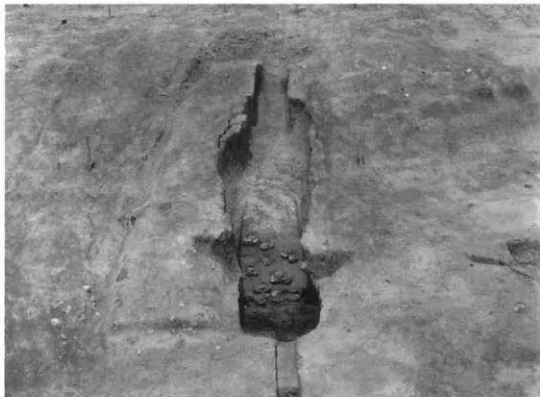
2. 2号窟土器出土状況（北から）



1. 2号窯左側壁（東から）



2. 2号窯右側壁（南から）



1. 3号竈 (南東から)



2. 3号竈土器出土状況 (南東から)



1. 3号竈とテラス（南東から）



2. 3号竈とテラス（東から）



1. SB2 (東から)



2. SB2ピット 断面 (南から)



1. 1号墳 (南東から)



2. 1号墳 (南東から)



1. 1号墳立室 (北東から)



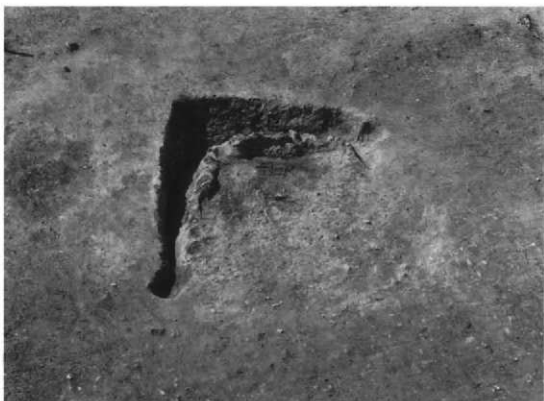
2. 1号墳南溝 (南東から)



3. 1号墳北溝 (南東から)



1. 1・2号墳 (南東から)



2. 2号墳 (南東から)



1. 2号墳奥壁（北西から）



2. 2号墳左壁（南西から）



1. 全景（上空南から）



2. 全景（南東から）



1. 全景 (南西から)



2. 南土塁断面 (南西から)



1. SH2調査状況



2. 3. 地磁器サンプル採集

4. 電動フルイ使用状況 5. 現地説明会風景



2



60



31



47



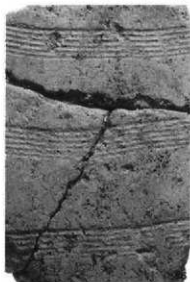
65



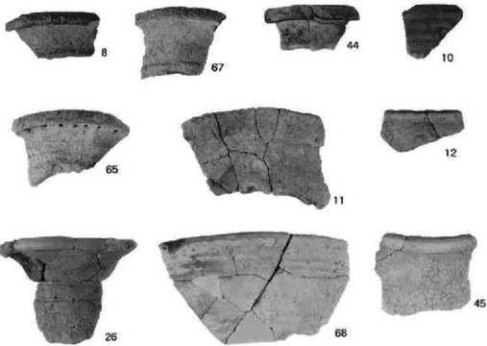
10



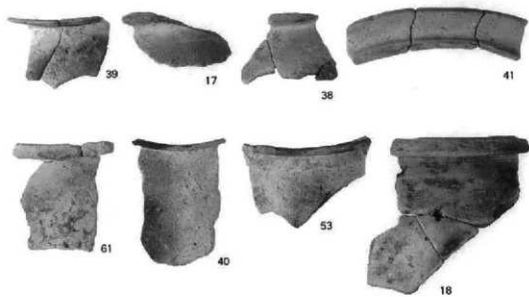
66



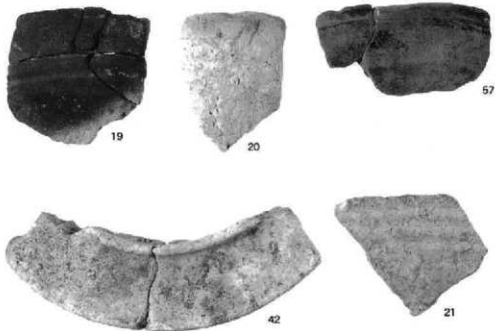
69



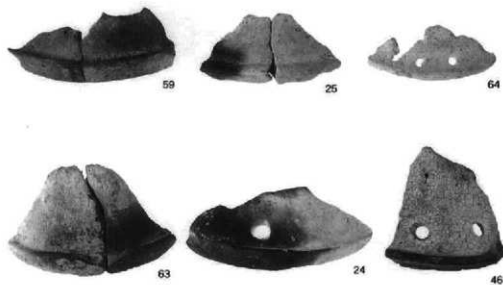
1. 弥生土器 壹



2. 弥生土器 貳



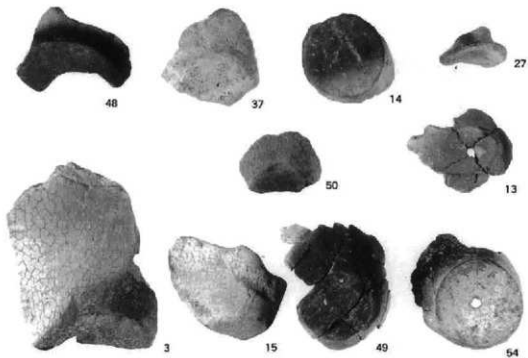
1. 弥生土器 高环



2. 弥生土器 脚部



1. 弥生土器 器台



2. 弥生土器 底部



702



701



702



701



701

702



702

701





701・702・703



703



704



901





57



98



71



76



75



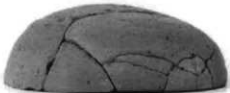
77



73



83



74



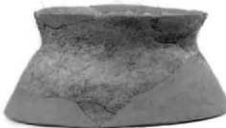
86



78



91



87



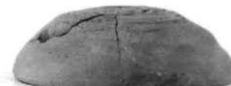
113



115



116



117



123



126



127



131



134



160



168



167



165



164



138



139



140



141



143



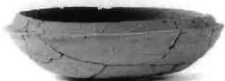
144



145



146



150



152



153



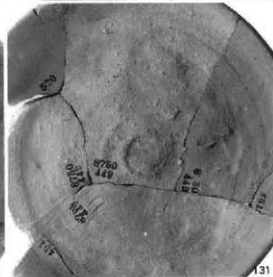
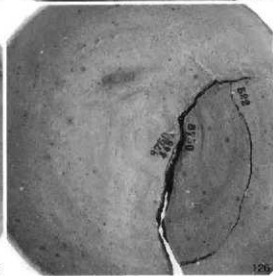
154



158



159



1号窯出土須惠器 坏蓋内外面



176



178



179



180



181



185



186



189



192



193



196



197



198



199



200

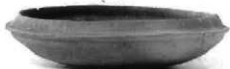


202

2号窟出土須恵器 坏蓋



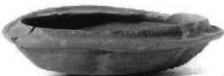
204



205



206



207



208



209



211



215



216



217



218



220



221



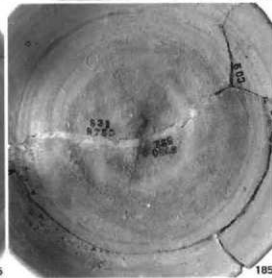
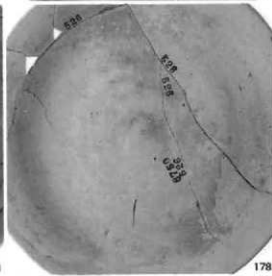
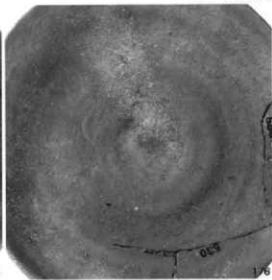
222



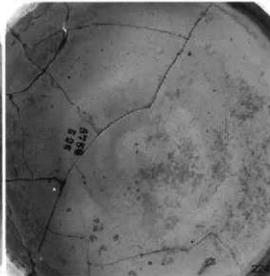
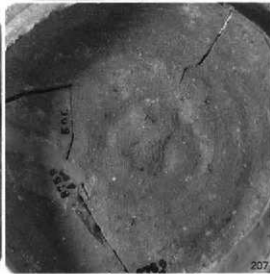
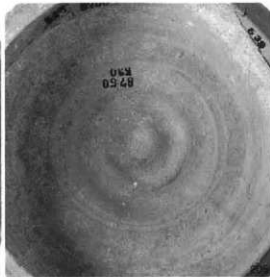
224



225



2号窯出土須惠器 环蓋内外面



2号窯出土須惠器 环内外面



234



235



236



238



239



240



241



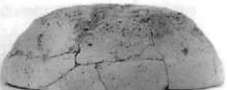
243



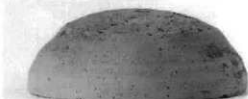
245



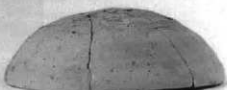
247



248



249



250



251



255



258



261



263



264



266



247



268



269



272



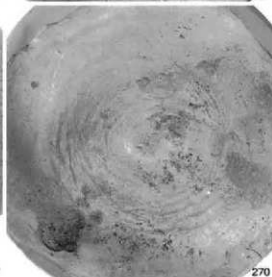
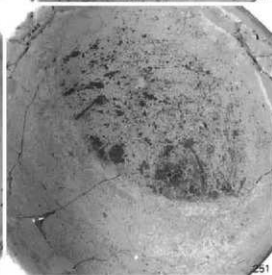
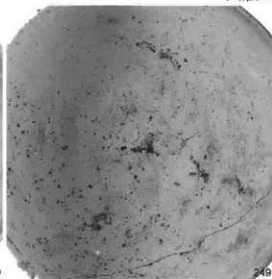
271



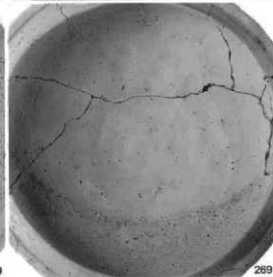
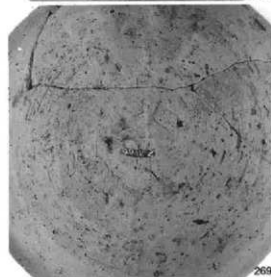
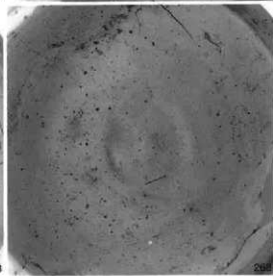
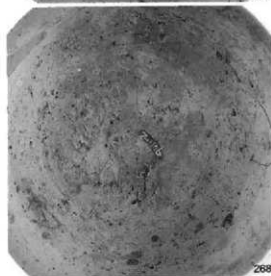
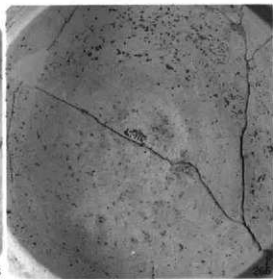
270



273



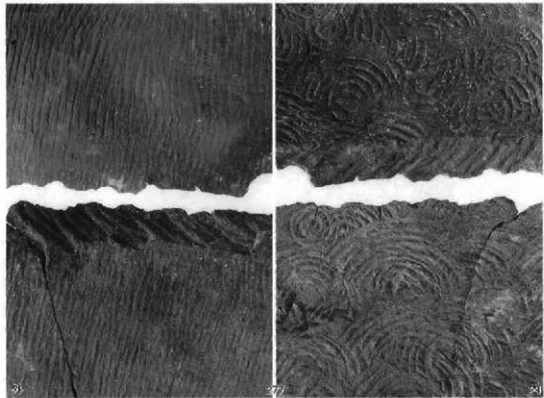
3号窯出土須惠器 环蓋・高环内外面



3号窯出土須惠器 坏内外面



277

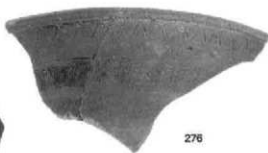


31

277

31

3号窟出土須惠器





268



108



287



286



284



283



104



285



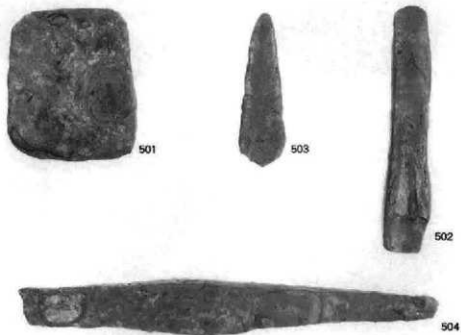
106



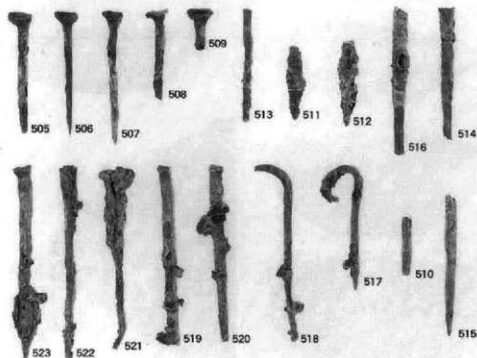
105



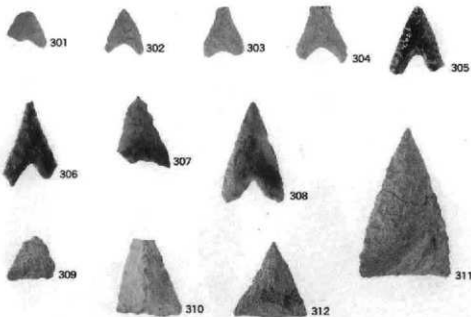
289



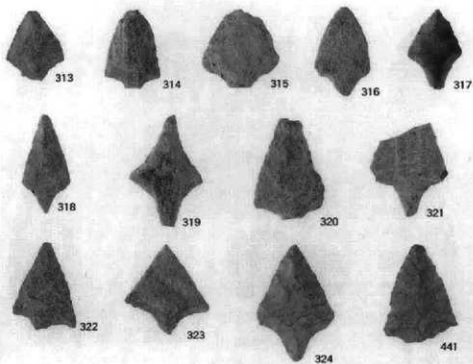
1. 弥生時代鉄器



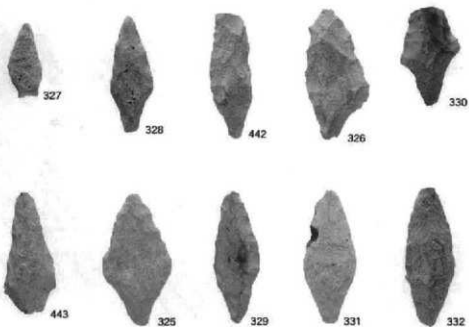
2. 古墳出土鉄釘



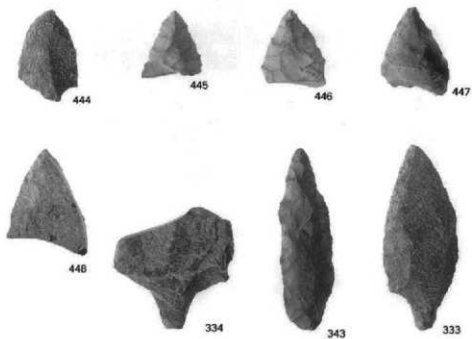
1. SH 2 出土の石器 (1)



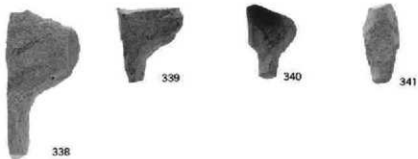
2. SH 2 出土の石器 (2)



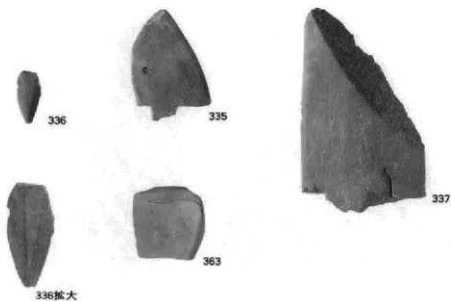
1. SH 2 出土の石器 (3)



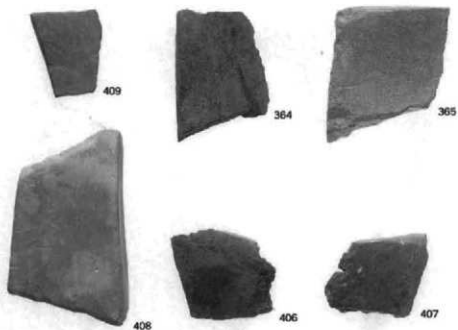
2. SH 2 出土の石器 (4)



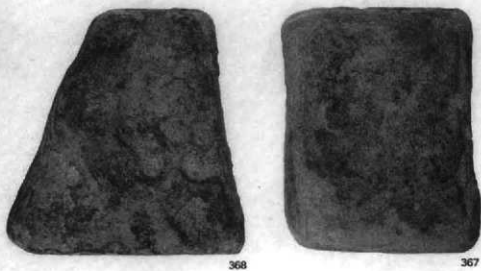
1. S H 2 出土の石器 (5)



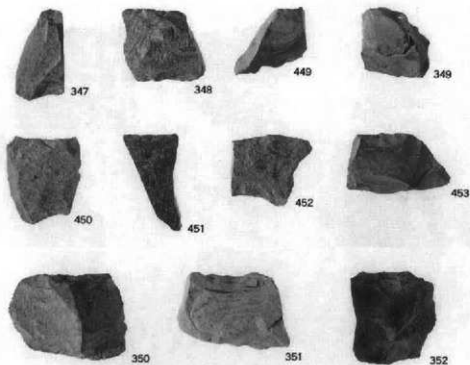
2. S H 2 出土の石器 (6)



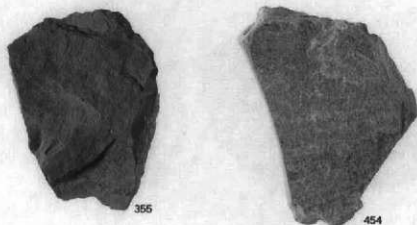
1. SH 2 出土の石簡 (7)



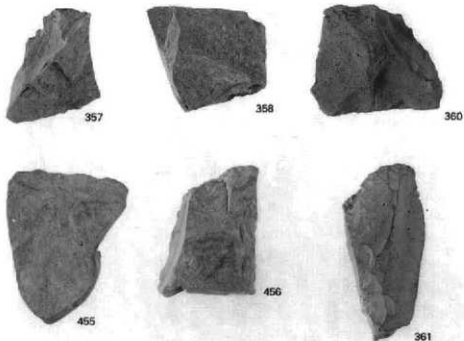
2. SH 2 出土の石簡 (8)



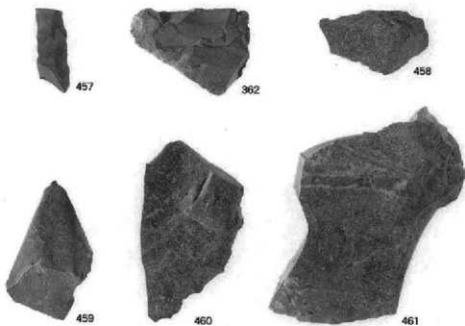
1. SH 2 出土の石器 (9)



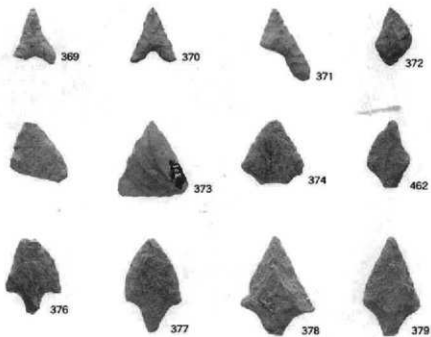
2. SH 2 出土の石器 (0)



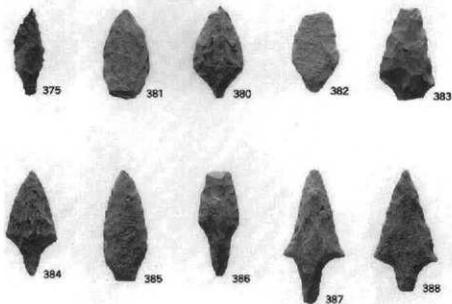
1. SH 2 出土の石器 (1)



2. SH 2 出土の石器 (2)



1. SH3出土の石器(1)



2. SH3出土の石器(2)



390



391



392



393



394



395

1. SH3出土の石器(3)



463



396



401



399



464

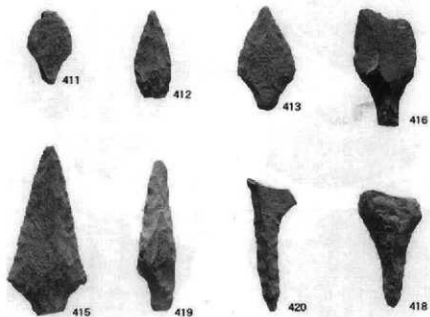


465

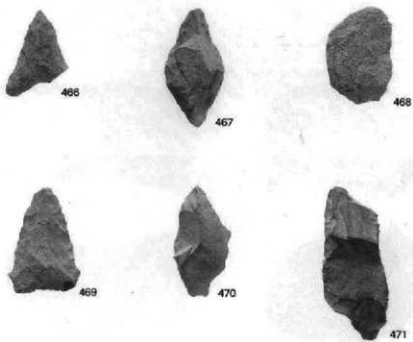


404

2. SH3出土の石器(4)



1. SH1出土の石器(1)



2. 包含層出土の石器(1)



425



425+426



426



1. 石器の接合資料



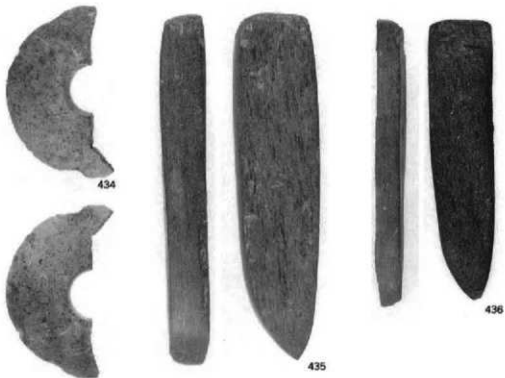
427



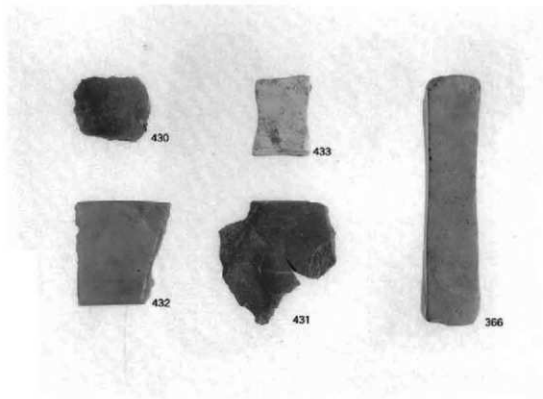
428



2. 包含層出土の石器 (2)



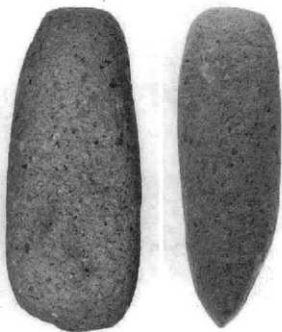
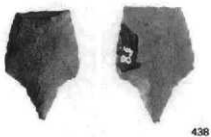
1. 包含層出土の石器 (3)



2. 包含層出土の石器 (4) (366はSH 2)



1. 縄文時代草創期の石器



2. 包含層出土の石器 (5)



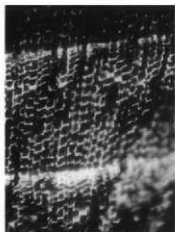
1. スギ (No.10) 木口



2. 同左、柁目



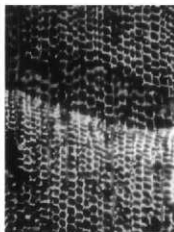
3. 同左、板目



4. スギ (No.18) 木口



5. 同左、柁目



6. スギ (No. 30) 木口



7. スギ (No.30) 柁目

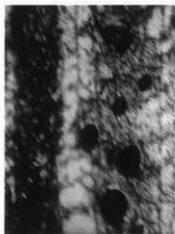


8. カシ類 (No.32) 木口

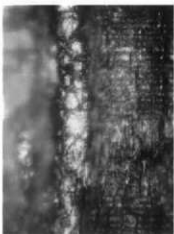


9. 同左、板目

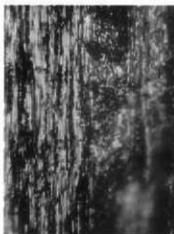
(×30, No. 2・5・7 : ×100)



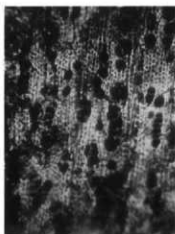
10. カシ類 (No.40) 木口



11. 同左、柀目



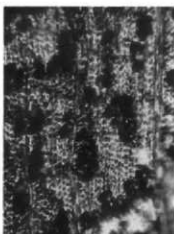
12. 同左、板目



13. カエデ類 (No.35) 木口



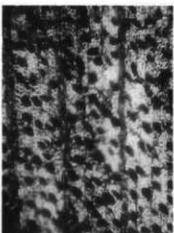
14. 同左、板目



15. カエデ類 (No.35) 木口



16. カエデ類 (No.37) 板目



17. リンゴク (No.33) 木口



18. 同左、柀目

平方西遺跡

平方西



1. 調査前 (北東から)



2. 全景 (南西から)



1. 全景（北東から）



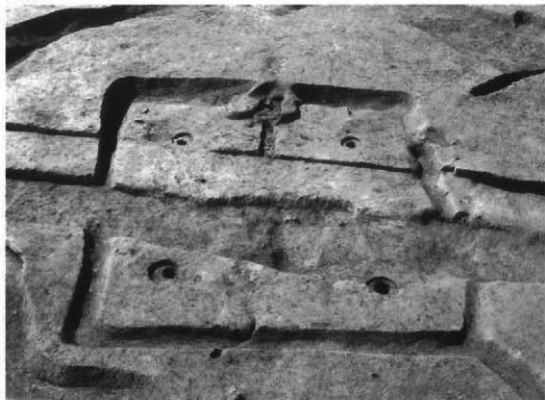
2. SH1・2（南東から）



1. SH1 (南東から)



2. SH1 遺物出土状況 (南西から)



1. SH2 (南東から)



2. SH2 遺物出土状況 (北西から)



1. SH1カマド (南東から)



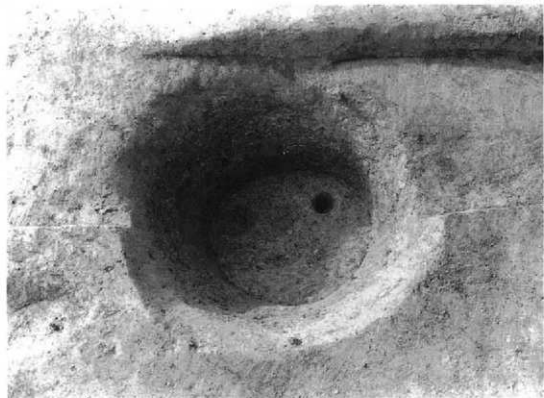
2. SH2カマド (南東から)



1. 木棺墓群 (南から)



2. SK1



1. SK 2



2. SK 2 断面



6



9



10



3



1



302



5



7



301



4



8



2

出土遺物

奈良山遺跡



1. 遺跡全景（北東から）



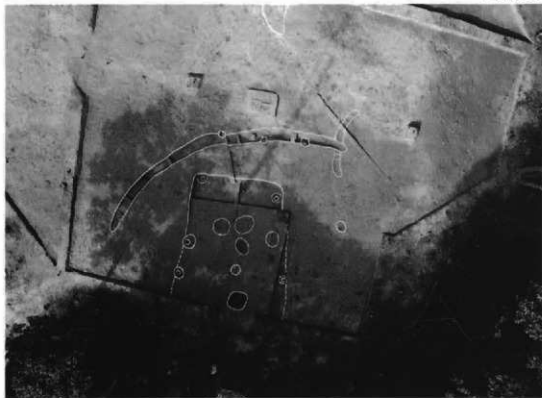
2. 第1工房跡全景



1. 奈良山5号墳と第1工房跡



2. 奈良山14号墳



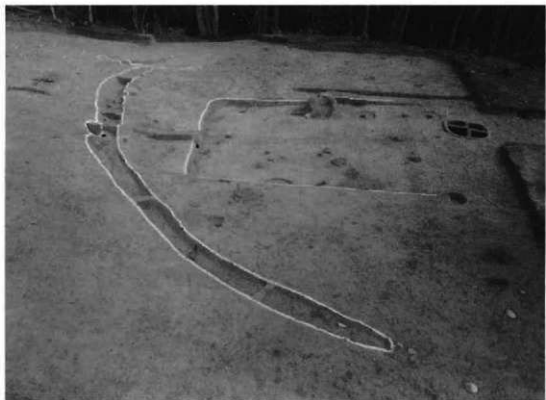
1. 第2工房跡全景



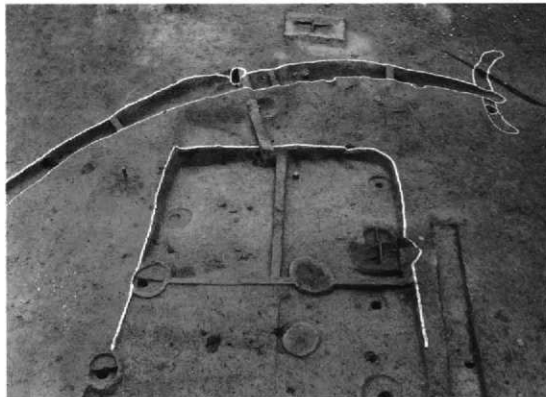
2. 第3工房跡全景



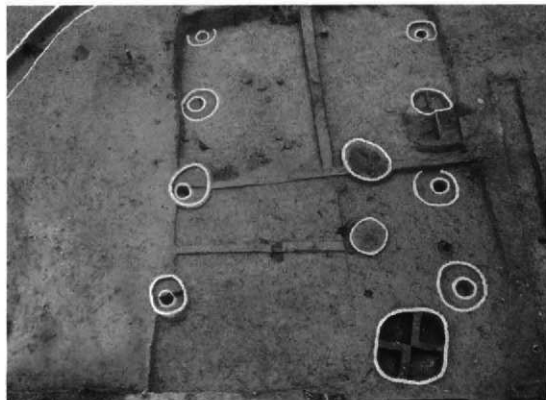
1. 第1工房跡 (南東から)



2. 第2工房跡 (西から)



1. 第2工房跡下層の竪穴住居跡



2. 同上層の掘立柱建物跡



1. 第3工房跡 (南から)



2. 炭窯跡



1. 中世基 (南から)



2. 中世基断ち割り



1. 近世墓全景



2. 近世墓域の石塔類



37



6



59



3



13



7



41



44



42



66



43



45



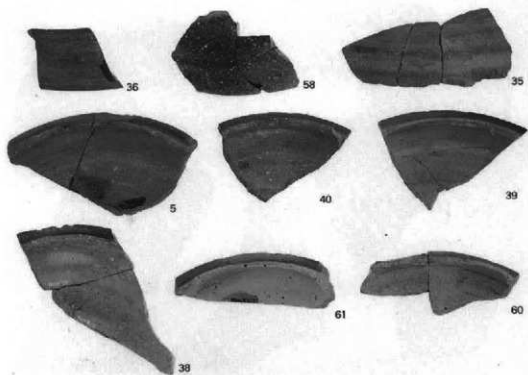
11



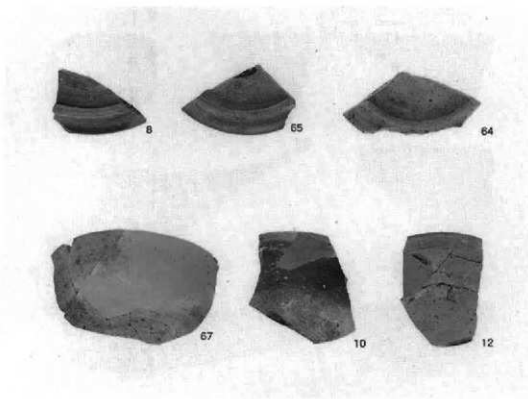
9

須惠器 蓋杯・高杯

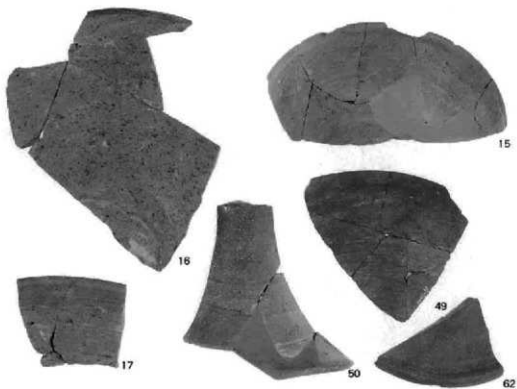




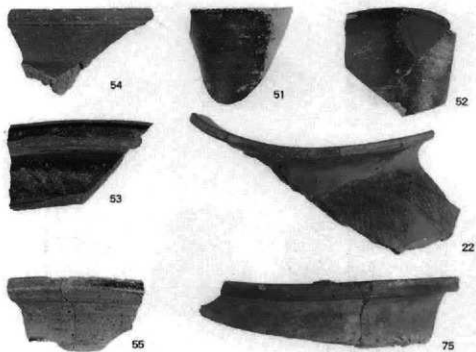
1. 須恵器 蓋杯



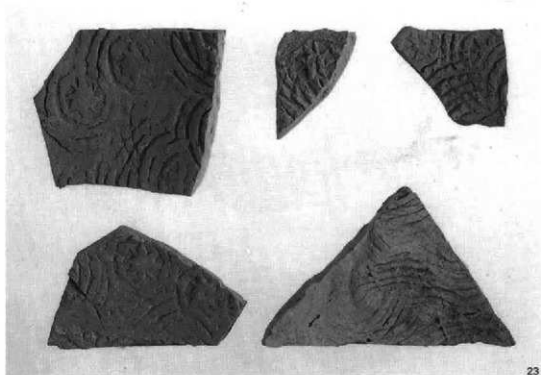
2. 須恵器 蓋杯



1. 須恵器 高杯



2. 須恵器 壺・甕



23

1. 須恵器 甕内面の当て具痕



26



57



28

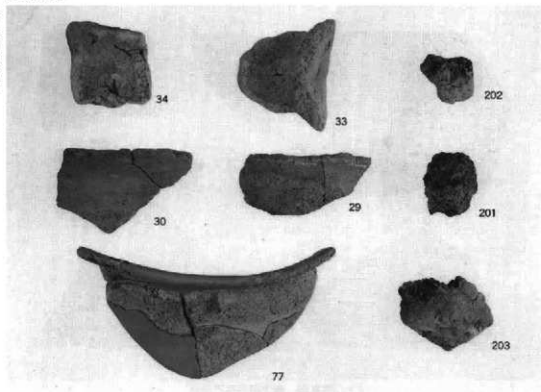


78



79

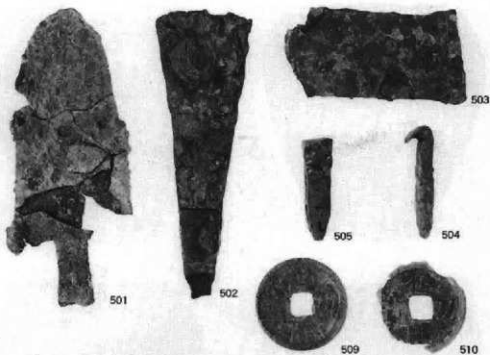
2. 土師器 杯・甕・鍋



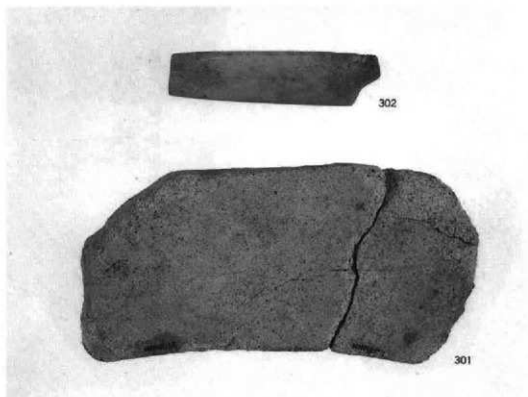
1. 土師器 甕・楯羽口



2. 鉄滓



1. 金属器



2. 石器



83



84



85



86



87



88



89



90



91



92



93



94



95



96



97



98



99



100



101



102



103



104



105



106

1. 近世墓出土土器 (2)



107



108



109

2. 近世墓出土土器 (3)



512



513



517



518



514



523



519



520



515



516



521



522

3. 近世墓出土銭貨

奈良山中央公園遺跡



遺構と出土土器

三 田 市

はくせつ

北摂ニュータウン内
遺跡調査報告書 Ⅲ

平成5年3月31日発行

編集 兵庫県教育委員会
埋蔵文化財調査事務所

〒652 神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5

発行 兵庫県教育委員会

〒650 神戸市中央区下山手通5丁目10-1

印刷 丸山印刷株式会社

〒676 高砂市米田町神爪57-1
